

平成21年度
神戸市埋蔵文化財年報



2012

神戸市教育委員会

平成21年度
神戸市埋蔵文化財年報

2012

神戸市教育委員会



fig. 1 旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査全景



fig. 2
大橋町東遺跡第2次調査
SB201～203全景



fig. 3
新方遺跡第47次調査
SR03遺物出土状況



fig. 4
兵庫津遺跡第51次調査
SK505遺物出土状況

序

私たちが暮らすこの神戸の街には、古い時代から人びとが暮らし
てきたことが、次第にわかってきてています。

その私たちの祖先が生活した跡は、今私たちが生活している地面
の下で眠っていますが、そのうちのいくつかについては開発行為に
伴って残念ながら消滅してしまうものがあります。これらについては
発掘調査を行って記録を残し、しっかりと私たちに続く世代の
人々に伝えていかなければならぬと考えています。

本書に掲載しております調査成果は以上のような発掘調査によっ
て得られた大切な記録であり、今後大いに活用され、本書が自分た
ちの住む地域への愛着をさらに深める上で、その一助となれば幸い
です。

最後に、発掘調査および本年報を作成するにあたり、ご協力いた
だきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上
げます。

平成24年3月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成21年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関する発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工　樂　善　通　　大阪府立狭山池博物館館長
和　田　晴　吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教　育　　長	橋口秀志
社　会　教　育　部　長	大寺直秀
参事(文化財課長事務取扱)	柏木一孝
埋蔵文化財指導係長	丸山　潔
事　務　担　当　学　芸　員	谷　正俊　　東喜代秀 松林宏典
埋蔵文化財調査係長	千種　浩
文　化　財　課　主　查	安田　滋　　斎木　巖
事　務　担　当　学　芸　員	中谷　正
調　査　担　当　学　芸　員	西岡巧次　　口野博史　　黒田恭正 須藤　宏　　佐伯二郎　　阿部敬生 浅谷誠吾　　井尻　格　　川上厚志 石島三和　　中村大介
主幹(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	渡辺伸行
文　化　財　課　主　查	丹治康明
担　当　学　芸　員	富山直人　　山口英正

(財) 神戸市体育協会

会　　長	表　孟宏
副会長(専務理事事務取扱)	小川雄三
常　務　理　事	碩弘四郎
総　務　課　長	赤沢　徹
総　務　係　長	簗輪龍男
調　査　担　当　学　芸　員	池田　毅　　内藤俊哉　　阿部　功

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。調査範囲が広域な遺跡や目標となるものが入らない地点の遺跡の位置図については、キャプションに縮尺を表記している。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成21年度事業の概要1～5については千種 浩が執筆し、I-6については斎木 巍が執筆した。また、平成21年神戸市埋蔵文化財調査地点図と調査地点位置図については丸山 潔が作成した。編集については、千種の指導のもとに阿部敬生が行った。
4. 挿図写真の撮影、遺構図のトレースについては、fig.63は丸山が撮影を行い、その他のものについては各調査担当者が行った。
5. 卷頭カラーは、fig.1・4は丸山潔が、fig.2・3は調査担当者がそれぞれ撮影を行った。
6. 表紙写真は旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査（本文45頁）出土の煉瓦で、裏表紙写真は兵庫津遺跡第52次調査（本文59頁）出土の土製品等である。撮影は、杉本和樹氏が行った。
7. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

目 次

序

例言

I.	平成21年度 事業の概要.....	1
	平成21年度 埋蔵文化財発掘調査一覧.....	9
	平成21年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図.....	11
II.	平成21年度の発掘調査	
1.	森北町遺跡 第27次調査.....	15
2.	出口遺跡 第9次調査.....	17
3.	本山遺跡 第37次調査.....	19
4.	西岡本遺跡 第8次調査.....	23
5.	郡家遺跡 第84次調査.....	25
6.	郡家遺跡 第85次調査.....	31
7.	篠原遺跡 第28次調査.....	33
8.	篠原遺跡 第29次調査.....	35
9.	日暮遺跡 第34次調査.....	39
10.	二宮東遺跡 第3次調査.....	41
11.	雲井遺跡 第31次調査.....	43
12.	旧神戸外国人居留地遺跡 第1次調査.....	45
13.	楠・荒田町遺跡 第45次調査.....	51
14.	兵庫津遺跡 第50次調査.....	55
15.	兵庫津遺跡 第51次調査.....	57
16.	兵庫津遺跡 第52次調査.....	59
17.	兵庫津遺跡 試掘調査.....	65
18.	上沢遺跡 第57次調査.....	69
19.	上沢遺跡 第58次調査.....	73
20.	中遺跡.....	75
21.	中遺跡.....	77
22.	大橋町東遺跡 第2次調査.....	79
23.	二葉町遺跡 第22次調査.....	85
24.	大田町遺跡 第16次調査.....	87
25.	垂水・日向遺跡 第36次調査.....	91
26.	伊川谷町潤和 所在確認調査.....	93
27.	高津橋岡遺跡 第11次調査.....	97
28.	今津遺跡 第22次調査.....	101
29.	新方遺跡 第47次調査.....	105
30.	新方遺跡 第48次調査.....	111
31.	上池遺跡 第3次調査.....	115
32.	出合遺跡 第44次調査.....	117
33.	出合遺跡 試掘調査.....	121
III.	平成21年度の保存科学調査・作業の概要.....	125

挿図目次

fig.1	旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査全景〔巻頭カラー〕	
fig.2	大橋町東遺跡第2次調査SB201～203全景〔巻頭カラー〕	
fig.3	新方遺跡第47次調査SR03遺物出土状況〔巻頭カラー〕	
fig.4	兵庫津遺跡第51次調査SK505遺物出土状況〔巻頭カラー〕	
fig.5	企画展示「見て学ぶ考古学」〔写真〕.....	8
fig.6	講演会『海を渡った渡来人』〔写真〕.....	8
fig.7	出張授業〔写真〕.....	8
fig.8	「その道の達人に学ぶ体験講座」：竪穴住居をつくろう〔写真〕	8
fig.9	大歳山まつり〔写真〕.....	8
fig.10	西区地域学〔写真〕.....	8
fig.11	平成21年度 神戸市埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	11
fig.12	調査地点位置図(1).....	12
fig.13	調査地点位置図(2).....	12
fig.14	調査地点位置図(3).....	13
fig.15	調査地点位置図(4)	13
fig.16	調査地点位置図(5)	14
fig.17	調査地点位置図(6)	14
fig.18	調査位置図	15
fig.19	調査範囲位置図	15
fig.20	調査区西壁土層断面図	15
fig.21	調査区平面図	16
fig.22	調査位置図	17
fig.23	調査区平面図	18
fig.24	調査区全景〔写真〕	18
fig.25	調査位置図	19
fig.26	調査区西壁土層断面図	19
fig.27	SD01土層断面図	20
fig.28	SD01土層断面〔写真〕	20

fig.29	調査区平面図	21
fig.30	調査区南半全景〔写真〕	21
fig.31	出土遺物実測図	22
fig.32	調査地位置図	23
fig.33	第1遺構面平面図	24
fig.34	調査地位置図	25
fig.35	調査区平・断面図	25
fig.36	SB01遺物・礫検出状況平面図	26
fig.37	SB02遺物・礫検出状況平面図	27
fig.38	SB01出土遺物実測図	28
fig.39	SB02出土遺物実測図	29
fig.40	遺物包含層・遺構出土土器実測図	30
fig.41	調査地位置図	31
fig.42	第1遺構面平面図	32
fig.43	調査地位置図	33
fig.44	第1・2遺構面平面図	33
fig.45	第3遺構面平面図	34
fig.46	調査地位置図	35
fig.47	調査区壁面土層断面図	35
fig.48	第1遺構面平面図	36
fig.49	第2遺構面平面図	37
fig.50	第2遺構面全景〔写真〕	38
fig.51	SB201全景〔写真〕	38
fig.52	調査地位置図	39
fig.53	第2遺構面平面図	40
fig.54	第1遺構面全景〔写真〕	40
fig.55	第2遺構面全景〔写真〕	40
fig.56	調査地位置図	41
fig.57	第1・2遺構面平面図	42
fig.58	調査地位置図	43
fig.59	6 tr.土層断面図	43
fig.60	調査区平面図	44
fig.61	調査地位置図	45
fig.62	I期調査区平面図	47
fig.63	I期調査区全景〔写真〕	50
fig.64	調査地位置図	51
fig.65	調査範囲位置図	51
fig.66	V区 第2遺構面平面図	52
fig.67	出土遺物実測図	54
fig.68	調査地位置図	55
fig.69	調査区配置図	55
fig.70	第4遺構面平面図	56
fig.71	調査地位置図	57
fig.72	調査区土層断面模式図	57
fig.73	調査区配置図	57
fig.74	III・IV区 第5・7遺構面平面図	58
fig.75	調査地位置図	59
fig.76	第1～3遺構面平面図	61
fig.77	出土遺物実測図(1)〔胞衣壺〕	63
fig.78	出土遺物実測図(2)〔瓦〕	63
fig.79	調査地位置図	65
fig.80	試掘坑土層断面模式図(1)	66
fig.81	試掘坑土層断面模式図(2)	67
fig.82	調査地点と元禄絵図の合成図(約1:1,500)	68
fig.83	調査地位置図	69
fig.84	調査区西・北壁土層断面図	70
fig.85	第1遺構面平面図	70
fig.86	SK101・SX101遺物出土状況平面図	70
fig.87	SK101・SX101遺物出土状況〔写真〕	70
fig.88	第2・3遺構面平面図	71
fig.89	出土遺物実測図	72
fig.90	調査地位置図	73
fig.91	調査区平面図	74
fig.92	出土遺物実測図	74
fig.93	調査地位置図	75
fig.94	調査範囲位置図	75
fig.95	調査区平面図	75
fig.96	調査地位置図	77
fig.97	調査範囲位置図	77
fig.98	調査区平面図	78
fig.99	1区全景〔写真〕	78
fig.100	2区全景〔写真〕	78
fig.101	調査地位置図	79
fig.102	調査範囲位置図	79
fig.103	調査区土層断面図	80
fig.104	1区第1遺構面全景〔写真〕	80
fig.105	2区第1遺構面全景〔写真〕	80
fig.106	第1遺構面平面図	81
fig.107	SE101平・断面図	81
fig.108	SE101土層断面〔写真〕	81
fig.109	第2遺構面平面図	82
fig.110	1区第2遺構面全景〔写真〕	82
fig.111	2区第2遺構面全景〔写真〕	82
fig.112	SB201～203全景〔写真〕	83
fig.113	SK201遺物出土状況平・断面図	84
fig.114	SK201遺物出土状況〔写真〕	84
fig.115	出土遺物実測図	84
fig.116	調査地位置図	85
fig.117	調査区平面図	86
fig.118	調査地位置図	87
fig.119	調査範囲位置図	87
fig.120	調査区南壁土層断面図	88
fig.121	SD101全景〔写真〕	88
fig.122	SE101全景〔写真〕	88
fig.123	第1遺構面平面図	89
fig.124	第2遺構面平面図	89
fig.125	第1遺構面全景〔写真〕	90
fig.126	第2遺構面全景〔写真〕	90

fig.127 調査地位置図	91
fig.128 調査範囲位置図	91
fig.129 調査区平面図	92
fig.130 調査地位置図 1 : 5,000	93
fig.131 調査区平面図	95
fig.132 調査地位置図	97
fig.133 調査区平面図	98
fig.134 SB02・04平・断面図	99
fig.135 SB06平・断面図	99
fig.136 調査区西半部全景〔写真〕	100
fig.137 調査地位置図	101
fig.138 調査範囲位置図	101
fig.139 北トレンチ第1・2遺構面平面図	102
fig.140 南トレンチ第1・2遺構面平面図	102
fig.141 北トレンチ第2遺構面全景〔写真〕	102
fig.142 南トレンチ第2遺構面全景〔写真〕	102
fig.143 SB01平・断面図	103
fig.144 SK01遺物出土状況平面図	103
fig.145 SK01遺物出土状況〔写真〕	103
fig.146 SD04遺物出土状況平面図	104
fig.147 調査地位置図	105
fig.148 調査範囲位置図	105
fig.149 北区北壁土層断面図	106
fig.150 第1・2遺構面平面図	106
fig.151 北区東半第2遺構面全景〔写真〕	107
fig.152 北区SR03全景〔写真〕	107
fig.153 北区SR03東岸遺物出土状況〔写真〕	107
fig.154 南区SR03遺物出土状況〔写真〕	107
fig.155 南区SR06全景〔写真〕	107
fig.156 第3遺構面(上)・(下)平面図	108
fig.157 北区第3遺構面(上)全景〔写真〕	109
fig.158 北区第3遺構面(下)全景〔写真〕	109
fig.159 第4遺構面平面図	109
fig.160 南区第4遺構面全景〔写真〕	109
fig.161 SK18遺物出土状況〔写真〕	110
fig.162 ST01全景〔写真〕	110
fig.163 調査地位置図	111
fig.164 調査範囲位置図	111
fig.165 第1・2遺構面平面図	112
fig.166 1・2区土層断面図	112
fig.167 3区土層断面図	113
fig.168 3区水田畦畔全景〔写真〕	113
fig.169 第33・48次調査区平面図	114
fig.170 調査地位置図	115
fig.171 調査範囲位置図	115
fig.172 調査区平面図	116
fig.173 調査地位置図	117
fig.174 43トレンチ平面図	118
fig.175 43トレンチ全景〔写真〕	119
fig.176 SD03・SK07遺物出土状況〔写真〕	119
fig.177 SK04土層断面〔写真〕	119
fig.178 SK05礫検出状況〔写真〕	119
fig.179 44トレンチ平面図・北壁土層断面図	120
fig.180 調査地位置図	121
fig.181 調査区土層断面図	122
fig.182 調査区平面図	124
fig.183 開梱直後〔写真〕	125
fig.184 反転作業〔写真〕	125
fig.185 保存処理完了後〔写真〕	126
fig.186 保管ケース収納〔写真〕	126
fig.187 調査地〔写真〕	127
fig.188 合成樹脂塗布〔写真〕	127
fig.189 ガーゼ貼り込み〔写真〕	127
fig.190 土層転写完了〔写真〕	127
fig.191 クリーニング〔写真〕	128
fig.192 型枠作製〔写真〕	128
fig.193 保存処理後〔写真〕	128
fig.194 ケース収納〔写真〕	128
fig.195 レーヨン紙養生〔写真〕	129
fig.196 真空凍結乾燥〔写真〕	129
fig.197 完了後検品〔写真〕	130
fig.198 梱包〔写真〕	130
fig.199 重量変化(H21/8/21搬入分)	130
fig.200 重量変化(H22/1/14搬入分)	130

表目次

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1
表2 発掘調査面積	1
表3 発掘調査面積別件数	1
表4 写真・図面貸出一覧(1)	4
表5 写真・図面貸出一覧(2)	5
表6 平成21年度の企画展示	6
表7 講座「神戸の遺跡と考古学」	6

表8 平成21年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(1)	9
表9 平成21年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(2)	10
表10 平成21年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧表	10
表11 平成21年度出土金属製品	131
表12 平成21年度出土木製品	131
表13 平成21年度自然科学分析	131

I. 平成21年度 事業の概要

1. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を指示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成21年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、706件（前年度694件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が650件（前年度629件）であった。また、開発行為事前審査願119件（前年度130件）、試掘調査依頼は213件（前年度244件）であった。届出件数は前年度に比べてほぼ横ばいの状況で、試掘依頼件数は前年度を若干下回った。

試掘調査によって得られた情報や既存情報を基に、可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように設計変更を求めていることによって、発掘調査に至らずに保護を行っている件数も多い。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法93・94条関係）	706件
i	民間の事業に伴う発掘届（93条）	650件
ii	公共の事業に伴う発掘通知（94条）	56件
iii	発掘届・発見通知（92条）	0件
2	発掘調査の報告（99条）	30件
3	開発行為事前審査等各種申請	119件
4	分布調査依頼書（埋蔵文化財所在の有無の確認依頼書・調査件数）	142件
5	試掘調査（依頼件数）	213件
6	発掘調査（大規模確認調査も含む）	36件
i	民間事業に伴う発掘調査	28件
ii	公共事業に伴う発掘調査	6件
iii	園場整備事業に伴う発掘調査	2件
7	工事立会	65件
8	整理作業（復興調査整理作業を含む）	6件

表2 発掘調査面積

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	5,629	2,494	8,123
延べ調査面積	11,339	2,739	14,078

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
100m ²	12件	32.4	1,001～2000m ²	0件	0
101～300m ²	15件	40.6	2001～5000m ²	0件	0
301～500m ²	6件	16.2	5,000m ² 以上	0件	0
501～1,000m ²	4件	10.8	合計	37件	100

※調査件数37件は表1 発掘調査件数36件に出合遺跡国庫補助金調査1件を加えた件数

2. 埋蔵文化財事業

平成20年度に実施した埋蔵文化財調査事業は38件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、183,182千円であった。

国庫補助事業 文化財保護法の規程と国の補助事業の採択基準により採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を実施している。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費62,968千円であった。

このうち、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸等の保存処理を実施した。また、復興調査整理として、平成10・11年度に調査を実施した兵庫津遺跡の出土遺物整理を継続して行った。

市内発掘調査 発掘調査件数は、公共事業の減少、民間の景気動向の影響も受けて減少している。さらに、基礎構造の設計変更による遺跡保護の理解が得られた結果発掘調査が回避され、工事立会が増加している。

発掘調査面積は8,123m²（延べ14,078m²）で、このうち民間関連事業によるものが5,629m²（延べ11,339m²）と約7割を占めている。平成20年度までは6割強を占めていたが、公共事業に関わる調査が減少したことに起因している。面積別でみると、300m²以下の件数が27件と昨年度と同様に7割を占めており、さらに小規模傾向が強まっている。平成21年度は、これまでの2極化の一方である大規模調査がない年度であった。しかし、個人住宅や店舗等建替えなどの調査需要は、なお堅調であることが明らかになった。

現地説明会 発掘調査の現場において、実際に遺跡を体感していただく機会として、現地説明会や近隣住民を対象とした現地公開を行った。平成21年12月25日と26日に旧神戸外国人居留地遺跡の現地説明会を開催し、それぞれ290名と237名の参加があった。この遺跡はオフィス街にあり、地域住民が少ないこともあったため、通常は土曜日の午後に開催していた説明会を、平日の昼休みと土曜日午後の2回の開催を企画した。年末にもかかわらず多くの参加者があった。また、明治期にこの地で日本茶の輸出業を営み始め、現在も静岡市で営業されているヘリヤ商会の関係者も参加された。

また上池遺跡第3次調査地について、平成21年10月5日、近隣住民の要望もあり、公開を行い、36名の参加があった。同月15日と19日には高津橋岡遺跡第11次調査地を、遺跡が校区内に所在する高津橋小学校6年生160名が見学し、遺跡の説明を聞いた。

資料の活用 発掘調査によって保存された資料には、主に出土品と写真や図面の記録類があり、これらは他の機関等からの要望があれば、貸出等を行っている。写真・図面については、今年度は53件の依頼があり140点を貸出した。貸出資料としては、五色塚古墳関係が最も多く、18件、25点を数える。これらは主に学校教育関連図書、博物館等の展示図録等、歴史関係図書、情報誌などへの掲載を利用目的としている。近年は印刷物だけでなく、インターネット上の公開やデジタル配布を手法とする依頼が増えてきている。

出土遺物の貸出は8件、252点あり、依頼の多い、祇園遺跡、端谷城跡、西神第65地点遺跡、深江北町遺跡の出土品が、各地の博物館の展示で活用された。また、明石市立文化博物館で新たな態勢での開催が始まった『発掘された明石の歴史展』の第1回目である「明石の狩人」展において西区、垂水区の縄文時代の資料が多く利用された。

その他に出土品について資料調査の依頼が14件、約726点に対してあり、大学生、研究者が西求女塚古墳、熊内遺跡、祇園遺跡、二ツ屋遺跡、新方遺跡、神出古窯址群等の資料を調査している。

指定文化財 平成21年度は、史跡五色塚古墳・小壺古墳出土の埴輪、土師器、土製品408点が市指定有形文化財の考古資料として、神戸市文化財保護審議会の諮問を受けて指定された。

3. 刊行物一覧 平成21年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報』額価 1,700円 『神戸市埋蔵文化財分布図』額価 500円 『住吉宮町遺跡第45次発掘調査報告書』額価 700円 『住吉宮町遺跡第46次発掘調査報告書』額価 700円 『日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書』額価 300円 『二宮東遺跡第

『3次調査発掘調査報告書』頒価 400円 『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』頒価 3,000円
『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』頒価 9,000円 『兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書』頒価 500円 『二葉町遺跡第22次発掘調査報告書』頒価 900円 『松野遺跡第42-1・2次発掘調査報告書』頒価 600円

兵庫津遺跡第14・20・21次調査は、平成10・11年度に実施した調査で、出土量が膨大であったこと等により多くの時間を費やしたが、漸く報告書刊行に至った。その他は、平成20・21年度に発掘調査を実施したものである。

4. 史跡名勝天然記念物

国指定史跡「和田岬砲台」保存修理事業

史跡和田岬砲台は、江戸幕府の摂海防備策の一つとして、勝海舟の指導により元治元年(1864)に完成した。大正10年(1935)には国史跡に指定されている。大正末から昭和の初めに大規模な修理が行われ、その後も小修理が行われてきたが、近年石造部の一部が剥落し、内部木組みの腐食も進行した。そのため所有者である三菱重工業株式会社を事業主体とし、文化庁・兵庫県・神戸市の補助事業として平成19年度から保存修理事業を行っている。平成21年度はまず、基礎構造の修理方針を決定するデータを得るために、地盤の追加調査を行った。そのデータを基に学識経験者や地元代表者、所有者による修理検討委員会での検討の結果、基礎構造は現状のままとすることに決定した。平成21年12月からは内部木組みの解体を開始し、平成22年3月には全木組みの解体が完了した。

5. 連携事業

北区道場町連合自治会より、北区道場町の神戸市農村環境改善センターで毎年行われている道場町文化祭での展示の依頼があり、平成21年11月2日と3日に『塩田北山東古墳と白水瓢塚古墳』と題して塩田北山東古墳と西区の白水瓢塚古墳の出土品を展示した。600人の見学者があった。

兵庫区役所との共催事業として、和田岬砲台の保存修理事業に関連して、平成22年1月30日に兵庫歴史講演会『和田岬砲台の源流を探る』を三菱重工業株式会社神戸造船所設計開発センターで開催した。講演は、神戸市教育委員会学芸員安田滋による『和田岬砲台の概要と修理工事について』、立命館大学准教授唐澤靖彦氏による『マルテロタワーとしての和田岬砲台：その世界史的位置』を行い、講演会後、修理現場の見学を行った。163名の参加があった。

淡河町自治協議会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの連携事業の取り組みとして、淡河歴史セミナー(第13回)を共催した。平成22年3月4日から6日にかけて『発掘！淡河の遺跡』と題して淡河町内からの出土品を淡河小学校で展示し、245名の見学者があった。

神戸市文書館からの依頼で、平成22年3月28日に神戸市勤労会館で行われた新修神戸市史歴史編「古代・中世」発刊記念の歴史講演会に伴って、吉田南遺跡をはじめとする市内の古代・中世遺跡の出土品および発掘調査写真パネルの展示を行った。245名の参加者があった。

表4 写真・図面貸出一覧(1)

No.	申請者(団体名・個人名)	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	JTBパブリッシング	下記5件の携帯サイトに掲載するため ・インターネットサイトYahoo!トラベル ・インターネットサイトLAPANiCAN.com ・安心ダイヤル(あいおい損保) ・カーナビコンテンツ(日産) ・カーナビコンテンツ(G-BOOK)	五色塚古墳航空写真 データ1点	1
2	(株)フレーベル館	『きゅーはくの絵本9 墓輪 月夜のおおさわぎ(仮)』(フレーベル館)の解説頁に、資料写真として掲載するため	五色塚古墳航空写真 データ1点	1
3	広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館開館20周年記念企画展「平家一門の栄華と瀬戸内海－海原を駆けぬけた清盛の夢－」に係る展示解説図録及び広報資料に掲載するため	祇園遺跡 ①調査地遠景(南から) (4×5ポジ) 1点 ②SX07第Ⅱ期検出面全景(6×7ポジ) 1点 ③調査地全景(6×7ポジ) 1点 ④SX07第Ⅱ期全景(6×7ポジ) 1点 ⑤祇園遺跡出土祇園天目小碗(4×5ポジ) 1点	5
4	福井県立一乗谷朝倉氏資料館	福井県立一乗谷朝倉氏資料館 第17回企画展『金工の技と美－金属器にみる一乗谷－』における展示のため	①端谷城跡出土土器丸 4×5ポジ1点 ②塀列建物西半分甲冑出土状況 4×5ポジ1点	2
5	(株)日本アート・センター 代表取締役	『週刊古社名利 巡拝の旅』全50巻のうち、22巻「播州路」に掲載するため	五色塚古墳航空写真 データ1点	1
6	株式会社浜島書店	『兵庫県 地域の歴史を調べよう』中の学習項目「兵庫県の古墳文化」で学習資料として掲載するため	五色塚古墳調査前航空写真 データ1点	1
7	日本第四紀学会	『デジタルブック最新第四紀学』に掲載するため	大開遺跡 SD402西地区 遺物出土状況写真 カラー写真データ1点	1
8	橿原考古学研究所附属博物館	秋季特別展「銅鐸－弥生時代の青銅器鋳造」における展示のため	①西神ニュータウン内第65地点遺跡出土銅鐸石製鋳型未製品(4×5ポジ) 1点 ②楠・荒田町遺跡 石製鋳型(4×5ポジ) 1点	2
9	山川出版社	『社会人のための日本史』(仮称)に使用するため	五色塚古墳航空写真 データ1点	1
10	神戸市立博物館	博物館だより第96号・関連広報誌において、特別展「海の回廊」紹介記事を掲載するため	西求女塚古墳出土青銅鏡 カラーポジあるいは画像データ 1点	1
11	(株)小学館	『サライ』『古代史特集』に掲載するため	①五色塚古墳輪列と西側葺石斜面(北から) データ1点 ②五色塚古墳西側葺石斜面(南から) データ1点 ③五色塚古墳航空写真(西から) データ1点	3
13	兵庫県立考古博物館	平成21年秋季特別展「古代祭祀の世界」に係る展示解説図録に掲載するため	①新方遺跡出土土石棒写真(掲載承諾のみ) 1点 ②新方遺跡出土石製模造品一括写真(4×5ポジ) 1点 ③長田神社境内遺跡出土土偶写真(4×5ポジ) 1点 ④五色塚古墳出土土子持勾玉写真(4×5ポジ) 1点	4
14	三田市	『三田市史』第8巻 考古編に掲載するため	①塩田北山東古墳 第1・2主体部写真(4×5カラーポジ) 1点・青銅鏡写真(4×5カラーポジ) 1点 ②北神ニュータウン内第5・6地点遺跡 調査地全景写真 データ1点 ③定塚古墳群 第2号墳 剥竹形木棺写真データ1点 ④北神ニュータウン内第3地点古墳 石室左壁写真(6×7カラーポジ) 1点 ⑤北神ニュータウン内第22地点遺跡 第1号墳全景写真(6×7カラーポジ) 1点 ⑥祇園遺跡 園池遺構写真(6×7カラーポジ) 1点 ⑦宅原遺跡「評」墨書き土器 写真(6×7カラーポジ) 1点	8
15	株式会社 吉川弘文館	『日本中世の歴史3 源平の内乱と公武政権』に掲載するため	①祇園遺跡 園池遺構写真 6×7カラーポジ1点 ②祇園遺跡出土祇園天目小碗 4×5カラーポジ1点	2
16	専修大学教育振興会	西求女塚古墳竪穴式石室崩壊状況写真を使用した放送大学授業番組を複製し、頒布するため(放送大学授業番組「考古学(09)」第1回 DVDビデオ)	西求女塚古墳竪穴式石室崩壊状況 カラー写真データ1点	1
17	(株)小学館	『サライ』『古代史特集』に掲載するため	①五色塚古墳(空撮写真) データ1点 ②五色塚古墳輪集合写真 データ1点	2
18	株式会社 天夢人	知るマップ(シリーズ)『歴史浪漫の道 日本地図』(仮題)に掲載するため	五色塚古墳と小壺古墳 データ	1
19	伊丹市立博物館	平成21年度秋季企画展「古代の猪名野」の写真パネルに使用するため	①深江北町遺跡第9次調査 調査区西部全景(南から) データ1点 ②同 調査区西部全景(東から) データ1点	2
20	大阪府立狭山池博物館	「大阪府立狭山池博物館・大阪狭山市立郷土資料館共同運営記念展 狹山池復活－慶長の改修にみる先端技術－」大阪府立狭山池博物館図録10に掲載するため	五色塚古墳整備後全景航空写真 データ1点	1
21	株式会社 日本標準	『楽しく調べる日本の歴史』第1巻(旧石器～古墳時代)に掲載するため	①五色塚古墳(空撮) データ 1点 ②住吉東古墳 馬形埴輪 データ1点	2
22	姫路市教育委員会	秋季企画展『律令期の考古学』の展示解説パネルに使用するため	上沢遺跡SE201出土銅鏡 4×5カラーポジ1点	1
23	有限会社大悠社	ボプラ社刊行『ボプラディア情報館「日本地理」』第4巻「近畿地方」に掲載するため	五色塚古墳全景航空写真(五色塚古墳を上から望む) データ2点	2
24	神戸市立高津橋小学校	『高津橋小学校創立30周年記念誌』に掲載するため	①埋蔵文化財センター展示アカシ象 1点 ②新方遺跡 12号人骨(縦位置) 1点 ③新方遺跡 13号人骨(縦位置) 1点 ④吉田王塚古墳空中写真 1点 ⑤高津橋大塚古墳全景 1点 ⑥今津遺跡 全景 1点 ⑦新方遺跡 抜歯のある弥生战士 1点 ⑧新方遺跡 祭祀遺構の土器群 1点 ⑨新方遺跡 5000個の滑石製品 1点 以上9点 モノクロデータ	9

表5 写真・図面貸出一覧(2)

No.	申請者(団体名・個人名)	利用目的・内容	資料名	資料点数
25	神戸市文書館	『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』に使用するため	①日宋貿易関係の出土物写真プリント 1点 ②石塔寺伝岩本坊出土遺物写真プリント 1点 ③壽福寺 聖觀音像写真プリント 1点 ④西区・木津磨崖仏写真プリント 2点 ⑤神出古窯址群出土軒丸瓦写真プリント 1点 ⑥滝ノ奥遺跡 経塚出土品写真ボジ4×5 1点 ⑦祇園遺跡出土瓦狀天目小碗写真ボジ4×5 1点 ⑧端谷城跡出土 脊丸写真ボジ4×5 1点 ⑨端谷城跡 遺物出土状況写真プリント 1点 ⑩森北町遺跡 木簡「蘇民将来札」写真プリント 1点 ⑪冊子「遺跡に見る神戸の自然災害」以下写真 プリント 5点(垂水・日向遺跡より「垂水・日向遺跡の浅い内海の底に堆積した火山灰」・「火山灰で海底に閉じ込められたざざ波の跡」「火山灰の上を歩いた縄文人の足跡」・「洪水で根こそぎ流されてきた楠の大木」・深江北町遺跡より「水田を織り返し覆った洪水」 ⑫五色塚古墳空撮写真プリント 1点	17
26	神戸市立博物館	特別展「海の回廊」展示図録に掲載するため	①西求女塚古墳 9点・出土鏡群【報告書図版15】1点 ・出土鐵製品【報告書卷頭図版8】1点 ・6号鏡【報告書卷頭図版28】1点 ・7号鏡【報告書卷頭図版32】1点 ・9号鏡【報告書卷頭図版24】1点 ・西求女塚古墳遠景【報告書卷頭図版2-2】1点 ・天井石焼出状況【報告書卷頭図版4-1】1点 ・崩落した石室石材の間から出土した鏡【報告書卷頭図版4-1】1点 ・堅穴式石室副室遺物出土状況【報告書図版6】1点 ②狩口台きつね塚古墳 2点 ・出土馬具 集合写真【図録「古墳時代を駆けた馬」図版33】1点 ・狩口台きつね塚古墳全景写真1点	11
27	財団法人広島市文化財団	「ひろしまWEB博物館」第3常設展示室(古墳時代前期)に掲載するため(http://www.mogurin.or.jp/)	西求女塚古墳出土 三角縁神獸鏡(8号鏡)写真 データ 1点	1
28	神戸市文書館	『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』に掲載するため	・吉田南遺跡 郡衙跡と考えられるところに架けられた木橋 ・吉田南遺跡 郡衙と考えられる建物群跡 以上写真データ2点	2
29	財団法人神戸国際コンベンション協会	就学旅行者向け冊子「神戸学遊バスポート」事業に参加し、同冊子に掲載するため	五色塚古墳空撮写真 データ1点	1
30	株式会社 吉川弘文館	原剛「海防と様式軍事技術の導入」鈴木淳編『史跡で読む日本歴史10近代の史跡』に掲載するため	舞子砲台跡 写真 1点	1
31	FiveStarCorporation	文藝春秋『CREA』に掲載するため	五色塚古墳カラー写真データ	1
32	(株)Z会	(株)Z会発行『エブリスタディ小3』6月号(2009年度版・2010年度版)に掲載するため	神戸市の航空写真 1点	1
33	兵庫区まちづくり推進部	兵庫区まちづくり推進課発行のリーフレット「兵庫城築城のころの兵庫」(仮題)に掲載するため	兵庫津遺跡第35次発掘調査 堀状遺構 データ1点	1
34	KAZ企画	『人物や文化遺産で読み解く日本の歴史1巻』(あかね書房)に掲載するため	五色塚古墳 カラー写真データ	1
35	株式会社 帝国書院	『社会科 中学生の歴史－日本の歩みと政界の動き－』に掲載するため	五色塚古墳 空撮 カラー写真データ 1点 五色塚古墳 豊石写真 カラー写真データ 1点	2
36	兵庫県立歴史博物館	ミニ展示「水損した歴史遺産を救う－2009年台風9号豪雨被災古文書を中心に－」で写真パネルとして展示するため	被災資料の真空凍結乾燥処理の状況 カラー写真データ 7点	7
37	(株)光文書院	『社会科資料集6年』に掲載するため(平成22年4月1日刊行予定)	五色塚古墳 空中写真 カラーデータ 2点	2
38	株式会社 ぎょうせい	『日本の美術』第527号「土偶とその周辺II」に掲載するため	篠原遺跡出土 遮光器土偶頭部 カラー写真データ 1点	1
39	株式会社 コアステーション	『兵庫歴史探訪ルートガイド』(仮称)に使用するため	敦盛塚・清盛塚・姫女塚古墳・舞子砲台 カラー写真データ 各1点	4
40	株式会社 雄山閣	『季刊考古学』111号 特集「石器生産と流通にみる弥生文化」に掲載のため	本山遺跡 土坑に埋納された石器一括出土状況 カラー写真データ 1点	1
41	垂水区まちづくり推進部	れんげまつり広報用チラシに掲載するため	五色塚古墳 空中写真(データ) 1点	1
42	有限会社 リゲル社	絶図解シリーズ『古代史』(新人物社)に掲載するため	五色塚古墳遠望・五色塚古墳の円筒埴輪列 カラー写真データ 2点	2
43	株式会社 昭和堂	鈴柄後夫著『日本中世都市遺跡の見方・歩き方』に掲載するため	祇園遺跡 園池遺構 6×7カラーボジ 1点	1
44	神戸市文書館	『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』に掲載するため	発掘調査で見つかった阪神・淡路大震災の噴砂跡(御船遺跡)モノクロプリント(キャビネサイズ)2枚	2
45	奈良県立橿原考古学研究所	『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』研究成果報告書に掲載するため	三次元CG画像データ(下記のとおり)計17点 ①白水瓢塚古墳 両面文同じ向式系神獸鏡 1点 ②白水瓢塚古墳 車輪石 4点 ③白水瓢塚古墳 石劍 9点 ④塙田北山東古墳 三角縁天王日月・獸文帶一仏三神四獸 1点 ⑤塙田北山東古墳 紡錐車形石製品 1点 ⑥西求女塚古墳 紡錐車形石製品 1点	17
46	霞ヶ丘ふれあいまちづくり協議会	「霞ヶ丘ふれあいまちづくり安全マップ」の表紙に掲載するため。	五色塚古墳航空写真 データ1点	1
47	株式会社 フクト	(株)フクト発行『学習定着度診断シート 確かめシート』に掲載するため	五色塚古墳航空写真 データ1点	1
48	北区まちづくり課	第9回神戸建築物語見学会配付資料に掲載するため	淡河木津遺跡全景空中写真 データ1点	1
49	(株)浜島書店	浜島書店編集部編『兵庫県地域の歴史を調べよう』中の学習項目「兵庫県の古墳文化」で学習資料として掲載する	住吉東古墳出土の馬形埴輪 データ1点	1
50	学校法人高宮学園(代々木ゼミナール)	代々木ゼミナールテキスト『日本史図版集』に掲載するため	五色塚古墳 円筒埴輪 データ1点	1
52	神戸市文書館	『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』発行記念歴史講演会のポスター・チラシに掲載するため	祇園遺跡出土 玳瑁天目小碗写真 データ1点	1
53	橿原考古学研究所附属博物館	秋季特別展「銅鐸－弥生時代の青銅器鋳造」にかかる図録等	西神ニュータウン内第65地点遺跡 銅鐸石製錫未製品出土状況	2

合計 139

6. 普及啓発事業（埋蔵文化財センター）

企画展示・体験講座・学校連携・地域連携等を中心に、各種事業を展開した。平成21年度の埋蔵文化財センターへの入館者数は37,387名を数える。

企画展示の開催と講演会

平成21年度も別表（表6）のとおり、4回の企画展示を開催した。例年どおり、春季の企画展示では小学校の6年生の歴史授業の参考になるような展示を行っている。また、冬季の企画展示では小学校3年生が学習する「ちょっとむかしの暮らし」をテーマに展覧会を開催している。

秋季の企画展示のテーマに合わせて、10月11日に『海を渡った渡来人』と題して講演会を開催した。埋蔵文化財センター研修室で実施し、120名の参加を得た。

各種講座の開催

体験考古学講座

勾玉づくり・土器づくり・火おこし器づくり等、古代の技術を学びながら、親子参加型の講座を夏休みを中心に行なった。

「その道の達人に学ぶ体験講座」

「江戸時代の庄屋で草木染め」講座を11月7日に北区の内田家住宅で、「堅穴住居をつくる（みんなで古代のくらし体験）」講座を11月15日に埋蔵文化財センターで実施した。

講座「神戸の遺跡と考古学」の開催

6回シリーズの講演会で、本年度は弥生時代と古墳時代をテーマに学芸員が行った。受講生は全講座で235名であった。

表6 平成21年度の企画展示

展示会名	開催期間	開催日数	入館者数
見て学ぶ考古学 -教科書をより学びやすくするために-	4月14日～6月7日	52	8,179
神戸の横穴式石室	7月18日～8月30日	38	2,631
はるばる海を渡り来て	10月19日～11月29日	43	4,458
昭和のくらし・昔のくらし2	1月16日～3月7日	43	9,821

表7 講座「神戸の遺跡と考古学」

	月日	講演名	参加者数
1	9月19日	弥生時代の黎明 大開遺跡を語る	37
2	10月24日	大規模集落 玉津田中遺跡	32
3	11月21日	高地性集落と表山遺跡	30
4	12月12日	古墳時代の始まりと西求女塚古墳	43
5	1月23日	古墳時代の居館と松野遺跡	41
6	2月13日	舞子古墳群の謎に迫る	52

学校連携事業

大学との連携

連携協定を結んでいる大手前大学・神戸山手大学と、講演会を11月28日に開催した。

テーマ『弥生墳丘墓から古墳へ』と題して、大手前大学教授樋本誠一氏、神戸山手大学教授河上邦彦氏を講師に迎え、神戸山手大学において実施した。参加者は140名である。

啓明学院中学校・高等学校との連携

平成19年度より啓明学院中学校・高等学校が学内において実施する土曜講座の1プログラムを埋蔵文化財センターで担当しており、本年度は教養講座『神戸の文化遺産について学ぼう』というカリキュラムで、前期と後期あわせて13回の講座を担当した。前期は考古学、後期は近代化遺産に関するテーマで、授業及び学外の見学等を取り混ぜて行った。実物の出土資料を用いた授業や、学外の見学では、神戸港や須磨離宮、布引ダム等を訪れた。中学生・高校生・保護者の計23名が受講した。

高等学校との連携

平成20年度に続き、兵庫県立須磨友が丘高校・神戸市立六甲アイランド高校・啓明学院で、考古学の講義・遺跡の見学・拓本実習等の授業を行った。

神小研社会科部との連携

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携については、毎年、コミスタこうべ（中央区）にて開催される『神戸市小学校社会科作品展』（9月12～20日）において優秀作品を35点を選定し、「埋蔵文化財センター賞」を授与、表彰した。

小学校への出張講座・出張授業

小学校に出張して、勾玉づくり・土器作りの体験考古学講座を18校で行い、出張授業を3校で行った。出張講座・授業の利用者は1,849名である。

地域連携事業

地域行事への参加

「第27回 みどりと太陽のまつり」（5月16日）、「櫛谷川まつり」（9月5日）、「押部谷明石川リバーウォーク」（11月23日）等、地域の活動に参加し、埋蔵文化財センターのパネル展示や遺跡の説明等を行い、文化財の普及啓発に務めた。

大歳山まつりの開催

垂水区役所と連携して、11月3日に大歳山遺跡公園において開催した。恒例の竪穴住居の公開や古代衣装の試着、地域の協力を得て実施した古代米のおにぎり試食、勾玉づくり等、古代体験を満喫する一日となった。参加者860名を数えた。

西区地域学の開催

西区役所と連携して行う事業で、3月13日に埋蔵文化財センターでの講演のあと、性海寺・太山寺・如意寺の見学を行った。参加者は80名であった。



fig. 5 企画展示「見て学ぶ考古学」



fig. 6 講演会『海を渡った渡来人』

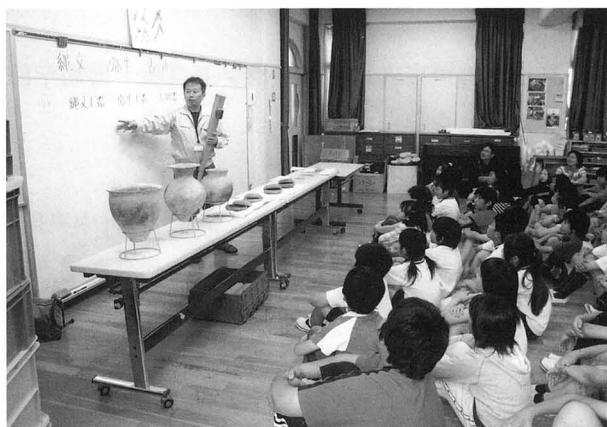


fig. 7 出張授業



fig. 8 「その道の達人に学ぶ体験講座」：竪穴住居をつくろう



fig. 9 大歳山まつり



fig. 10 西区地域学

表8 平成21年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表(1)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	森北町遺跡 第27-b次調査	東灘区森北町4丁目1-5	神戸市教育委員会	東喜代秀	7m ² 7m ²	21.12.07～ 21.12.07	中世の耕作痕と考えられる溝を2条検出した。	宅地造成 〔国庫補助事業〕
2	出口遺跡 第9次調査	東灘区本山北町1丁目333番	神戸市教育委員会	阿部敬生	60m ² 60m ²	21.10.20～ 21.10.28	時期不明のピット2基を検出した。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
3	本山遺跡 第37次調査	東灘区本山南町8丁目19番	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	150m ² 150m ²	21.10.07～ 21.11.18	弥生時代中期の大溝1条を検出し、弥生時代前期～中期の土器とともに、石包丁や太型蛤刃石斧、磨石等の石器が出土した。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
4	西岡本遺跡 第8次調査	東灘区西岡本5丁目2番、3番	神戸市教育委員会	西岡巧次	450m ² 450m ²	21.11.24～ 22.01.22	2面の遺構面を確認し、弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑、奈良時代後期～平安時代前期の掘立柱建物6棟、柱列1条などの遺構を検出した。	宅地造成
5	郡家遺跡 第84次調査	東灘区御影町御影字城ノ前 1454-10、御影町郡家字官ノ浦290-55	神戸市教育委員会	須藤宏	120m ² 120m ²	21.07.06～ 21.08.12	古墳時代後期の堅穴住居・溝、室町時代の土坑、江戸時代の採石坑などの遺構を確認した。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
6	郡家遺跡 第85次調査	東灘区御影町御影字城ノ前 1427番2	神戸市教育委員会	井尻格	510m ² 1,000m ²	21.10.26～ 21.11.18	2面の遺構面を確認し、弥生時代後期の自然河道・土坑・溝、古墳時代後期の自然河道、奈良時代頃の掘立柱建物1棟などの遺構を検出した。	共同住宅建設
7	中新田遺跡 試掘調査	灘区桜ヶ丘町16番、19番、21番ほか	神戸市教育委員会	井尻格	205m ² 205m ²	21.05.12～ 21.05.27	試掘調査 遺構は検出されなかった。	〔国庫補助事業〕
8	篠原遺跡 第28次調査	灘区篠原中町3丁目37番・37番1	神戸市教育委員会	須藤宏	120m ² 120m ²	21.04.13～ 21.05.13	3面の遺構面を確認し、弥生時代中期の堅穴住居1棟、弥生時代後期の堅穴住居1棟などの遺構を検出した。	宅地造成 〔国庫補助事業〕
9	篠原遺跡 第29次調査	灘区篠原中町2丁目28番2、28番3	神戸市教育委員会	川上厚志	108m ² 216m ²	21.05.12～ 21.05.29	2面の遺構面を検出し、弥生時代後期の堅穴住居、弥生時代末～古墳時代初頭の溝、中世の廻溝などの遺構を検出した。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
10	日暮遺跡 第34次調査	中央区八雲通3丁目3	神戸市教育委員会 財神戸市体育協会	東喜代秀	185m ² 370m ²	21.04.08～ 21.04.20	2面の遺構面を確認し、中世の湿地状落ち込み、時期不明の土坑などの遺構を検出した。	市営住宅建替
11	二宮東遺跡 第3次調査	中央区二宮町1丁目381番6、7	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	150m ² 300m ²	21.07.22～ 21.09.11	2面の遺構面を確認し、縄文時代早期の土坑・ピット・落ち込み、古墳時代の大溝を検出し、縄文時代早期の神並上層式の土器が出土した。	共同住宅建設
12	雲井遺跡 第31次調査	中央区旭通2丁目310番地	神戸市教育委員会	東喜代秀	25m ² 25m ²	21.08.12～ 21.08.13	古墳時代後期の溝・ピットを検出した。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
13	雲井遺跡 第32次調査	中央区琴ノ緒町4丁目367、368、369、370、372-2、373、375、376-1、377	神戸市教育委員会	口野博史	135m ² 135m ² (次年度継続)	21.03.08～ 21.03.26 (次年度継続)	北半部の第1遺構面の調査を実施し、中世後半頃の溝2条を検出した。溝からは13世紀頃の土師器・須恵器が出土している。〔次年度継続〕	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
14	旧神戸外国人居留地遺跡 第1次調査	中央区江戸町97、98-2	神戸市教育委員会	千種浩・ 斎木巖・ 阿部功	306m ² 306m ²	21.12.01～ 22.02.25	3時期にわたる旧居留地時代及びその後の遺構・遺物を確認し、特に茶再製場の遺構を確認するなどの成果を得た。	市危機管理センター建設
15	柿・荒田町遺跡 第45次調査	兵庫区西上橋通1丁目4-26、27	神戸市教育委員会	石島三和	173m ² 308m ²	21.11.16～ 21.12.08	2面の遺構面を確認し、第1遺構面では時期不明の柱穴列を検出した。第2遺構面では弥生時代前期の土坑、弥生時代中期の堅穴住居や方形周溝墓等を検出した。	店舗改築
16	兵庫津遺跡 第50次調査	兵庫区兵庫町2丁目1-10～17	神戸市教育委員会	井尻格	210m ² 1,040m ²	21.07.09～ 21.09.25	6面の遺構面を確認し、中世後半～近世の遺構・遺物を確認した。特に第6遺構面では土師器皿を大量に埋納した祭祀土坑を検出した。	ガソリンスタンド建設
17	兵庫津遺跡 第51次調査	兵庫区西宮内町2丁目	神戸市教育委員会	石島三和	451m ² 3,152m ²	21.07.17～ 21.10.30	鎌倉時代から江戸時代までの7面の遺構面を確認した。第3～7面において計23基の土器投棄土坑を検出した。	共同住宅建設
18	兵庫津遺跡 第52次調査	兵庫区西柳原町5番20号	神戸市教育委員会	阿部敬生・ 川上厚志	160m ² 480m ²	22.02.02～ 22.03.05	3面の遺構面を確認し、18世紀～幕末頃の遺構・遺物を検出した。18世紀後半～19世紀前半と考えられる第2遺構面では、石垣状遺構や大型礫石遺構、井戸等の遺構を検出した。	社殿建替
19	兵庫津遺跡 試掘調査	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	川上厚志	36m ² 36m ²	21.07.21～ 21.07.29	試掘調査	〔国庫補助事業〕
20	上沢遺跡 第57次調査	兵庫区上沢通8丁目106番12	神戸市教育委員会	口野博史	22m ² 66m ²	21.07.15～ 21.08.05	3面の遺構面を確認した。第1遺構面では、弥生時代終末～古墳時代初期の土坑・溝等を検出した。第2遺構面では弥生時代終末の溝・落ち込みを、第3遺構面では弥生時代前期と考えられる溝等の遺構を検出した。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
21	上沢遺跡 第58次調査	長田区五番町2丁目2-2	神戸市教育委員会	口野博史	28m ² 28m ²	21.10.13～ 21.10.26	遺構面を1面確認し、奈良時代頃の落ち込み・ピットを検出した。出土遺物の中には少量の瓦も含まれる。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
22	中遺跡	北区八多町中字アフギ1440-1、1440-2	神戸市教育委員会	須藤宏	45m ² 45m ²	21.11.12～ 21.11.24	中世の土坑・溝・掘立柱建物の一部と考えられる柱穴等を検出したほか焼土層も確認しており、調査地の南側に火災を受けた室町時代の屋敷地が存在することが想定される。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
23	中遺跡	北区八多町中字堂ノ元1113	神戸市教育委員会	阿部敬生	130m ² 130m ²	22.03.19～ 22.03.31	中世の掘立柱建物1棟、溝8条等を検出した。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
24	大橋町東遺跡 第2次調査	長田区大橋町3丁目	神戸市教育委員会 財神戸市体育協会	池田毅・ 阿部功	450m ² 450m ²	21.11.13～ 22.02.25	2面の遺構面を確認し、第1遺構面では平安時代中期の掘立柱建物、井戸、溝等を検出した。第2遺構面では古墳時代後期の堅穴住居、掘立柱建物、土坑、弥生時代中期の溝等を検出した。	市街地再開発
25	二葉町遺跡 第22次調査	長田区久保町6丁目	神戸市教育委員会 財神戸市体育協会	池田毅・ 阿部功	500m ² 500m ²	21.05.18～ 21.07.17	12世紀頃の掘立柱建物、井戸、溝等の遺構を検出した。	市街地再開発
26	大田町遺跡 第16次調査	須磨区大田町8丁目4、25	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	165m ² 330m ²	22.03.04～ 22.03.29	2面の遺構面を確認し、第1遺構面では奈良時代～平安時代の廻溝、時期不明の溝状落ち込み・井戸を検出した。第2遺構面では時期不明の溝を検出した。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
27	垂水・日向遺跡 第36次調査	垂水区日向2丁目205	神戸市教育委員会	石島三和	167m ² 334m ²	22.02.19～ 22.03.26	12世紀後半～13世紀初頭頃の溝、掘立柱建物を検出した。	商業ビル建設

表9 平成21年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（2）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
28	伊川谷町潤和 範囲確認調査	西区玉津町高津橋字馬掛原 824ほか	神戸市教育委員会	西岡巧次	890m ² 890m ²	22.03.09～ 22.03.23	試掘調査 ピット・落ち込み等の遺構を検出した。	〔国庫補助事業〕
29	高津橋岡遺跡 第11次調査	西区玉津町高津橋470-2、471-1	神戸市教育委員会 財神戸市体育協会	阿部功	550m ² 550m ²	21.08.17～ 21.09.29	弥生時代後期の落ち込み、古墳時代後期の土坑、古墳時代後期～飛鳥時代頃の堅穴住居、奈良時代頃の掘立柱建物等の遺構を検出した。	街路築造
30	今津遺跡 第22次調査	西区玉津町今津字松ヶ本618、 619	神戸市教育委員会	須藤宏	80m ² 80m ²	22.01.18～ 22.02.17	2面の遺構面を確認し、第2遺構面では弥生時代中期の掘立柱建物・土坑等の遺構を確認した。特に弥生時代中期の土坑からは完形の土器が数個体出土した。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
31	新方遺跡 第47次調査	西区玉津町西河原字七反田21番	神戸市教育委員会	須藤宏・ 阿部敬生	120m ² 720m ²	21.08.12～ 21.10.23	4面の遺構面を確認し、第1遺構面では奈良時代の流路、第2遺構面では飛鳥時代の掘立柱建物、第3遺構面では古墳時代～飛鳥時代の溝、第4遺構面では弥生時代中期の木棺墓等を検出した。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
32	新方遺跡 第48次調査	西区伊川谷町潤和字平松814 番ほか	神戸市教育委員会	阿部敬生	47m ² 47m ²	22.03.12～ 22.03.17	2面の遺構面を確認し、第1遺構面では平安時代のものと考えられる水田畦畔1条、落ち込みを検出した。	店舗建設 〔国庫補助事業〕
33	上池遺跡 第3次調査	西区玉津町上池字五鬼田315- 6、315-7、315-10	神戸市教育委員会	西岡巧次・ 阿部敬生	315m ² 315m ²	21.08.05～ 21.11.04	8世紀半ば～10世紀の掘立柱建物12棟、溝及び河川状遺構29ヶ所、性格不明土坑1ヶ所を検出した。	福祉施設建設
34	出合遺跡 第44次調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会 財神戸市体育協会	藤井太郎・ 阿部功	80m ² 120m ²	21.04.08～ 21.05.08	2面の遺構面を検出し、中世の掘立柱建物・土坑・溝・ピットを検出した。	集落基盤整備
35	出合遺跡 第44次調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会	藤井太郎	20m ² 40m ²	21.04.08～ 21.04.22	近世の落ち込みを検出した。	集落基盤整備 〔国庫補助事業〕
36	出合遺跡 試掘調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会	須藤宏・ 井尻裕	100m ² 100m ²	22.03.17～ 22.03.31	試掘調査 古墳時代～中世の遺構・遺物を検出した。	〔国庫補助事業〕
37	堂垣内遺跡	北区有野町二郎	兵庫県立考古博物館	西口圭介・ 長濱誠司	853m ² 853m ²	21.10.15～ 21.12.22	中世後期の焼土坑4基、土坑・不定形落ち込み30基、溝2条を検出した。	高速道路建設
				調査面積合計	8,123m ²			
				延調査面積合計	14,078m ²			

表10 平成21年度 埋蔵文化財出土遺物整理一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
A	住吉宮町遺跡 第45次調査		神戸市教育委員会	口野博史	0m ² 0m ²	21.07.01～ 22.03.31	出土遺物整理・報告書作成	民間開発
B	住吉宮町遺跡 第46次調査		神戸市教育委員会	口野博史	0m ² 0m ²	21.07.21～ 21.12.28	出土遺物整理・報告書作成	民間開発
C	雲井遺跡 第28次調査		神戸市教育委員会	西岡誠司・ 川上厚志	0m ² 0m ²	21.07.01～ 22.03.31	出土遺物整理・報告書作成	市街地再開発
D	松野遺跡 第42-1・2次 調査		神戸市教育委員会 財神戸市体育協会	内藤俊哉	0m ² 0m ²	21.04.01～ 22.03.31	出土遺物整理・報告書作成	市街地再開発
E	兵庫津遺跡 保存処理		神戸市教育委員会	中村大介	0m ² 0m ²	21.04.01～ 22.03.31	兵庫津遺跡第14次調査出土鉄製品保存処理	〔国庫補助事業〕
F	八幡神社古墳群 保存処理		神戸市教育委員会	中村大介	0m ² 0m ²	21.04.01～ 22.03.31	塩田北山東古墳出土木棺材等保存処理	〔国庫補助事業〕
G	端谷城跡 保存処理		神戸市教育委員会	中村大介	0m ² 0m ²	21.04.01～ 22.03.31	端谷城跡第5次調査出土の鉄製甲(胴丸)保存処理	〔国庫補助事業〕
H	復興調査整理		神戸市教育委員会	黒田恭正・ 佐伯二郎・ 中村大介	0m ² 0m ²	21.04.01～ 22.03.31	国庫補助事業調査の遺物整理、兵庫津遺跡(H10・11)	〔国庫補助事業〕

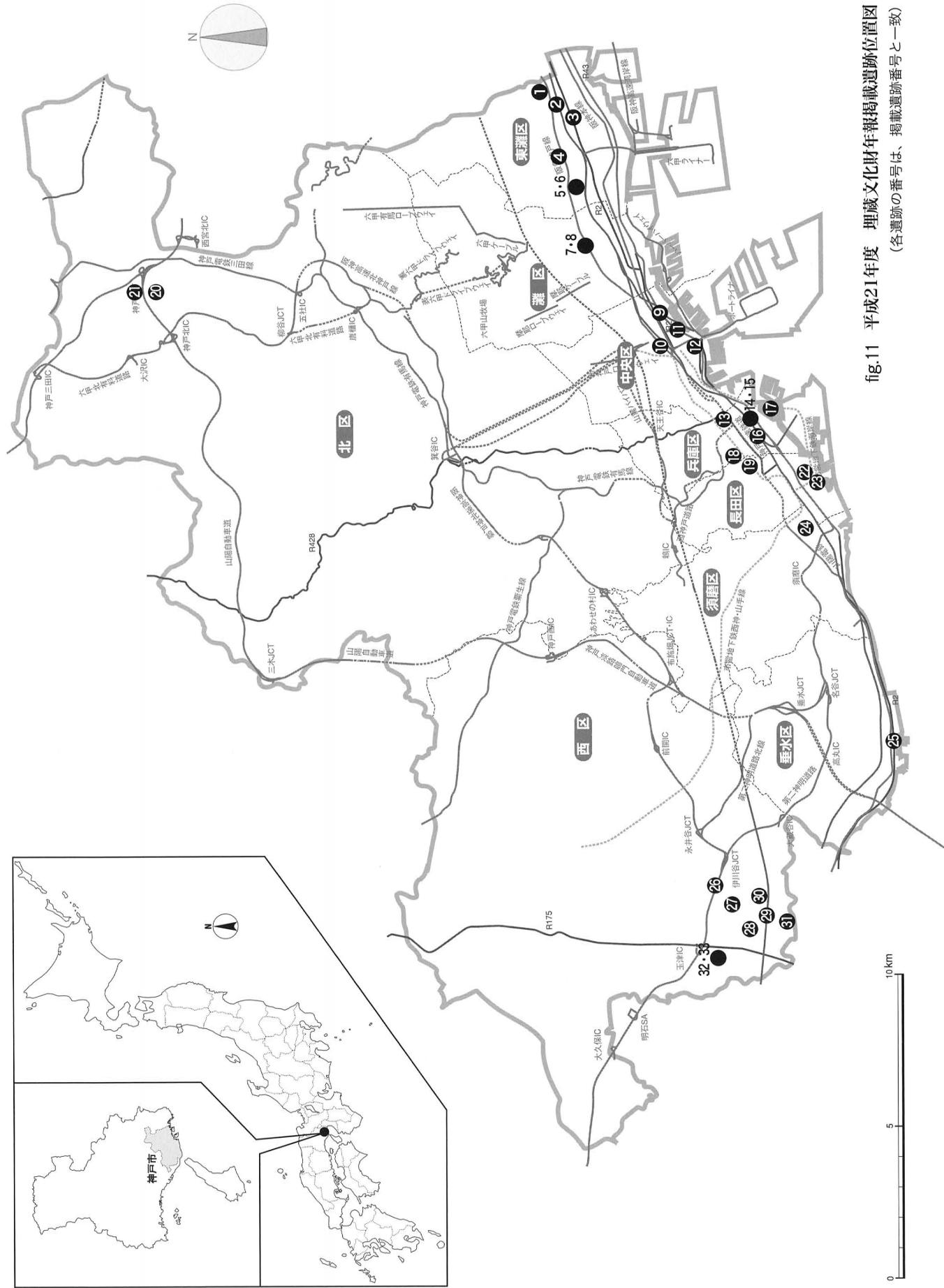




fig.12 調査地点位置図（1） 1/50,000



fig.13 調査地点位置図（2） 1/50,000



fig.14 調査地点位置図（3） 1/50,000



fig.15 調査地点位置図（4） 1/50,000



fig.16 調査地点位置図（5） 1/50,000



fig.17 調査地点位置図（6） 1/50,000

II. 平成21年度の発掘調査

1. 森北町遺跡 第27-b次調査

1. はじめに

森北町遺跡は、神戸市東灘区に所在する、弥生時代～中世にかけての複合遺跡である。当遺跡は六甲山南麓の斜面地上に立地しており、これまでの調査では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての時期において、前漢鏡片や韓式系土器、あるいは他地域産の土器等が出土しており、当該時期における拠点的な集落としての位置を占めていたことが想定されている。

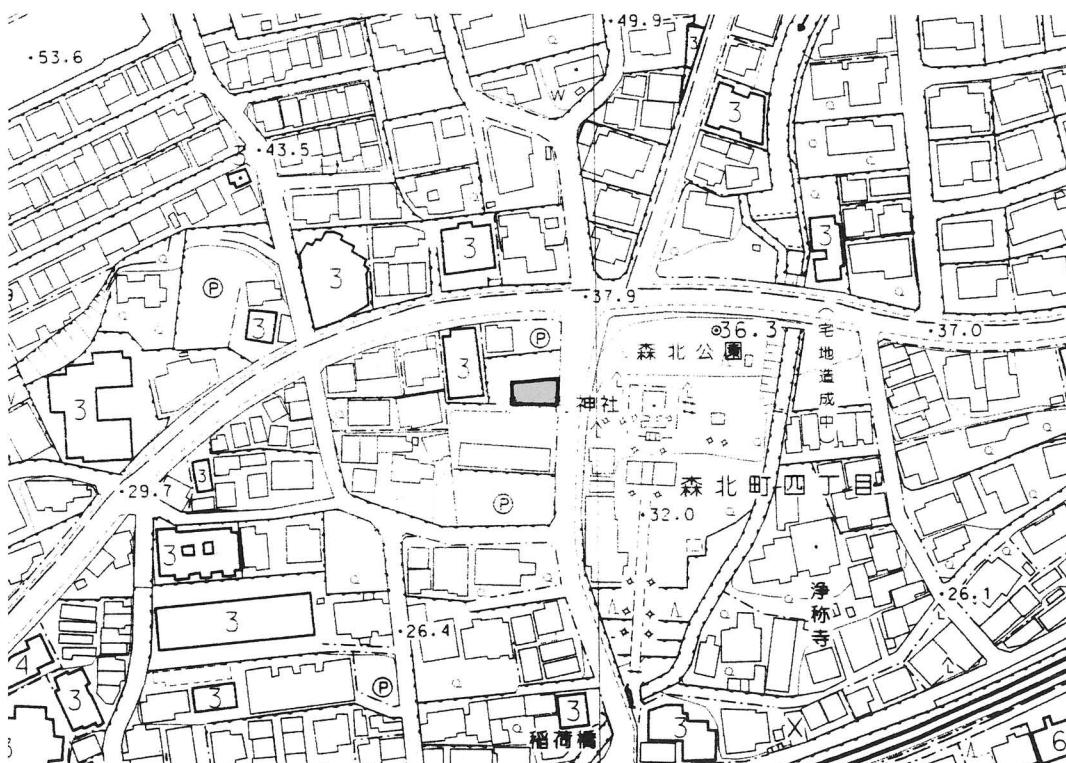


fig.18
調査地位置図
1:2,500

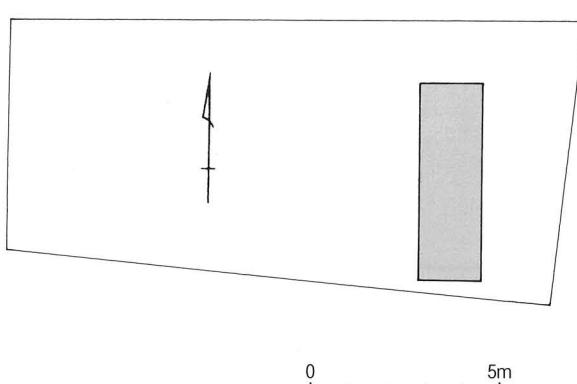


fig.19 調査範囲位置図

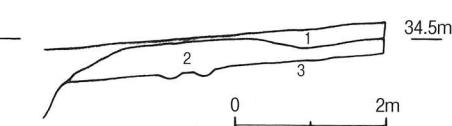


fig.20 調査区西壁土層断面図

2. 調査の概要 今回の調査は宅地造成に伴って実施したものであるが、今回の調査対象地においては平成19年度に第27次調査を実施しており、弥生時代後期の竪穴住居や中世のピット等の遺構を検出している。同調査においては工事影響深度まで調査を止めたため未調査部分が残ることとなったが、今回設計変更が行われることとなり、前回の未調査部分のうち工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

基本層序 調査区西壁付近では、埋め戻し土の下層に、上層より、暗灰褐色砂質土、黄茶褐色礫混じり砂質土（地山）が堆積している。

耕作痕 地山面上で幅30cm、深さ5cmの溝を2条検出した。耕作痕と考えられる溝で、第27次調査においても多数検出されている。

埋土は暗灰褐色砂質土である。埋土の状況から、第27次調査における第2遺構面の遺構に対応するものと考えられ、中世の遺構と考えられるが、遺物は出土していない。

3. まとめ 今回の調査では中世の耕作痕を検出した。第27次調査においても今回の調査区の周辺は遺構の分布が希薄な地区に位置しており、中世以降主に耕作地として利用されていたものと考えられる。

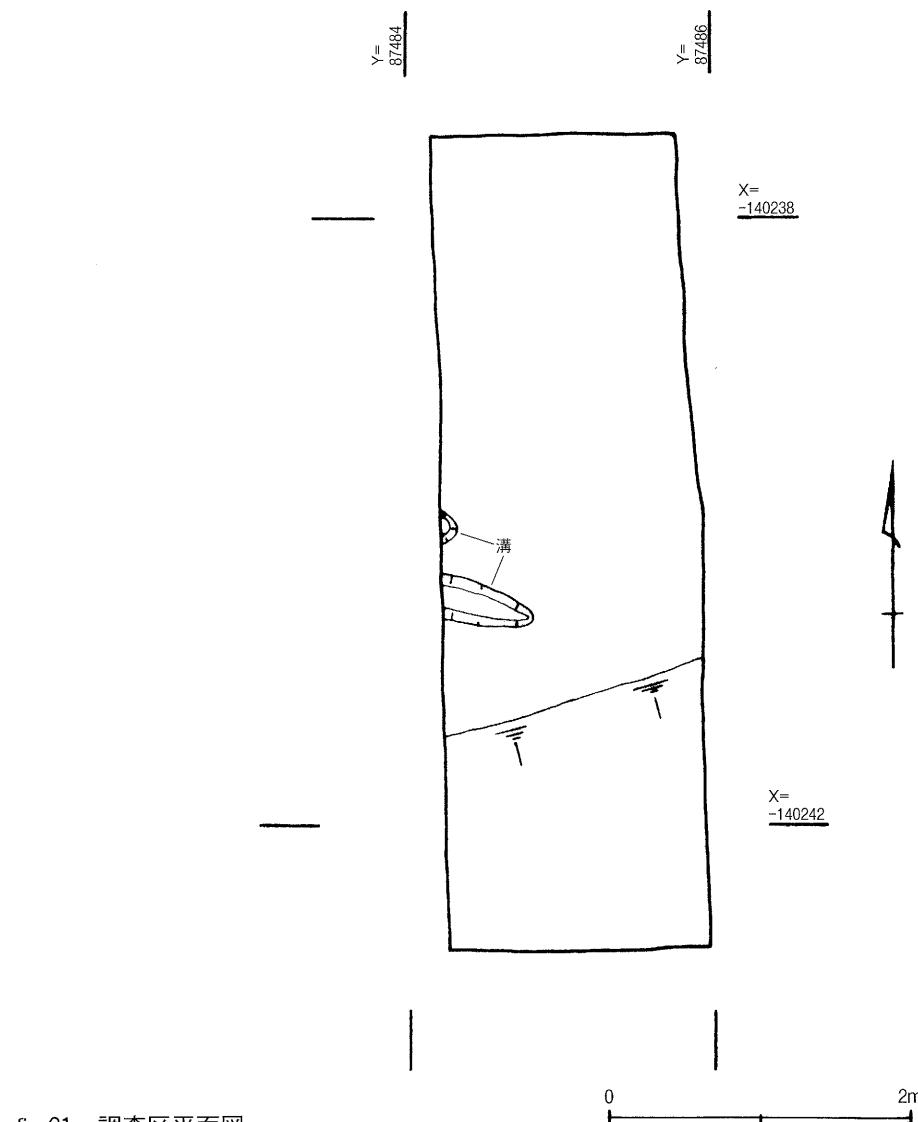


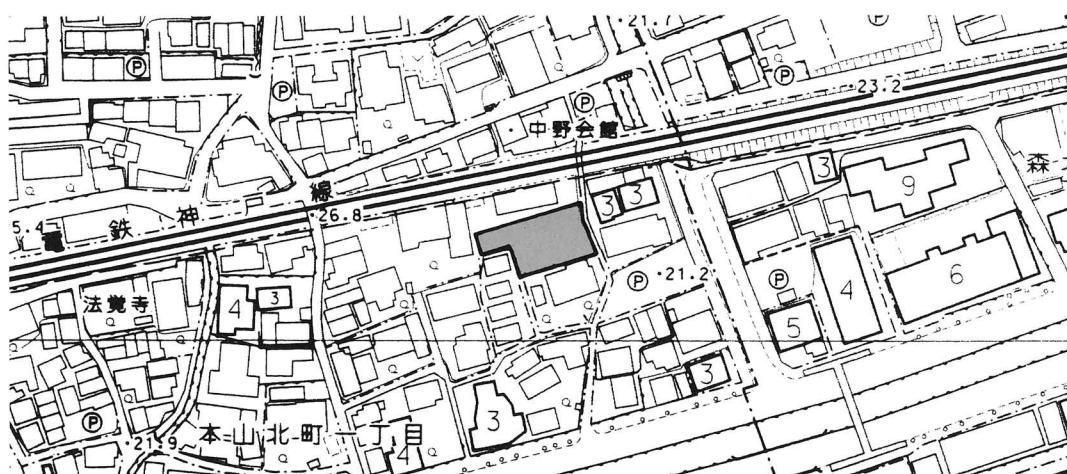
fig.21 調査区平面図

2. 出口遺跡 第9次調査

1. はじめに

出口遺跡は、神戸市東灘区森北町から本山北町に所在する、弥生時代～中世に至る複合遺跡である。当遺跡は、六甲山南麓の扇状地上に立地している。当遺跡の周辺には森北町遺跡、井戸田遺跡や生駒銅鐸出土地が存在するなど、神戸市域の中でも特に埋蔵文化財が密集して存在する地域として知られている。

当遺跡においては、平成元年以來これまでに8次にわたる調査が実施されている。第1次調査においては平安時代後期の掘立柱建物や自然流路が検出され、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製白磁碗・皿、青白磁合子や「蘇民将来・・・」の墨書木簡等の遺物が出土している。



2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴う新設駐車場部分について、工事によって影響を受ける範囲に限定して実施した。今回の調査地は、第4次調査地の北側に隣接している。

今回の調査区は調査対象地の北東隅に位置している。今回の調査は、工事影響深度までに止めたため、調査区南半は遺構面の検出までは至っていない。また、調査区東端には石垣が存在しており、その保護のため、一部については調査を実施できなかった。

今回の調査区は、北西から南東方向への緩斜面上に位置している。

基本層序

上層より、畑耕土、盛土及び搅乱（部分的に存在）、淡黄灰色砂質土、暗黄灰色～（暗）褐色小礫混じり砂質土（遺物包含層）、暗黄灰色～暗褐色礫混じり砂質土（遺物包含層）、暗黄灰色小礫～礫混じり土、礫層+淡褐色砂質土、淡褐色細砂（遺構面基盤層）となる。

遺物包含層である暗黄灰色～（暗）褐色小礫混じり砂質土、暗黄灰色～暗褐色礫混じり砂質土からは弥生時代～中世の土器が多く出土している。土層断面観察では上記のように2層に分層が可能であるが、平面的にはそれぞれの層ごとの遺物の取り上げは実施できなかった。ただし上述のように、ともに弥生時代～中世の土器が出土しており、各層に含まれる遺物に顕著な違いが認められないことから、2つの土層について一括して捉えることに支障はないものと考えられる。

遺物包含層からの出土遺物は完形に復元できるものはないが、磨耗のあまり顕著ではない比較的大型の破片も多く含まれている。弥生時代～中世の各時期の土器が出土しているが、さらに詳細にみると、弥生時代後期～古墳時代前期の甕・高環、古墳時代後期の須恵

器坏蓋・坏身、飛鳥時代の須恵器坏蓋、奈良時代～平安時代の土師器皿(坏)・須恵器坏、平安時代の黒色土器A類椀・瓦器椀、鎌倉時代頃の須恵器鉢・瓦器椀など、さまざまな種類・器種の土器が出土している。

また、出土遺物の中には、灰釉陶器、綠釉陶器、青磁もそれぞれ1～2点出土している。小片のため、詳細な時期については不明であるが、わずかであるものの出土が認められることは、比較的身分の高い階層の人々が近隣に居住していた可能性を示唆するものである。

調査区北半で淡褐色細砂、礫層+淡褐色砂質土を基盤層とする遺構面を検出し、調査区北西隅でピットを2基検出した。

ピット 検出した2基のピットはいずれも径20cm程度のもので、深さはSP01が約29cm、SP02が約26cmを測る。この2基のピットについては、掘立柱建物の柱穴である可能性も考えられるが、調査区内では2基のみの検出であり断定はできない。掘立柱建物であれば、その大半は当調査区の西あるいは北側に広がるものと考えられる。

遺物は、SP02より須恵器・土師器が少量出土しているが、小片のため時期については不明である。

3.まとめ

今回の調査は、工事影響深度までに止めたため、調査対象範囲の全面において遺構面を検出するまでは至らなかった。そのため当該調査地の埋蔵文化財の全容については不明な点が多いが、調査区北西部でピットを2基検出した。

遺物については前述のように、弥生時代後期～鎌倉時代頃までの長い時間幅を示す土器等が多く出土している。出土状況から判断すれば、今回遺物包含層として取り扱った土層は整地層ないし流土といった二次的な堆積土として判断することが妥当と考えられるが、磨耗のあまり顕著でない大型の破片も多く含まれるため近隣に各時期の集落が存在していたことが想定される。その場合、今回調査区の北西隅でピットを検出していることから、各時期の集落は当調査区の北あるいは西方向に存在していたものと考えられる。特に平安時代から鎌倉時代においては、極少量ながら灰釉陶器、綠釉陶器、青磁も出土していることから、特に平安時代以降においては、公的な階層を含む居住域が存在していたものと考えられる。

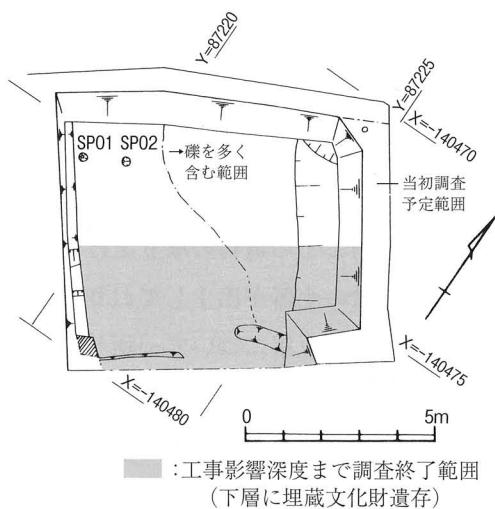


fig.23 調査区平面図



fig.24 調査区全景

3. 本山遺跡 第37次調査

1. はじめに

本山遺跡は神戸市東灘区に所在する、弥生時代の集落遺跡である。

これまでに実施した30数次にわたる調査においては、弥生時代前期～中期の竪穴住居や土坑等の遺構を検出しているほか、今回の調査地の東側隣接地で実施した第12次調査では銅鐸が埋納坑を伴って出土している。また、第16次調査においては、流路内から弥生時代前期初頭の土器や木製品が多量に出土しており、注目されている。

以上のように当遺跡は弥生時代における拠点的な集落跡として考えることができる遺跡である。

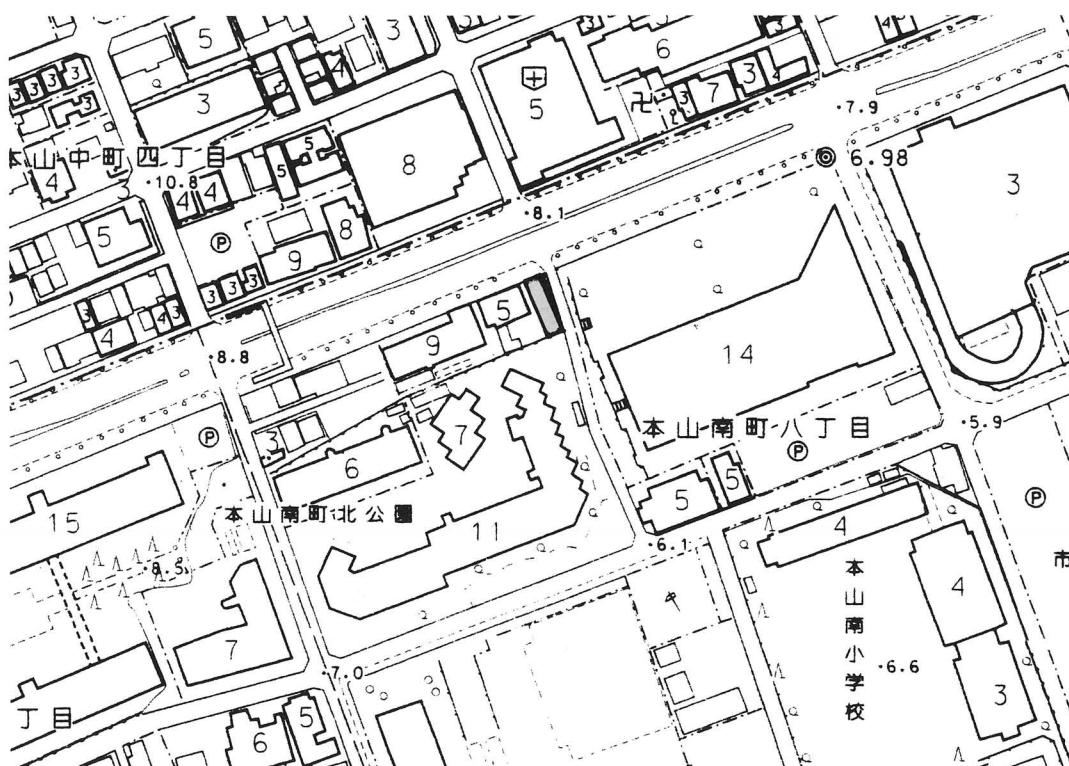
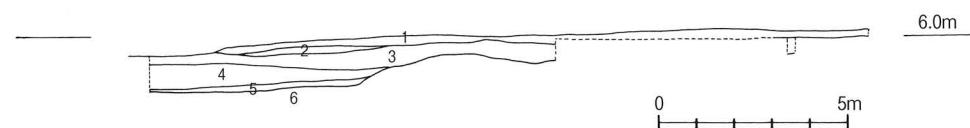


fig.25
調査地位置図
1:2,500



- 1 暗茶褐色シルト混砂質土(遺物包含層)
- 2 黒茶灰褐色砂混シルト
- 3 黒灰色シルト(やや砂混じる)
- 4 黒灰色シルト
- 5 暗灰褐色礫混砂質土
- 6 淡青灰色礫混砂質土

fig.26 調査区西壁土層断面図

2. 調査の概要 今回の調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。調査の結果、調査区全体において弥生時代中期の大溝を1条検出した。

基本層序 上層より、搅乱、暗灰色砂質土（旧表土）、黒褐色砂質土（遺物包含層）、黄褐色砂質土（遺構面基盤層）が堆積している。

遺物包含層である黒褐色砂質土や後述するSD01の埋土から、多量の弥生時代前期～中期の遺物が出土している。黒褐色砂質土からは石槍や石庖丁などの石器も出土している。

また、遺物包含層より上層の砂礫層から、銭貨「皇宋通寶」が出土している。本来は宝元2年〔1039〕初鑄の北宋錢であるが、摩滅が著しいため私鑄銭の可能性も考えられる。

SD01 幅約5.0m、深さ約1.3mを測る大溝である。調査区の南半部分においては完掘したが、調査区の北半部分は、工事影響深度の関係で遺構の上面付近を検出したにとどまる。以上のような状況から、大溝の全体像については不明な点が多いが、南半部は南北方向に流れ、北半部は、トレーナー掘削による確認作業の結果西方向へ屈曲する状況が考えられる。

上層～中層は黒灰色シルトが堆積し、下層は暗灰褐色礫混じり砂質土が堆積している。下層の堆積状況から、流水があったものと考えられる。

弥生時代前期～中期中頃の土器が多量に出土している。前期及び中期中頃（Ⅲ様式期）の遺物が多く、中期前葉（Ⅱ様式期）の遺物は少ない傾向が認められる。最も新しい時期の遺物が弥生時代中期中頃のものであるため、SD01の機能していた時期についても同時期であったものと考えられる。なお、上層と下層の遺物に時期差は認められず、前述の遺物が混在している。

土器以外の弥生時代の遺物として、石包丁や大型蛤刃石斧の破片や磨石等の石器が出土したほか、サヌカイト剥片も多く出土している。

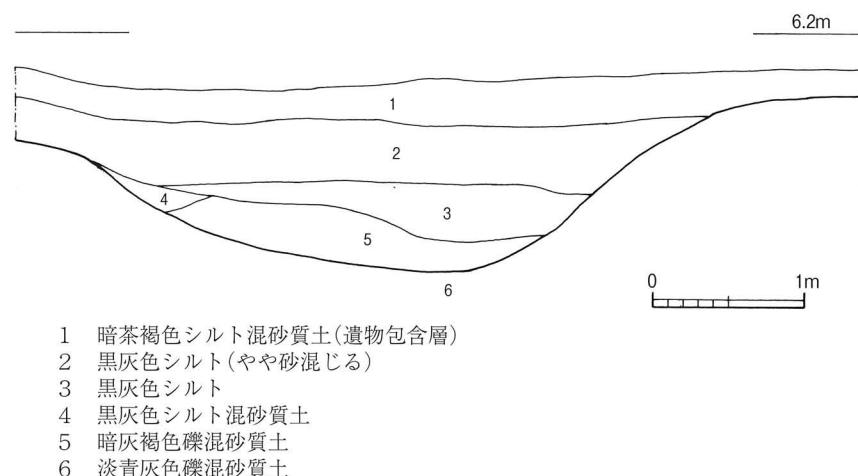


fig.27
SD01
土層断面図



fig.28
SD01
土層断面

3.まとめ

今回の調査では弥生時代中期（Ⅲ様式期）の大溝を1条検出した。大溝は肩部から急角度で落ち込むもので、人為的に掘削された遺構と考えられる。

大溝の下層（遺構の底部付近）は礫混じりの砂質土が堆積しており、掘削された当初は流水があったものと考えられる。

周辺地における調査成果を考え合わせると、今回検出した大溝は、当該時期の居住域内かあるいは居住域の近接地において掘削されたものと考えられる。水路あるいは排水路としての機能をもつものと推定される。

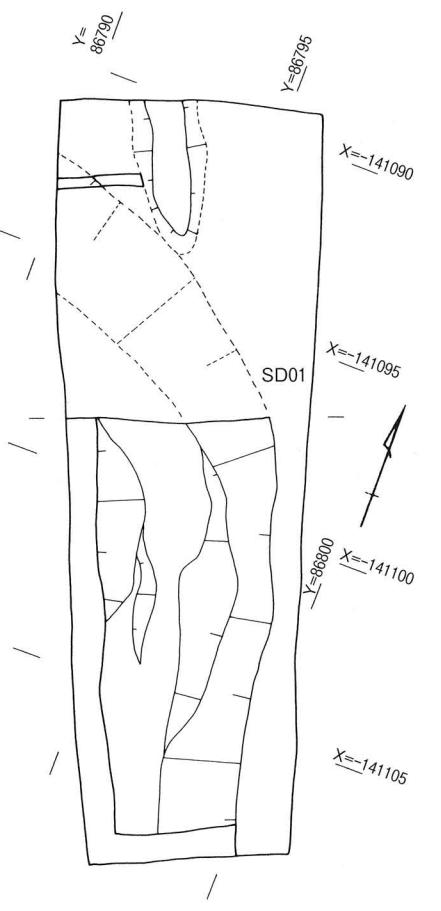


fig.29
調査区平面図



fig.30
調査区南半
全景

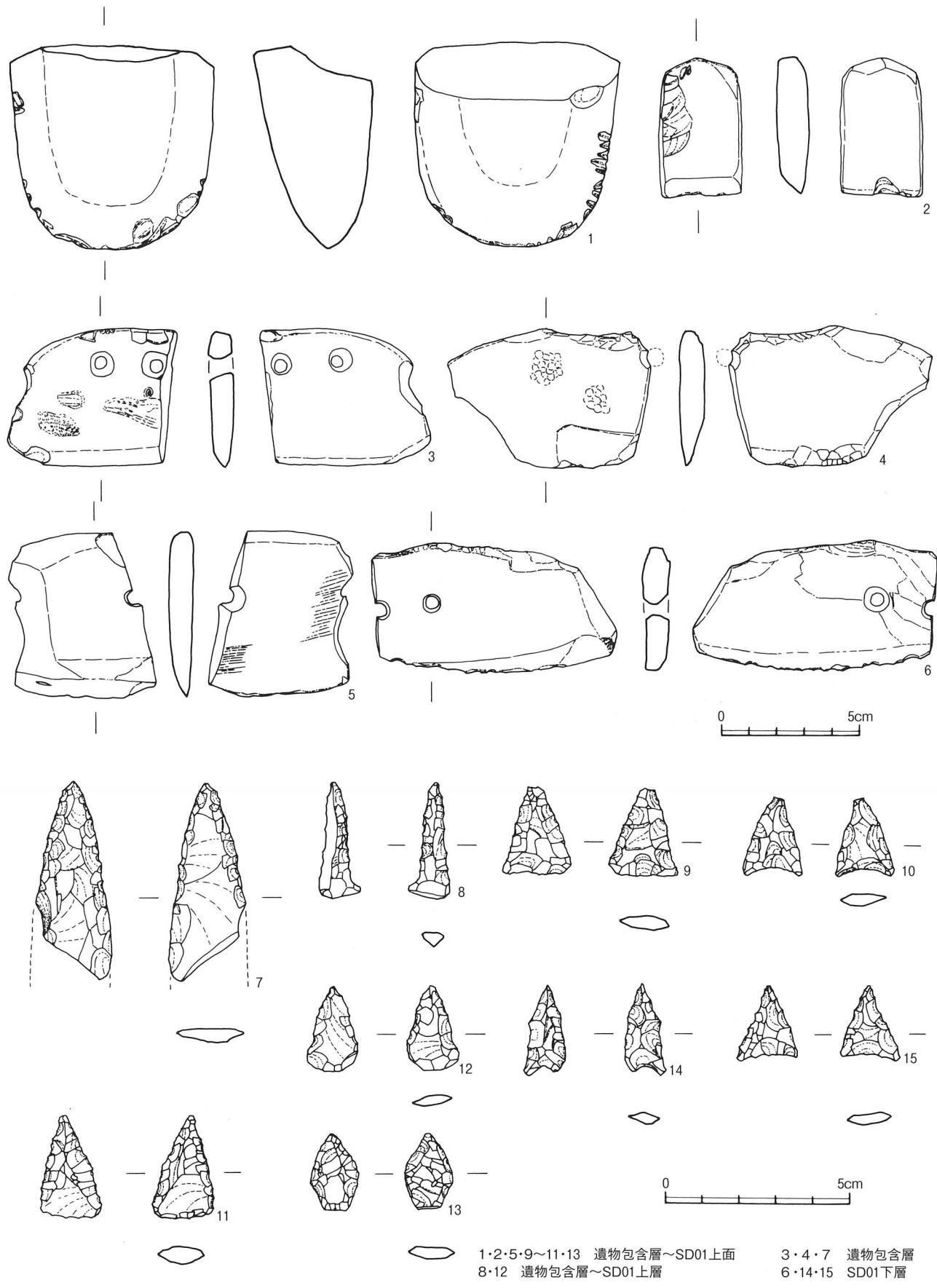


fig.31 出土遺物実測図

4. 西岡本遺跡 第8次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は東灘区西岡本5・6丁目に所在し、住吉川上流域左岸、標高50～80mの高位段丘上に立地している。西岡本地区はかつては武庫郡本山村大字野寄と呼ばれていた地区であり、明治時代より野寄古墳群と呼称される古墳の集中する地域として知られてきた。ただし早くから住宅地としての開発が行われたこともあり、遺跡の実態については長い間不明であった。昭和63年度以降これまでに7次にわたる調査が行われてきたことにより、近年ようやく当遺跡の様相が窺われつつある。

なお、当調査については平成22年度に『西岡本遺跡第8次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

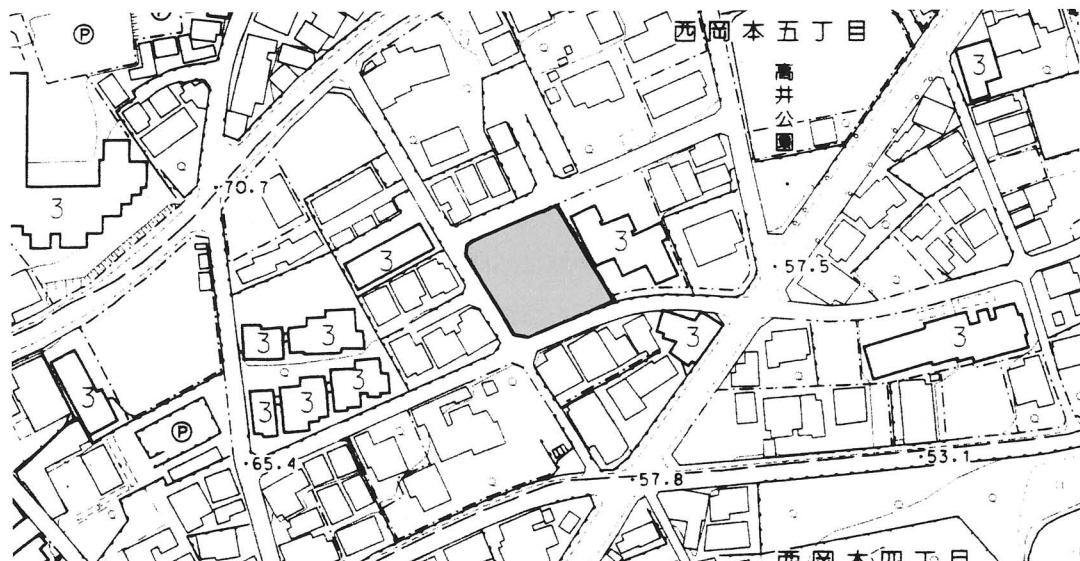


fig.32
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は宅地造成工事に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。

基本層序

調査地内は、北・西側接道部から南に緩やかに傾斜し、南側接道部手前は段状に約1.5m落ち込んで平坦面となっている。

現況盛土の下層、北端で現地表下50cm、南端では同90cmで弥生時代～中世の土器を含む遺物包含層である灰黄褐色粘性砂質土上面を確認した。

遺物包含層の下層は、北部では暗赤褐色粘質土の遺構検出面として広がるが、南部では暗褐色粘性砂質土、南端部では暗褐色粘性砂質土の上層に淡灰色砂質土が被覆している。この暗褐色粘性砂質土上面で掘立柱建物の柱穴等の遺構を検出した（第1遺構面）。

この整地層を除去すると、全体に暗赤褐色粘質土の地山面となる。西南部及び東南部では暗赤褐色粘質土もしくはその下層の赤茶褐色砂質粘土が遺構面基盤層となる。この地山面で奈良時代の土坑や弥生時代後期の竪穴住居・土坑等の遺構を検出した（第2遺構面）。

第1遺構面

奈良時代後半～平安時代の掘立柱建物6棟、柵列1条を検出した。

SB01

調査区南東部で検出した東西3.6m、南北3.6mを測る、2間×2間の掘立柱建物である。出土遺物から、奈良時代後半の建物と考えられる。

- SB02 調査区南東部で検出した東西4.8m、南北5.6mを測る、東西2間×南北3間の掘立柱建物である。出土遺物から、奈良時代後半の建物と考えられる。
- SB03 調査区南東部で検出した東西4.2m、南北4.8mを測る、2間×2間の掘立柱建物である。出土遺物からは判然としないが、平安時代後期頃の建物の可能性がある。
- SB04 調査区中央南よりで検出した東西6.5m、南北5.5m以上を測る、4間×3間以上と推定される東西棟の大型の掘立柱建物である。西側に1.9m、東側に1.5mの庇をもつ。出土遺物から、奈良時代末～平安時代前期の建物と考えられる。
- SB06 調査区西南端で検出した東西3.4m、南北3.4mを測る、2間以上×2間以上の掘立柱建物である。出土遺物から、奈良時代後半の建物と考えられる。
- SB07 調査区東部で検出した東西3.8m、南北5.0mを測る、2間×2間の掘立柱建物である。出土遺物から、平安時代前期の建物と考えられる。
- SA05 調査区中央西よりで検出した柱穴5基から構成される柵列である。掘立柱建物の一部である可能性も考えられたが、周辺で対応する柱穴を確認できなかったため柵列と判断した。
- 第2遺構面** 壺穴住居1棟、土坑7基、性格不明の落ち込み5ヶ所を検出した。
- SB201 調査区東端北よりで検出した平面形が方形の壺穴住居であるが、調査区外に延びるため本来の規模は不明である。弥生土器あるいは土師器と考えられる土器片が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

3.まとめ 今回の調査では遺構面を2面確認し、第1遺構面では奈良時代後期～平安時代の掘立柱建物6棟、柵列1条を、第2遺構面では弥生時代後期～古墳時代初頭の壺穴住居、土坑、奈良時代の土坑などを検出した。

第1遺構面で検出した掘立柱建物・柵列については建物の主軸方向や柱穴の形状から大きく4つの群に分かれるが、切り合い関係からSB02・SA05→SB01・06→SB04・07→SB03の変遷が考えられる。

第2遺構面で検出した遺構のうち弥生時代後期～古墳時代初頭の壺穴住居、土坑については、今回の調査地の100m東側で実施された岡本北遺跡第2次調査の調査成果と類似しており、当該時期における集落の範囲を考える上で貴重な成果となった。



5. 郡家遺跡 第84次調査

1. はじめに

郡家遺跡は神戸市東灘区に所在する、弥生時代～平安時代の集落遺跡である。遺跡は、六甲山南麓、石屋川左岸の沖積地に立地している。これまでに実施した80数次にわたる調査成果から、摂津国菟原郡衙の推定地として考えられている。

今回の調査地周辺においても、古墳時代後期の堅穴住居や掘立柱建物等の遺構が複数の調査地点において検出されている。



fig.34
調査地位置図
1:2,500

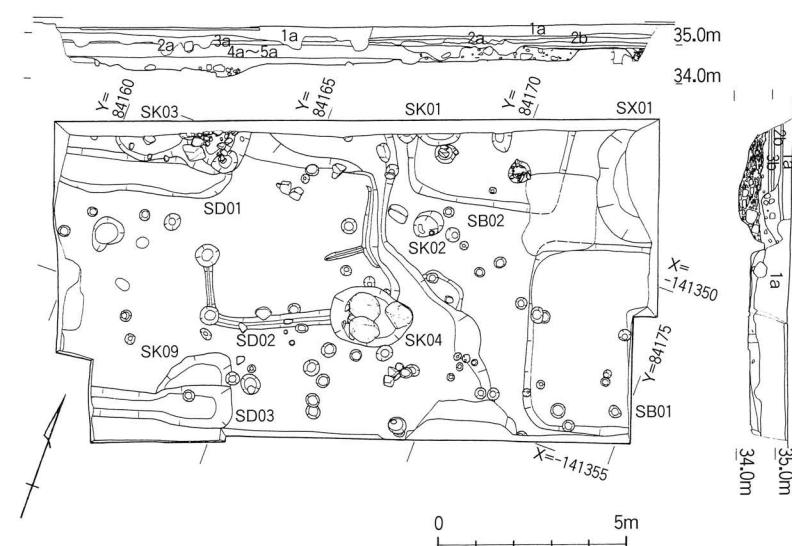


fig.35
調査区平・
断面図

2. 調査の概要 今回の調査は個人住宅建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。

基本層序 上層より、盛土、旧耕土が堆積しており、その下層が遺構面となる。なお、水田造成により遺構面のレベルは西半に比べ東半の方が高くなっている。

調査の結果、遺構面を1面確認し、古墳時代後期の竪穴住居、溝、室町時代の土坑、江戸時代の採石坑などの遺構を検出した。

SB01 調査区東部で検出した竪穴住居で、東側は調査区外に延びる。検出した規模は、南北約5.1m、深さ30cmを測る。主柱穴は2基検出した。柱穴の床面からの深さは20cmを測る。住居北辺近くの床面において火を受けたことによる赤変部分を確認した。

住居内には大量の礫が投棄されている。礫は、北側に多く、南側に少ない傾向がある。礫の中には一辺70cmに及ぶ大型のものもあり、礫と礫の間から土器が出土している。貼床直上において土師器甌や須恵器高坏が出土している。住居から出土した遺物は、古墳時代後期のものと考えられる。

SB02 調査区北東部で検出した竪穴住居で、北側は調査区外に延びる。検出した規模は、南北約4.2m、深さ30cmを測る。主柱穴は2基検出した。柱穴の床面からの深さは20cm程度を測る。SB01と同様に礫が大量に投棄されている。礫は、東側に多く、西側に少ない傾向がある。礫の中には一辺40cmを越える大型のものもあり、礫と礫の間から土器が出土している。住居から出土した遺物は、古墳時代後期のものと考えられる。

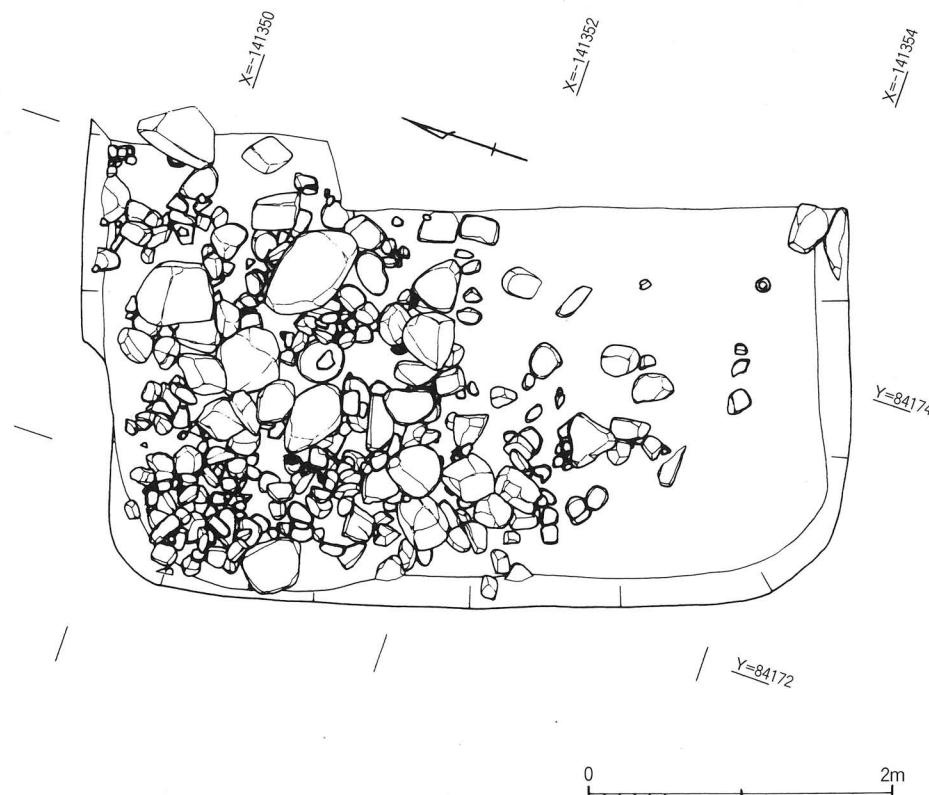


fig.36
SB01遺物・礫検出状況平面図

- SD01 調査区北西部で検出した直線的に流れる溝で、西側は調査区外に延びている。SK03によって切られている。幅約1.0m、深さ約20cmを測る。古墳時代後期の須恵器壺・甕等が出土している。
- SD03 調査区南西部で検出した直線的に流れる溝で、西側は調査区外に延びている。SK09と切り合い関係があるが、前後関係は判然としない。同一遺構の可能性がある。幅約0.7~0.8m、深さ約30cmを測る。
- SK04 調査区中央部で検出した土坑で、平面形は不整形を呈する。東西約2.2m、南北約1.5m、深さ約80cmを測る。埋土の上層には多量の礫を含むが、下層は地山に含まれる大型の花崗岩の転石のみである。大型の礫と礫の間は土砂の流入は少なく、空隙が存在する。石材採取のための採掘坑の可能性も考えられるが、後述するSX01とは違い、石材加工の際に生じる薄い石材片は見られない。出土遺物は、室町時代のものを主体としている。
- SX01 調査区北東隅で検出した土坑で、北・東側は調査区外に延びるため本来の規模は不明であるが、平面形は不整円形を呈するものと考えられる。南北約3.0m、東西約1.4m以上の規模をもつ。石材加工の際に生じる石屑が詰まったような状態で検出している。地山に含まれる花崗岩の転石を採取するための採掘坑に、石材加工時に生じた石屑を廃棄したものと考えられる。石屑に残る矢穴の形状から、江戸時代以降の遺構と考えられる。
- 柱穴 約50基の柱穴を検出したが、掘立柱建物としてのまとまりは認められなかった。

3. まとめ 今回の調査では、周辺地における既存の調査成果と同様に古墳時代後期の竪穴住居等を中心として、中世～近世に至る遺構・遺物を確認した。

竪穴住居の埋土中において礫と礫の間から出土した土器は遺存度の高いものも含まれており、土石流等によって流入した遺物ではなく住居が廃絶された跡の窪みに礫とともに集積されたものの可能性が高いものと考えられる。



fig.37
SB02遺物・礫検出状況平面図

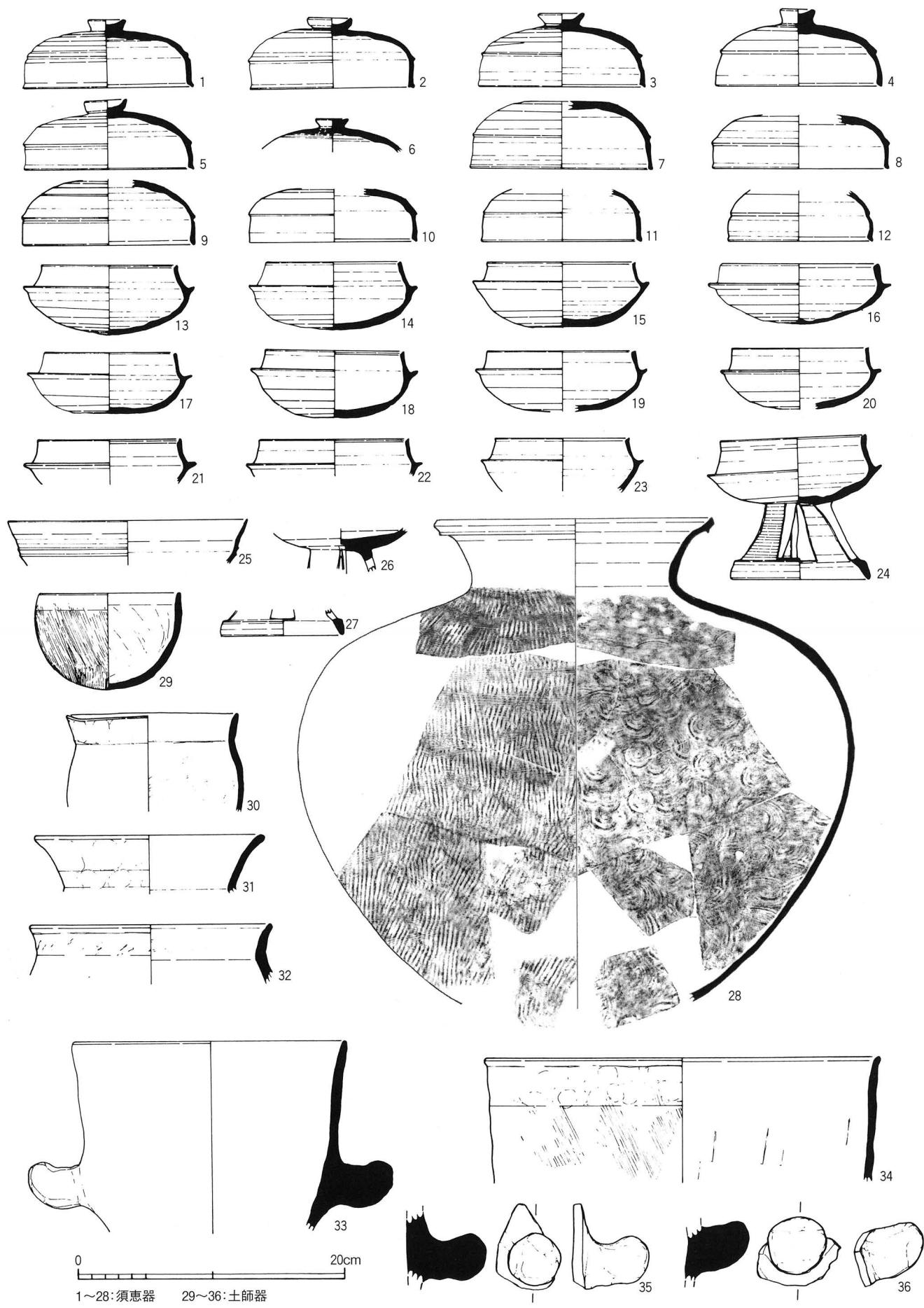


fig.38 SB01出土遺物実測図

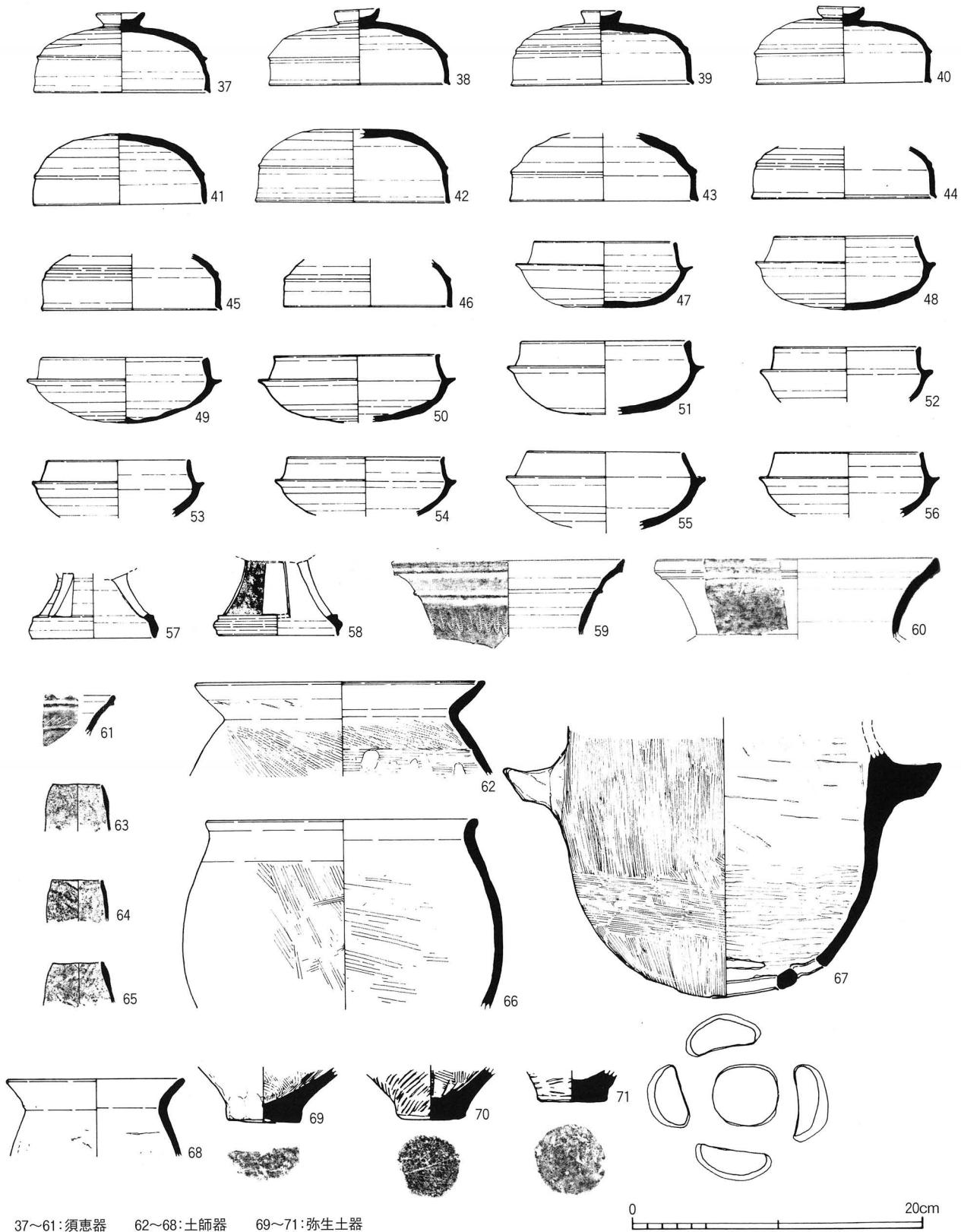


fig.39 SB02出土遺物実測図

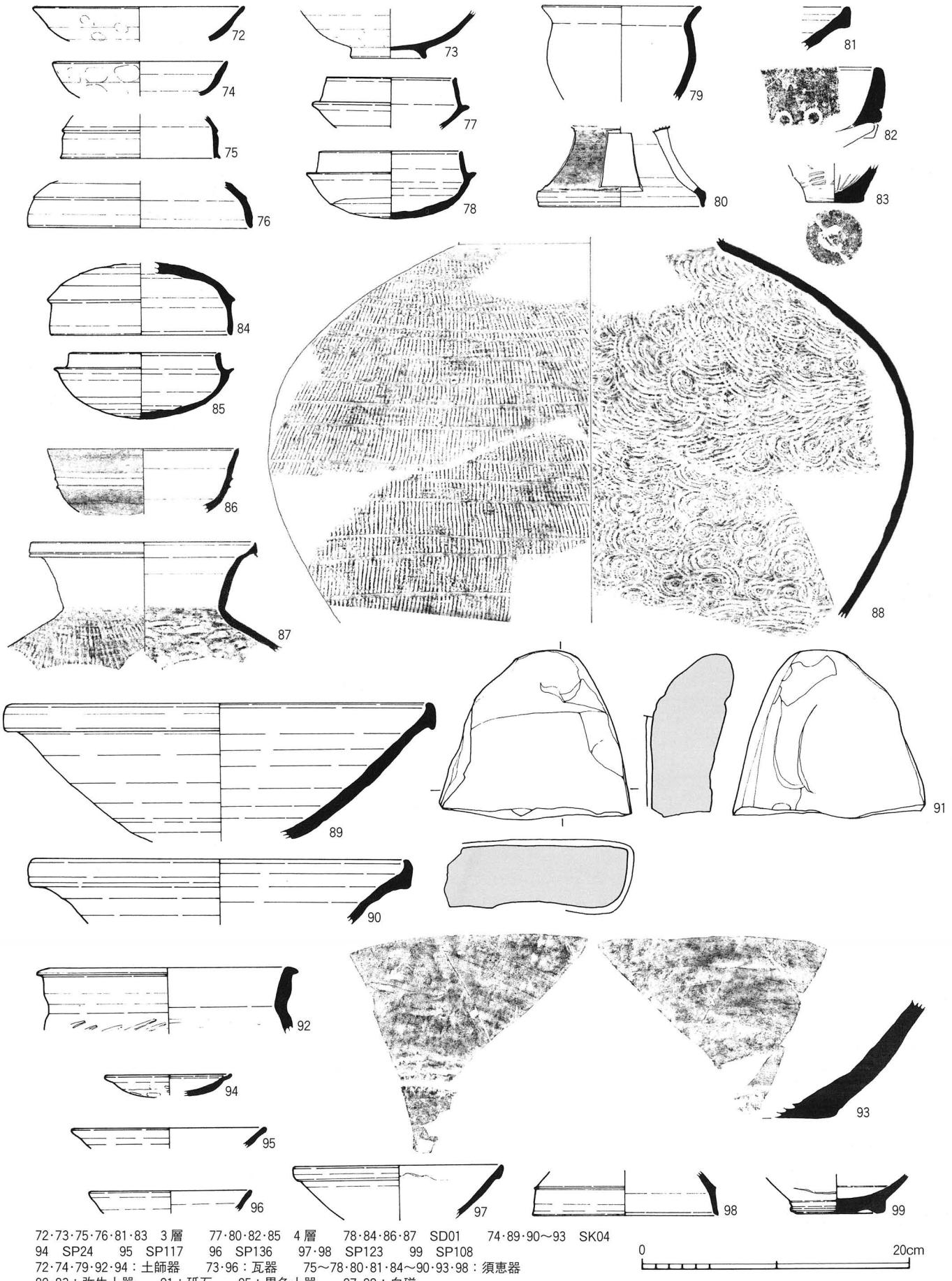


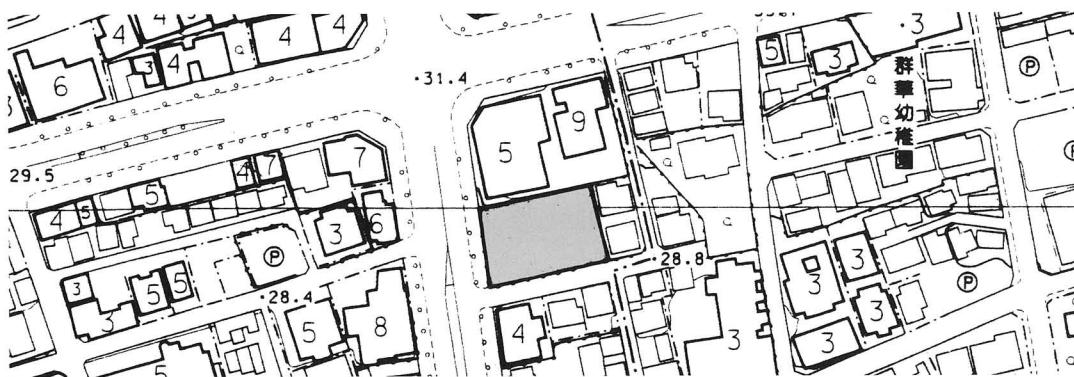
fig.40 遺物包含層・遺構出土土器実測図

6. 郡家遺跡 第85次調査

1. はじめに

郡家遺跡は神戸市東灘区御影町、御影中町に所在する、弥生時代～平安時代の集落遺跡である。当遺跡は、石屋川と住吉川によって形成された扇状地上に立地し、現標高13～40mを測る。これまでに実施した80数次にわたる調査においては、各時代の遺構・遺物が確認されているが、特に昭和54年度に大蔵地区で実施した調査において大型の掘形をもつ柱穴から構成される奈良時代の掘立柱建物を検出しており、摂津国「菟原郡衙」の推定地と考えられている。

なお当調査については、平成22年度に『郡家遺跡第85次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。

基本層序 上層より、盛土、近現代耕土、黄褐色～淡褐色砂（洪水砂）、黒褐色シルト（第1遺構面基盤層）が堆積している。この黒褐色シルトは弥生時代後期及び古墳時代後期の遺物包含層であり、その下層の暗黄茶色砂質土上面で第2遺構面を確認した。

第1遺構面 標高27.3～28.5mで第1遺構面を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、自然流路2条、溝1条、柱穴、ピットである。

SB101 調査区東部で検出した、東西2間(6.5m)以上、南北4間(9.5m)以上を測る掘立柱建物である。建物の主軸方向はN9°Eである。北・東側は調査区外に延びるため正確な規模は不明である。

SP107～109 SB101の南側柱列の南側で平行に並ぶ柱穴3基を検出した。柱穴出土の土器は小片のため詳細な時期については不明であるが、検出状況から、SB101に伴う庇と考えられる。

SR101 調査区中央部で検出した南北方向に流れる自然河道である。最大幅約5m、深さ20～30cmを測る。古墳時代後期頃のものと考えられる須恵器が少量出土している。

SR102 調査区南西隅で検出した自然河道で、調査区内では北西～南東方向に流れしており、南肩が調査区外に存在するため本来の規模は不明である。検出した規模は幅7.0m以上、深さ約70cmを測る。古墳時代後期頃の須恵器が少量出土している。

SD101 調査区西部で検出した南北方向に流れる溝である。南部はSR102によって失われている。幅2.2～3.0m、深さ20～35cmを測る。時期不明の須恵器が出土している。

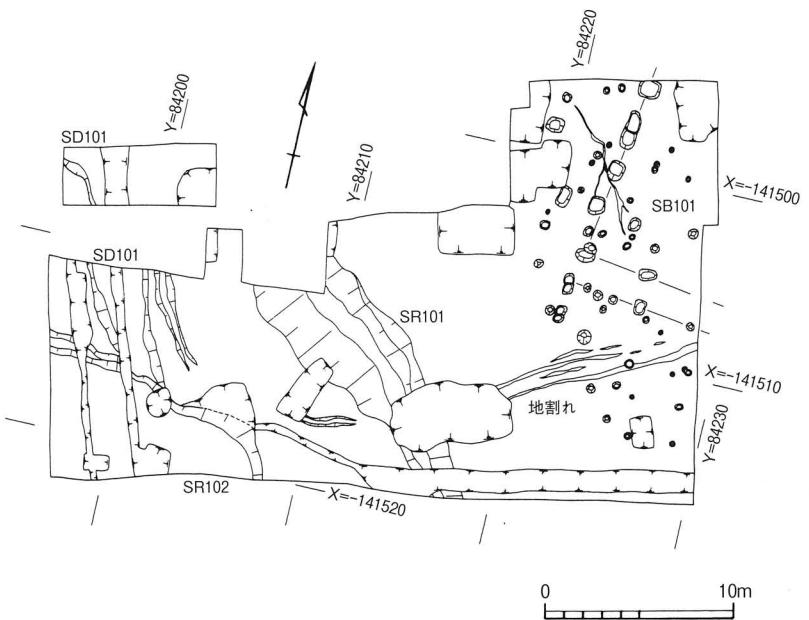


fig.42
第1遺構面
平面図

第2遺構面 標高27.2~28.4mで確認した。弥生時代後期の土坑、落ち込み、自然流路、ピットを検出した。

SK201 平面形が方形に近い形状を呈する土坑で、一辺30cm、深さ25cmを測る。遺物は出土していない。

SX201 平面形が楕円形を呈する落ち込みで、一辺1.6×1.0m、深さ8cmを測る。遺物は出土していない。

SR201 南北方向に流れる自然河道で、幅5.0~7.5m、深さ約35~50cmを測る。弥生時代後期の土器が出土している。出土土器の中には生駒西麓産の胎土をもつ土器も少量含まれる。

SR202 調査区南西部で検出した自然河道で、北西~南東方向に流れしており、南肩が調査区外に存在するため本来の規模は不明である。検出した規模は幅7.0m以上を測る。弥生土器と古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

SD201 SR201の西側で検出した南北方向に流れる溝である。南部はSR202によって失われている。幅6.0m、深さ13cmを測る。弥生時代後期の土器が出土している。

3.まとめ 今回の調査で検出した遺構のうち調査区東部で検出した柱穴、ピット、掘立柱建物は、遺構面上面が土石流や洪水によって削平されていることから、本来は今回の検出面よりも上位から掘り込まれた遺構と考えられる。SB101については柱穴からの出土遺物が乏しく時期の確定は困難が伴うが、当調査区の南東で昭和62年度に大蔵地区で実施した調査では奈良時代~平安時代の掘立柱建物2棟を検出しているなど既存の調査成果を考え合わせると、同様な時期の建物である可能性が高い。

SR101・201は、昭和59年度に城ノ前地区で実施した調査で確認している自然流路のつづき部分と考えられる。今回の調査では出土遺物が少なく不明な点が多いものの、周辺地での調査成果を考え合わせると、弥生時代後期に徐々に埋まり、古墳時代以降には完全に埋没したものと考えられる。

7. 篠原遺跡 第28次調査

1. はじめに

篠原遺跡は六甲山南麓、西の榎谷川・東の都賀川が合流して都賀川となる地点付近、両河川にはさまれる範囲および六甲川左岸の傾斜地に立地する遺跡である。

当遺跡から出土した縄文土器が1929年に小林行雄氏によって紹介され、早くから縄文時代の遺跡として知られてきた。ただし、当遺跡において組織立った発掘が実施されたのは1983年が最初である。以後これまでに27回の発掘調査が実施されており、縄文時代早期・後期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期～中世に至る各時代の遺構・遺物が確認されている。特に、縄文時代晩期の東北地方北部の土器である大洞式土器や遮光器土偶等が出土したことは、当該時期に東北地方との間の交流を示すものとして注目される。



2. 調査の概要

今回の発掘調査は、宅地造成に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。調査の結果、遺構面を3面確認した。

基本層序

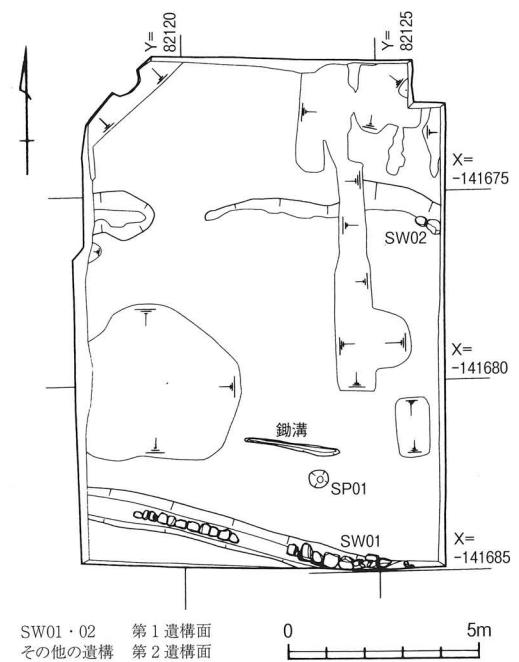
現表土の下に3枚程度の水田土壤および表土層(2a層～5a層)を確認した。2a層上面が第1遺構面、3a層下面が第2遺構面、5a層下面が第3遺構面となる。

第1遺構面

2a層を耕土とする耕地を南北の段状に区画する石垣を検出した。石垣SW01・SW02の間隔は9mを測る。時期は、中世以降と考えられる。

第2遺構面

これも耕土と考えられる3a層の下面で確認された遺構面で、鋤溝・柱穴(SP01)各1が検出された。第1遺構面よりも古いが、時期は同様に中世以降と考えられる。



第3遺構面 5a層下面で検出した遺構面である。

調査区の南部で混入と考えられる須恵器が少量出土しているが、基本的に5a層は弥生時代後期までの遺物を含む土層である。竪穴住居2棟、溝2条、土坑3基、土器集中部3ヶ所、柱穴28基等を確認した。

SB01 北東部で検出した、復元径約10mを測る大型の円形竪穴住居である。西側の一部のみを検出した。SB02、SD02、SK03と切り合い関係にあり、SB01が前二者より古く、SK03よりも新しい。深さ約20cmを測る。

幅約20cm、床面からの深さ約20cmの周壁溝がめぐる。竪穴住居に伴う柱穴を1基確認している。柱穴は、床面からの深さ約40cmを測り、柱痕の直径は約25cmである。住居の北西部に25cm×35cmの台石が据え置かれる。住居西部の床面上で弥生時代中期の甕及び壺片が出土している。

SB02 平面形が方形を呈する竪穴住居で、深さ約25cmを測る。西隅の一部のみの確認であり、規模は不明である。調査区内では柱穴、周壁溝は確認していない。SB01、SK03と切り合い関係にあり、SB02の方が新しい。住居の廃絶後、埋没がある程度進行した段階で大型の礫等が複数投棄されている。弥生時代後期の遺物が出土している。

SD02 幅約60cm、深さ約20cmを測る。SB01、SK01、SX01と切り合い関係にあり、SB01よりも新しく、SK01、SX01よりも古い。

SK01 東西約100cm、南北約60cm、深さ約20cmを測る、平面形が梢円形を呈する土坑である。埋土はSX01と同質で区別できなかった。SX01の凹み部分であるかもしれない。

SK02 径約70cm、深さ約20cmを測る、平面形が円形を呈する土坑である。

SK03 40cm×60cm以上、深さ約60cmを測る、平面形が不整円形を呈する土坑である。SB01、SB02と切り合い関係にあり、SK03が両者よりも古い。

3.まとめ 第3遺構面で弥生時代の竪穴住居等を確認した。SB01は西側の一部のみの確認であるが、復元される直径は10m程度を測り、大型の住居に属するものといえるだろう。SB01は弥生時代中期、SB02は弥生時代後期の住居と思われるが、より詳細な時期については出土遺物の整理を実施した後に検討したい。

その上層にあたる第1・2遺構面については、耕地として土地利用が行われていることを確認した。周辺の調査においては中世の掘立柱建物等が確認されており、今回検出した耕地が中世に属するとすれば、この時期、耕作地の広がる中に屋敷が散在するという景観が当地に広がっていたものと推測される。

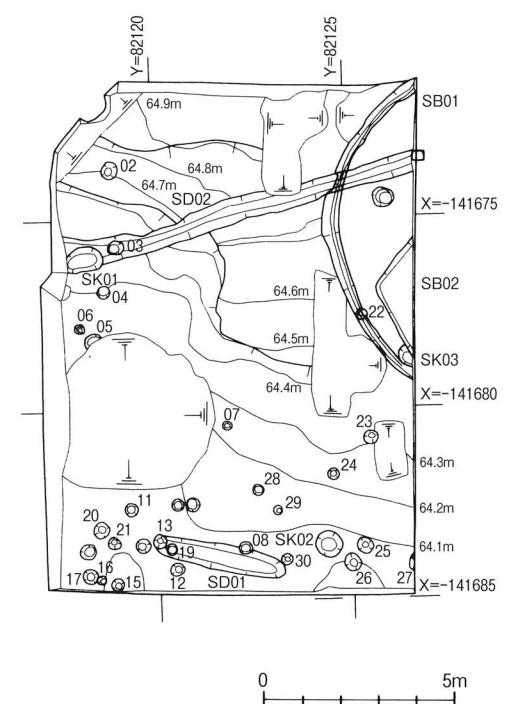


fig.45 第3遺構面平面図

8. 篠原遺跡 第29次調査

1. はじめに

篠原遺跡は六甲山南麓、都賀川左岸の扇状地上標高50～86mに位置する遺跡である。

当遺跡は、昭和4年に小林行雄氏によって発見され、これまでに28次にわたる発掘調査が実施されている。これまでの調査の結果、縄文時代～中世に至る遺構・遺物が確認されている。特に縄文時代晚期の遺物が顕著であり、東北地方の大洞式土器や遮光器土偶の一部などが出土している。また、弥生時代後期の竪穴住居や中世の掘立柱建物等も発見されている。

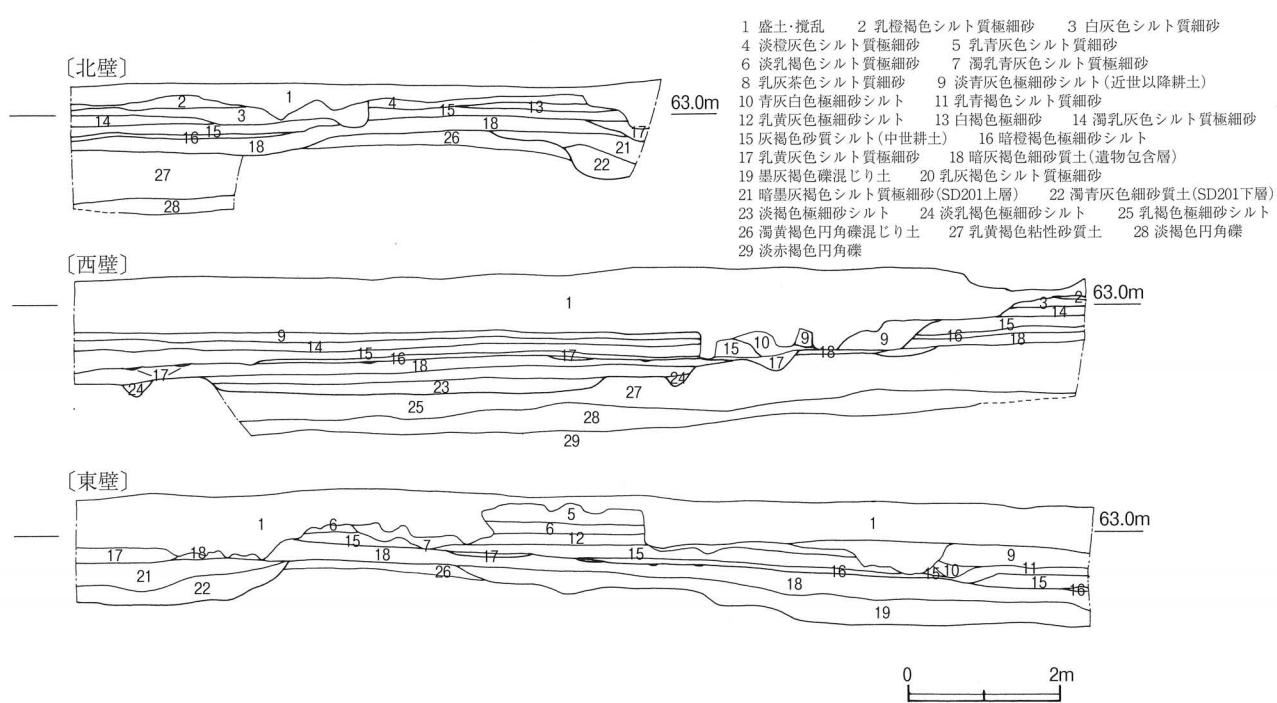
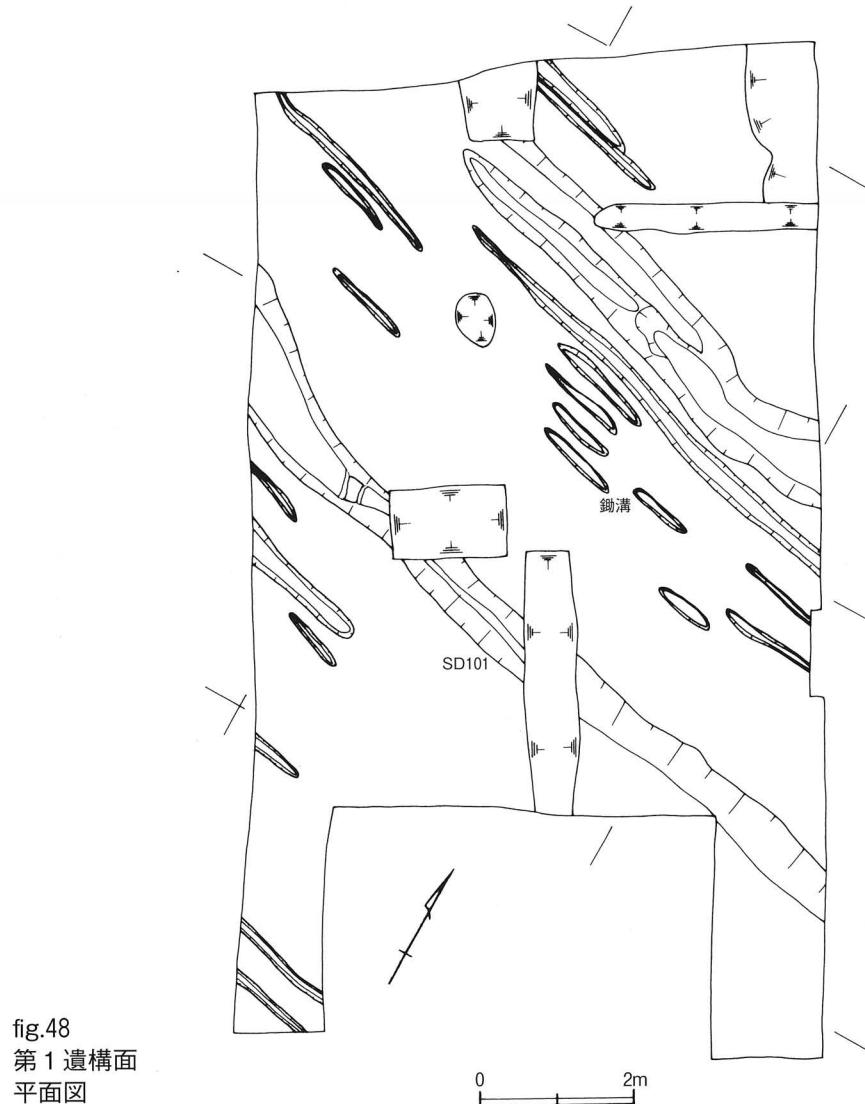


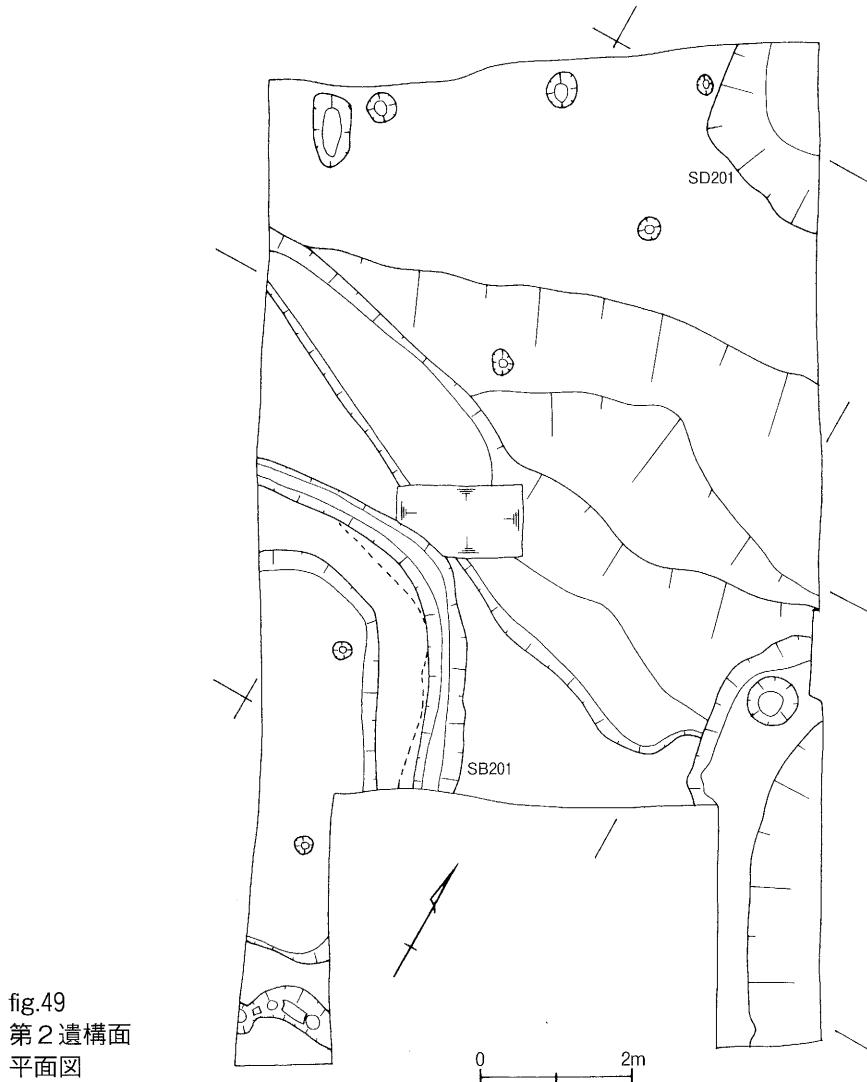
fig.47 調査区壁面土層断面図



2. 調査の概要 今回の調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、新設建物の独立基礎部分と地中梁部分を最終面まで発掘調査を実施した。調査対象範囲は、対象地の大半を占めるため、約50m²分の上層の搅乱及び盛土を除去した後東西を二分割し、反転して調査を実施した。

基本層序 南に低くなる地形であるため、土層の堆積は南に向かって厚くなっている。上層は大半が盛土や搅乱による土層である。その下層には淡青灰色極細砂シルト（近世以降の旧耕土）が堆積し、さらに下層に灰褐色砂質シルト（中世耕土）、暗橙褐色極細砂シルト（中世床土）が堆積している。その下層が第1遺構面基盤層であり第2遺構面の遺物包含層である暗灰褐色細砂質土、上面が第2遺構面検出面である乳黄褐色粘性砂質土（南側）、濁黄褐色円角礫混じり土（北側）となっている。北から南へ下がる緩やかに傾斜する地形であり、六甲山麓に頻繁に見られる土石流の痕跡を第2遺構面の下層で確認した。

近世以降 調査区の南東隅から北西隅にかけて段差を設けており、大きく2段の耕作面を作り出していたようである。段差の方向は、前面道路を挟んだ北側の地区である篠原中町3丁目の東西通りのラインとほぼ平行しており、当地における町割りは、3丁目地区の方が古い形態を残しているものと考えられる。



第1遺構面 弥生時代後期～末の遺物を含む暗灰褐色細砂質土上面で検出した遺構面である。近世の耕作地と同様の方向性をもつ段を3段分検出した。それぞれの段では、幅20cm前後、深さ2～4cmを測り、N106°Eの方向性をもつ鋤溝を検出している。鋤溝内からは、瓦器の細片が出土しており、中世には耕作地として利用されていたものと考えられる。

第2遺構面 暗灰褐色細砂質土の下層において、北側では土石流である濁黄褐色円角礫混じり土、南側では乳黄褐色粘性砂質土を基盤層とする遺構面を検出した。第2遺構面と呼称する。

SD201 調査区の北東端で、屈曲するような平面形を呈するSD201を検出した。大きな土坑である可能性も考えられたが、今回の調査区の東側隣接地で実施した第22次調査で確認された、南北方向から西に直角に曲がるSD02の形状と、今回検出したSD201の南北方向から東に曲がる形状が合致しており、同一の遺構である可能性が考えられたため同様に溝としての遺構名を付した。弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が出土している。

調査区の北側では、ピット5基、土坑1基を検出したが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。またピットについても建物を構成するような配置はみられない。遺物包含層からは弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土していることから、これらの遺構についても当該時期のものと考えられる。

SB201

調査区の南西隅で検出した竪穴住居である。調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、平面形状は隅丸方形を呈している。住居内でベッド状遺構を検出している。また、住居の南辺ではベッド状遺構の立ち上がりは確認できたが、住居外周の立ち上がりがみられず、周壁溝と考えられる遺構のみを検出した。このため規模については、南北幅の計測にあたり、周壁溝の南側を南端とすると約7.3mで、ベッド状遺構の南北幅は、約5.3m、ベッド面の上面幅は約75cmを測る。検出面からベッド状遺構上面までの深さは約15cm、ベッド状遺構上面から床面までの深さ約20cmを測る。また、周壁溝の幅は約30cm、深さは約15cmを測る。ベッド状遺構は、地山を削り出して構築した部分と盛り土を施して整形した部分が見られる (fig.49点線部分が盛土)。床面で直径25cm、深さ約20cmの主柱穴を2基検出したが、中央土坑などその他の施設は検出していない。出土遺物から、弥生時代後期の竪穴住居と考えられる。

出土遺物

特記する遺物としては、遺物包含層中より鉄鏃が1点出土している。出土地点は調査区東半の南端部で、すぐ西側にSB201が存在する地点である。鉄鏃の平面形状は、有茎柳葉式と考えられる。全長5.4cm、鏃身長2.8cm、幅1.4cmを測る。今後X線透過撮影や鏃の除去作業を実施することにより詳細が判明するものと考えられる。遺物包含層からの出土であるが、弥生時代後期～末の時期のものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居を検出した。これまでの周辺地区における調査においても弥生時代後期～末の竪穴住居が多く検出されており、当調査地も、当遺跡内において弥生時代後期～末の時期の集落の中心に近い地点にあたるものと考えられ、貴重な成果を得たものといえよう。今後の周辺地における調査により、集落の全体像がさらに解明されるものと考えられる。



fig.50 第2遺構面全景



fig.51 SB201全景

9. 日暮遺跡 第34次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山南麓に位置し、六甲山を構成する花崗岩の風化した土砂や大阪層群から流出した土砂によって形成された沖積地の末端に立地する、古墳時代～中世にかけての複合遺跡である。昭和61年の第1次調査以来、共同住宅や個人住宅建築などに伴ってこれまでに延べ33回の調査を実施している。

これまでの調査では、古墳時代の竪穴住居や奈良時代～平安時代の掘立柱建物、中世の溝・土坑等を確認している。

なお今回の調査成果については、平成20年度に実施した第33次調査成果と合わせて、平成21年度に『日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig.52
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、市営住宅の建て替え工事に伴って実施したもので、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲のうち、平成20年度に実施した第33次調査部分を除く範囲が対象となる。なお調査区名については、第33次調査区名に続けて3区西半部と呼称する。

基本層序

基本層序は、第33次調査と同様で、盛土の下層に近世・近代の耕土が数層堆積し、暗褐色～黒褐色砂質土の遺物包含層が部分的に存在する。その下層に風化した花崗岩の砂粒を含む褐色～茶褐色バイラン土、土石流の堆積と推定される10～15cmの礫を多量に含む褐色～茶褐色バイラン土と続く。遺構面は、暗褐色～黒褐色砂質土上面（第1遺構面）と褐色～茶褐色バイラン土上面（第2遺構面）で検出した。

第1遺構面

溝8条、土坑1基、ピット3基を検出した。いずれも埋土は暗灰褐色シルト混じり細砂で、この土層は旧耕土と考えられる。

溝

幅約0.2～1.3m、深さ約10～50cmの溝を8条検出した。大半が南北方向の溝で、幅約0.2～0.6m、深さ約5～20cmの浅いものと、幅約0.5～1.3m、深さ30～50cmの比較的深いものの2種類に分けることができる。浅い溝は耕作痕と考えられ、深い溝は耕作地の周辺の用水路と考えられる。中世土器の小破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

土坑

直径0.6m、深さ10cmを測る浅い土坑である。土器の小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

- 第2遺構面** 濡地状落ち込み、土坑3基、溝多数、ピット約20基を検出した。
- 湿地状落ち込み** 調査区東部で落ち込みを検出した。幅8~11m、深さ40~80mを測り、底面は凹凸がみられるものの、概ね北から南に緩やかに傾斜している。埋土は、底面付近は砂が堆積し、上層は黒褐色シルトが堆積している。短期間流水があった後、その後水の流れがほとんどなくなり、緩やかに沈殿して堆積したものと考えられる。

中世の須恵器、土師器が出土しているが、その大半は小破片である。わずかに12世紀末頃の土師器碗の完形品が1点出土している。

- SK214** 調査区中央北西の壁際で検出した土坑であるが、調査区の西側へ延びるため、正確な規模は不明である。調査区内の規模は短径1.3m、深さ70cmを測る。

中世の須恵器、土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

- 3.まとめ** 今回の調査区は調査対象地の西半部に位置しており、中世の濡地状落ち込み、土坑、ピット、溝を確認した。第33次調査では調査対象地の東半部において土石流の堆積の上面で多数の遺構を確認したが、西半部は流路や濡地状の堆積を確認したのみで、土地利用の状況が東側と西側では異なっていることが明らかとなっていた。今回の調査成果も、以上の状況を追認することとなった。

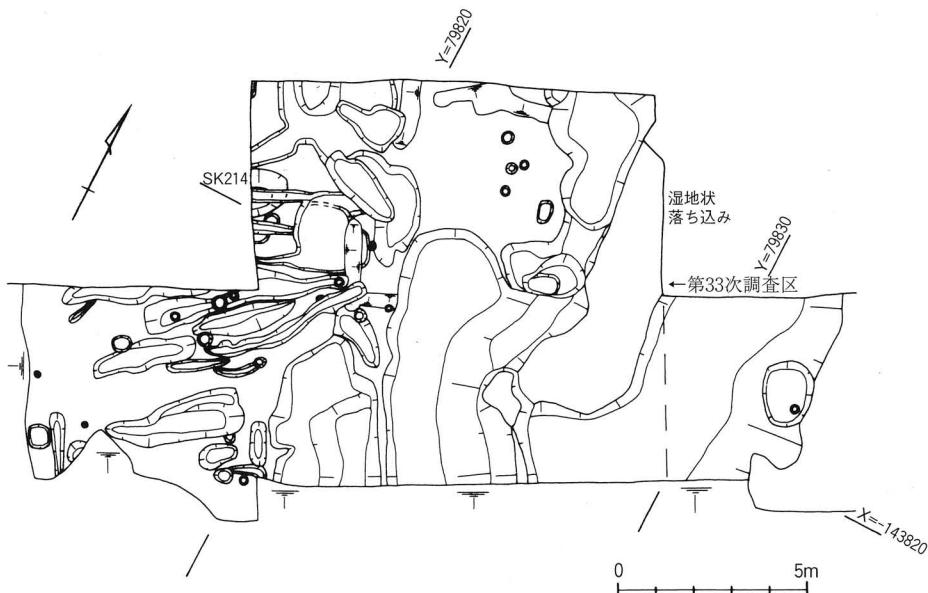


fig.53
第2遺構面
平面図



fig.54 第1遺構面全景



fig.55 第2遺構面全景

10. 二宮東遺跡 第3次調査

1. はじめに

二宮東遺跡は、神戸市中央区二宮町に所在する遺跡で、平成15年に新たに発見された遺跡である。当遺跡における発掘調査の件数は多くなく、今回の調査が第3次調査となる。これまでに実施した2度の調査では、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の大溝などが検出されているが、遺跡の全容については未だ不明な点が多いのが現状である。

なお今回の調査成果については、平成21年度に『二宮東遺跡第3次調査発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

fig.56
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序

上層より、搅乱、灰褐色砂質土（第1遺構面基盤層、縄文時代早期上層遺物包含層）、茶褐色砂質土（縄文時代早期中層遺物包含層）、褐色砂質土（第2遺構面基盤層、縄文時代早期下層遺物包含層）、淡褐色砂質土（縄文時代早期最下層遺物包含層）、褐色礫混じり砂質土（無遺物層）が堆積している。調査の結果、2面の遺構面を確認した。

第1遺構面

古墳時代の大溝1条、柱穴、落ち込みを検出した。

SD101

調査区西端で検出した大溝で、西側は調査区外に延びる。今回の調査区の西側隣接地で実施した第2次調査において同様の遺構を確認しており、その東側部分にあたるものと考えられる。今回の調査区内での規模は幅3.2m、深さ約1.5m以上を測り、ほぼ南北方向に直線的に流れる。肩部の傾斜は比較的急勾配であり、人為的な遺構と考えられる。

埋土は上・中・下層の大きく3層に分かれるため、この分層に基づいて遺物の取り上げを実施した。下層出土土器は土師器のみであり、須恵器を含まないため、遺構の掘削時期については古墳時代前期まで遡る可能性も考えられる。中層出土土器の中にはわずかに須恵器を含んでおり、古墳時代後期頃までは溝が機能していたことが考えられ、中層上部から7世紀頃の須恵器壺が出土していることから、埋没時期も7世紀頃と考えられる。

第2遺構面

縄文時代早期の土坑、ピット、落ち込みを検出した。遺構は東半部に偏って存在する。

SK201

調査区中央北寄りで検出した平面形が不整円形を呈する土坑で、長径0.66m、短径0.4m、深さ約17cmを測る。

縄文時代早期の土器が少量出土したほか、石鏃1点、サヌカイト剥片が出土している。

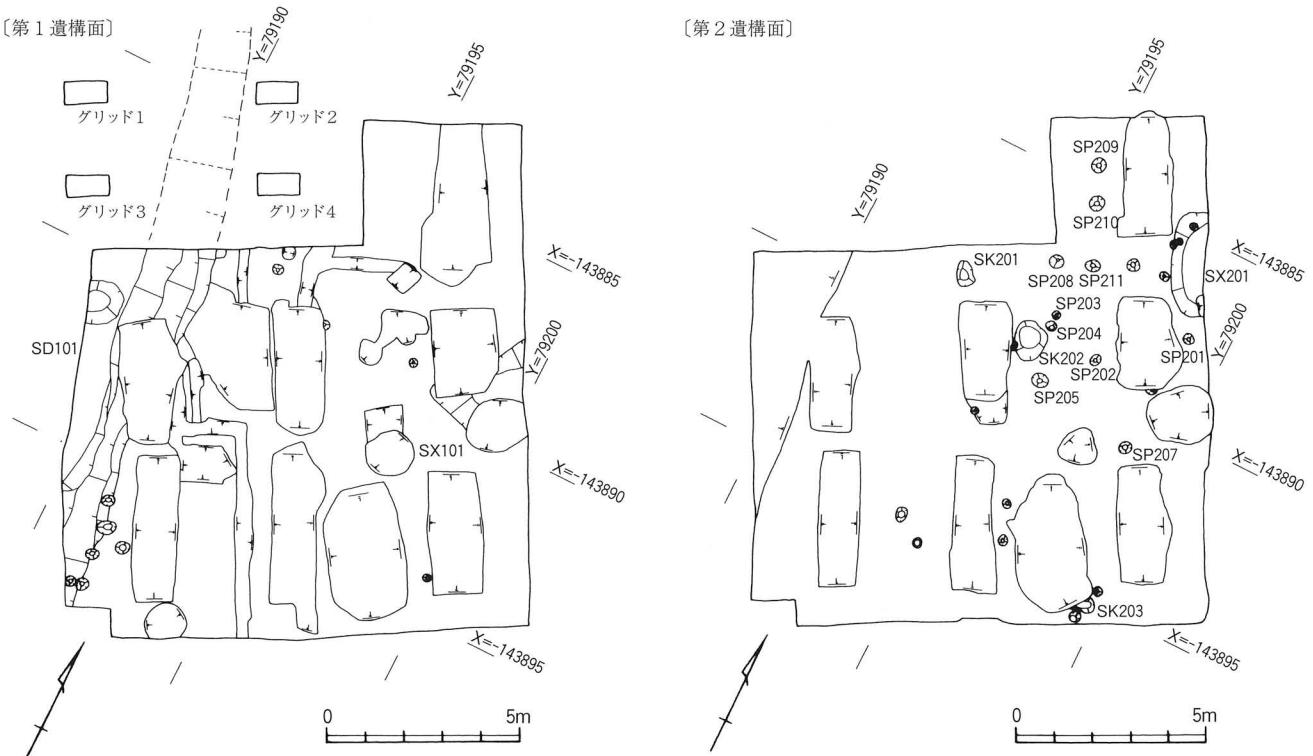


fig.57 第1・2遺構面平面図

SK202 調査区中央やや北寄りで検出した平面形が不整円形を呈する土坑で、長径1.06m、短径0.88m、深さ約25cmを測る。縄文時代早期の土器が少量出土している。

SK203 調査区東半部、南端で検出した土坑で、攪乱によって一部が失われているが、平面形はおそらく不整円形を呈するものと考えられる。縄文時代早期の土器が出土している。

SX201 東端部で検出した落ち込みで、調査区の東側に延びており正確な規模については不明である。平面形はおそらく不正円形を呈するものと考えられる。竪穴住居である可能性も考えられるが、断定できない。調査区内での規模は、2.6m×0.9m、深さ約20cmを測る。縄文時代早期の土器が比較的多く出土したほか、石鏃1点、サヌカイト剥片が出土している。

縄文時代早期の土器 第2遺構面で検出した遺構内及び遺物包含層からまとまった量の縄文時代早期の土器が出土している。

出土した縄文時代早期の土器は、外面に主に山形文を施す押型文土器であり、神並上層式の範疇におさまるものである。出土層位による形式差は認められない。

石器 第2遺構面の遺構及び遺物包含層からまとまった量の石器が出土している。石鏃や楔形石器、削器などの製品ほか、石核、剥片も出土しているが、すべてサヌカイトである。

3.まとめ 第1遺構面で検出したSD101は、第2次調査成果を合わせると幅約5.0m、深さ1.5~1.75mを測る規模をもつ古墳時代の大溝と考えられる。大溝の掘削時期については、先述のように古墳時代前期に遡る可能性も考えられ、埋没時期については7世紀頃と考えられる。

また今回の調査では、縄文時代早期の遺構・遺物を確認しており、出土した土器の特徴から、神並上層式として捉えられるものである。当該時期の遺構・遺物については近接する位置に所在する雲井遺跡でも確認されているものの、神戸市内全域においても類例が限られるもので、貴重な調査成果を得ることができたといえよう。

11. 雲井遺跡 第31次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山系の南麓から南に流れる生田川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩斜面地（現地表標高12.5m～13.5m）に立地している。

当遺跡周辺は、早くから市街地化され、遺跡の存在は明らかでなかったが、昭和62年度の市街地再開発ビル建設事業に伴う発掘調査によって発見された。

第1次調査では、縄文時代前期の炉跡、縄文時代晚期～弥生時代前期の土坑・落ち込み、弥生時代中期の方形周溝墓・木棺墓・溝・土坑等を検出した。また、縄文時代早期～後期の土器・石器、縄文時代晚期～弥生時代前期の土器・石器、弥生時代中期の土器・石器などが多量に出土している。

第4次調査では、縄文時代早期の集石遺構・土坑・溝、弥生時代前期の土坑・溝・ピットを検出し、縄文時代早期の土器・石器、弥生時代前期の土器・石器が出土している。

その後、市街地再開発事業をはじめ、道路建設、個人住宅、店舗建設に伴って発掘調査を実施しており、縄文時代早期～中世にかけての遺構・遺物を数多く検出している。

また、当調査地の北側で実施した第10次調査では、古墳時代後期の堅穴住居・掘立柱建物・溝・ピットを検出している。



fig.58
調査地位置図
1: 2,500

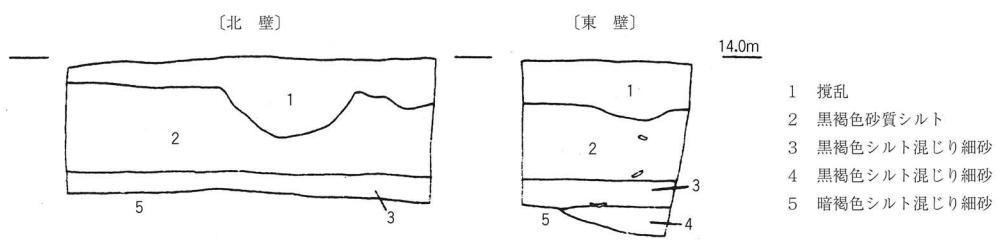


fig.59
6 tr.
土層断面図

2. 調査の概要 今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、発掘調査に先立って実施した試掘調査において遺物が確認されたため、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

基本層序 上層より、搅乱、黒褐色砂質シルト、黒褐色シルト混じり細砂、暗褐色シルト混じり細砂と堆積している。このうち黒褐色砂質シルト、黒褐色シルト混じり細砂に古墳時代後期の遺物が含まれており、暗褐色シルト混じり細砂上面で遺構を検出した。

遺構と遺物 遺構は、調査区北半で、ピット1基と溝1条を検出した。

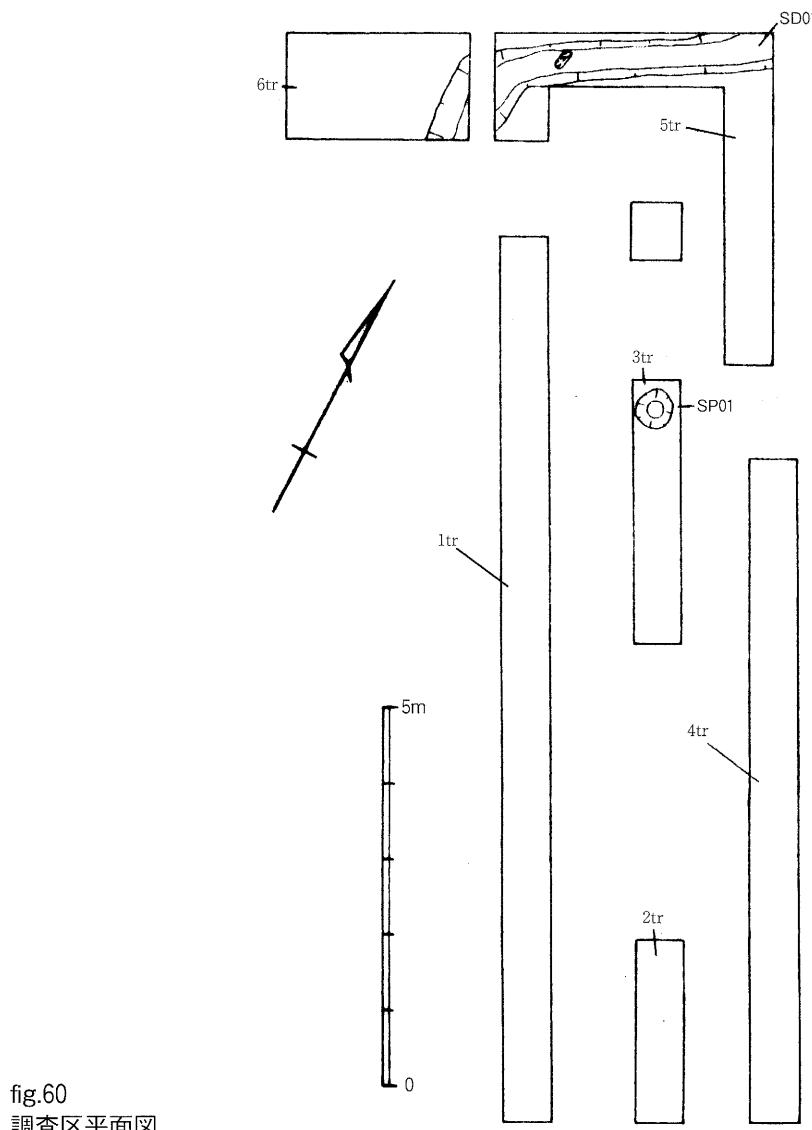
遺物は、古墳時代後期の須恵器・土師器片が出土している。

ピット 径約50cm、深さ約20cmの円形のピットである。遺物は出土していない。

溝 幅約40~50cm、深さ約15~20cmの溝で、西から東へ流れている。埋土より古墳時代後期の土師器の甕の破片が出土している。

3. まとめ 今回の調査では、調査区北半で古墳時代後期の遺構を検出した。調査区の南半については、遺構面は存在するが顕著な遺構は検出できなかった。

従来より当調査地周辺では古墳時代後期の堅穴住居や掘立柱建物を確認しており、古墳時代後期の遺構が当調査地にも広がっていることが確認できた。



12. 旧神戸外国人居留地遺跡 第1次調査

1. はじめに

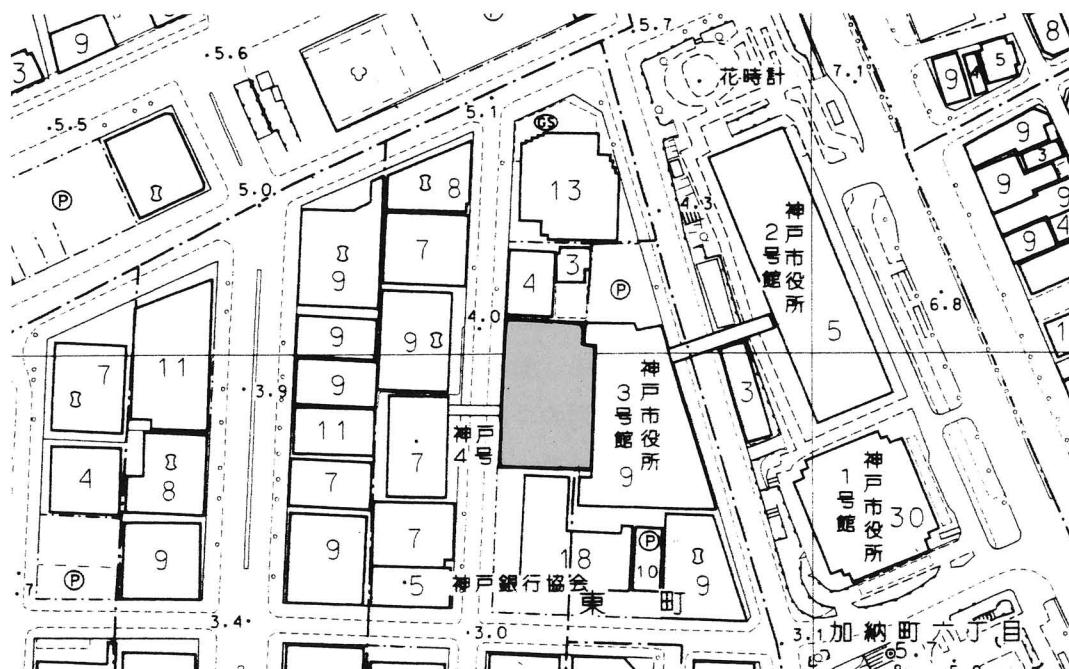
外国人居留地は、江戸時代末の安政5年〔1858〕の日米修好通商条約をはじめとする通商条約に基づいて、外国人に借地権を与え、居住と通商等の営業を認める専用特別区として設置されたものである。

慶応3年〔1867〕兵庫（神戸）が開港し、神戸外国人居留地は、東が生田川、西は鯉川まで、北は西国街道から南は海岸までと定められた。イギリス人土木技師J・W・ハートが明治3年〔1870〕作成した計画図が現存しており、126区画に整然と区画された地番や、生田川堤防跡を利用して設置されたレクレーション・グランド（現在の東遊園地）、海岸沿いのプロムナード、下水道流路、歩道、街灯など計画的な街づくりが窺われる。

明治32年〔1899〕に外国人居留地は日本に返還され、神戸外国人居留地も歴史の幕を閉じ、現在では「旧神戸居留地十五番館」（国指定重要文化財）が唯一現存するのみである。

なお今回の調査については、平成22年度に『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

fig.61
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は、神戸市危機管理センター建設工事に伴って実施したものである。調査対象地は市庁舎3号館西側に隣接し、3号館別館用地として使用されていた。建設工事に先立ち、3号館別館解体に伴って実施した試掘調査の結果、旧神戸外国人居留地に関連するものと考えられる煉瓦造建物跡が確認され、工事により影響を受ける部分について、発掘調査を実施した。

調査区は、試掘調査により確認された煉瓦造建物跡を中心に4分割し、北東側から時計回りにI～IV区として、記録・遺物の取り上げを行った。なお、I・IV区で検出した東西方向のコンクリート基礎が、調査区東側へさらに延びることが判明したため、調査区を東側へ拡張し、この範囲を東側拡張区とした。

基本層序	調査区の基本層序は、煉瓦造建物上部及び遺構面と考えられる灰褐色細砂、灰色細砂上面までは、従前建物基礎による搅乱土である。調査区の東西南北のそれぞれは、建物基礎により深く掘削されており、遺構面は遺存していない。現地表面から煉瓦造建物までの深さは0.7~1.0m前後である。調査地は北から南へと緩やかに下がる地形である。
	煉瓦造建物 1棟と、この建物に伴うと考えられる東西方向のコンクリート基礎 1基の他、礎石建物 1棟、溝 1条を検出した。
煉瓦造建物	東西10.5m、南北は最大12mの範囲で検出した。主軸を東西に有する建物と考えられ、幅2.25m前後の東西方向の土間を中心に南北2つの棟が存在するものと推定されるが、西側及び南棟の南・東側の大半は搅乱により失われており、全体の状況は不明である。
南煉瓦積	土間の南側に、東西3.7m、南北2.0mの範囲で検出した。3段分程の煉瓦積を検出し、全体は長軸を南北方向に煉瓦を積んでいる。
土間	幅2.25m前後で、長さ7.2mを検出した。全体に煤が付着している。
礎石	土間のやや西寄りには相対する礎石 3基があり、礎石の下層からはコンクリート台座を検出した。礎石は一辺76cm、高さ12~15cmのコンクリート製の台座の上面を掘り窪めて一辺35cm、高さ30cm前後の花崗岩を据えて、モルタルで固定している。
北煉瓦積	土間に並行して、幅35cm幅で、東西方向の帯状に煤が付着する範囲を検出した。この部分は溝状を呈しており、3列分の煉瓦の平を上に、南・北側の壁は長手面を上にして長軸を東西方向に組んでいる。北壁では70cm前後の張り出し部3ヶ所と、北へ開口する東西0.77m、南北1.17mの長方形で、煤の付着する窪み3ヶ所を検出した。
煉瓦囲い	北棟の東側には幅80cm、厚さ65cmの東西から南北方向へ逆L字状に屈曲する、コンクリート基礎が存在する。このコンクリート基礎は北棟及び土間の東側を掘り込んで構築されている。この点から、煉瓦造建物には、大きく改修また改築などの手を加えた時期が存在することが考えられる。また、このコンクリート基礎の北東には、調査区の北東隅に東西2.9m、南北2.5mの方形のコンクリート基礎が接続している。この基礎の上面は小丘状を呈し、中央には、幅80cmで、4個の煉瓦の長軸を放射状に方形に配しており、鉄筋数本が存在している。この方形基礎のコンクリートは玉砂利の粒子が大きく、配合も多く粗い印象を受ける。側面には縦板の痕跡が認められることから、掘形掘削後、板を立てて中にコンクリートを流し込んで構築している状況が確認できる。
	南北方向のコンクリート基礎上には煉瓦積が構築されており、不等辺な方形区画の煉瓦囲い3基が構築されている。これらは東側に開口し、奥壁に対して、開口部が狭く、方形の一辺が斜角を形成している、この内部には、崩落した煉瓦、漆喰材等を充填していた。
	これらの煉瓦囲いは奥壁幅1.3~1.34m、開口部の幅1.05~1.1m、奥行1.1~1.6mと規模に差異があり、中央の煉瓦囲い2は南側の辺に東西95cm、南北37cmの規模で南壁から北側への張出部が存在する。この張出部の煉瓦積と目地には、増築した痕跡が確認できる。
基礎	煉瓦造建物の建設は、建設に先立ち、砂を主体とする軟弱な地盤を補強するため、建物基礎範囲に杭打ちを行っている。この際土間の部分には杭打ちを実施しておらず、杭を打つ前に建築範囲の割付を行っていると推定される。杭は土層断面の観察から径20~25cm前後、長さ1.0m程度と推定される。杭打ち後に整地を行っている。

整地完了後、礎石部分にコンクリート製台座を据えて、台座上部を穿って窪ませた後に、礎石を据えてモルタルで固定している。礎石を設置後、25cm前後の厚さで基礎コンクリートを打っている。礎石には墨壺による割付が確認できる。この際、杭は整地面から高さ0.1~0.15m前後に頭を出した状態でコンクリート基礎を構築したと推定され、基礎内部で、杭が腐朽して空洞化した状況を確認した。土間の範囲の基礎は10~15cmと薄い点が注目される。その後、この基礎上面にモルタルを塗り、1段目の煉瓦を敷き並べている。なお、北棟では、コンクリート上面に瓦片を敷いた後にモルタルを塗り、1段目の煉瓦を敷いている。土間は粒子の細かいモルタルを使用して、仕上げを行なっている。

建物は1段目の煉瓦を敷設後に、墨壺を用いて割付を行ない、窪み等を構築し、さらに煉瓦を積み上げている。北棟では掛け算などの計算式が墨書された煉瓦1点を検出した。煉瓦積内の使用煉瓦は、刻印の確認されるものについてはほぼ推定堺煉瓦株式会社製であると考えられる。

礎石建物 I区北東部で、一辺30cm前後の方形の花崗岩を用いた、礎石建物1棟を検出した。東西3間、南北2間分を検出したが、東西南北それぞれが搅乱の影響を受けており、全体の規模は不明である。掘形は現状で径70cmの円形のものと、一辺50~90cmの方形のものが存在する。深さは検出面から5~10cm前後であるが、全体が削平を受けており、元來の形状は不明である。

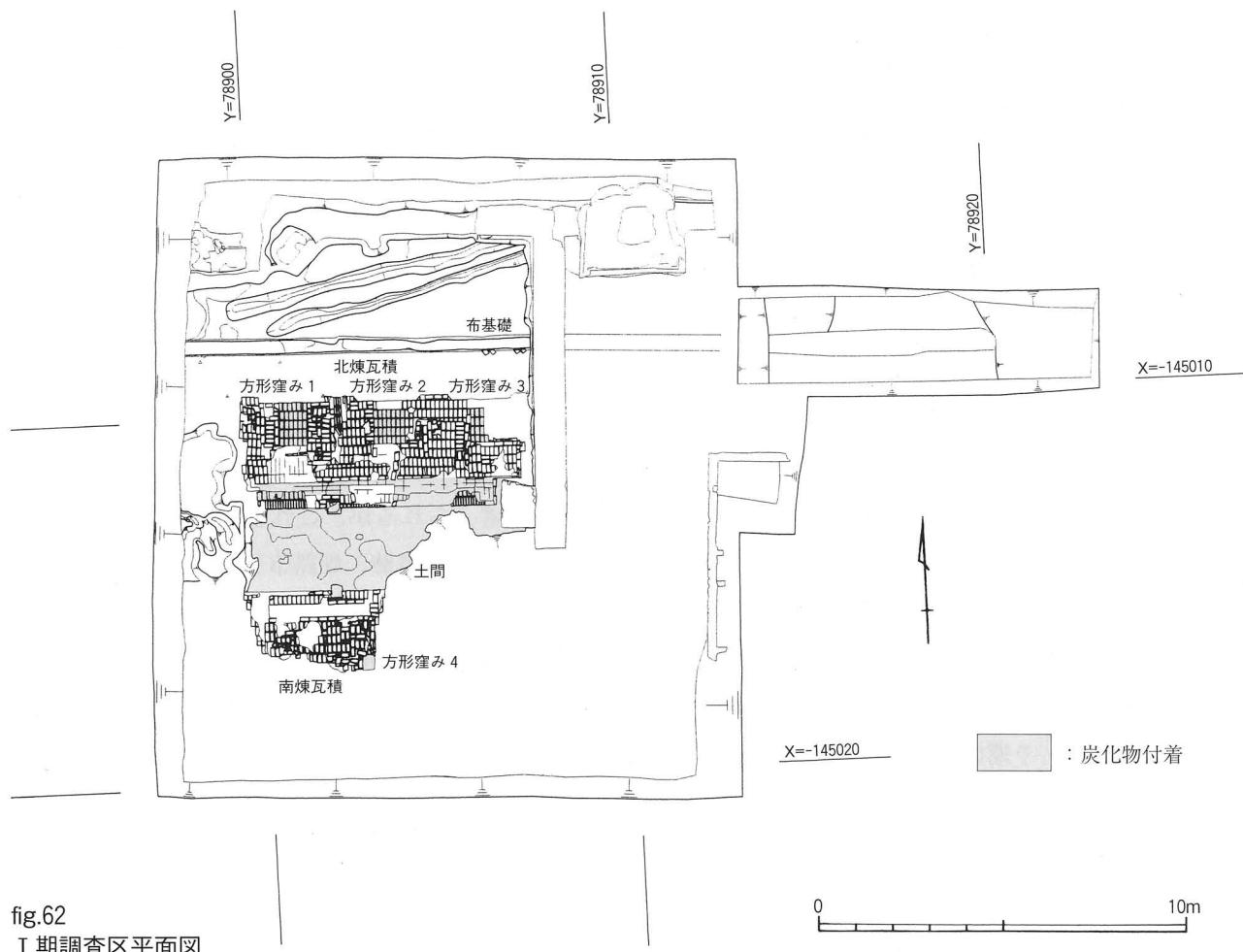


fig.62
I期調査区平面図

3.まとめ

今回の調査では、煉瓦造建物を検出し、切り合い関係から概ね3期に分けられると考えられる。出土遺物には、煉瓦、瓦、陶磁器、金属製品等がある。

出土した煉瓦には、平に刻印が確認できるものも多く存在し、5つの長方形を「大」の字状に放射状に配した刻印が押捺された、堺煉瓦株式会社製と推定されるものが大半を占め、岸和田煉瓦株式会社製と推定される煉瓦と、貝塚煉瓦株式会社製と推定される煉瓦がわずかに含まれる。この他、試掘調査時には、平に「大日本 B.C.H.J.」などの刻印が押捺されたくぼみ煉瓦や、平に井桁状内に「若」の刻印がある煉瓦が確認されている。これらは、旧ハンター邸（明治22年〔1889〕頃創建、イギリス人ハンターが明治40年〔1907〕に購入移転、王子動物園内へ移築現存）に使用が確認されている。特に前者のくぼみ煉瓦は「ハンター特製煉瓦」とも呼称され、関西煉瓦会社（大阪市か？）製とされているものである。また、弧状煉瓦が出土している点も特筆できる。

これらの出土遺物と遺構の切り合い関係から、下記の様な建物の変遷が考えられる。

I 期

居留地の97番地に相当する建物の基礎にあたる。煉瓦造建物が創建された時期である。土間とその南北の煉瓦積2棟が当初に建造されたものと推定される。北棟北側の東西方向のコンクリート基礎もこの時期に伴うものと推定される。煉瓦造建物に使用された煉瓦は、刻印の認められる煉瓦は大半が推定堺煉瓦株式会社製と考えられる。ヘリヤ商会による木骨石造りの建物である。

II 期

大正年間のものと推定される建物の基礎にあたる。煉瓦造建物の東側に、土間や北棟の一部を掘り込み、逆L字状及び方形のコンクリート基礎が築造され、その上に煉瓦開い1～3、東壁が構築される時期である。

III 期

昭和27年に建設された建物の基礎にあたる。煉瓦造建物の北・東側に石敷が設けられる時期である。この石敷の下層に存在する整地層や落ち込み内からの出土煉瓦には推定貝塚煉瓦株式会社製、岸和田煉瓦株式会社製の煉瓦が含まれている。

時期

以上の変遷を、出土煉瓦から考えると、出土煉瓦の大半を占める推定堺煉瓦株式会社製の煉瓦は、明治26年〔1893〕7月から大阪府堺市で製造が開始されたとされる。今回出土した煉瓦の多くは「手抜き成形法」で製造されていると考えられ、平には刻印が捺印されている。刻印の中央には「ナ」、「ヌ」、「ハ」、「フ」、「ラ」、「リ」、「ロ」、「ワ」などのカタカナや「井」などの漢字が認められるものが存在する。これらは製造所を示す「社印」と煉瓦製作者個人を表す「責任印」が一体化したものとも考えられるが、これまでに推定堺煉瓦株式会社製と考えられる煉瓦が出土した神戸市中央区熊内遺跡、姫路市豆腐町遺跡等の出土煉瓦には、刻印に文字の組み合わせは確認されていない。水野信太郎氏の研究では、煉瓦への刻印は「責任印」のみの捺印から、「社印」と「責任印」の両方或いは両方を兼ねた印を捺印する時期へ、さらに「責任印」を省略して「社印」のみへと変化する傾向が指摘されている。I期の煉瓦には、明治30年代に多用されると考えられている、櫛状工具による搔き目を平に施しているものが含まれており、刻印が「社印」と「責任印」が一体化したものであるとすれば、煉瓦の変遷と堺煉瓦株式会社の創業時期から、今回の出土煉瓦は、明治30年代前半頃を中心とする時期のものとも考えられる。

III期の下層からの出土煉瓦は、煉瓦積から遊離したもので、落ち込み内などからの出土

ではあるが、貝塚煉瓦株式会社製と推定される煉瓦、岸和田煉瓦株式会社煉瓦製の煉瓦が含まれており、Ⅱ期の時期を考える上での参考となる。

姫路市豆腐町遺跡では、明治36年〔1903〕建設の山陽鉄道（現在のJR山陽本線）姫路機関庫の煉瓦積2代目扇形機関庫及びコンクリート製転車台が検出されている。この扇形機関庫とその引き込み線には、当調査出土煉瓦と同じく、岸和田煉瓦株式会社製と推定貝塚煉瓦株式会社製煉瓦が使用されている。水野信太郎氏の研究では、岸和田の煉瓦製造所は幾度かの変遷があるが、岸和田煉瓦株式会社時代（明治26年〔1893〕11月～大正8年〔1919〕11月）のいずれかの時期に社の徽章として「×」印を採用したとされており、同社の製造煉瓦は明治31年〔1898〕～大正5年〔1916〕着工・竣工の建物に使用が認められるとされている。

貝塚煉瓦株式会社は、明治27年〔1894〕6月に現在の大坂府貝塚市で創業するが、明治40年〔1907〕1月に大阪窯業株式会社（明治15年〔1882〕1月硫酸瓶製造会社として創業、明治18年〔1885〕5月より煉瓦製造を開始）へと合併されており、わずかな期間での操業であったとされる。推定同社製造煉瓦は明治35年〔1902〕～大正11年〔1922〕着工・竣工の建物に使用が認められるとされる。

煉瓦は、明治時代中期～大正時代初め頃にかけて建築材料の主力として使用されたが、大正12年〔1923〕9月1日に発生した関東大震災により関東地方の煉瓦造建物が甚大な被害を受けて以降、鉄筋コンクリート造建物へと変化したとされる。Ⅱ期の建物基礎には、逆L字状と方形のコンクリート基礎が使用されているが、断面の観察が可能な逆L字状コンクリート基礎には鉄筋は使用されていない。また、煉瓦囲いの床はセメントで仕上げられている点や、明治39年〔1906〕までの操業であった推定貝塚煉瓦株式会社製の煉瓦の存在から、Ⅱ期の時期は、建築物にコンクリートの多用がはじまる明治末期～大正時代以降である可能性も考えられる。これらの点から考えると、概ねⅠ期は明治30年代～明治時代末期、Ⅱ期は明治時代末期～大正時代頃、Ⅲ期は大正時代以降の時期が考えられる。

遺構の性格

今回検出した煉瓦造建物には、3時期に大別される改修・改築の時期が存在することが判明した。建物内の土間、窓などの煤が付着する箇所が複数存在することや、施設には、窓（西・中央・東）や煉瓦囲い1～3の様に、外部へ開口するものがあり、窓の床面端部、煉瓦囲いの床面全体は外部へ傾斜を有している。しかし、出土遺物からは、建物の性格や、これらの施設を特徴付けるものは出土していない。

旧神戸外国人居留地関連の記録から、今回の調査地は神戸外国人居留地の中の97番全体と98番の北半に位置している。調査地の履歴では、『JAPAN DIRECTORY』の1907版に「HELLYER & CO'S GOODWNS. 97 & 98, Yedo - machi」の記載があり、明治40年〔1907〕の段階では、調査地はヘリヤ商会の所有地で倉庫であったことが窺われる。ヘリヤ商会は、F.ヘリヤが明治8年〔1876〕頃に神戸で設立したアメリカ系の製茶輸出業者で、明治18年〔1885〕頃に横浜へ進出、神戸では明治21年〔1888〕頃に居留地内の112番から調査地の西側に近接する92番へ移転している。輸出用に茶の乾燥、袋詰めなどの再製加工を行なっていた記録や現存する写真があり、今回確認された遺構には、土間、帶状の煤の付着や窓への煤の付着が認められる点から、茶の乾燥などの再製加工に伴うものである可能性も考えられる。

登記の変遷では、大正10年〔1921〕に工務店倉庫（煉瓦造瓦葺2階建倉庫と木造瓦葺2階建倉庫）であったことが確認でき、大正11年〔1922〕に取り壊されている。その後、昭和15年〔1940〕には、一部の土地へ運輸会社の倉庫が建造され、昭和20年〔1945〕6月5日に第2次世界大戦の神戸空襲により、調査地付近は甚大な被害を受けている。戦後の昭和27年〔1952〕には、工務店、商社の建築物が建造されていることが確認される。

今回検出された遺構は、出土遺物の時期と合わせると、これらの記録の時期の前後に該当する可能性が考えられる。

神戸外国人居留地は、神戸の歴史に重要な位置を占めており、その成立はまさに近代の国際貿易港神戸の幕開けの時期でもあり、その発展は神戸の発展の時期でもある。今回の調査は旧神戸外国人居留地遺跡において実施した初めての発掘調査であり、明治期の煉瓦造建物の基礎構築状況を確認したことや、使用された煉瓦の産地が当時的一大煉瓦生産地であった大阪府泉州地方からの搬入であり、その大半が推定堺煉瓦株式会社製造の煉瓦であること、また、記録に残る茶の再製加工に関連する可能性がある遺構の検出等、貴重な成果を多く得ることができたものといえよう。

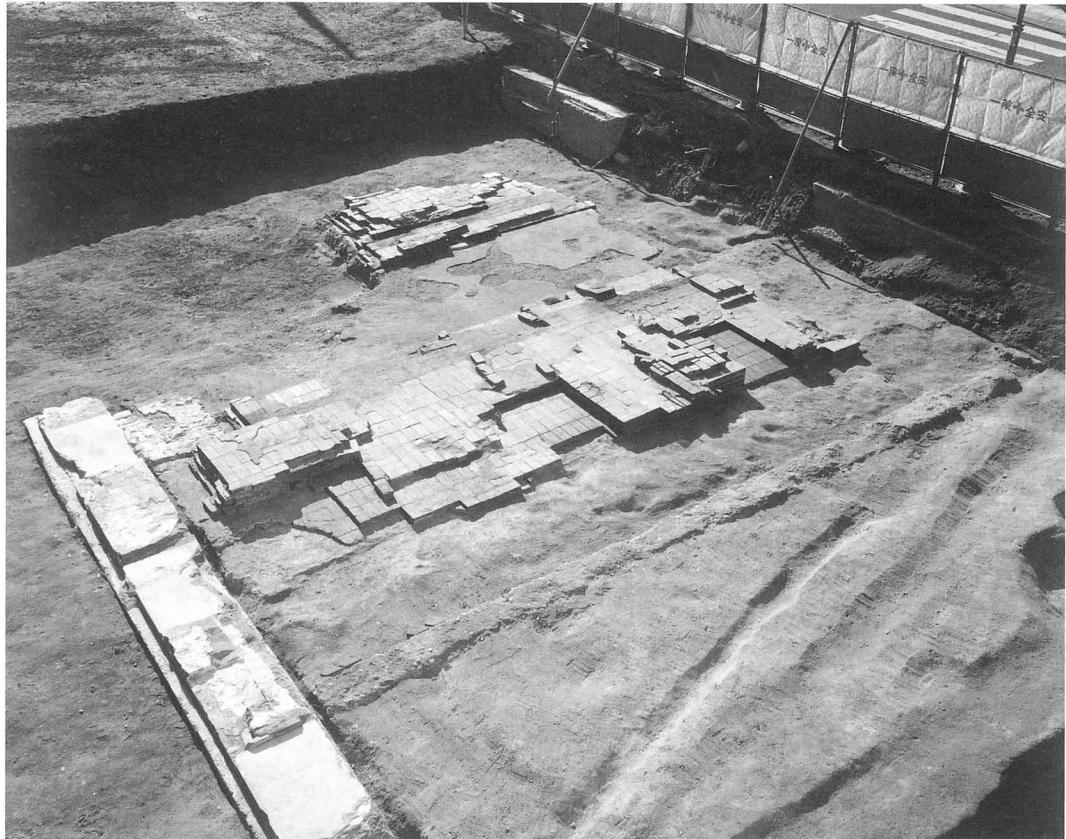


fig.63 I期調査区全景

13. 楠・荒田町遺跡 第45次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、神戸市中央区楠町から兵庫区荒田町にかけて広がる、縄文時代～中世の複合遺跡である。遺跡は扇状地上に立地している。

昭和53年に実施した第1次調査以来これまでに44次にわたる調査を実施しており、各時代の遺構・遺物が出土しているが、特に弥生時代においては拠点的な集落であったことが判明している。

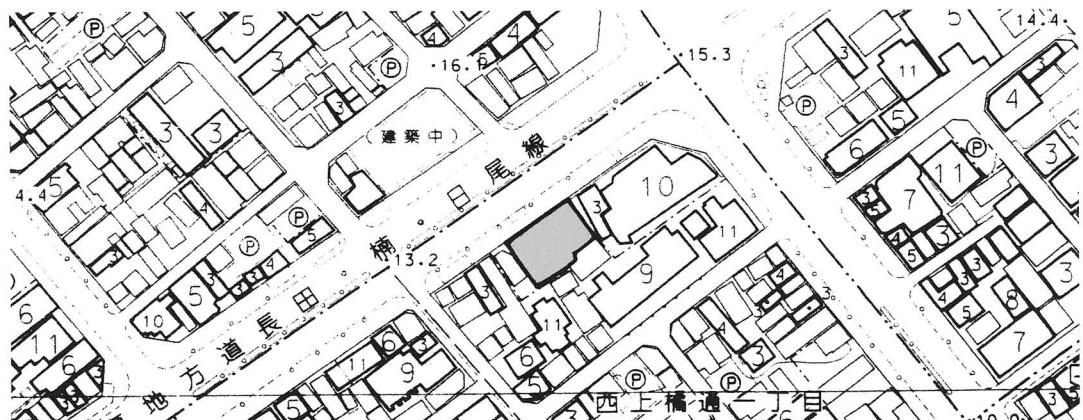


fig.64
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査はガソリンスタンド建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。

調査対象範囲は5ヶ所に分かれており、I～V区の調査区名を付して遺物取り上げ等の便宜を図った。このうちII・IV区は搅乱により遺構面が遺存していなかった。

基本層序

従前建物の基礎等による搅乱のため、全ての調査区で良好な状態で堆積土層の観察には至らなかったが、搅乱を免れた部分においてはほぼ共通する基本層序を確認できた。

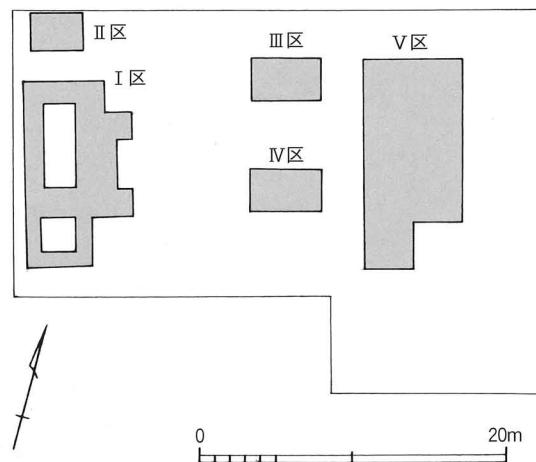
上層より、盛土、旧耕土、弥生時代の遺物包含層2層、地山となる。遺構面は、上位の遺物包含層上面で第1遺構面を、地山面上で第2遺構面を確認した。

I区

2面の遺構面を確認したが、第2遺構面については工事影響深度の関係から調査区の南側約3分の1については遺物包含層の途中で調査を終了している。

第1遺構面で、並走する溝3条とピット5基を検出した。遺構からの出土遺物はほとんどなく時期については不明である。溝とピットの埋土が異なるため、両者には時期差があるものと考えられる。

第2遺構面では、弥生時代中期の土坑1基を検出した。



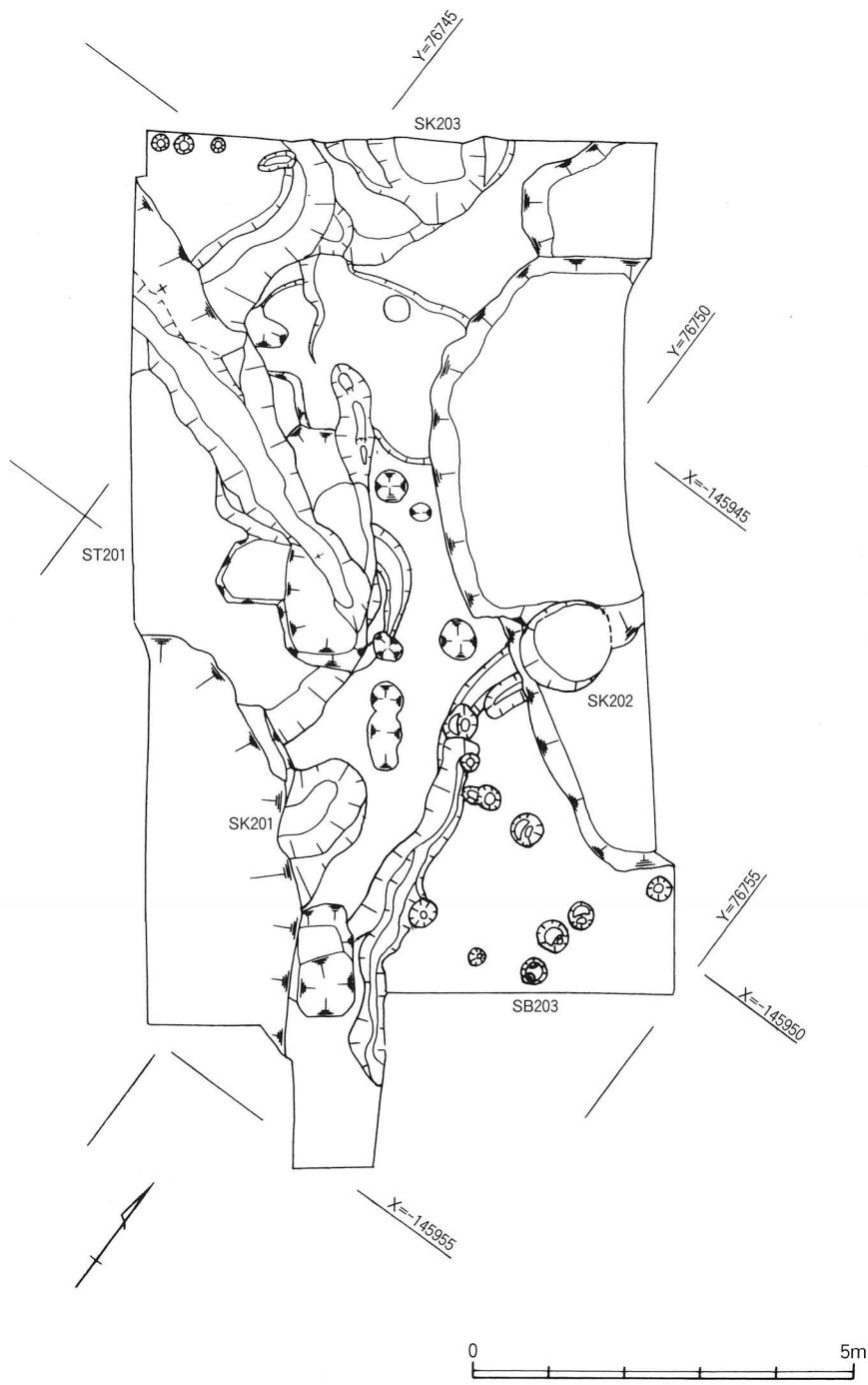


fig.66
V区 第2遺構面平面図

III区

大半が搅乱を受けており、西端部にわずかに遺物包含層及び地山が遺存していたにすぎない。地山面で窪み状の遺構を検出した。弥生土器が出土しており、検出状況と合わせて考えると第2遺構面に伴うものと考えられる。

V区

今回の調査区の中で最も濃密に遺構を確認した調査区である。

第1遺構面

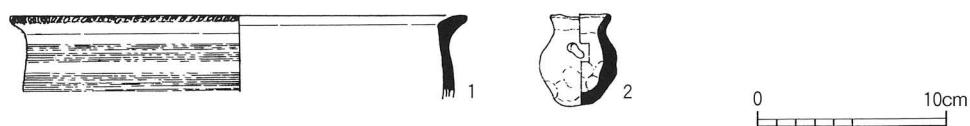
柱穴列を確認しており、掘立柱建物を構成するものの可能性が考えられるが調査区外に延びているものと考えられ、断定には至っていない。また時期についても出土遺物がなく、不明である。

- 第2遺構面 竪穴住居1棟、落ち込み1ヶ所、方形周溝墓1基、土坑3基を検出した。
- SB203 調査区南端で検出した竪穴住居で、調査区外に延びている。平面形は円形を呈するものと考えられ、住居の直径は10m程度と推定される。周壁溝及び柱穴を確認している。周壁溝は深さ20~30cmを測る。
柱穴の直径は30~40cm、深さは70~100cm程度を測る、遺存状態の良好なものである。
弥生時代中期（Ⅲ様式）の土器が出土している。
- SB201 調査区北西部で検出した深さ50cm程度を測る落ち込みで、後述する方形周溝墓によって切られている。弥生時代中期の土器が出土している。平面形が円形に近く竪穴住居の可能性も考えられるが、周壁溝を検出していないことや、SB203に比して内部の柱穴が小さいため断定には至っていない。
- ST201 調査区中央西半で検出した。方形周溝墓の西側の溝と考えられる南北方向の溝及び南東隅部分を検出したものと考えられる。溝からは供獻土器と考えられる弥生土器がまとまとした状態で出土しており、方形周溝墓と判断した。出土した土器は、弥生時代中期（Ⅳ様式）のものである。南東隅部分は段落ち状に造られている。主体部は、調査区内では検出しえおらず、位置的な関係からも調査区外に存在するものと考えられる。
- SK201 調査区南部で検出した土坑で、西側は搅乱によって失われている。検出した規模は、最大幅約1.2m、深さ62cm程度を測る。弥生時代前期後半の土器が出土している。
- SK202 調査区中央東半で検出した土坑で、搅乱による影響を大きく受けている。遺存部分から推定される規模は、直径1.2m以上、深さ1.2m以上を測り、上部よりも下部の方が若干広がるもののはぼ垂直に壁面が立ち上がる円筒状の形状を呈する。既存の調査と考え合わせると、貯蔵穴の可能性が考えられる。弥生時代前期の土器が出土している。
- SK203 調査区北端で検出した土坑で、北側は調査区外に延びる。検出した規模は、最大幅約2.4m、深さ30cm程度を測る。擂鉢状の断面形を呈する。弥生時代前期後半の土器が出土している。

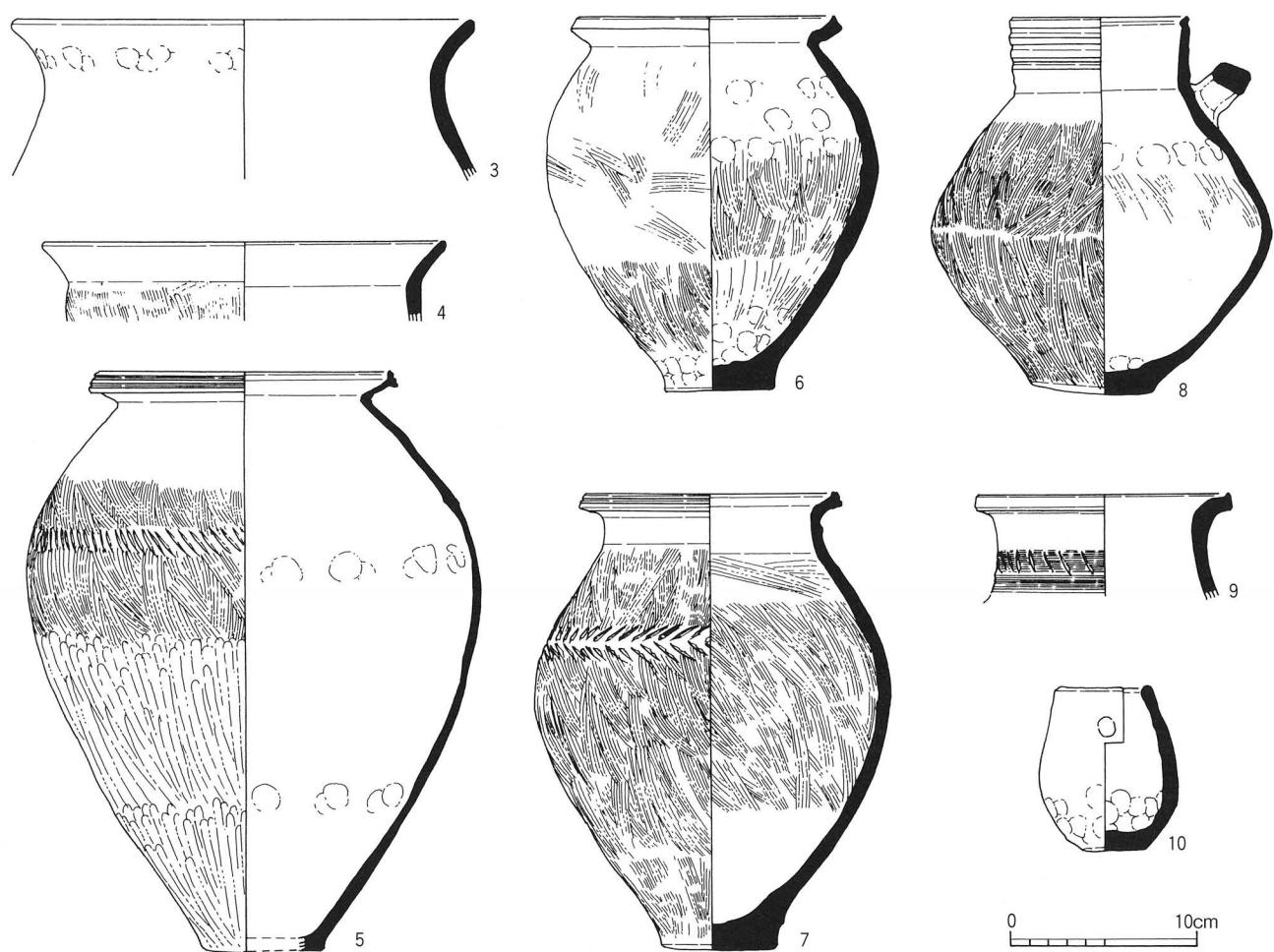
3. まとめ 今回の調査では、既存の建物基礎等による搅乱の影響やまた工事影響深度との関係から対象範囲内における埋蔵文化財の状況を全て把握できるまでは至らなかったが、特にV区において濃密に遺構が存在する状況を確認した。

V区では弥生時代前期の土坑、弥生時代中期の竪穴住居や方形周溝墓などの遺構を検出した。周辺地における既存の調査成果を補強する成果を得られたものと考えられる。方形周溝墓は溝が全周せず途切れる部分があるタイプの可能性も考えられる。このタイプの方形周溝墓は周辺地においても確認されており、当遺跡における普遍的なタイプとの認識も可能かもしれない。

また弥生時代中期において同一地区内でⅢ様式期の竪穴住居とⅣ様式の方形周溝墓を検出しており、SB201とST201の切り合い関係からも、居住域から墓域への土地利用の変化が認められよう。



1・2 SB203 出土



3~10 ST201 出土（供献土器）

fig.67 出土遺物実測図

14. 兵庫津遺跡 第50次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、古湊川によって形成されたと推定される扇状地末端から砂州の臨海部に立地する、南北約2.0km、東西約1.5kmの広範囲に広がる奈良時代～近世の遺跡である。

これまでに49回にわたる調査が実施されており、主に近世の遺構・遺物が検出されている。また、兵庫津については、元禄9年〔1696〕に作成された『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』が残されており、近年発掘調査の成果と同絵図との整合性が確かめられつつある。

なお今回の調査については、平成21年度に『兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

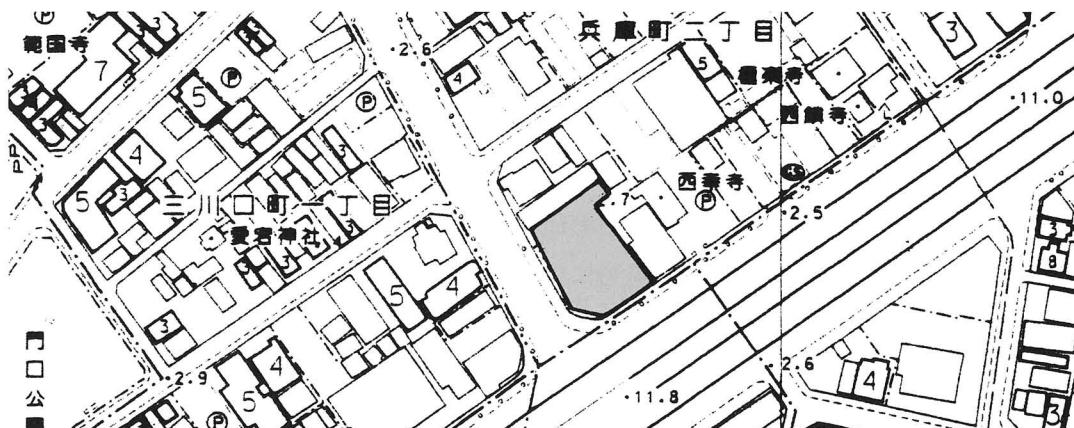


fig.68

調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査はガソリンスタンド建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査地の現標高は、概ね2.6m前後を測る。

調査対象地は2ヶ所に分かれており、北側の調査区をI区、南側の調査区をII区と呼称する。今回の調査では6面の遺構面を確認したが、I区については工事影響深度との関係から第4遺構面までの調査に止めた地区がある。

基本層序

盛土・戦災焼土の下層約30cmで、淡黄褐色シルト～灰褐色砂質土の整地層上面において第1遺構面を検出した。さらに現地表下約50cmで宝永大火以降に形成された焼土層及び整地層上面において第2遺構面を検出した。宝永大火以前の生活面が第3遺構面であり、現地表下約80cmで検出した。その下層の現地表下95～115cm前後で淡黄茶色細砂を基盤層とする第4遺構面を検出した。その下層の現地表下120～130cmで第5遺構面を、同155～170cmで第6遺構面を検出した。

現地表下約190cm（標高T.P.0.7m）で湧水が認められるが、さらに下層からも土師器が出土している。

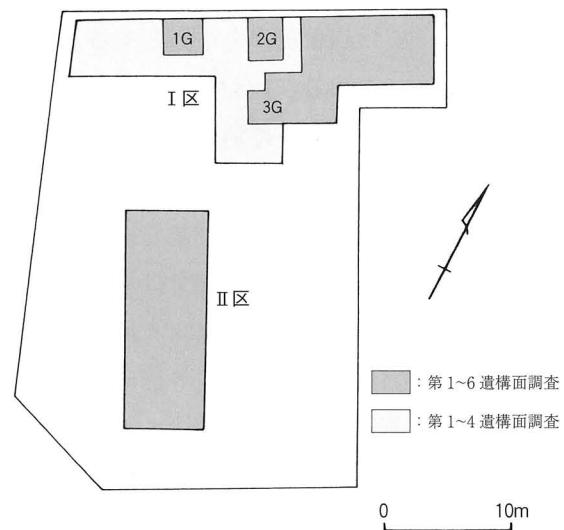
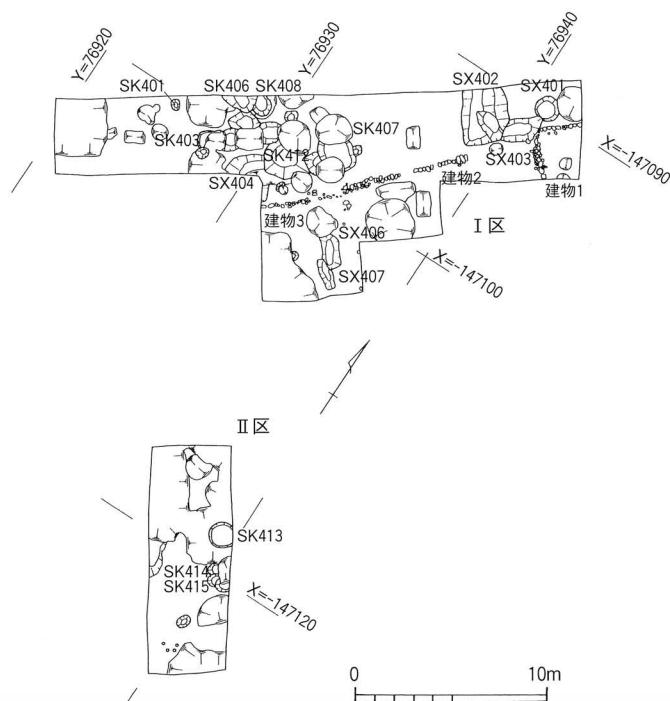


fig.69 調査区配置図

- 第1遺構面** 近世の遺構面で、I区では東半部は搅乱により遺構面が遺存していないが、西半部で土坑6基、井戸1基、竈状遺構1基、不定形遺構1基を検出した。II区では遺構面は確認したが顕著な遺構は検出されず、北側半分は、搅乱により最終面まで消失している。
- 第2遺構面** I区では東半部は搅乱により遺構面が遺存していないが、西半部で土坑13基、井戸1基、水溜め状遺構1基、不定形遺構1基を検出した。II区では搅乱により遺構面の遺存状況が悪く、南部で小規模な土坑2基を検出したに止まった。
- 第3遺構面** 1708年の宝永の大火により被熱した土間面及び整地面に相当すると考えられる遺構面である。標高1.8m前後で確認した。I区では東部では焼土が入った土坑5基を検出した。I区中央では井戸1基、西端で小土坑8基を検出した。II区では大量の焼けた瓦を投棄した土坑3基、集石土坑1基、埋壺土坑2基等を検出した。
- 第4遺構面** 標高1.6m前後で確認した。I区東半部でほぼ同一方向に並ぶ石列を検出し、主軸方向を南北方向にもつ町屋が3棟並んでいた状況を確認した。I区中央では土坑14基を検出した。II区では土坑5基、ピット4基などを検出した。
- 建物1** I区南東隅で検出した町屋建物で、東西2.4m、南北2.6mの石列を検出した。調査区外に延びるため、本来の規模は不明である。
床面からの出土遺物には、肥前系磁器、唐津焼皿、17世紀末～18世紀前半頃とともに考えられる銅緑釉がかかる皿、丹波焼擂鉢、須佐唐津焼擂鉢、古寛永通宝等がある。
- 建物2** I区東半部、建物1の西側で検出した町屋建物で、調査区外に延びる。東西6.6m以上、南北3.0m以上の規模をもつ。肥前系磁器、柿右衛門様式の色絵碗等が出土している。
- 建物3** I区中央、建物2の西隣で検出した町屋建物で、調査区外に延びる。東西4.0m以上、南北5.3m以上の規模をもつ。肥前系磁器が出土している。
- 第5遺構面** 標高1.4m前後で確認した中世後半の遺構面である。I区は工事影響深度の関係から部分的な調査に止ったが土坑6基等を検出した。II区では土坑7基、集石土坑2基等を検出した。
- 第6遺構面** 標高0.9～1.0mで確認した、14世紀代を中心とする遺構面である。I区では、土坑、溝、土師器皿を埋納した祭祀土坑等を検出した。II区では落ち込み4ヶ所、ピット17基を検出した。
- 3.まとめ** 今回の調査では第4遺構面で近世の町屋建物を検出し、また下層の遺構面では中世後半の遺構・遺物を確認した。以上のように、当遺跡における既存の調査成果を補強する大きな成果を得たものといえる。



15. 兵庫津遺跡 第51次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、六甲山系に源流をもつ古湊川によって形成された扇状地の末端から砂州に立地する奈良時代～近世の遺跡である。

これまでに50回にわたる発掘調査を実施しており、主に近世の町屋関係の遺構・遺物を中心とした調査成果が得られており、近年の調査では中世の遺構・遺物についても検出されつつある。

なお、今回の調査については平成22年度に『兵庫津遺跡発掘調査報告書－第51次調査－』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

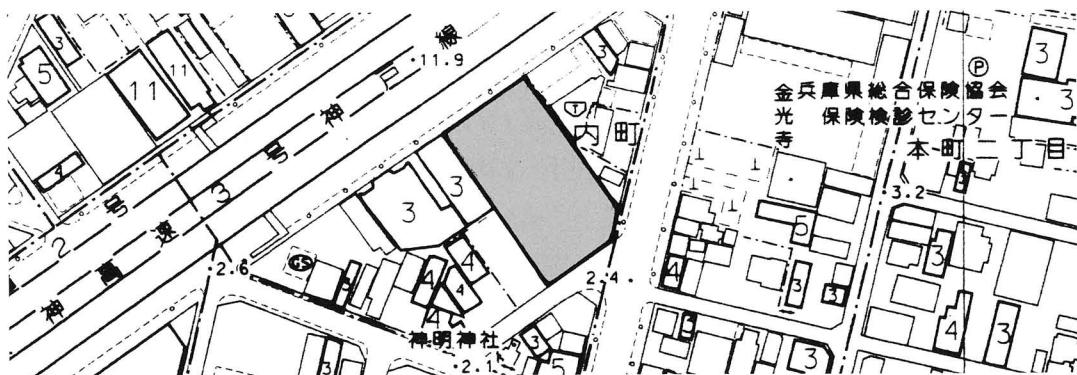


fig.71
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査対象範囲は3ヶ所に分かれており、このうち独立した東側、南側の調査区はそれぞれⅠ区、Ⅱ区と呼称し、他の広範囲な面積をもつ1ヶ所については南北に2分割して調査区名を個別(Ⅲ、Ⅳ区)に付した。

基本層序

今回の調査では、T.P.0.5～1.5m前後において7面の遺構面を確認したが、第7遺構面を浜堤上で検出した以外は、全て人工的な堆積層である整地層の上面で確認している。町屋建物の建設や建て替え等に際して頻繁に整地が行われたことの反映といえる。

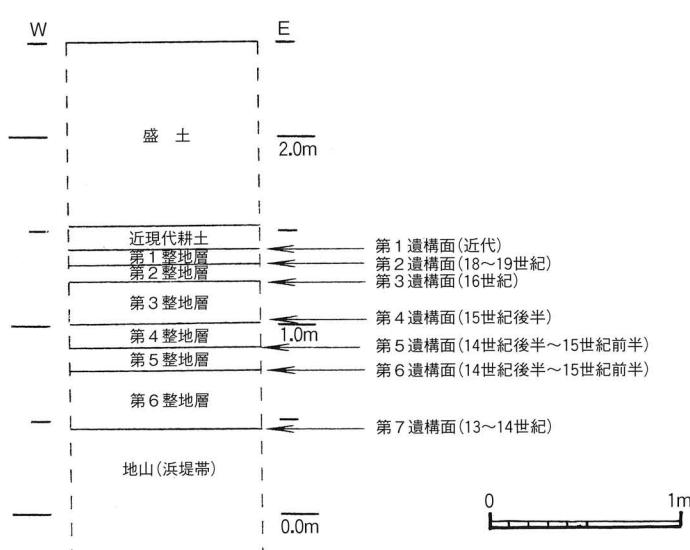


fig.72 調査区土層断面模式図

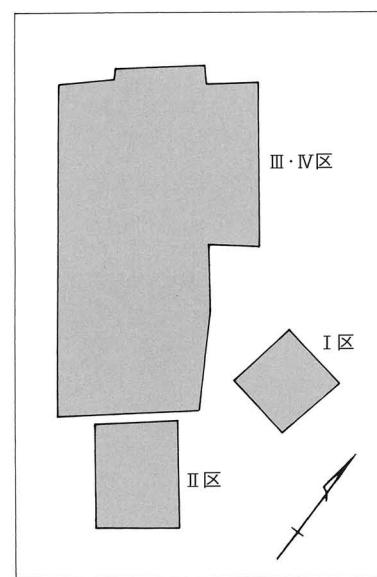
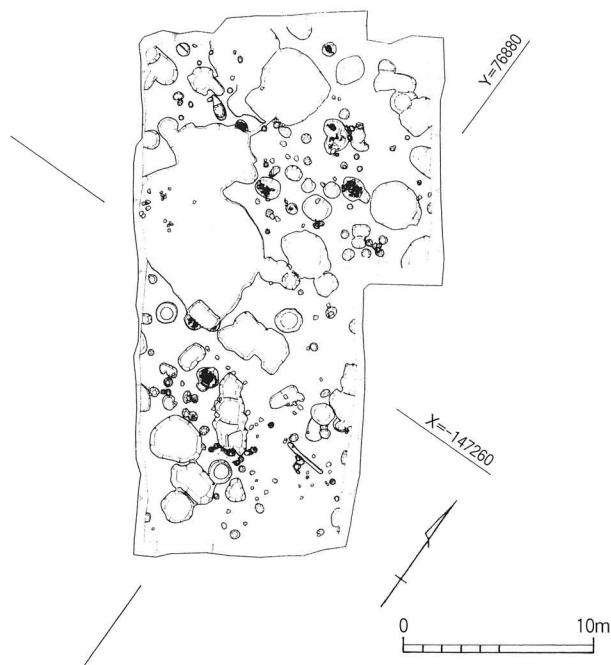


fig.73 調査区配置図

- 第1遺構面** II区のみで確認した。土管樋の一部を確認し、上下水道の一部と考えられる。
- 第2遺構面** T.P.1.4m付近で確認した遺構面で、胞衣壺埋納遺構、街路等の遺構を検出した。出土遺物から、18~19世紀の遺構面と考えられる。
- 第3遺構面** 街路、礎石建物、井戸等の遺構を検出した。I・II区で検出した街路は、第2遺構面と同一の位置で確認した。出土遺物から、16世紀を中心とする時期の遺構面と考えられる。
- 第4遺構面** 街路及びそれに伴う柵列、円形石組遺構1基、礎石建物3棟等の遺構を確認した。建物、街路の方向は第2・3遺構面と同一である。出土遺物から、15世紀代の遺構面と考えられる。
- 第5遺構面** I区で、街路柵列、I・IV区で礎石建物4棟、土師器皿埋納遺構6基を検出した。建物、街路の方向は第2~4遺構面と同一である。出土遺物から、14世紀~15世紀前半の遺構面と考えられる。
- 第6遺構面** II区及びIII・IV区の南半分では遺存状態が悪く、遺構面としての検出はできなかった。I区及びIII・IV区の北半分で整地層及び遺構面を確認した。
I区で掘立柱建物1棟、III・IV区で掘立柱建物1棟、土師器皿埋納遺構2基を検出した。出土遺物から、14世紀後半~15世紀の遺構面と考えられる。
- 第7遺構面** T.P.0.5m前後の浜堤上で検出した遺構面である。建物址と考えられる半地下構造の遺構6棟、落ち込み3ヶ所、堀状遺構2条、土師器皿埋納遺構1基等を検出している。出土遺物から、13世紀前半~14世紀前半を中心とする時期の遺構面で、14世紀後半まで存続する可能性も考えられる。
- 3.まとめ** 今回の調査では7面の遺構面を確認し、中世後半~近世の遺構・遺物を検出した。土師器埋納遺構等の特徴的な遺構も検出しており、当遺跡における様相を考える上で貴重な成果を得たといえよう。

[第5遺構面]



[第7遺構面]

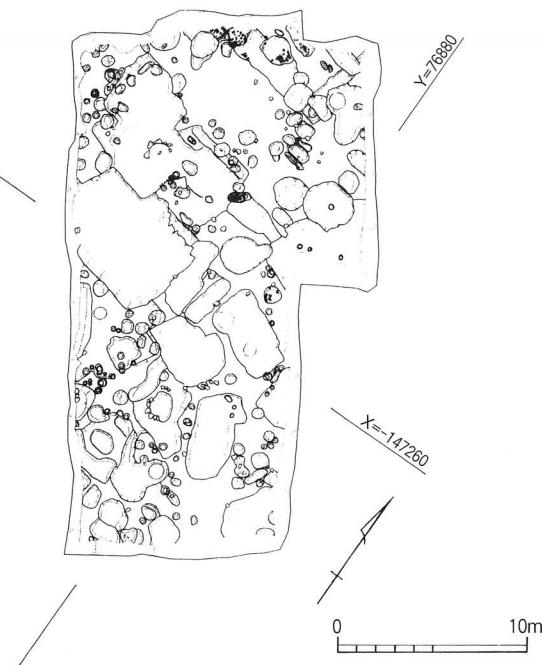


fig.74 III・IV区 第5・7遺構面平面図

16. 兵庫津遺跡 第52次調査

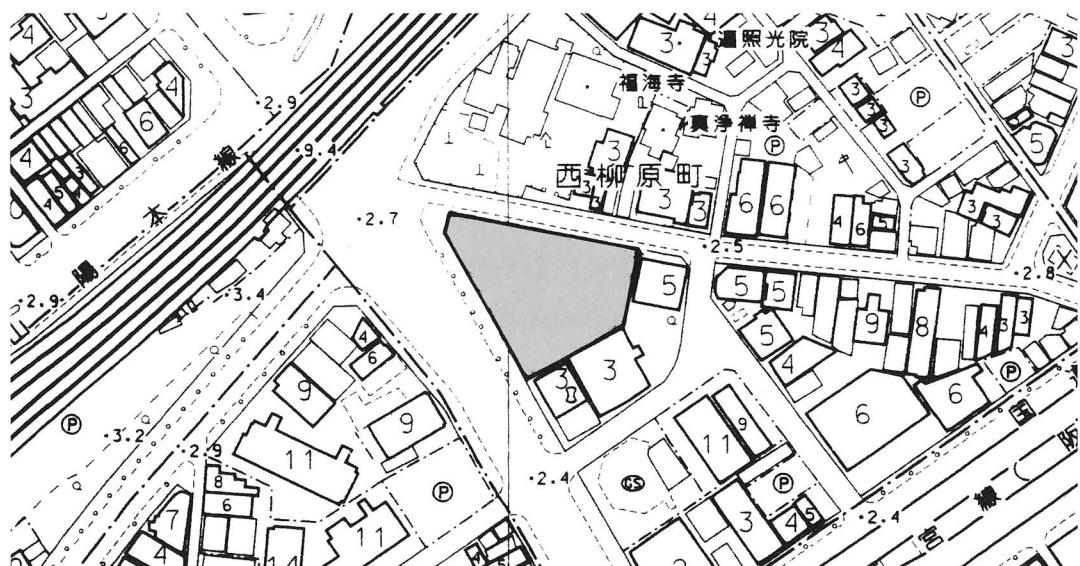
1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区、JR兵庫駅の東側一帯に広がる遺跡で、奈良時代～近世に至る複合遺跡である。古くは「大輪田泊」と呼ばれ、文献上にもたびたび登場するが、特に平清盛による経ヶ島築造により、日宋貿易の拠点となったことはよく知られている。

これまでに50回以上にわたる調査が実施されてきており、江戸時代の町屋や墓地等の遺構が各調査において検出され、次第に兵庫津遺跡の実態が判明しつつある。

また、兵庫津については絵図がよく残されており、特に著名な『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』(元禄9年〔1696〕、以下『元禄絵図』と記す)については、近年の発掘調査成果ともよく符合し、絵図の正確さが立証されつつある。

なお、今回の調査については平成22年度に『兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



2. 調査の概要

今回の調査は、社殿建替えに伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。今回の調査では、3面の遺構面を確認したほか、第1遺構面よりも上位において、明治期以降のものと考えられる便所遺構・水琴窟等も検出している。

第1遺構面

胞衣壺埋納遺構、土坑、ピット、建物跡、竈状遺構等の遺構を検出した。遺構面検出中に「文久永宝」1枚（文久3年〔1863〕初鑄）が出土していることなどから、幕末期頃の遺構面と考えられる。

SK102

調査区中央やや東よりで検出した胞衣壺埋納遺構である。長径0.88m、短径0.61m、深さ6cmを測る土坑状の遺構で、土坑の中心よりも北へ寄った場所に胞衣壺を設置している。胞衣壺は完存しているが、蓋は遺存していない。

SX103

調査区北壁で検出した胞衣壺埋納遺構である。平面形は不明である。身は蛸壺を転用したもので、蓋は、陶器の蓋を内面を上側に向けて使用している。

第2遺構面

井戸3基、溝2条、土坑3基、ピット15基、性格不明遺構8基を検出している。出土した遺物から、18世紀後半～19世紀半ば頃と推定できる遺構面である。

- SX204 調査区中央で検出した、平面形が方形を呈する遺構である。他の遺構や搅乱によって正確な規模は不明であるが、現存する規模は、南北1.6m、東西1.5mを測る。
- 遺構の中央に、長径1.14m、短径0.9mの平面形が橢円形を呈する範囲で砂層の堆積部分があり、その中央に幅20~30cm、長さ60cm程度の扁平で細長い石を2石設置している。この2石の下部にも扁平な石を数段にわたって積み上げているが、周囲及び底部付近には大型の石は存在しない。
- 前述の橢円形プランの外側には扁平な径17~40cm程度の石を6石等間隔に配置している。中央に扁平な石2石を密着して設置しており、その密着する部分はやや窪んでいるようにも見えることから、上部に柱等を設置するための施設のような性格も想定される。
- SX206・
SX207 調査区東部で検出した2基の柱穴状の遺構である。2基の距離は3.9mを測る。現状での規模は、SX206が径1.3m、SX207は径1.0mを測るが、SX207は上部を搅乱によって削平されているため、本来はSX206と同規模であったものと考えられる。SX207は削平のため根石しか遺存していないが、径40~50cmの扁平な石を3石組み合わせて、中心にあたる部分を窪ませており、上部に柱状のものを据えていたことが推察される。SX206は、SX207と同様に根石に3石を用い、その上位に径54cm、厚さ18cmの扁平な石を載せ、さらにその外側を黄褐色の粘質土によって固定している。石がずれないように配慮したものと考えられる。以上のように2基の遺構は、大型の石材を数個使用し、また石を固定していることから判断すると、重量のある柱状のものを上部に据えていた可能性が考えられる。
- SX208 SX204の東側で検出した石垣状の遺構である。径40cm程度の石を西側に面をもつように設置している。遺存しているのは1段分のみであるが、裏込めの石材も検出しており、上位にさらに数段石がつまれていたことは確実であろう。
- また、SX208の東側でアワビ貝が1個出土した。内側を上に向けて出土しており、意図的に据えたものと考えられる。
- 第3遺構面 落ち込み、溝などを検出した。18世紀前半頃の遺構面と考えられる。
- SD301 後述するSG301内部の肩部付近に最上層が溝状に堆積しており、この部分をSD301として遺物の取り上げを行った。幅0.5~0.7m、最深部の深さは35cm程度である。
- SD303 SG301に注ぎ込むようなかたちで調査区北東部で検出した溝である。溝の底部及び立ち上がり部に一石五輪塔等石造物などの石材を使用して護岸としている。一石五輪塔のうちの1点については、「寛永6年」[1629]の年号や戒名と思われる文字が刻まれている。墓標として製作・使用されていたものが転用されたものと考えられる。北端部では木樋の一部を検出した。
- SG301 調査区南半部は大きく落ち込む地形となっていることを確認した。この落ち込みをSG301と呼称する。肩部は、東側及び西側は湾曲し、南側に曲がっている。南側の肩部は調査区内で検出していないため、地形が一段下がるだけなのか、堀や池などの完結する遺構となるのか現段階では不明である。
- 下層 第3遺構面よりも下層の状況について把握するために断割調査を実施した。調査区北壁際で行った断割調査では、標高0m付近以下には砂層が堆積しており、この砂層には遺物を含まず、遺構も確認されなかつたためここまでで調査を終了した。

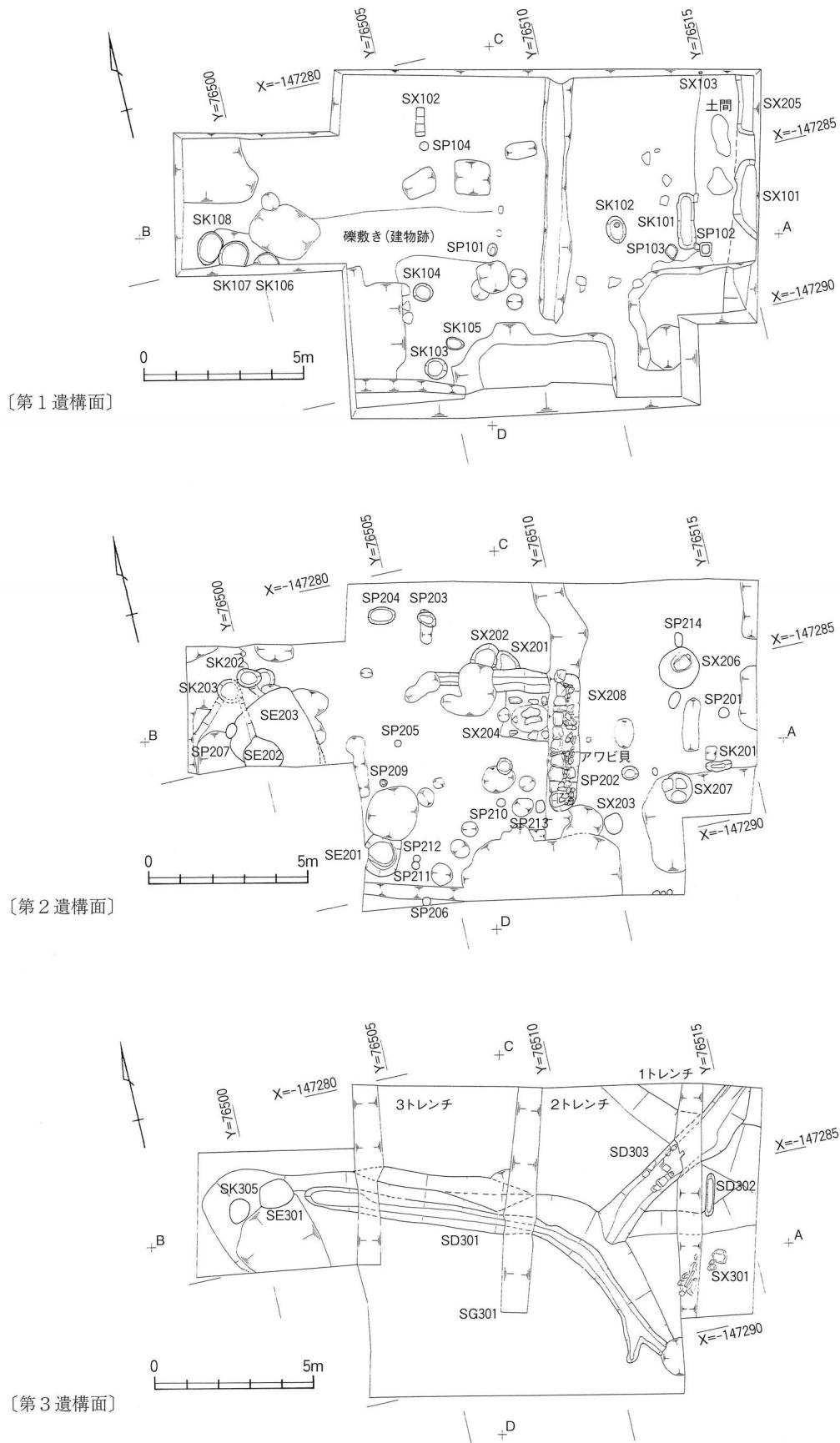


fig.76 第1～3遺構面平面図

3.まとめ

今回の調査地は、「柳原惣門」の所在地と想定される地点にあたり、さらに詳細にいうと、今回の調査区は『元禄絵図』では、「札場」・「戎社」の記載がある場所に位置しているものと考えられる。「札場」は高札を掲示する場であり、「戎社」は現在当地に鎮座する「蛭子神社」に連なるものである。

今回の調査では、江戸時代と考えられる時期の3面の遺構面を確認し、種々の遺構を検出した。

第2遺構面で検出したSX204・206・207・208は全てが同時存在したかどうかは明確ではないが、人頭大以上の石材を多く使用した構築物で、調査区中央から東部に偏って検出したことから有機的な関連が想定される。例えばSX206・207については鳥居の礎石及び柱穴の可能性等、今後も類例調査を含めた検討を要する課題と考えている。SX208については高札場の基壇等の可能性も想定できるが、削平のため上部構造が不明であり断定できない。「札場」跡の発掘調査例は全国的にみても多くなく、現在知り得るものとしては近年発掘調査及び報告書刊行が行われた山口県萩市の唐柵札場跡がある。唐柵札場跡では高札場遺構が確認され、考察が加えられている。高札場の基礎構造を考える上で参考となるもので、排水に関わる瓦積遺構を伴う等、当調査でも同様の機能をもつと考えられる瓦集積遺構SX203を検出しており類似点もあるが、今回の調査成果は唐柵札場跡に比して高札場の遺構としては断定的な要素が乏しいといえよう。今後も検討を加えたい。以上のように現段階では、「札場」・「戎社」との関連を明確に示す遺構を断定できるまでは至っていない。今回の調査地内に「札場」・「戎社」の境界が存在するかどうかについても不明である。

第3遺構面で検出したSG01については、『元禄絵図』に「札場」の南側に湾曲するようなラインが見え、このラインより南側には畠地が広がっているようである。このラインとの関連も考慮したが結論に至らず、今後の検討課題となった。

なお、今回の調査においては都賀堤については全く確認できなかった。都賀堤は明治8年〔1875〕に削平されているため発掘調査において確認される可能性が低いとも考えられるが、痕跡を全く止めていないかどうかは不明であるため今後の周辺地での調査においても十分注意を払う必要があろう。現段階では当調査地は都賀堤よりも内側に位置しているものと考えておきたい。

今回の調査においては遺構や整地土から28ℓ入りコンテナで40箱以上の遺物が出土しており、その主体となるものは近世に属するものであるが、中世に属するものも含まれる。出土遺物には当該時期の土師器・陶器・磁器・瓦・銭貨・鉄製品等があり、陶器や磁器については国内の各生産地で生産されたものがある。また特徴的な遺物もいくつか含まれる。一部については報告書において紹介しているが、以下では、実測図等を報告書に掲載できなかったものも含め遺物についての考察を加えたい。

まず、丁銀形土製品であるが西日本を中心として近世遺跡からの出土が確認されている。兵庫県内においては、当遺跡（第14・20・25・33次及び兵庫県教育委員会調査）、神戸市萩原遺跡、伊丹市伊丹郷町遺跡、姫路市姫路城跡等で出土している。用途は、不明である。

また第1遺構面で2基の胞衣壺埋納遺構を検出しており、fig.77に出土遺物を掲げた。

1はSK102出土の
もので、胞衣壺の身
に使用された土師器
の短頸壺である。

2・3はSX103出
土のもので、蓋を
伴って出土したもの
である。2の蓋は施
釉陶器で、3の身は
土師器蛸壺を転用し
たものである。

当遺跡においては
比較的多くの胞衣壺

が出土している。当調査のSX103のように身には蛸壺を転用したものが多い傾向が認められるが、一方で幕末頃には、当調査のSK102や第21次調査のように土師器の短頸壺（火消壺）を使用しているものもある。第14次調査では灰釉陶器の壺（二耳壺、三耳壺）を、第20次調査では丹波焼の壺を身に使用しているものもある。蓋には、土師器のほか陶器も使用されている。蓋は、当調査のSK102のように遺存していないものもあるため、木製等の有機質のものも用いられていた可能性も考えられるが、第14次調査では身の内部から出土したアワビ貝の貝殻について、蓋として使用されていた可能性も考えられている。

以上のように当遺跡からはさまざまな器を使用した胞衣壺が出土しているが、黒田恭正氏によれば、時期的には、現在17世紀初頭以降のものの出土が確認されているようである。

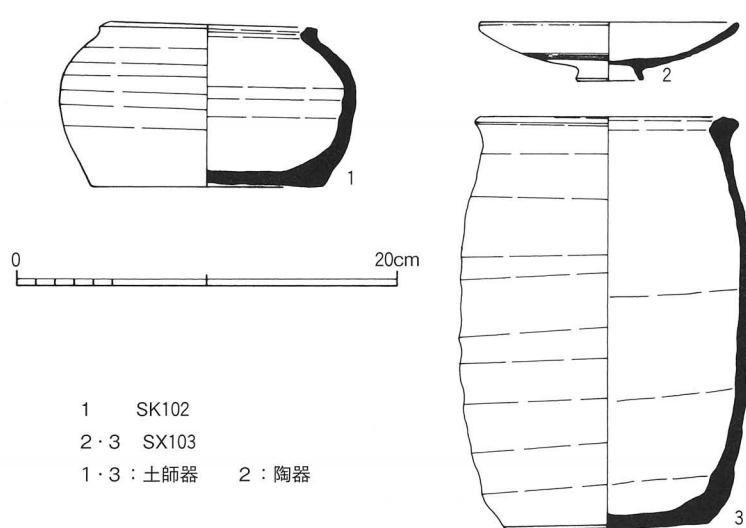


fig.77 出土遺物実測図 (1) [胞衣壺]

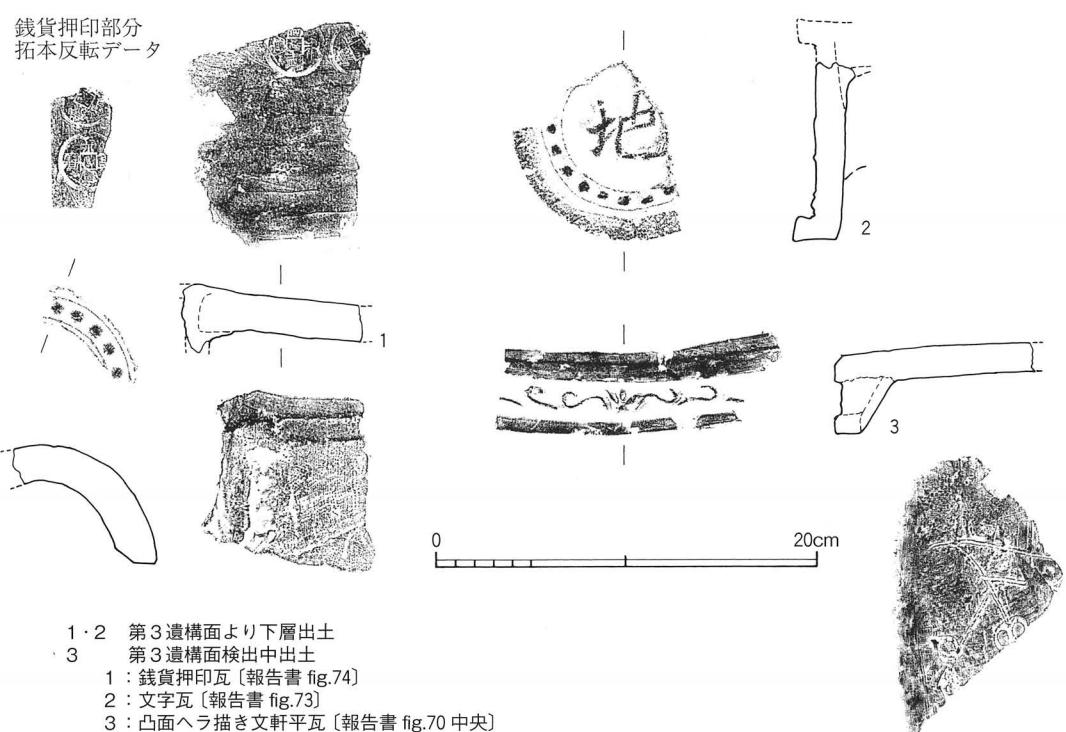


fig.78 出土遺物実測図 (2) [瓦]

瓦も多く出土している。大半が近世瓦と考えられるが、中世に遡る瓦も出土している。これらの瓦が直接柳原惣門や戎社、あるいは蛭子神社の屋根に葺かれていたものかどうかの判定は難しいが、通有の軒瓦等のほかに鬼瓦、鳥衾瓦、墀瓦、雁振瓦、留蓋や、各種の道具瓦等多種の瓦が出土しており注目される。出土瓦の一部については報告書において写真や拓本を掲げて若干の説明を行ったが、実測図については掲載することができなかつたため、fig.78に一部軒瓦の実測図・拓本を掲げた。1・2は第3遺構面より下層から出土したもので、3は第3遺構面検出中に出土したものである。

1は軒丸瓦で、丸瓦部凸面の頂部付近に錢貨崇寧重宝（北宋錢、初鑄1103年）を2ヶ所に押印している。崇寧重宝は、神戸市内では滝ノ奥経塚において出土例がある。当十銭の大銭で、近畿地方での流通量はあまり多くなく、流通しているものについては外縁が削られるものが多い傾向があるが、今回の瓦に押印されているものには滝ノ奥経塚出土例と同様に外縁が残る。錢貨を瓦に押し付けることの積極的な意味については現段階では見出せていないが、参考となる資料が京都府木津川市瀬後谷瓦窯跡から出土している。出土した資料は錢貨和同開珎が押印された須恵器坏である。この資料については、賃金を和同開珎で支給された工人が焼成前に押し付けた可能性も考えられている。時代が大きく隔たり、瓦と須恵器という違いもあるために直ちに同様の理由を想定することについては早急の感もあるが、須恵器、瓦ともに本来錢貨を押印する必要性が感じられない焼物であるため、上記の想定もひとつの考え方として参考となろう。瓦当部については、外縁部が4分の1程度残存しているのみであるため、全体の文様については不明な点が多い。外区は2条の圈線の間に珠文を配するもので、内区文様はほとんど遺存していないが、内側の圈線の内側に巴の尾部の一部と思われるものが遺存しているので、おそらく（三）巴文であろう。丸瓦部凹面には布目痕が残る。凸面には、タテ方向の強いヘラナデを施す。

2は、文字瓦である。外区文様は1と同様に2条の圈線間に珠文を配するもので、内区に「地」字を施す。当調査出土の文字瓦としては、図化を行っていないが他にもう1点、「福」字の一部と思われるものが残る軒丸瓦（第2遺構面SX201出土、報告書fig.77に拓本掲載）がある。当遺跡出土文字瓦としては、第4次調査出土「福」、第14次調査出土「福」・「西（異体字）」、第34次調査出土「福」、第51次調査出土「巨」、兵庫県教育委員会調査出土「福」・「久」が報告されている。各調査出土瓦中に占める文字瓦の割合は非常に低く、軒瓦の主体をなすものではないと考えられる。文字瓦の文字の示す意味についても不明であるが、「福」字を施すものがやや多いという事実をここでは確認しておきたい。

3は軒平瓦で、凸面にヘラ状工具により草花？文を施す。凸面に文様を施しても瓦を葺いた際には下側になって隠れてしまいその装飾を見ることはできない。工人の意図を量りかねるが、何か特別な思いを反映したものであろうか。凹面には板ナデを施す。

土器類では肥前系の磁器や、備前、唐津、丹波、堺・明石等の陶器が多く出土しており中世～近世における流通の一端を垣間見ることができる。また近年出土例が徐々に増えつつあるものに山口県須佐唐津窯産と考えられる陶器擂鉢がある。現在神戸市内では当遺跡内のみ出土が確認されている。当遺跡内でも出土地点に偏りがあり、出土数も限られるが、近年佐伯昌俊氏による編年案も提示されており、今後の出土状況に注意が必要である。

17. 兵庫津遺跡 試掘調査

1. はじめに

神戸市中央卸売市場の移転による西側本場部分の再開発計画に伴い、これまでに3回の試掘調査を実施してきた。当該地は兵庫津遺跡の中でも特に兵庫城跡推定地に位置しており、明治7年〔1874〕の新川運河開削により大きく改変を受けているものの、「兵庫陣屋」、「勤番所」、「兵庫鎮台」、「兵庫裁判所」、「兵庫県庁」、「明親館」と変遷を辿る兵庫城及び堀などの付属施設の遺存状況を把握することは重要な意味がある。

過去に実施した3回の試掘調査においても搅乱を受けつつも遺跡の存在が確認されており、その広がりや遺構面のより正確な把握を大きな目的として、平成21年も試掘調査を実施した。

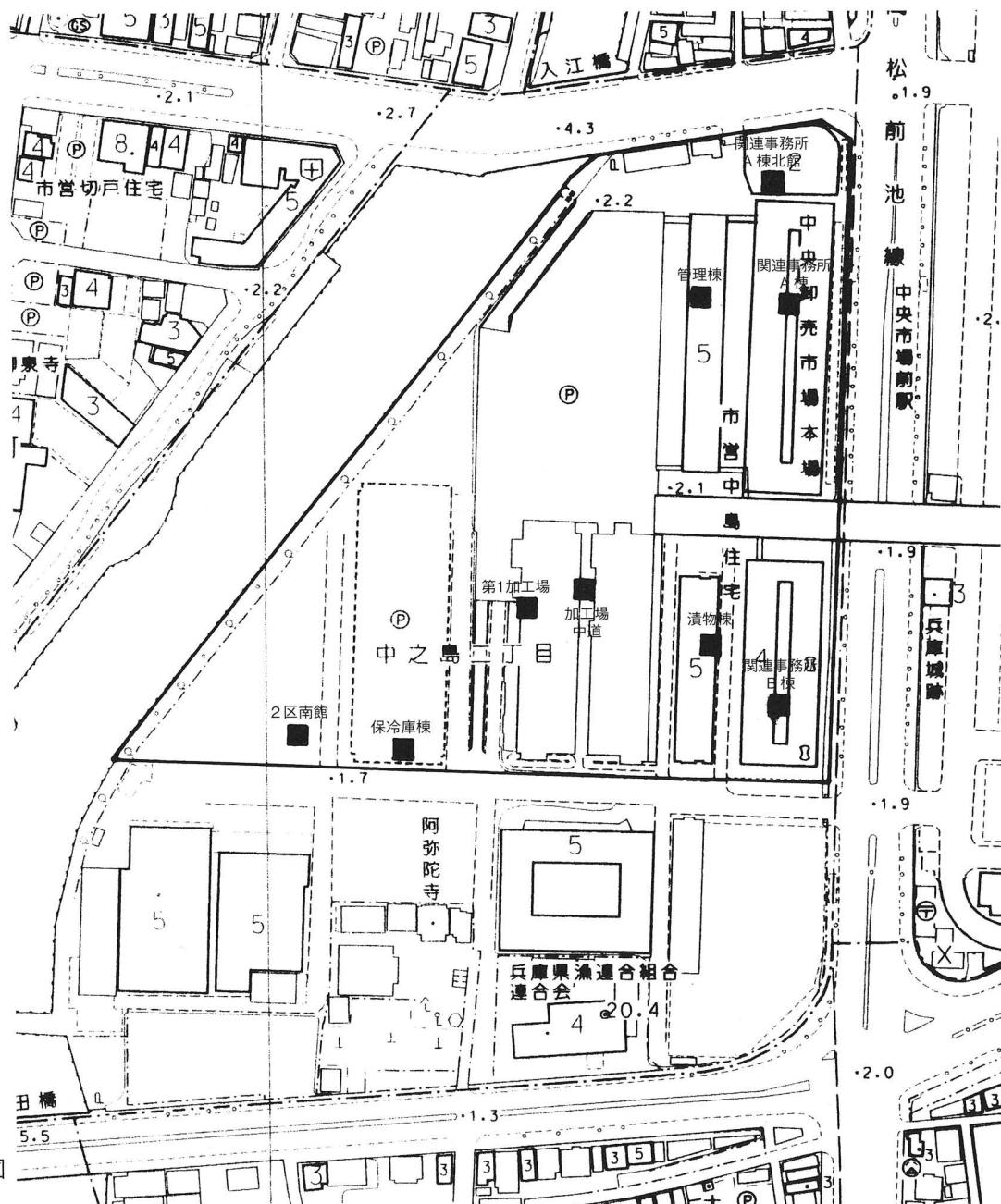


fig.79
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査地点は既存建物の内部に位置しており、それぞれの建物棟名を試掘坑の名称として使用することとした。
- 関連事務所 A棟北館 床面の高さはT.P.2.201mで、既存建物の基礎と埋め土や土壤改良でT.P. 0m以下まで搅乱されていた。T.P.-0.157mで明黄褐色砂を確認したが、湧水が著しく、遺構面を形成するとは考えられない。
- 関連事務所 A棟 床面の高さはT.P.2.283mで、既存建物の基礎と埋め土などでT.P. 0m以下まで搅乱されていた。T.P.-0.233mで明黄褐色砂を確認したが、湧水が著しく、遺構面を形成するとは考えられない。
- 関連事務所 B棟 床面の高さはT.P.2.311mで、既存建物の基礎と埋め土などでT.P.0.424mまで搅乱されていたが、その直下で明黄褐色砂を確認した。湧水が著しく、遺構面を形成するとは考えられない。
- 漬物棟 床面の高さはT.P.2.342mで、既存建物の基礎と埋め土などでT.P.0.424mまで搅乱されていた。その直下で、明黄褐色砂を確認した。湧水はあまり多くはなく、面を精査した結果、土坑1基と焼土塊等を検出した。また近世の磁器や瓦等も出土した。
- 管理棟 床面の高さはT.P.2.220mで、既存建物の基礎と埋め土などでT.P.0.227mまで搅乱されていた。その直下で明黄褐色砂を確認した。湧水はあるもののあまり多くはなく、面的に精査をしたが、遺構や遺物は確認できなかった。
- 第1加工場 床面の高さはT.P.2.086mで、既存建物の基礎と埋め土などでT.P.0.05mまで搅乱されていた。その直下で明黄褐色砂を確認した。湧水著しく、遺構や遺物は確認できなかった。
- 加工場中道 道路面の高さはT.P.2.190mで、新旧の消防用水と考えられる鉄管の埋設等でT.P.0.233mまで搅乱されていた。その直下で淡黄灰色砂を確認した。湧水が著しいが、T.P. 0mよりさらに下層には濁青灰色粘質砂が堆積し、近世の瓦や磁器が出土した。湧水が多く視覚的には確認できないが、人頭大の石が南北方向に、一直線に点在しているようである。それらの石と同様な深さ(T.P.-0.50m)で一石五輪塔が出土した。

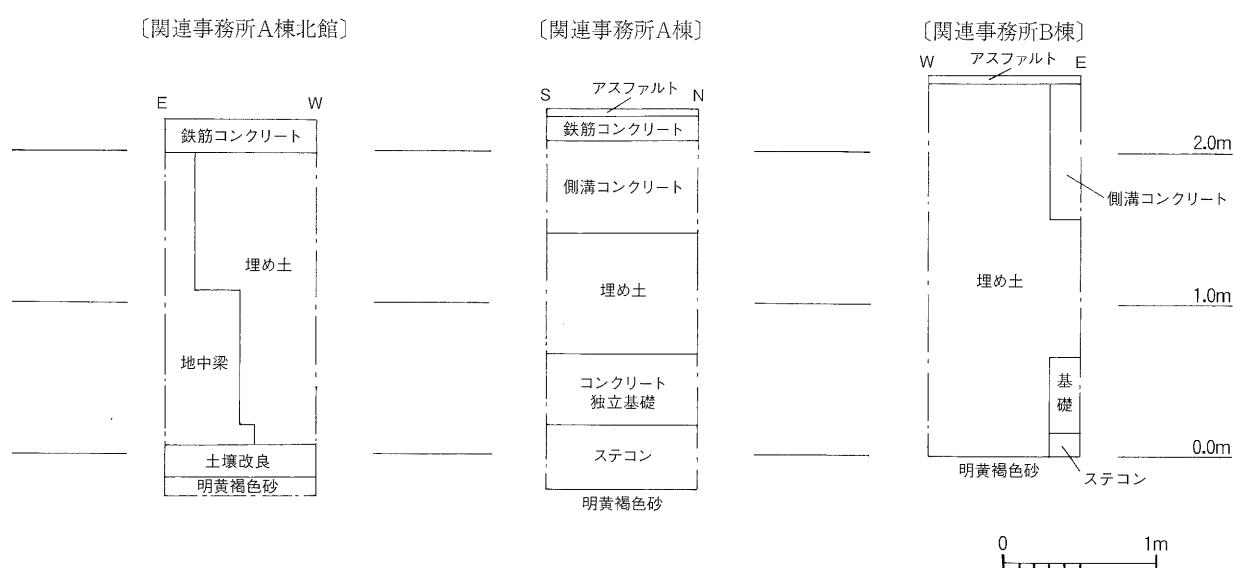


fig.80 試掘坑土層断面模式図（1）

- 保冷庫棟** 床面の高さはT.P.2.118mで、既存建物の地中梁などで搅乱されていた。東西方向の地中梁はT.P.0.8mまでと浅いが、南北方向の地中梁は、T.P.0.522mまでと深く入れられている。地中梁の下には複数の砂礫層が存在するが、湧水が著しく、遺構や遺物は確認できなかった。
- 2区南端** 前回の試掘調査の際に湧水と砂層の崩落により実施できなかった下層の状況の確認を、水圧サポーターなどの資材を使い実施した。前回の最下層の下は乳灰褐色砂が存在し、前回の試掘結果でも指摘されているが、中世の遺構が存在する可能性がある。
- その層の下がT.P. 0 mとなっている。T.P. -0.478mまで掘削したが、黄褐色砂と淡黄灰色砂の互層を確認したが、遺構が存在するとは考えにくい。

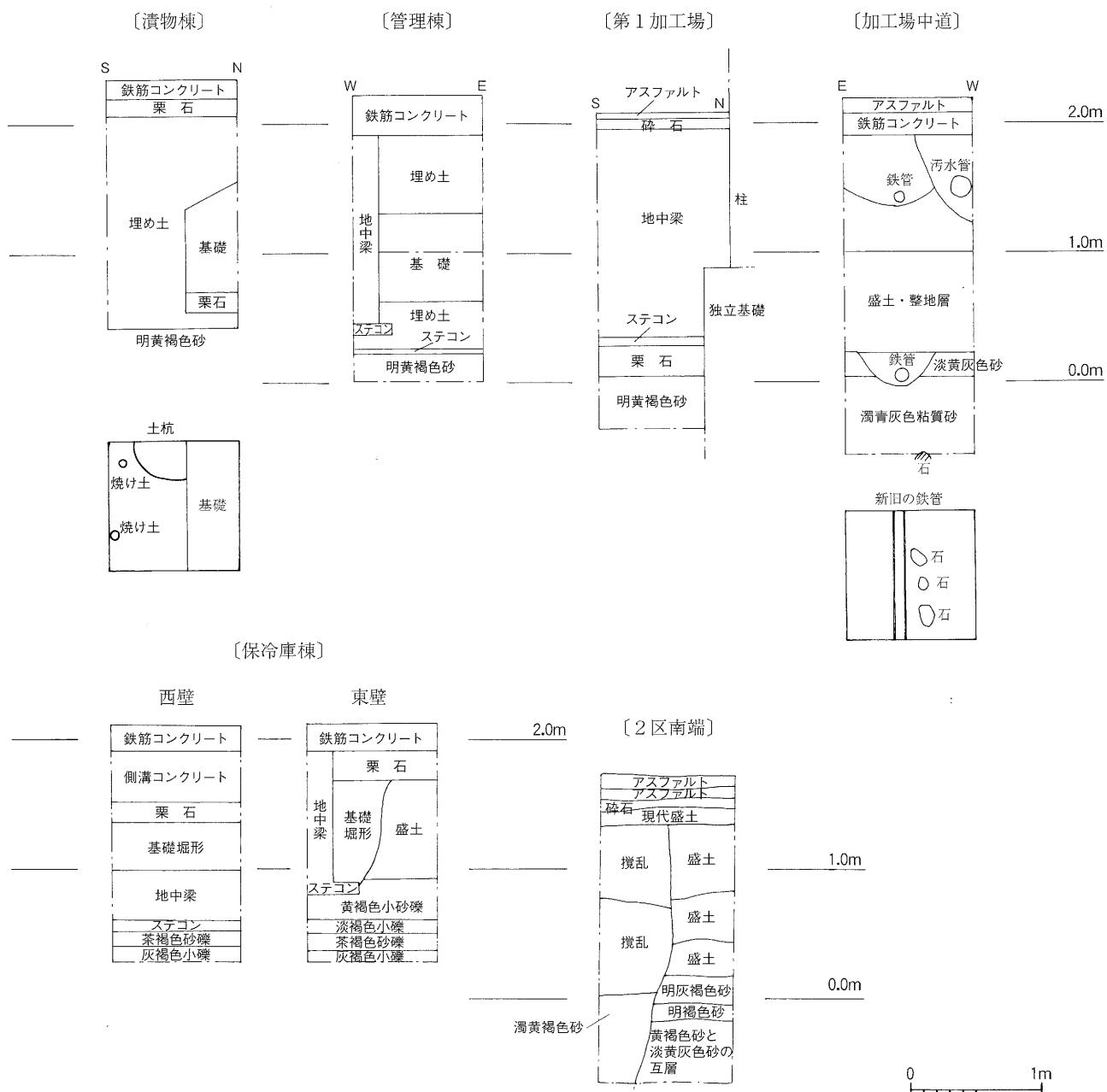


fig.81 試掘坑土層断面模式図（2）

3.まとめ

T.P. 0 m以下まで既存建物の基礎が及ぶところは、基本的に遺構面は遺存していない模様であるが、加工場の中道では、明らかにT.P. 0 m以下において遺物が出土している。おそらく、兵庫城の堀の部分に当たるものと考えられる。これまでの発掘調査の成果と絵図を合成すると、加工場の中道は堀の東側の町屋区域の道路部分に相当しているが、絵図と現在の地図とは完全には一致しないことから、堀の中を掘削したものとも考えられる。

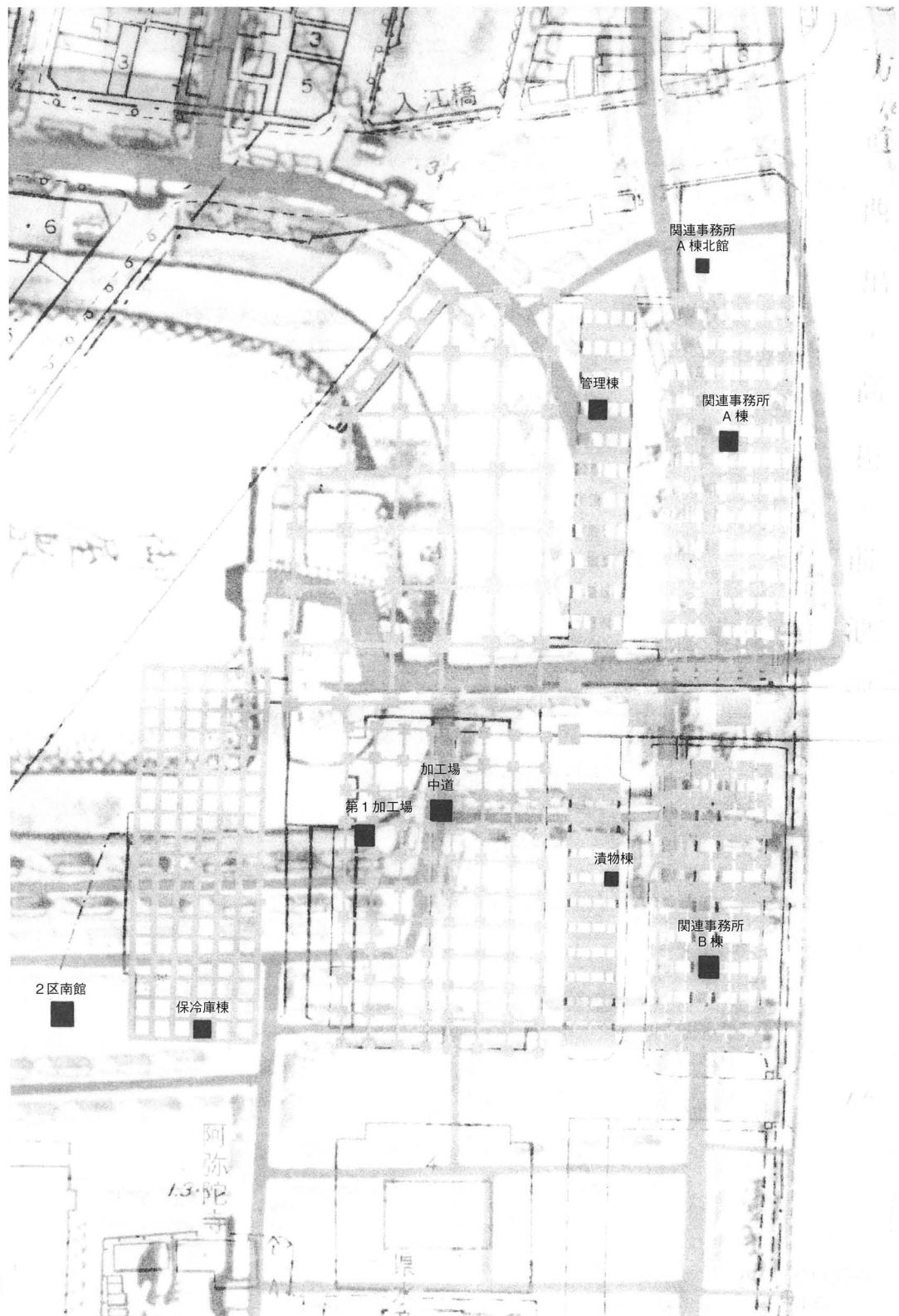


fig.82
調査地点と
元禄絵図の合成図
(約1:1,500)

18. 上沢遺跡 第57次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、昭和63年に都市計画道路房王寺線街路築造工事に伴う試掘調査によって発見された遺跡である。現在当遺跡は、兵庫区、長田区にまたがる、東西約400m、南北約400mの範囲に広がる遺跡として周知されている。

これまでに56回の発掘調査を実施してきており、房王寺線付近の地区では縄文時代晩期～弥生時代前期の流路が発見され、山手幹線沿線の地区では弥生時代～中世にかけての集落の存在が確認されている。また遺跡の中央部（上沢通八丁目公園・第28・31次調査）では奈良時代の井籠組の井戸枠が検出され、井戸内より銅鏡等が出土している。以上のように縄文時代～中世に至る複合遺跡であるとともに、銅鏡等に代表される奈良時代の遺構・遺物が検出され、当該時期においては寺院あるいは役所のような性格をもつと考えられる遺跡である。



fig.83
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。当調査地周辺では弥生時代前期と弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構面等が検出されている。当調査においても同様の遺構面を3面検出した。

調査対象地の大半が調査対象範囲であり、残土置場の確保のため三分割して調査を実施した。調査着手順に北西部を1区（東西5.0m、南北1.7m）、南西部を2区（東西5.0m、南北1.7m）、東部を3区（東西1.5m、南北3.5m）と呼称する。

基本層序

上層より、現代盛土、淡灰色泥砂（旧耕土）、黄褐色砂泥（旧床土）、灰色砂泥、黄色砂（洪水砂・西半には無）、褐色砂泥（遺物包含層1）、灰褐色泥砂（遺物包含層2）、褐色泥砂（SD201）、黄褐色泥砂、灰褐色混礫砂となる。遺構面の標高は、第1・2遺構面はT.P.11.5m前後、第3遺構面はT.P.11.1m前後である。

層序としては、灰色砂泥、黄色砂は奈良時代～中世頃の堆積と考えられるが、遺物は含まれず、また遺構も検出していない。

褐色砂泥（遺物包含層1）からの出土遺物は古墳時代前期頃の土師器が大半を占めるが、古墳時代後期の須恵器をわずかに含む。この層を除去すると第1遺構面となる。

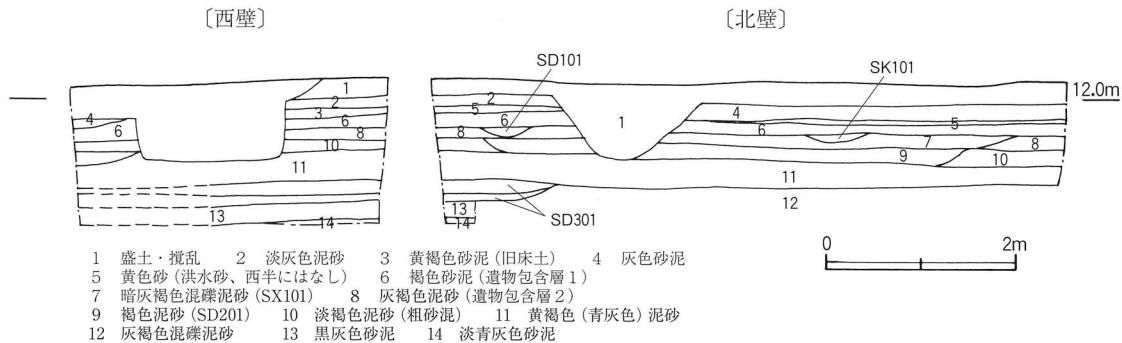


fig.84 調査区西・北壁土層断面図

第1遺構面 遺構面は、調査区北西隅がやや高く東南方向へ下がる。

西側で幅60cm、深さ10cmを測る溝状遺構SD101を検出した。中央では南に向かって下る落ち込みSX101を検出した。SX101は北側で、土坑SK101によって切られている。SK101は直径1.2m、深さ20cmを測り、平面形は円形を呈する。

東隅では、径40cm、深さ5cmを測るピットP101を、東辺では南北90cm、深さ10cmを測る落ち込みSX102を検出した。

SX101とSD101は南西部において切り合い関係をもつものと考えられるが、切り合い部付近に存在する搅乱孔のため両者の前後関係は不明である。SX101の東側は、P101から南に幅20~30cm、深さ5cmの細い溝を介して、西に向かって下がる。SX101の深さは、南端の最深部で約40cmを測る。

SD101からは少量の土師器が出土している。SX101の北端部では、土師器甕片などがまとまって出土した。またSK101の南側部分でも同様に土師器高坏片、甕片などが出土した。P101、SX102からは遺物は出土していない。

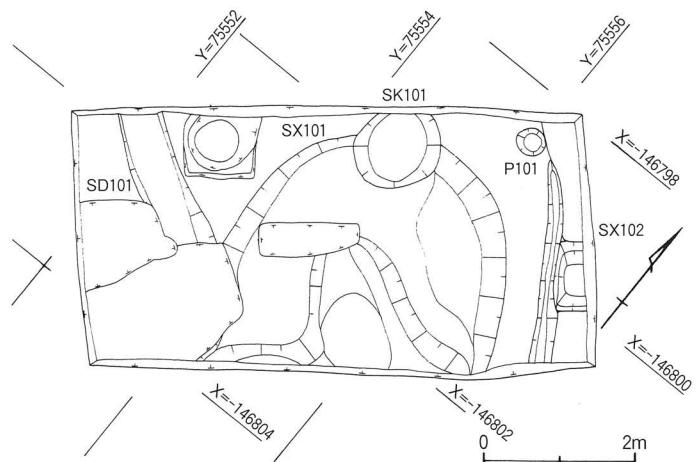


fig.85 第1遺構面平面図

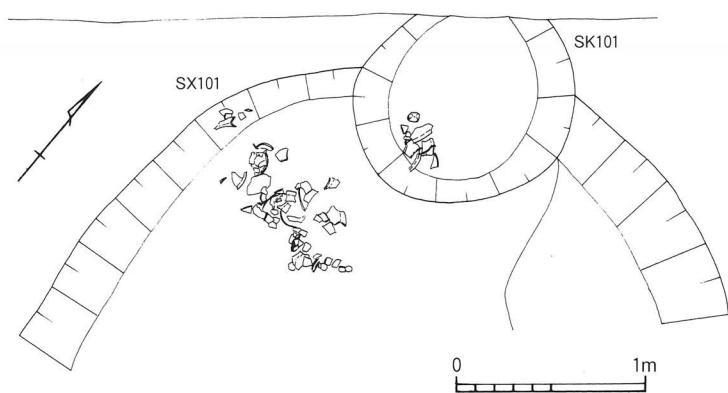


fig.87 SK101・SX101遺物出土状況

fig.86 SK101・SX101遺物出土状況平面図

第2遺構面 SX101の東西の高い部分を掘削し、中央部にSX101のくぼみが少し残る程度まで掘削した段階で第2遺構面を検出した。

西辺と東辺が高く中央部低くなる、幅約5m程度を測る溝SD201を検出した。SD201は中央部がさらに深くなっている。この部分をSX201と呼称する。SX201中央部で、土師器が出土した。またSX201の内部で北西から南東方向に流れ、幅50cm、深さ20cmを測る溝SD202と長径60cm、短径30cm、深さ10cmを測るピットP201を検出した。調査区西隅では、南西に向かって下がる深さ20cmを測る落ち込みSX202を、また調査区東隅では、径20cm、深さ10cmのピットP202を出した。

SX202、P201、P202からは遺物は出土していない。

SX201と第1遺構面SX101のそれぞれの出土遺物の間には時期差があまり認められないようであるが、今後の整理作業を待つてさらに検討したい。

第3遺構面 第2遺構面の下層約30cmにおいて第3遺構面を検出した。基盤層である黄褐色泥砂は、硬くしまっている。1区では、西に下がる深さ20cm程度のSD301を検出し、2区でも同様の遺構面があることを確認した。しかし雨水や湧水が著しく遺構検出が困難であった。

3区では北と南に下がるSX301とSX302を検出した。それぞれの深さは10cmと15cm程度である。しかしながら1、2区との連続性は不明である。

SD301、SX301から弥生時代前期に属する土器が出土したが、石器類は出土しなかった。また遺構上面となる黄褐色泥砂層からも弥生時代前期の土器が少量出土した。

3.まとめ 今回の調査では、遺構面を3面検出した。遺物包含層1は、土師器が大半であるが少量の須恵器を含む。この直下の第1遺構面の遺構からの出土遺物には須恵器を含まない。弥生時代終末～古墳時代初期にかけての時期が考えられる。

第2遺構面の時期は、第1遺構面の時期よりやや古く弥生時代終末期が考えられる。第3遺構面は、出土遺物より弥生時代前期が考えられる。遺物の詳細な時期については整理作業の進展を待ちたい。

なお周辺の調査では、奈良時代から中世頃の遺物包含層及び遺構が検出されているが、今回の調査では、層序としては存在するものの遺構、遺物は検出していない。

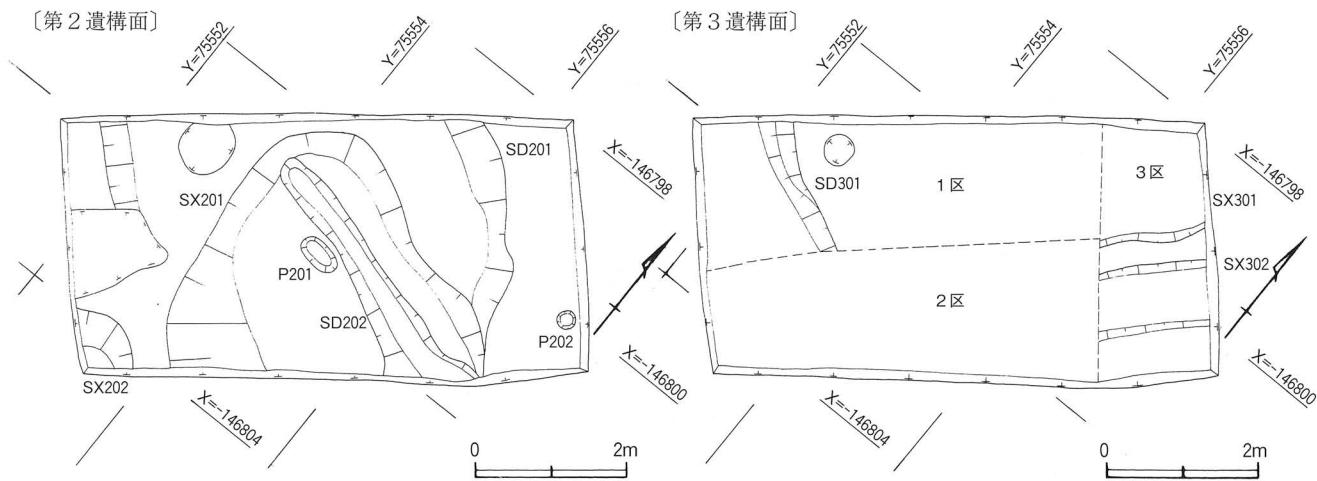
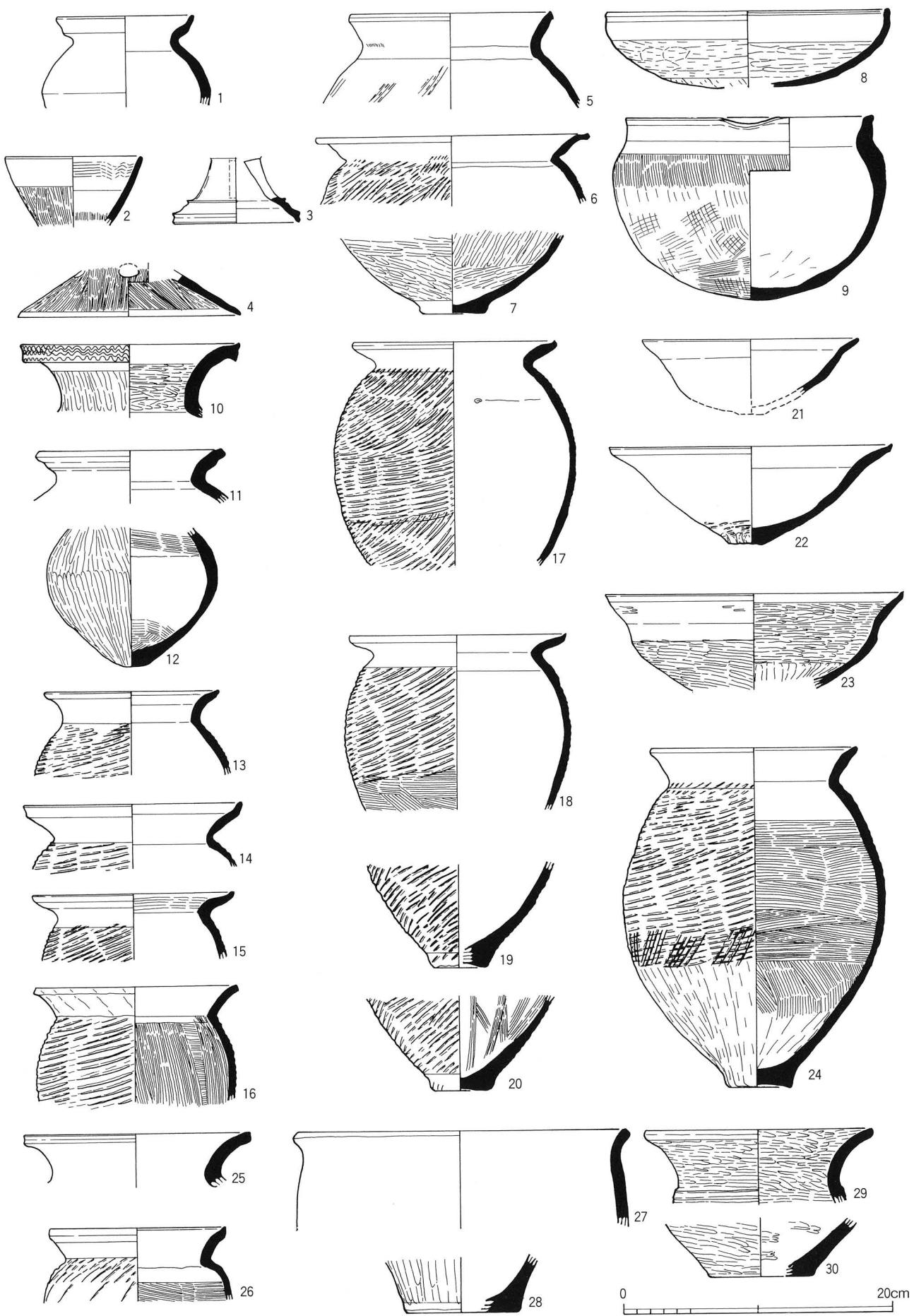


fig.88 第2・3遺構面平面図



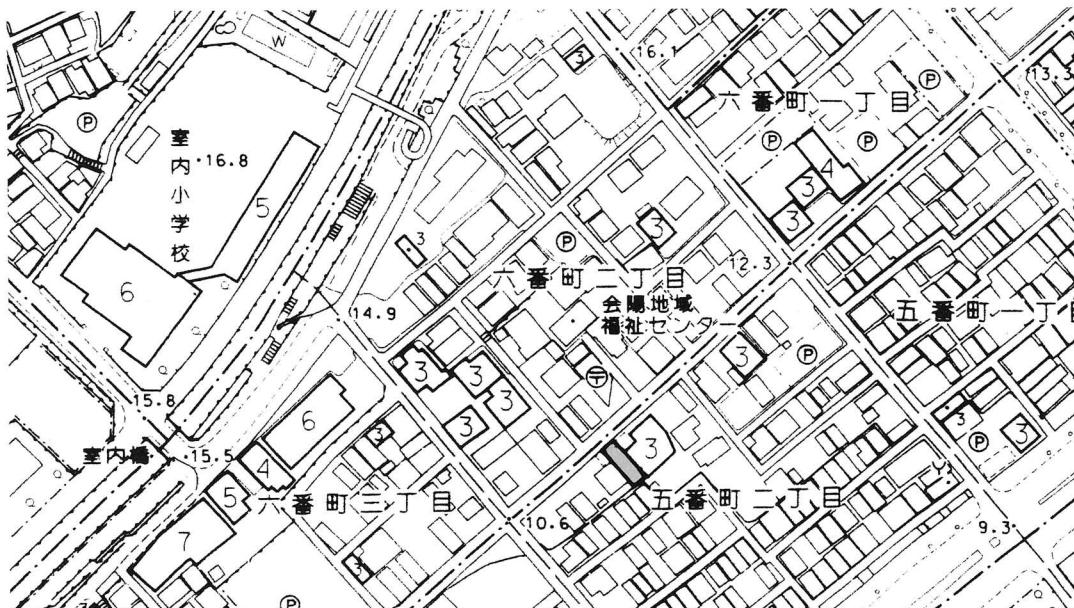
1~7 遺物包含層
8・9 SK101
25・26 SD201
10~24 SX101
27・28 SX301
29・30 SD301

fig.89 出土遺物実測図

19. 上沢遺跡 第58次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、兵庫区上沢通から長田区五番町にかけて所在し、六甲山系から続く丘陵末端部の沖積地上に立地する遺跡である。昭和63年以降これまでに57次におよぶ発掘調査を実施しており、これまでの調査では、縄文時代晩期～弥生時代前期の流路や、弥生時代～中世にかけての集落が確認されている。また奈良時代の井籠組の井戸枠を用いた井戸が検出され、井戸内より銅鏡等が出土している。



2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査対象範囲は調査対象地の大半を占めており、残土置場を確保するため二分割して調査を実施した。北半部を1区、南半部を2区と呼称する。2区より調査に着手した。

基本層序

上層より、現代盛土、旧耕土、黄灰色泥砂、灰色泥砂、淡灰色泥砂、黒褐色混礫泥砂（遺物包含層）、灰褐色混礫泥砂、黄褐色泥砂、黄褐色混礫泥砂となる。遺構面の標高はT.P.10m程度である。調査区南端には、黄色の洪水砂の堆積がみられる。近世以降これらの洪水砂などを取り込んで、南に下がる段状の造成が行われたものと考えられる。

層序としては、黄灰色泥砂、灰色泥砂、淡灰色泥砂は中世～近世の堆積と考えられるが、出土遺物はほとんどなく、また遺構も検出していない。

黒褐色混礫泥砂（遺物包含層）からは、奈良時代頃の土師器、須恵器、瓦片等が出土している。この層を除去した段階で遺構面を検出した。

また遺構面より下層について遺構の有無を確認するために、1区、2区ともに断ち割り調査を実施した。2区南端では、黒褐色混礫泥砂（遺物包含層）が南へ下がって広がっていくことを確認した。また当調査区の下層では遺構、遺物は検出していない。

遺構面

遺構面は、調査区北隅がやや高く南方向へ下がる。調査区南端では、遺構面が削平を受けているが、遺物包含層と遺構面は南へ下がって広がっていくことが判明した。

中央部で、長径3.2m、短径1.4m、深さ10cmを測る落ち込みSX01を検出した。SX01の中央と東端で直径30cm、深さ40cmと直径40cm、深さ30cmのP05とP04を検出した。遺構の切り合い関係は、試掘坑設定位置に重なっており、発掘調査時には観察不能であったため不明である。

北隅で、北に向かって下がる、深さ15cmを測る落ち込みSX02を検出した。少量の土師器、須恵器が出土した。SX02の底面では直径15cm、深さ10cmのP08を検出した。

その他SX02を切る直径70cm、深さ20cmのP03、直径0.2m、深さ5cmのP01、P02の浅いピットや、同様に浅いP06、P07を検出した。

3.まとめ

今回の調査では、奈良時代頃の遺構面と、少量ではあるが瓦片を検出した。当調査地北側の室内小学校（室内遺跡）では、1928年のプール工事の際に奈良時代の瓦片が発見され、1978年の調査でも瓦片等が出土している。1997年には湊川河川改修工事に伴う兵庫県教育委員会が実施した調査で、多量の瓦と塑像の台座等が出土した。第56次調査では奈良時代の掘立柱建物や多量の瓦が検出された。今回の調査においても、これらの調査成果から追認される成果が想定されたが、調査面積が狭く、また一定程度の性格を表すような遺構や遺物は検出していない。

遺構、遺物の詳細な時期については今後の整理作業を待って検討したい。

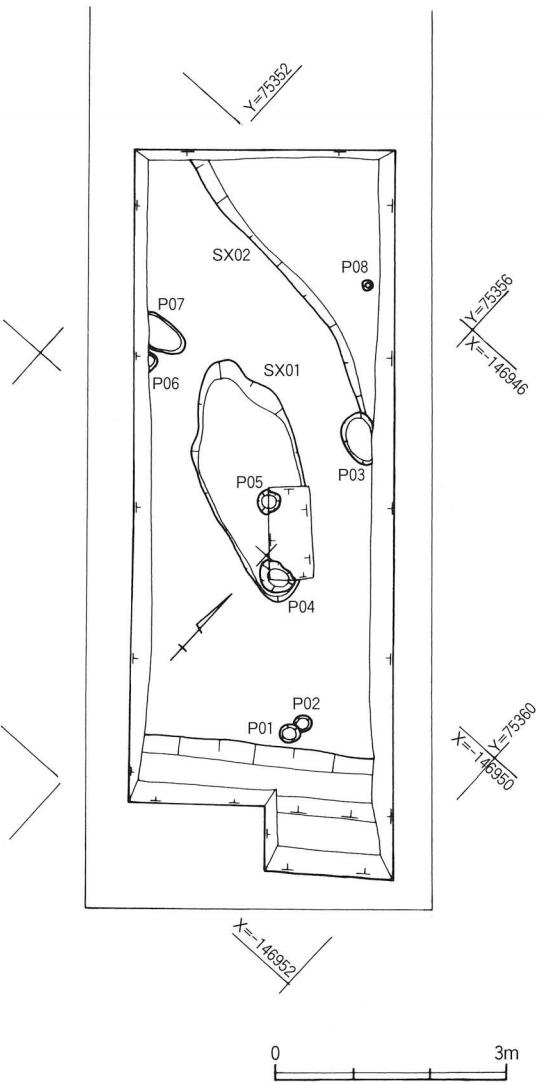


fig.91 調査区平面図

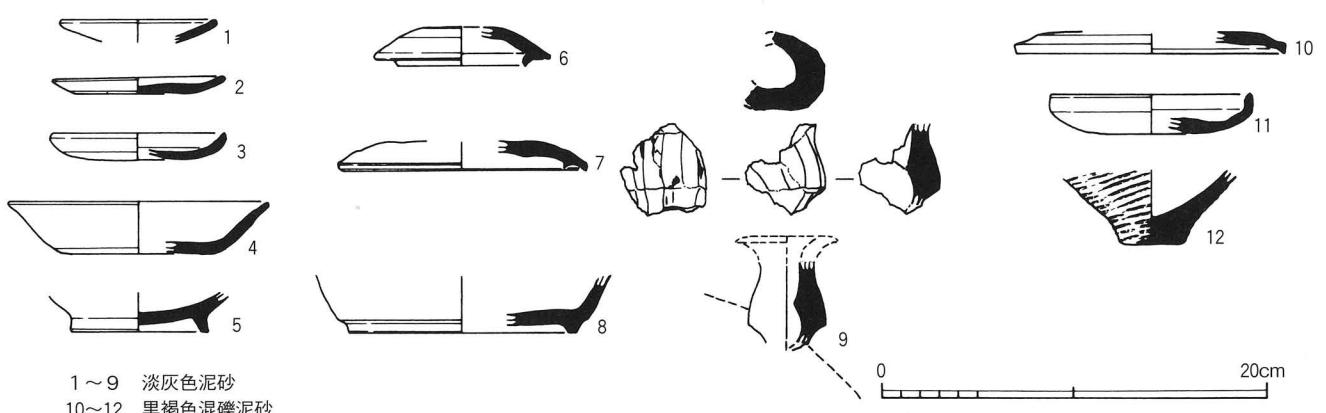


fig.92 出土遺物実測図

20. 中遺跡

1. はじめに

中遺跡は六甲山の北側、武庫川支流の八多川沿いに所在する。八多川流域の平野部には数遺跡が隣接して存在し、縄文時代から江戸時代に至る遺構・遺物が確認されている。八多川流域一帯は古代の有馬郡八多郷、のちの八多荘に属する。当地の旧村名「中村」は『慶長国絵図』において確認することができ、この地名は少なくとも中世まで遡るものと考えられ、「中」という地名から当地が八多庄およびこれを引き継ぐ地域の中心であった時期のあることを示している。

当遺跡におけるこれまでの調査では、飛鳥時代～奈良時代・平安時代、さらに鎌倉時代・室町時代に續く遺構・遺物が確認されている。特に飛鳥時代・奈良時代の円面窯や倉庫と推定される掘立柱建物が確認されており、この周辺に古代の役所の存在する可能性が推定され、古代においても当地が地域の中心となっていた時期のあることを示している。

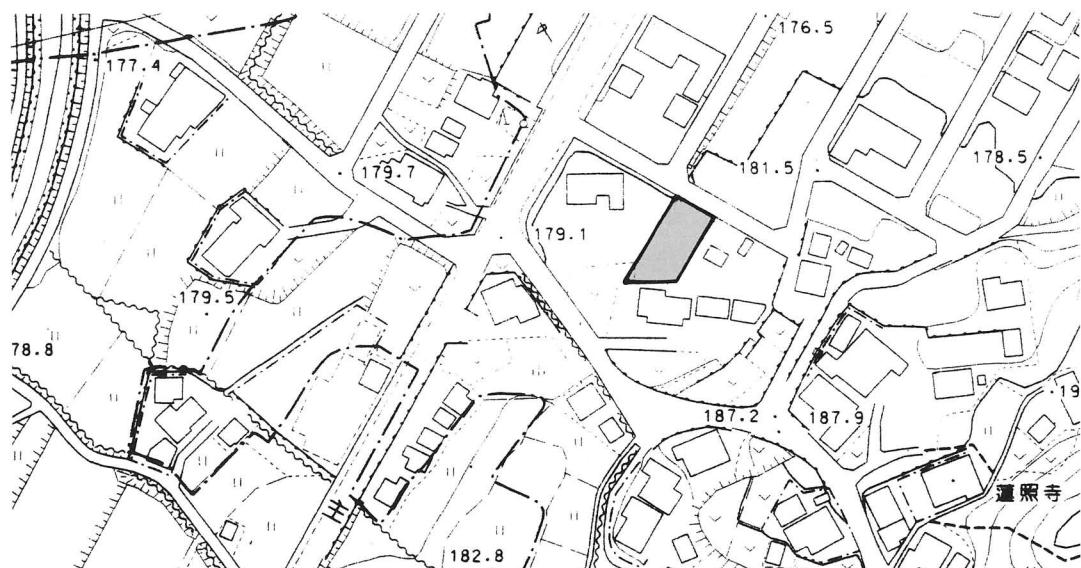


fig.93
調査地位置図
1:2,500

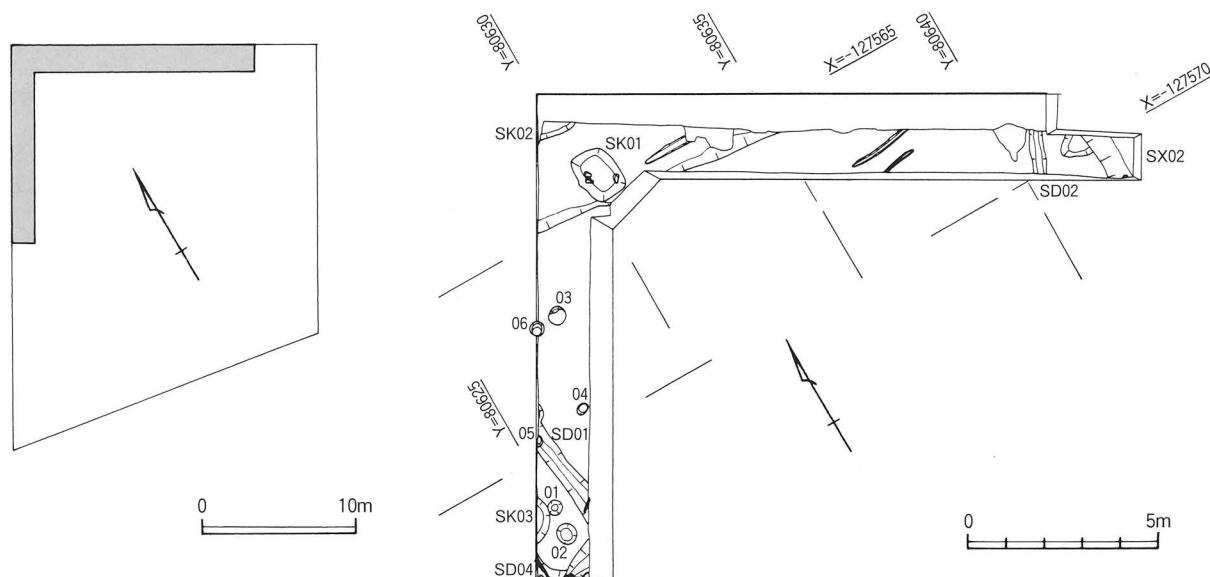


fig.94 調査範囲位置図

fig.95 調査区平面図

2. 調査の概要 今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査の結果、遺構面を1面確認した。

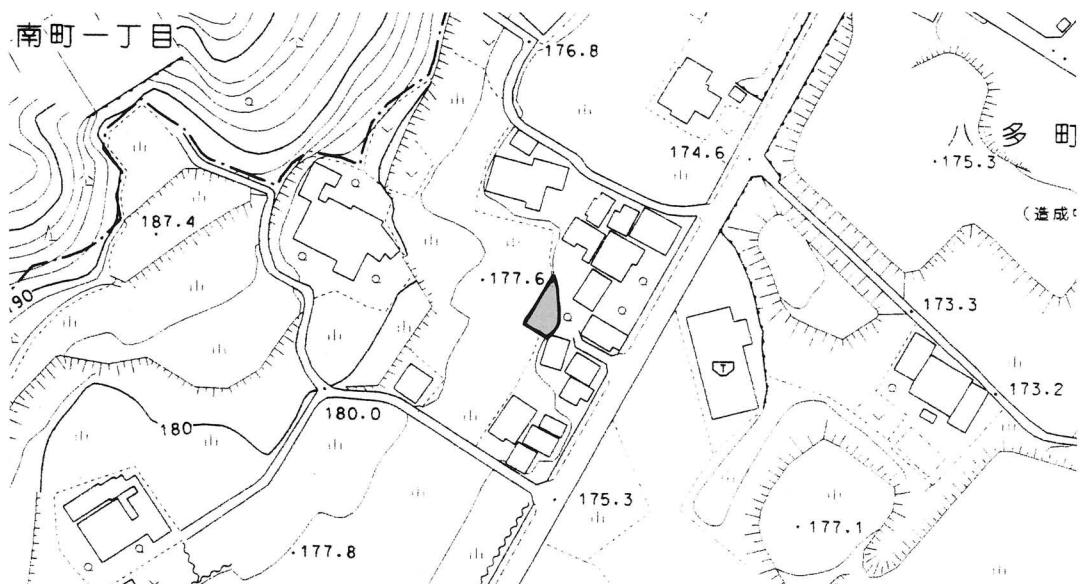
基本層序	今回の調査地は南から北に下る緩傾斜地に位置している。区画整理に伴う盛土の下層の旧耕土下には数枚の水田土壤が確認でき、その下層の4a層が鎌倉時代から室町時代を主体とする遺物を包含する土層である。この層の下面で遺構面を確認した。現地表面の標高はT.P.約180.7m、遺構面の標高はT.P.179.6m～179.7mでほぼ水平である。調査区の北隅付近は南側に比べて一段低くなっている、標高はT.P.約179.3mを測る。この段は直線的で、方位はW7°Nを指向する。
遺構	鎌倉時代～室町時代の遺構を同一面で確認した。遺構の密度は北西～南東方向の北トレンチ部分が相対的に低く、北東～南西方向の西トレンチが高い傾向にある。
SX02	北トレンチの東部で検出した遺構である。調査区外に延びるため正確な形状や規模については不明である。西辺は南北方位にほぼ合致し、南北1.8m以上、東西1.0m以上、深さ20cm以上を測る。土器が少量出土した。
SK01	調査地の北隅部分の一段低い平坦面で検出した土坑で、主軸方向はほぼ南北方位に合致する。南北約1.4m、東西約1.1m、深さ約55cmを測る。底面付近の埋土には炭粒子を含み、埋土中から出土した礫は焼け焦げている。鎌倉時代を中心とする土器が少量出土した。
焼土 (SX01)	西トレンチの一段高い部分、SP03・SP06よりも南側は柱穴・土坑・溝などの遺構が集中するとともに、遺構面が炭・焼土で覆われている。屋敷地が火災に遭ったものと推定される。この焼土層からは室町時代までの遺物が出土している。
SD01	西トレンチ南部で検出した溝である。幅約50cm、深さ約10cmを測る。埋土は遺構面を覆う焼土層であり、火災時に機能していたものと考えられる。木片が出土している。
SD03・04	西トレンチ南端で検出した浅い溝である。SD03はSD01とほぼ同じ幅をもち、SD01と直交する方向に流れる。 SD04はSD01と平行している可能性も考えられるが、調査区隅で一部を検出したに止まったため詳細は不明である。湧水もあり、SD03との切り合い関係も確認できていない。 SD03・04とともに板材と少量の土器が出土している。SD03は礫石が平坦面を上に向かた状態で出土している。
SK03	西トレンチ南部で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、径1.5m程度と推定されるが4分の3程度が調査区外に延びるため詳細は不明である。深さは約30cmを測る。土器が少量出土している。
柱穴	西トレンチで6基を検出した。SP04・05・06等は柱間距離や位置関係などから掘立柱建物等の一部である可能性が考えられる。SP06は柱痕部分から土師器小皿3枚が出土しており、そのうちの2枚は口を合わせた状態で出土している。柱抜き取り後の埋納物と考えられる。

3.まとめ 今回の調査では、西トレンチで遺構の集中と焼土層の存在を確認しており、両者はともに調査地の南側に続くと考えられる。以上から、今回の調査地の南側に室町時代に火災を受けた屋敷地が存在するものと考えられ、今回の調査で確認したのはその北端部に該当するものと推定される。

21. 中遺跡

1. はじめに

中遺跡は、神戸市北区八多町に所在する平安時代～中世にかけての複合遺跡で、八多川によって形成された河岸段丘及び沖積地上に立地している。昭和46年以来これまでに大小さまざまな規模の発掘調査が実施されており、平安時代～中世にかけての掘立柱建物等の遺構や、各時代の様々な遺物が検出されている。



2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査は残土置場を確保するため調査区を北・南に2分し、反転して実施した。北側より調査を開始し、北側部分の調査区を1区、南側部分の調査区を2区と呼称する。

基本層序

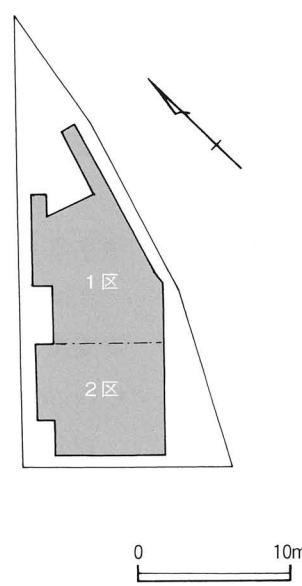
盛土・耕土の下層に何枚かの旧耕土が存在し、その下層に遺物包含層である灰褐色シルト質細砂が堆積している。遺物包含層は、西側ではほとんど存在せず、東側の旧地形が下がる部分に堆積しており、1区では最大でも15cm程度の厚さである。遺物包含層の下層の淡黄灰色～黄褐色シルト質細砂の上面で遺構面を検出した。ただし、西側の標高が高い側では、旧田圃面造成時の削平により現地表面直下で遺構面となっている。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝8条、鋤溝、ピット5基などである。

SB01

中世の掘立柱建物で、1区で1間×2間分を検出し、2区で1間×2間分を検出した。SB01全体での規模は東西2間、南北3間の総柱の建物となる。

柱間は、南北方向は28m、東西方向は21～22mを測る。 fig.97 調査範囲位置図



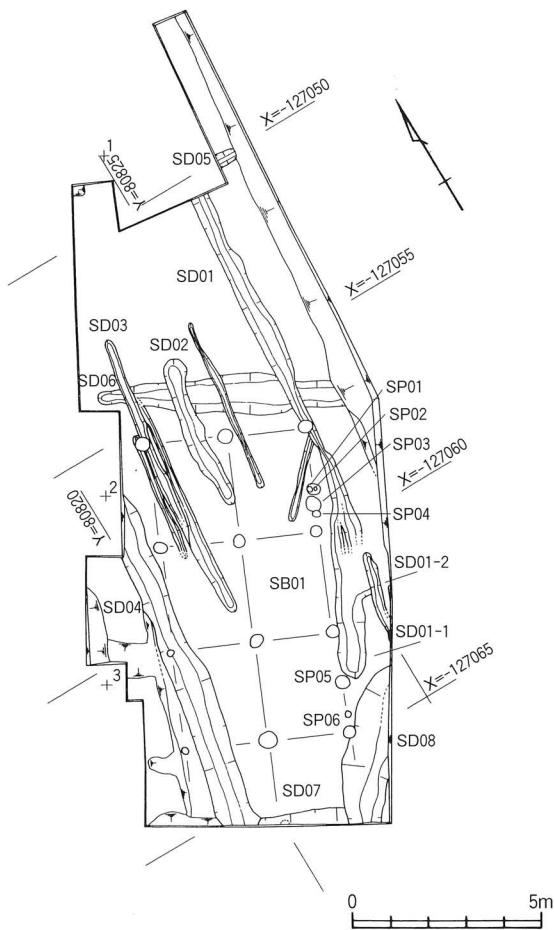


fig.98 調査区平面図



fig.99 1区全景



fig.100 2区全景

SD01～04 検出した6条の溝のうち、SD01～04はほぼ地形に沿って南北方向に平行に流れるもので、検出状況から、鋤溝のような耕作に伴う溝と考えられる。

SD05～07 SD05・06はSD01～04と異なり、東西方向に流れる。SD05はSD01と直行するような主軸方向をもち、やはり耕作に関わるものと考えられる。

SD08 2区南東隅で検出した溝状の落ち込みである。北側は屈曲して東側に延びるが大半が調査区外に延びるため、正確な規模等詳細は不明である。

ピット その他、SB01-P3・P6間でピット3基、P9・P12間でピットを1基検出した。建物と関連するものかどうかは現段階では明らかではない。

3. まとめ 今回の調査では、中世の掘立柱建物1棟等の遺構を検出した。当調査地は区画整理事業が実施される以前は圃場面が広がる地区であり、その田圃造成時の削平を受けてはいるものの、今回掘立柱建物等の遺構を検出したことは大きな成果といえよう。

掘立柱建物等の遺構は、今回の調査地の西側街路部分において実施された発掘調査のうち、当調査区の南西方向に位置する調査区においても確認されており、12～13世紀頃の建物とされている。今回検出したSB01の詳細な時期については今後の整理作業を待って検討を加えたいが、建物の主軸方向は概ね同様である。街路部分の調査で確認されていた中世の集落域が当調査地にも広がっていることを確認できたものと考えられる。

22. 大橋町東遺跡 第2次調査

1. はじめに

大橋町東遺跡は旧苅藻川西岸の沖積地に立地している。平成20年度に初めて発掘調査が実施され、弥生時代～中世の集落遺跡であることが確認されている。



fig.101
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、市街地再開発事業に伴って実施した。調査は便宜上、調査地を南北に2分割して実施した。南側の調査区を1区、北側の調査区を2区と呼称し、1区より調査を開始した。調査の結果、遺構面を2面確認し、第1遺構面では平安時代中期（10～11世紀）の掘立柱建物、井戸、溝等を、第2遺構面では弥生時代中期～古墳時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、溝等を検出した。

基本層序

現地表下40～50cmは盛土で、その下層に中世～現代の旧耕土が3層程度存在する。旧耕土は主として灰色系の砂質土または粘砂土で、各層厚さ約5～10cmを測る。旧耕土の下層に2層の遺物包含層が存在し、下層の遺物包含層（暗褐色粘砂土）上面が第1遺構面（現地表下60～70cm）、その下層上面が第2遺構面（現地表下80～90cm）となる。第1遺構面を覆う遺物包含層（暗灰色粘砂土）は、1区の西半部のみで確認しており、残存する層厚は約5cm程度である。

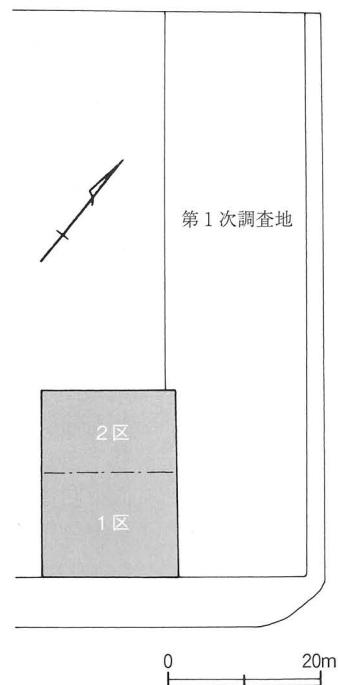


fig.102 調査範囲位置図

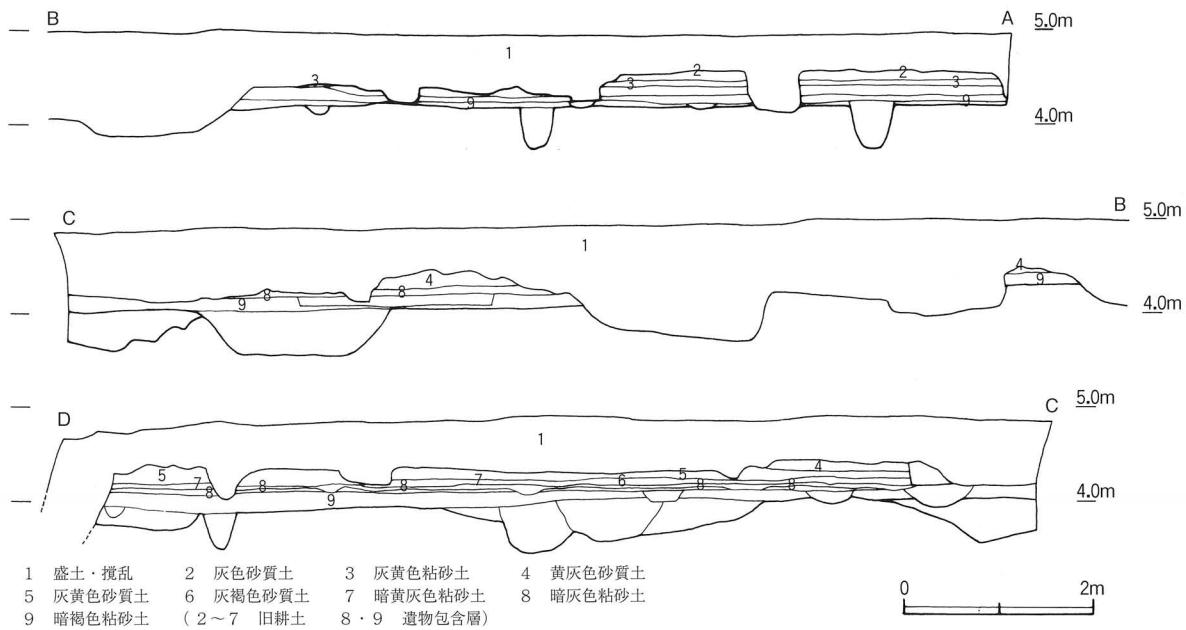


fig.103 調査区土層断面図

第1遺構面 掘立柱建物、井戸、溝等の遺構を確認した。

SB101 2区の北西部で掘立柱建物を2棟検出した。SB101は東西4間の規模で、南北の柱穴間隔が短いことから、南側底部分のみの検出と考えられる。

SB102 SB102は2×2間分の規模を検出しているが、西側は調査区外に延びる可能性が高いものと考えられる。

SE101 南西部で井戸を1基検出した。平面形はやや不整な円形、断面形が漏斗状を呈し、直径約1.9m、深さ約2.7mを測る。井戸側材などの出土はなく、構造は不明である。

溝 溝は数条検出しており、鋤溝と考えられる小規模なものから、幅約1mを測るものまでさまざまである。

その他、落ち込み(SX101~104ほか)や木棺墓の可能性のある遺構(ST101)なども検出しているが、詳細は不明である。

遺構内からの出土遺物は少なく、時期の判明するものについては、現段階ではSE101より11世紀初頭～前半頃の黒色土器碗が出土していることや、SD102より10世紀後半～11世紀初頭頃の土師器羽釜が出土していることを確認している程度である。



fig.104 (左)
1区
第1遺構面全景



fig.105 (右)
2区
第1遺構面全景

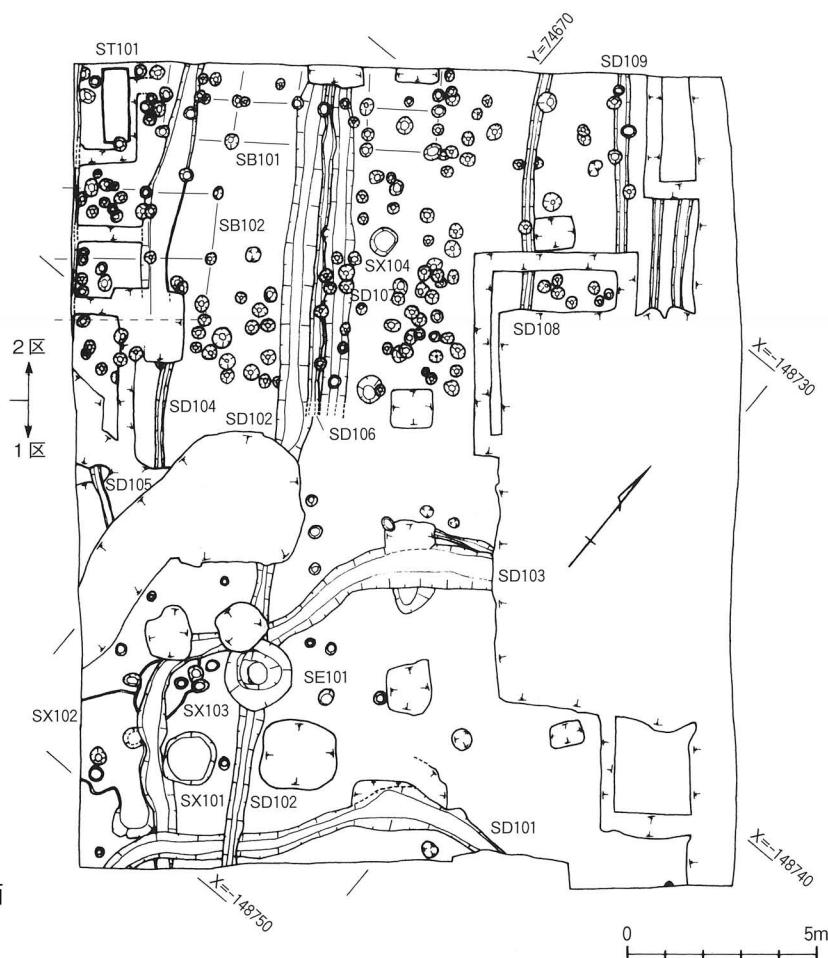


fig.106
第1遺構面
平面図

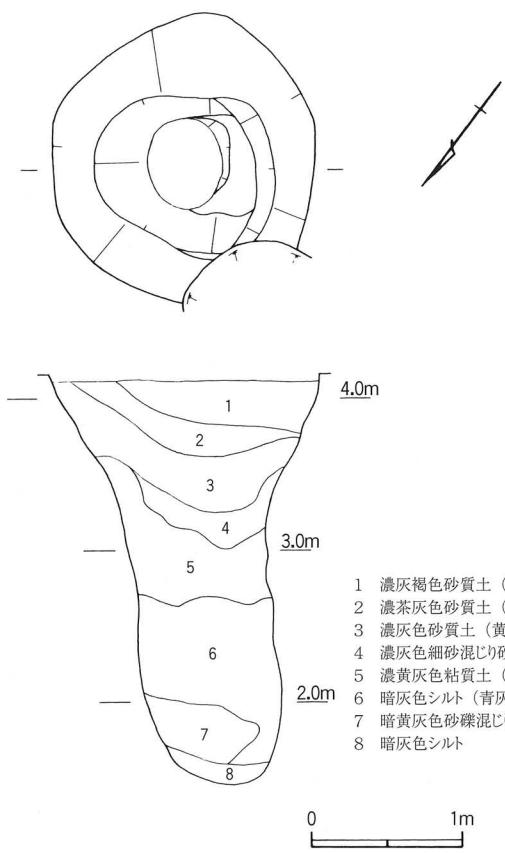


fig.108 SE101土層断面

fig.107 SE101平・断面図

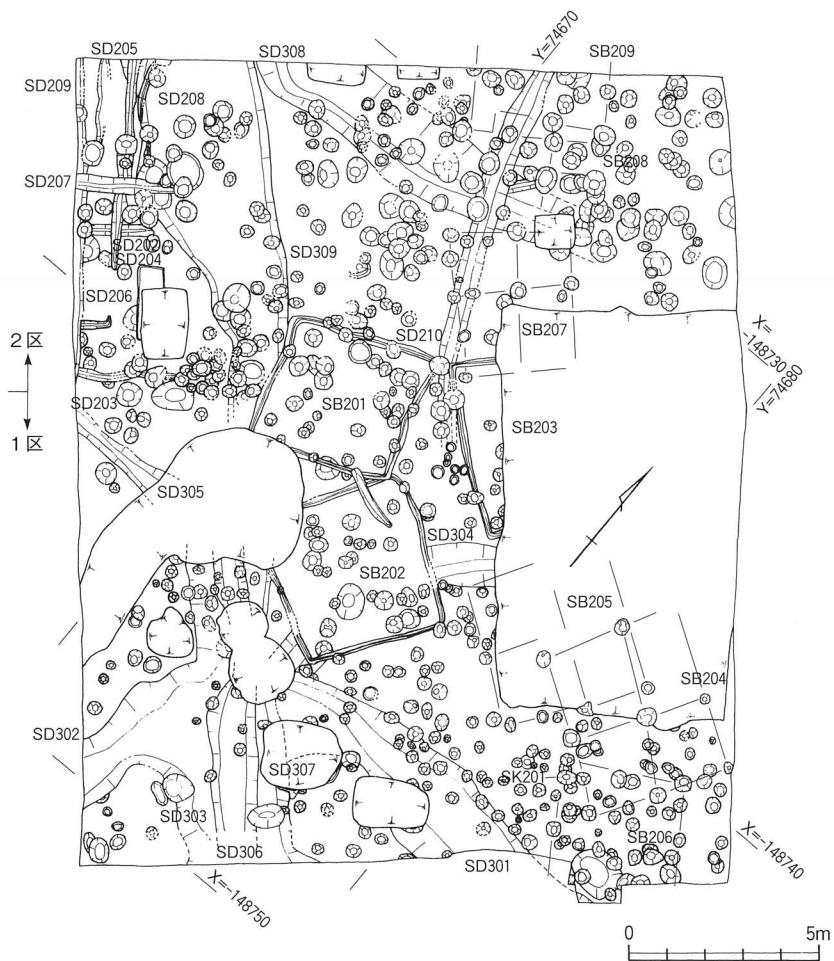


fig.109
第2遺構面
平面図

第2遺構面 堪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝等の遺構を確認した。

SB201～ 中央部で堪穴住居を3棟検出した。いずれも一辺約4～5mを測る、平面形が方形を呈するものである。出土遺物は土師器・須恵器の小片のみで、時期等の詳細は不明である。
SB203 SB203は、搅乱により半分以上が失われており構造は不明であるが、SB201・202は主柱穴は4本柱で、カマドを持たないタイプのものである。



fig.110 1区第2遺構面全景

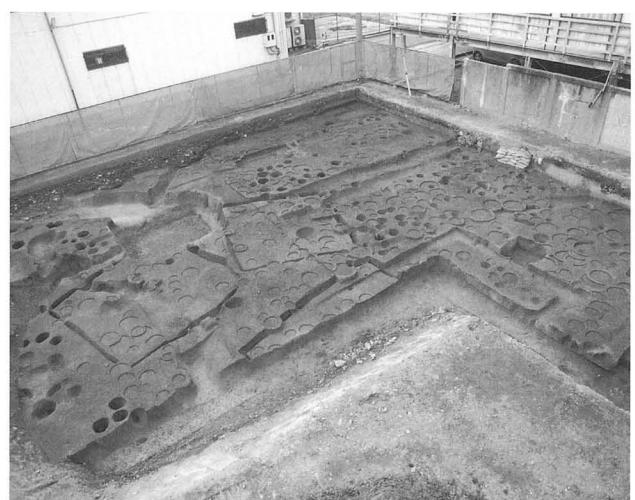


fig.111 2区第2遺構面全景

- SB204～掘立柱建物は6棟確認している。いずれも2×2間もしくは3間程度の小規模なものである。
 SB209 柱穴内からの出土遺物は少なく、土師器・須恵器の小片を数点確認した程度である。
- SK201 SB204・206の西側で検出した小規模な土坑で、長径約50cm、短径約40cm、深さ約15cmを測る。土坑内からは、須恵器壺が2点、土師器壺が1点のほか、土師器・須恵器の小片に混じって、製塩土器の小片が出土している。
- SD201～いずれも幅約30～70cmの小規模な溝で、鋤溝も含む可能性が高い。出土遺物は土師器・須恵器の小片のみである。
- SD210 その他、浅い溝状遺構や落ち込み等を確認しているが、出土遺物も少なく、詳細は不明である。
- 第2遺構面における出土遺物は、遺構面を覆う遺物包含層を含めて、弥生土器、土師器、須恵器等の小片が大半で、古墳時代中期～後期（5世紀後半～6世紀前半）に属するものが多くみられる。まとまって遺物が出土したのはSK201で、須恵器壺の特徴から、概ね5世紀末頃の時期の遺構と推測される。
- SD301～第2遺構面において、弥生時代の遺構も確認している。当該時期の遺構と考えられるものはSD301～309で、いずれも幅約0.5～3.5m、深さ約50～70cmを測る比較的大規模な溝である。埋土は主として淡茶色系の砂質土もしくは細～粗砂で、古墳時代の溝状遺構であるSD201～210の埋土とは大きく異なる。埋土中からは、弥生時代中期の土器小片が数点出土している。



fig.112 SB201～203全景

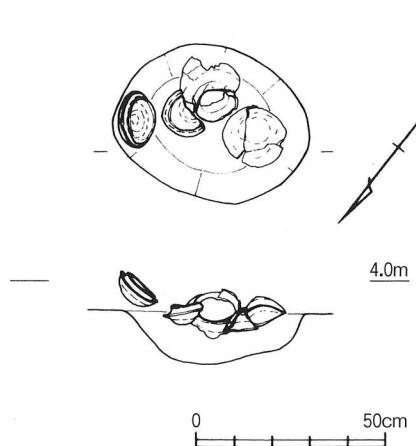


fig.113 SK201遺物出土状況平・断面図



fig.114 SK201遺物出土状況

3. まとめ

今回の調査では2面の遺構面を確認し、第1遺構面において概ね平安時代中期（10世紀後半～11世紀前半）、第2遺構面においては弥生時代中期～古墳時代後期の遺構を検出した。以上の状況は、当遺跡の北側に所在する神楽遺跡における状況に類似しており、両遺跡の関連性が窺える。

今回の調査で検出遺構については、数量的には第2遺構面の方が多く検出しており、堅穴住居等数棟を含む建物遺構を確認している。堅穴住居からの出土遺物は土師器の小片が大半で、SB203のみ須恵器の小片を確認した。詳細は不明であるが、SK201出土の須恵器（5世紀末・TK23型式併行）に近い時期のものと推測される。同遺構面の弥生土器出土の溝以外のその他遺構についても、概ね古墳時代中期～後期（5世紀後半～6世紀前半）の範疇と考えられる。

また、第1・2遺構面とも、調査地の北あるいは西側に遺構の拡がりが想定され、今後の調査において、多くの成果が期待できるものと考えられる。

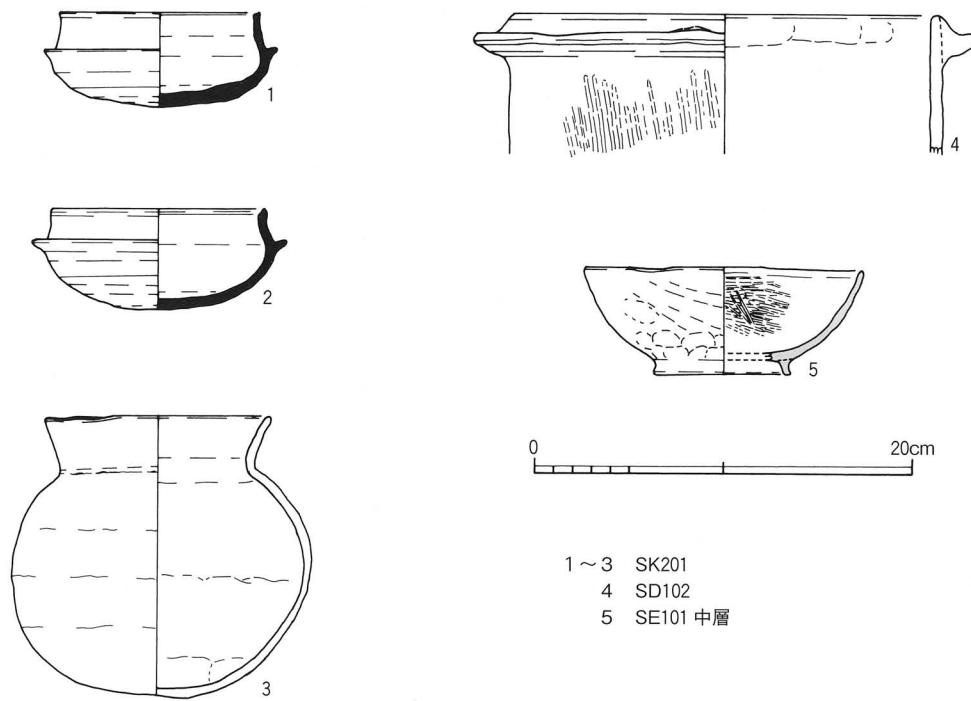


fig.115
出土遺物実測図

23. 二葉町遺跡 第22次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は妙法寺川や旧辻藻川に挟まれた沖積地に立地している。これまでに20回以上の発掘調査を実施してきており、縄文時代～江戸時代の遺構・遺物が確認されている。特に平安時代～鎌倉時代において大規模な集落が営まれていたことが明らかになっている。

なお、当調査については平成21年度に『二葉町遺跡第22次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

fig.116
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は、市街地再開発に伴うもので、搅乱により削平されている箇所が目立つものの、掘立柱建物2棟、井戸4基のほか、溝、土坑、ピット、落ち込み等を確認した。

基本層序

上層より盛土、3～4層に分層可能な中世～現代の旧耕土が堆積し、その下層に遺物包含層が存在する。遺物包含層は暗褐色粘砂土あるいは砂質土で、層厚約5cmである。遺物包含層を除去した段階で遺構面を検出した。遺構面までの深度は箇所によって差異がみられるが、現地表下80～90cmである。遺構面基盤層は、調査地の大半が灰茶色系の粘砂土あるいは砂質シルトであるが、東南部は灰茶色または灰褐色系の礫混じりの砂質土である。

掘立柱建物 2棟確認した。SB326は東西4間（約8.7m）×南北4間（約8.7m）以上の総柱の建物と推定されるが、搅乱や削平によって失われた柱穴もある。柱穴規模は径約20～40cm、深さ約25～65cmを測り、柱間隔は2.1～2.3mである。また、柱痕（柱材）が遺存していた柱穴もある。柱穴内から12世紀代のものと考えられる土師器、須恵器の小片が出土した。

SB327は東西4間（約8.2m）×南北不詳の建物と推定される。遺存する柱穴は、径約25～35cm、深さ約30～35cmを測り、柱間隔はおよそ1.9～2.1mである。調査区内では、北端の柱列と考えられる一列のみを検出しており、調査地南側に延びるものと推測される。柱穴内より土師器の小片が出土しているものの、時期等は不明である。

井戸

4基確認した。SE315は掘形の平面形がやや不整な円形、断面形が漏斗状を呈する。規模は検出面での直径が約2.3m、深さ約3.2mを測る。出土遺物は土師器、須恵器が多く、11世紀末～12世紀中頃のものと推測され、12世紀前半のものが多い。

SE316は掘形の一部が搅乱を受けているものの、平面形はほぼ円形と考えられ、断面形は漏斗状を呈する。下半部の狭隘となる部分の平面形は、正方形に近い隅丸方形を呈する。

規模は直径が約2.0m、深さ約2.5mを測る。SE315・SE316については、井戸側材や水溜材が確認されず、構造については不明である。出土遺物は少なく、土師器、須恵器が数点確認された程度で、時期の特定できるものは、およそ11世紀後半頃に属する。

SE317・SE318は、調査地の南端部で並んで検出した素掘りと考えられる井戸で、南半部を搅乱により、失われている。SE317は掘形の平面形が不整な円形、断面形が扁平な漏斗状を呈すると考えられ、残存する部分での規模は、径約1.7m、深さ約1.1mを測る。出土遺物は12世紀代のものが中心で、特に12世紀前半～中頃のものが多い。

SE318は掘形の平面形が長方形状で、井戸本体部分においては、不整な橢円形状を呈し、断面形が扁平な漏斗状を呈する。残存する部分での規模は、井戸本体部分の径が約2.7m、深さ約1.3mを測る。また、隣接するSE317と切り合い関係にあり、SE317に切られるかたちで検出している。出土遺物は、土師器皿、須恵器碗が中心で、12世紀初頭～中頃に属するものと考えられる。

溝 SD313～315は鋤溝で、SD311・312・316～318は集落に伴う溝と考えられる。SD311から11世紀後半頃、SD318から12世紀前半～中頃に属する土師器小皿が出土している。

3. まとめ

今回の調査では、掘立柱建物や井戸等の遺構を検出した。今回の調査成果を受けて二葉町遺跡の様相がかなり明確になってきたものと考えられる。当遺跡においては、特に11世紀中頃～13世紀前半に属する遺構・遺物が豊富で、当該時期において大規模な集落が形成されていたことが窺える。また、地域的にも今回の調査地の所在する久保6地区と南に隣接する二葉6（二葉町6丁目）地区において多くの遺構が確認されており、両地区が集落の中核であることが認識できる。今回の調査では、このような集落の一端と考えられる遺構とそれに伴う遺物を確認し、さらなる集落の拡がりと様相が明らかとなった。

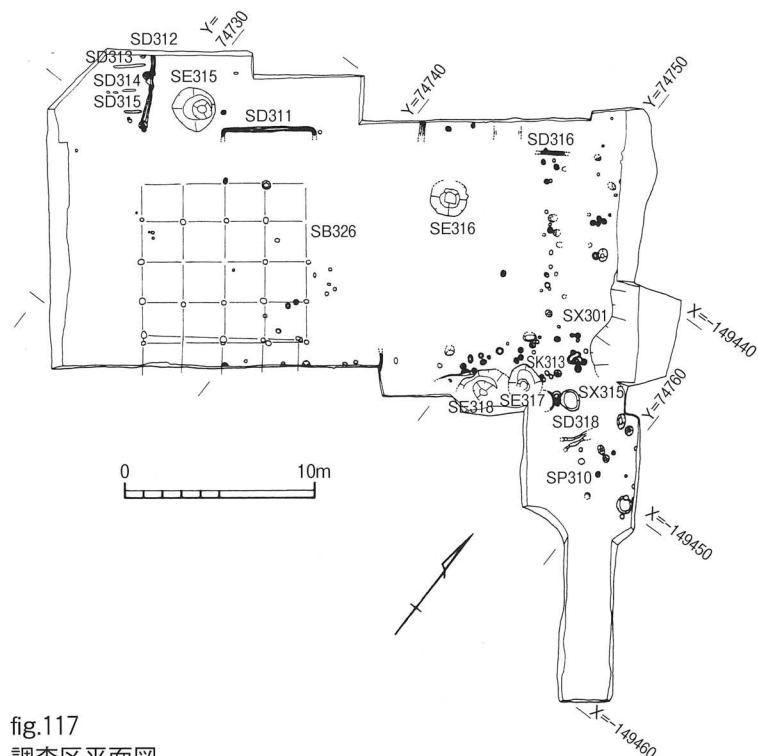


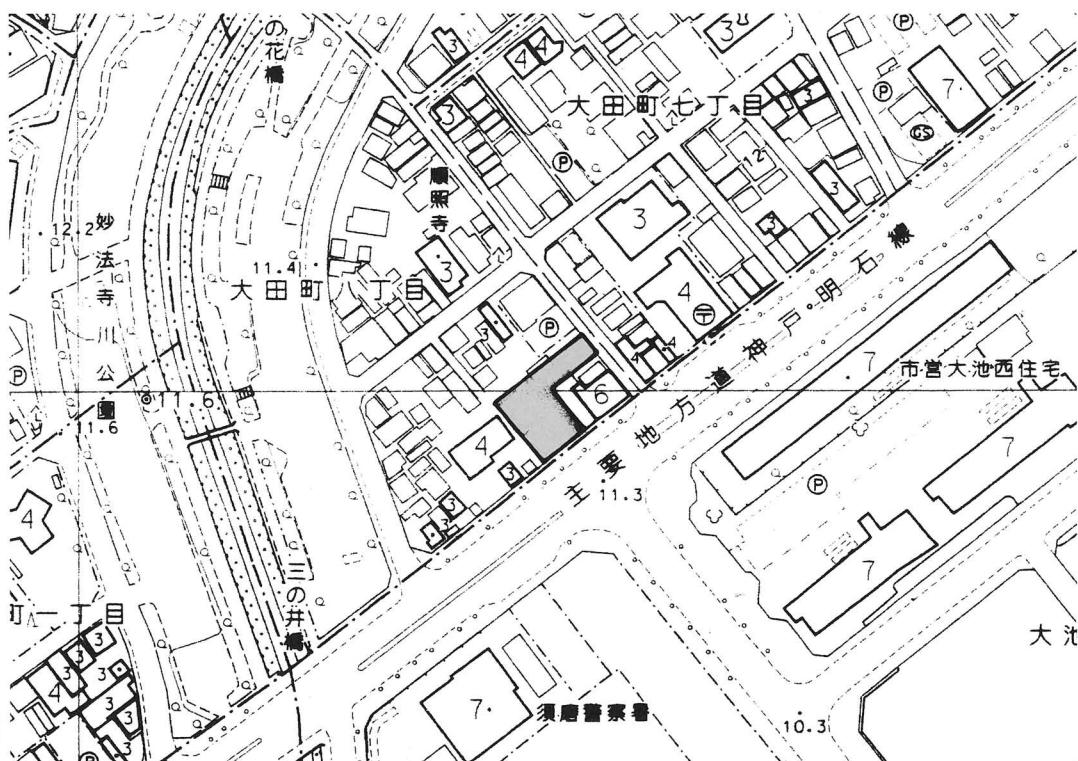
fig.117
調査区平面図

24. 大田町遺跡 第16次調査

1. はじめに

大田町遺跡は、妙法寺川流域の沖積地上に立地する遺跡である。これまでの調査では、弥生時代前期～中期、古墳時代後期、奈良時代～平安時代を主とする集落が確認されている。特に奈良時代～平安時代にかけては、遺物では「荒田郡」の銘が認められる須恵器や、多量の緑釉陶器、灰釉陶器等が出土し、遺構では掘形の平面形が方形を呈する柱穴から構成される掘立柱建物が検出される等、官衙的性格をもつ遺跡として、『須磨駅家』の推定地としても知られている。

fig.118
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。今回の調査地は、旧山陽道としての可能性が推定されている現況道路(県道神戸明石線)の北側に接する地区に位置している。

基本層序

上層より、搅乱及び盛土、灰色砂質土(旧耕土)、淡緑灰色砂質土(洪水砂)、暗灰色砂混じりシルト(第1遺構面基盤層)、暗灰色砂混じりシルト(暗色が強い、第2遺構面基盤層)、暗灰色砂質土(土師器、弥生土器を含む、河道堆積)が堆積している。

今回検出した第1遺構面の標高は、T.P.約9.9mで、第2遺構面の標高は、T.P.約9.75mである。

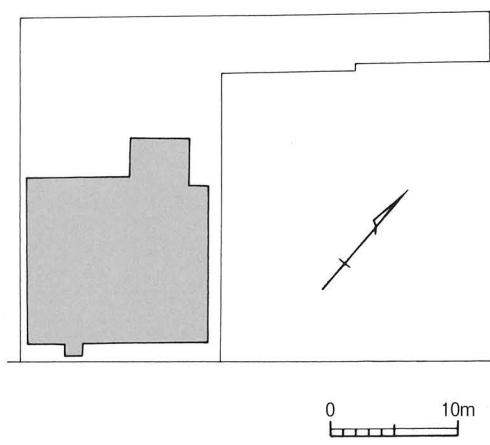


fig.119 調査範囲位置図

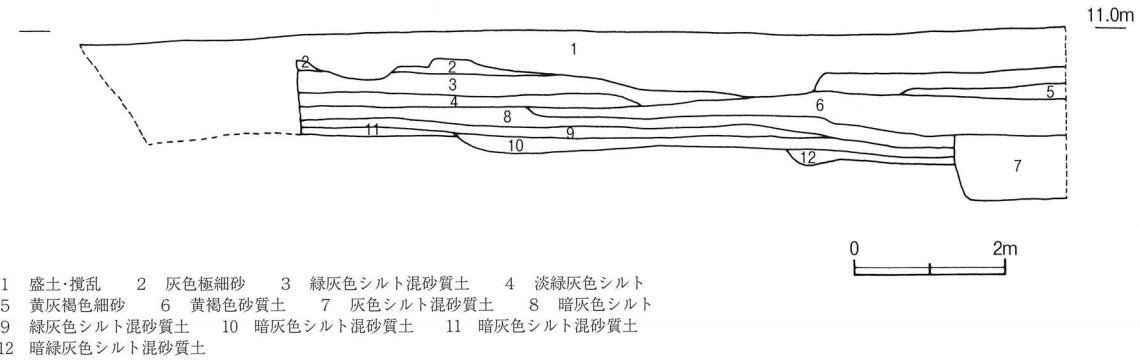


fig.120 調査区南壁土層断面図

第1遺構面 鋤溝、溝、井戸を検出している。後述するように、鋤溝からは奈良時代～平安時代の須恵器、土師器が出土しているが、溝状落ち込みや井戸については詳細な時期は不明である。

鋤溝群 県道神戸明石線に直交する方向に伸びる鋤溝を多数検出している。幅約30cm程度の鋤溝が多く、奈良時代～平安時代頃の須恵器と土師器が出土している。

SD101 調査区南端で確認した、東西方向に伸びる溝状の落ち込みである。北肩部分のみ検出している。一部拡張して調査を実施したが、南肩部分は確認できていない。

南北の幅約1.5m以上、深さ約35cmを測る。シルト混じり砂質土が堆積し、滞水していた状況も認められる。検出した位置は調査区の南端で、山陽道の可能性が指摘されている現県道神戸明石線の北側で、同県道に平行する。山陽道の側溝としての可能性が考えられる遺構であるが、遺物が出土していないため時期が明確ではなく、今回の調査結果のみでは山陽道の側溝部分に該当するかどうかは断定できない。

SE101 調査区南東隅で検出した、平面形が円形を呈するものと考えられる素掘りの井戸である。調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、調査区内で検出した規模は、井戸部分の直径1.0m、深さ90cm、掘形の径は1.4m、深さ90cmを測る。

SD101廃絶後に構築されている。須恵器と土師器が出土しているが、細片のため時期については不明である。



fig.121 SD101全景



fig.122 SE101全景

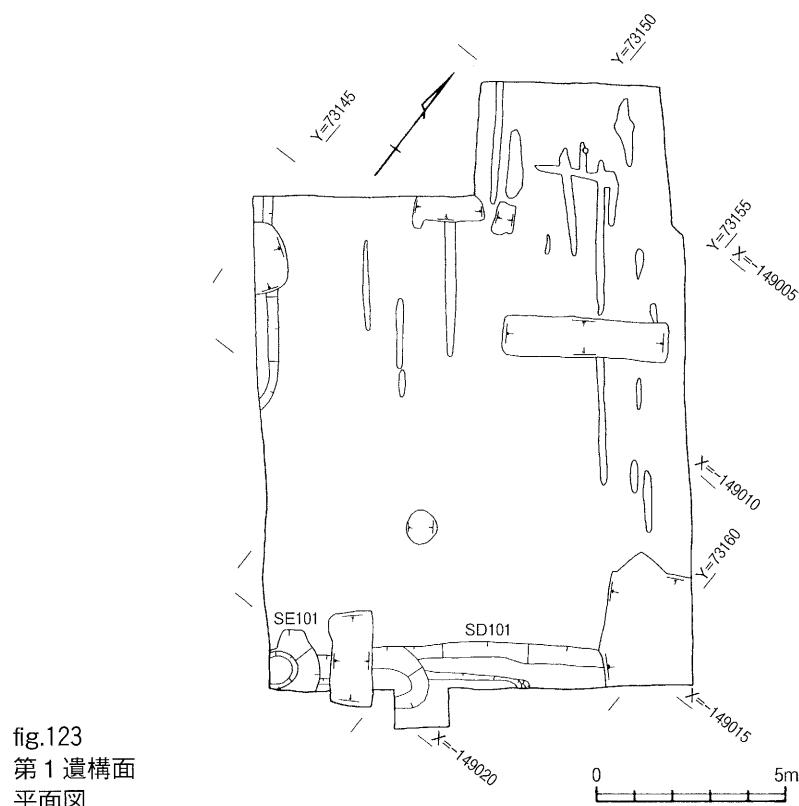


fig.123
第1遺構面
平面図

第2遺構面 溝1条を検出した。

SD201 調査区南半で検出した、幅40cm、深さ20cmを測る溝である。北東～南西方向に流れている。
須恵器と土師器が少量出土しているが、時期については不明である。

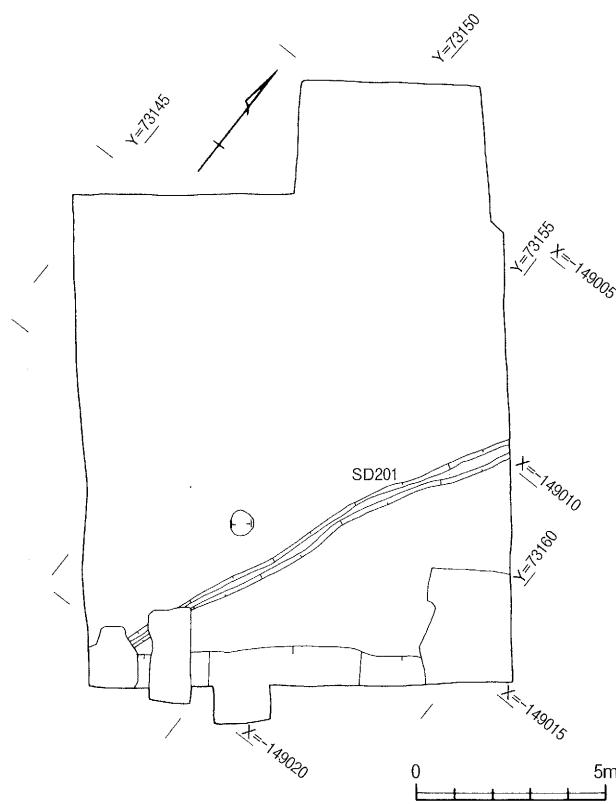


fig.124
第2遺構面
平面図

3. まとめ

今回の調査では2面の遺構面を確認した。

第1遺構面では、調査区南端で県道神戸明石線に平行する溝状落ち込みを検出した。同県道は周辺地での調査成果から山陽道に該当する可能性が高いものと考えられており、今回の調査で検出したSD101のように県道のすぐ北側で、県道に平行する溝状の落ち込みが数地点で確認されており、いずれも山陽道の北側側溝としての可能性が指摘されている。今回検出したSD101からは出土遺物がなく所属時期について不明であることから、山陽道側溝としての性格をもつものとしての断定には至っていない。遺構の規模についても幅が1.5m以上を測るものであり、山陽道の側溝として妥当な規模かどうかについても今後の検討課題の一つである。

以上のように、今回検出したSD101は、現段階では山陽道の側溝として断定できるものではないが、先述のとおり同様な溝状の落ち込みは県道神戸明石線の北側に位置する数地点の調査地で確認されており、東西に長い距離にわたって連続する可能性が考えられる。以上の状況を積極的に評価すればやはり山陽道の側溝としての可能性は高いものと考えられ、今後の周辺地での調査成果を鑑みながら考えていく必要があろう。



fig.125 第1遺構面全景



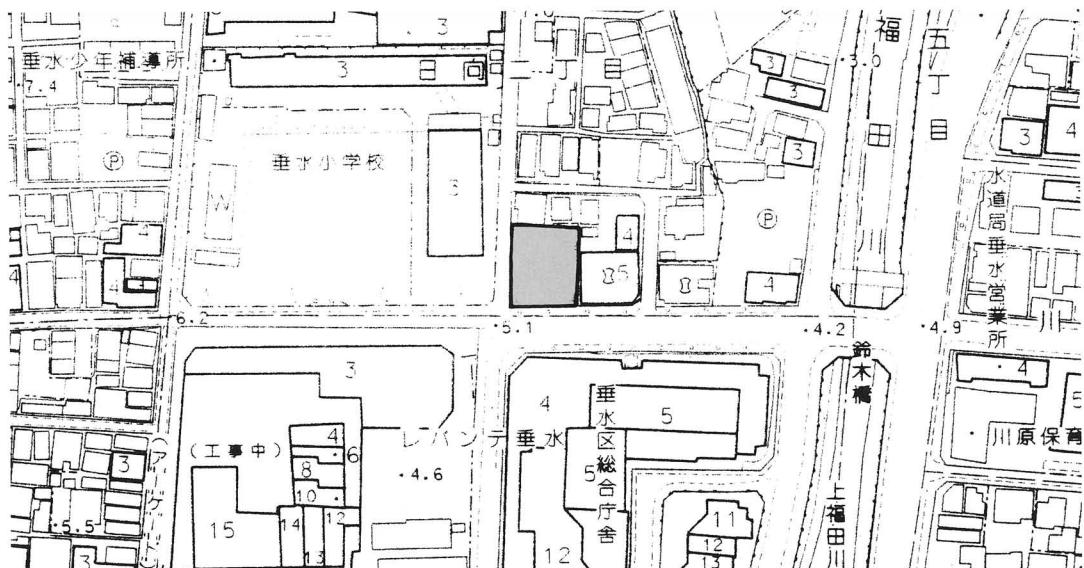
fig.126 第2遺構面全景

25. 垂水・日向遺跡 第36次調査

1. はじめに

垂水・日向遺跡は、福田川によって形成された沖積地に立地する遺跡である。これまでに30回以上の発掘調査が実施されており、縄文時代中期～中世の遺構・遺物が確認されている。また、縄文時代においては早期～前期に相当する層に人間の足跡が検出されている。

fig.127
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は、商業ビル建設に伴って実施したものである。調査の便宜上、対象範囲を南北に2分割し、順次調査を実施した。北半部の調査区をⅠ区、南半部の調査区をⅡ区と呼称し、Ⅰ区より調査に着手した。

基本層序

上層より、盛土、旧耕土が堆積しており、その下層のT.P.5.1m付近に一部褐色系粘土が存在する。この土層は調査区中央付近に流土状に堆積している。この層の下層で遺構面を確認した。遺構面の基盤層は、北半部では灰色系粘土、南半部では灰黄色粘土である。この2層の基盤層は、南半部の灰黄色粘土の方が新しい堆積であり、元来急峻な傾斜地であった当調査地において、13世紀頃南半部に粘土層が堆積したことにより緩斜面が形成され生活面として利用されるようになったことが推察される。

調査の結果、掘立柱建物1棟、溝2条、ピット数基を検出した。

SD01

調査区北半部で検出した溝で、幅3.5m、深さ70cm以上を測る。断面形はV字状を呈する。調査区内を東西方向に流れるが、西部で北側に屈曲している。断面形や堆積状況から人為的に掘削された溝と考えられるが、調査区外に延びているため全体の状況については不明である。深さについても約70cm程度まで確認できたが、工事影響深度まで掘削を止めたため、本来の深さについては不明である。

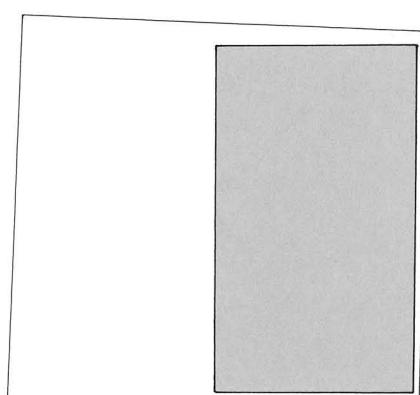


fig.128
調査範囲位置図

SD01より北側の地区に存在する何かを区画する性格のものである可能性も考えられるが、詳細は不明である。

12世紀後半～13世紀初頭頃の須恵器碗等が出土している。

SD02 SD01の北側で検出した溝である。SD01に並走して流れるが、西側は搅乱により失われており、また東側は調査区外に延びるため、本来の規模は不明である。幅0.6m、深さ10cm程度を測る。出土遺物はほとんどなく時期については不明であるが、中世の遺構である可能性が考えられる。

SH01 調査区南部で柱穴列を確認した。南北2間、東西1間分を検出し、掘立柱建物を構成するものと考えられる。柱間距離等から東側は調査区外に延びるものと考えられる。柱穴からはほとんど出土遺物が出土していないため正確な時期については不明であるが、柱穴の埋土の状況からは上記の溝と大差ない時期のものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、掘立柱建物や溝などの遺構を確認した。SD01からは先述のとおり12世紀後半～13世紀初頭頃の遺物が出土しており、埋土の同質性等から他の遺構についても同様な時期のものである可能性も考えられる。ただし、基本層序において述べたとおり、北側と南側では遺構面の基盤となる土層が異なり、南側の基盤層は、北側の基盤層よりも新しい時期に堆積したものと考えられるため、掘立柱建物（SH01）については溝（SD01、02）よりも新しい時期のものである可能性も考えられる。この点については南側の基盤層の下層においてSH01よりも古く、SD01、02と同時期の遺構の存在の有無を確認する必要があるが、今回の調査では工事影響深度との関係から確認には至らず、今後の周辺地での調査成果に委ねることとなった。

また、遺構面の上部に堆積する褐色系粘土には弥生時代あるいは古墳時代初頭の遺物が含まれていた。下層の中世遺構面との間に時間的な逆転がみられるため、2次堆積したものと考えられる。この場合、当調査地の北側に弥生時代あるいは古墳時代初頭の遺跡が存在し、遺物包含層あるいは遺構面の基盤層が流土となって当調査区内に堆積した可能性が考えられる。この点についても今後北側隣接地周辺での調査成果を待って再度検討したい。

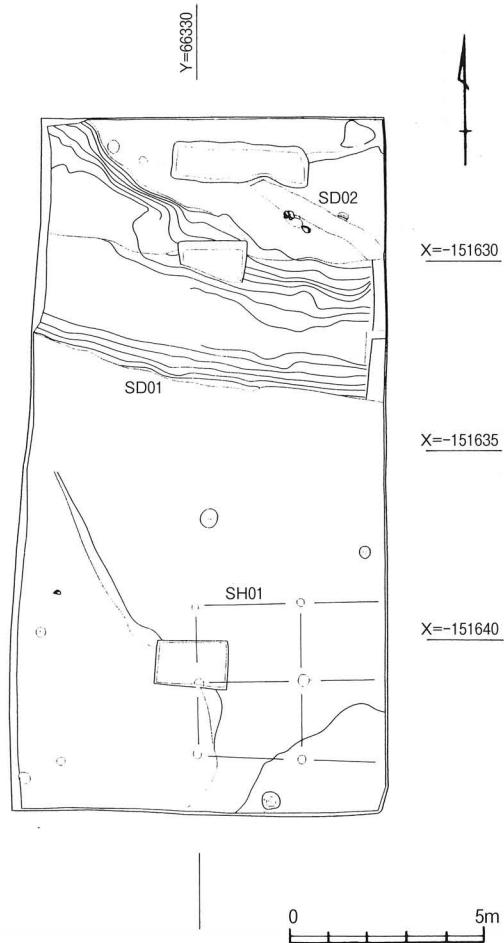


fig.129 調査区平面図

26. 伊川谷町潤和 所在確認調査

1. はじめに

今回の試掘調査対象範囲は、平成15年度に都市計画道路出合新方線建設工事に先立って実施された馬掛原遺跡第1次発掘調査地の東側の畠地約10,390m²である。

第1次調査成果をみると馬掛原遺跡では遺物包含層が存在せず、耕土直下が遺構面となっている。遺物は遺構内からの出土に限られ、遺構も削平を受けているため浅く検出されるという特徴をもっている。出土した遺構は、溝および掘立柱建物で、掘形内の埋土から弥生時代～古墳時代の土器が出土していることから、馬掛原遺跡は弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落もしくは墓域といった性格をもつ遺構と考えられてきた。

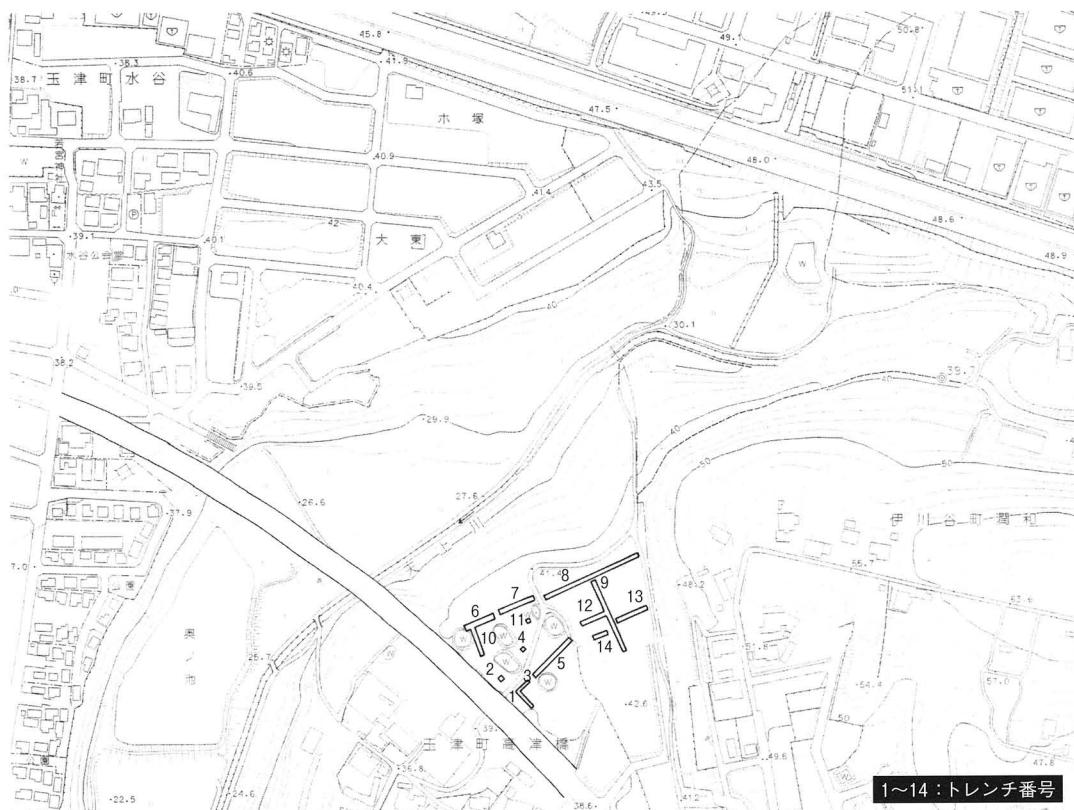


fig.130
調査位置図
1 : 5,000

2. 調査の概要

今回の調査は、第1次発掘調査地と同様、開墾のため削平をうけた丘陵に広がる畠地において試掘坑を設定し、遺跡の広がりを確認する調査を実施した。

調査対象範囲は、現状で中央に段があり、東側が高く、西側が低くなっている。西側の一段低い畠地においては「L」字形もしくは「T」字形に幅2～3mの試掘溝、そのうち小区画の畠地には3×3mの試掘坑を設定した。東側の一段高い畠地には、「キ」字形に幅3mの試掘溝を設定し、遺跡の存否確認に遗漏のないように努めた。その結果、西側低位の畠地に9ヶ所(No.1～7、10、11トレンチ)、東側高位の畠地に5ヶ所(No.8、9、12～14トレンチ)の試掘溝・坑を設定した。

No.1 トレンチ 調査区南端に設定した、幅2.5m、長さ16.0mの南北方向のトレンチである。耕土直下20～40cmに淡黄灰色粘性砂質土及び黄灰色砂質土の地山がみられる。この淡黄灰色粘性砂質土上面で淡黄灰色砂質土を埋土とするピット1基・落ち込み2ヶ所を検出した。

No.2 トレンチ No.1 トレンチの北側に設定した、 3×3 mの試掘坑である。耕土直下40cmに厚さ10～20cm前後の淡黄灰色粘性砂質土、その下層に黄灰色砂質粘土がみられ、黄灰色砂質粘土上面において淡灰黄色砂質土を埋土とするピット3基を検出した。

No.3 トレンチ 調査区南端部、No.1 トレンチの北端から東に延びる位置に設定した、幅3.0m、長さ10.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下20～30cmに淡黄灰色粘性砂質土及び黄灰色砂質粘土の地山がみられる。この黄灰色粘性砂質土上面で淡灰黄色砂質土を埋土とするピット1基・落ち込み2ヶ所を検出した。

No.4 トレンチ No.2 トレンチの東側に設定した、 3×3 mの試掘坑である。耕土直下40cmに厚さ10～20cm前後の淡黄灰色粘性砂質土、その下層に黄灰色砂質粘土がみられ、調査区北辺部で黄灰色砂質粘土上面において、淡灰黄色砂質土を埋土とする深さ20cm前後のピット2基を検出した。

No.5 トレンチ No.3 トレンチの東側に設定した、幅3.0m、長さ34.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下20～30cmに厚さ5～10cmの淡黄灰色粘性砂質土がみられ、その下層は黄灰色砂質粘土の地山がみられる。この黄灰色砂質粘土上面に淡灰黄色砂質土を埋土とするピット7基・落ち込み3ヶ所を検出した。

No.6 トレンチ 調査区北端に設定した、幅3.0m、長さ21.0mの東西トレンチである。耕土直下20～30cmに淡黄灰色粘性砂質土及び黄灰色砂質粘土の地山がみられる。この淡黄灰色粘性砂質土上面で淡灰黄色砂質土（灰黒色土混じり）を埋土とするピット16基を検出した。遺構上面から弥生土器もしくは土師器が出土している。

No.7 トレンチ No.6 トレンチの東側に設定した、幅3.0m、長さ25.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下20～30cmに厚さ3cm前後の淡黄灰色粘性砂質土がみられ、その下層は黄灰色砂質粘土の地山となる。この黄灰色砂質粘土上面で淡灰黄色砂質土を埋土とするピット6基を検出した。

No.8 トレンチ No.7 トレンチの東側高位の畠地に設定した、幅3.0m、長さ66.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下は造成土によって埋め立てられ、一部で旧耕土を残すが、造成現表土下90cmで厚さ5～10cmの淡黄灰色粘性砂質土がみられ、その下層は黄灰色砂質粘土の地山がみられる。この黄灰色砂質粘土上面では浅いピット状の落ち込みが1基みられるが、近現代の杭痕跡と思われる。なお、試掘坑東端は現代の溜池によって壊滅している。

No.9 トレンチ No.8 トレンチ中央に直交して設定した、幅3.0m、長さ50.0mの南北方向のトレンチである。現耕土直下は造成土によって埋め立てられ、試掘坑北側の一部で旧耕土を残し、現表土下90cmで厚さ5～10cm淡黄灰色粘性砂質土がみられる。調査区南側は現表土下150cmまで造成土で埋め立てられ黄灰色砂質粘土の地山がみられる。これら淡黄灰色粘性砂質土・黄灰色砂質粘土上面においてはピット等の遺構は検出していない。

No.10 トレンチ No.6 トレンチ西部より直交して設定した、幅3.0m、長さ21.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下20～30cmに淡黄灰色粘性砂質土及び黄灰色砂質粘土の地山がみられる。この淡黄灰色粘性砂質土上面に淡灰黄色砂質土（灰黒色土混じり）を埋土とするピット15基、落ち込み3ヶ所を検出した。検出したピット上面より弥生土器もしくは土師器片が出土している。なお試掘坑の中央西側は現代の溜池となっており壊滅している。

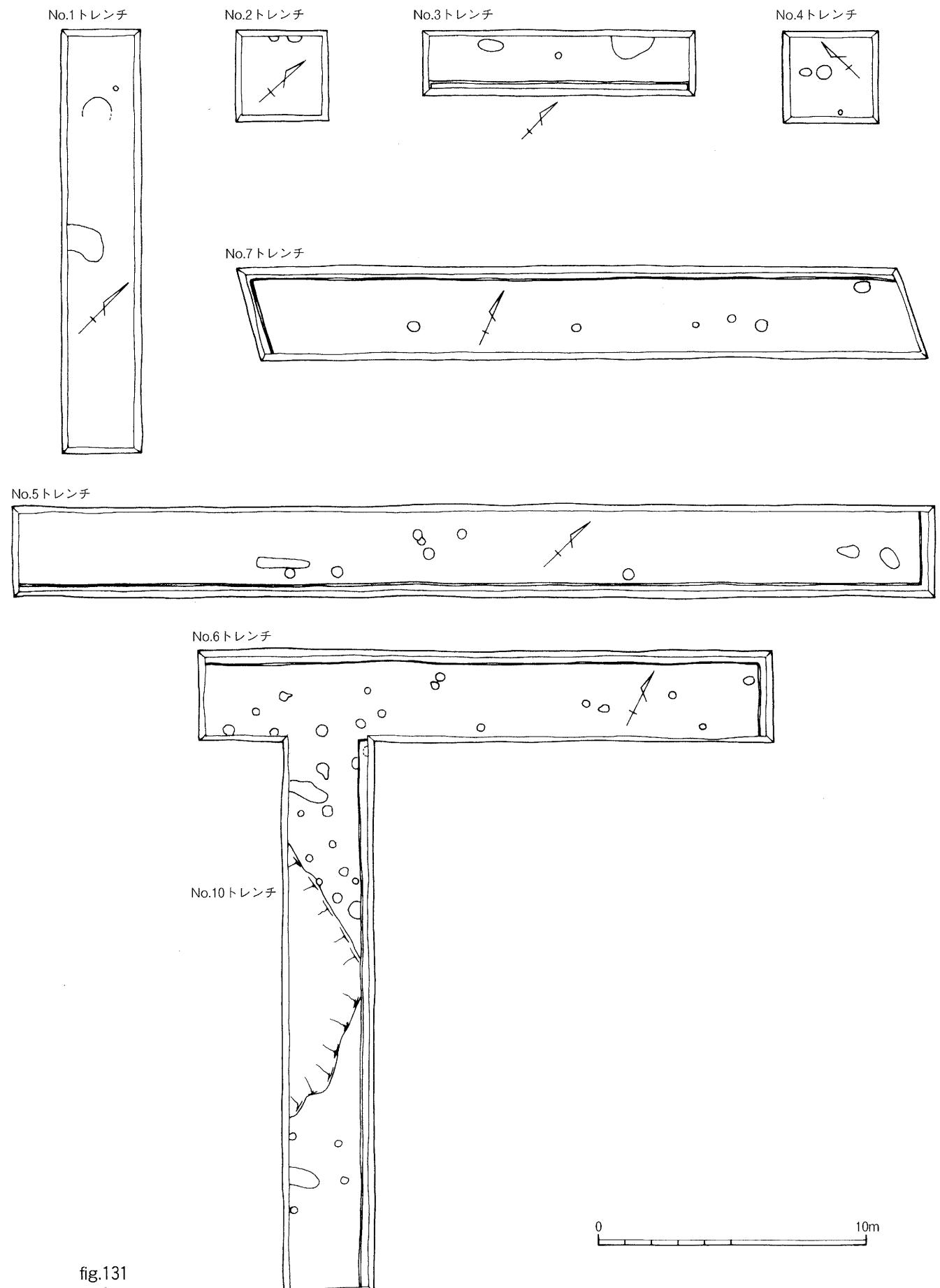


fig.131
調査区平面図

No.11トレンチ No.7トレンチの南側に設定した、3m×3mの試掘坑である。耕土直下20~40cmに厚さ10~20cm前後の淡黄灰色粘性砂質土、その下層に黄灰色砂質粘土がみられ、淡黄灰色粘性砂質土および黄灰色砂質粘土上面においてピット等の遺構は検出していない。

No.12トレンチ No.9トレンチ中央西側に直交して設定した、幅3.0m、長さ17.0mの東西方向のトレンチである。現耕土直下は造成土によって埋め立てられ、試掘坑西側の一部で旧耕土を残し、現表土下深さ140cmで厚さ5~10cm淡黄灰色粘性砂質土がみられる。その下層は黄灰色砂質粘土となる。これら淡黄灰色粘性砂質土・黄灰色砂質粘土上面においてはピット等の遺構は検出していない。

No.13トレンチ No.9トレンチ中央東側に直交して設定した、幅3.0m、長さ17.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下は造成土によって埋め立てられ、旧耕土を残していない。現表土下100cmで厚さ5~10cm淡黄灰色粘性砂質土がみられる。その下層が黄灰色砂質粘土となる。黄灰色砂質粘土上面において浅い耕作溝等を検出したが、ピット等の遺構は検出していない。また造成土内からの摩滅した須恵器片が出土している。なお調査坑東端は現代の溝状落ち込みにより壊滅している。

No.14トレンチ No.9トレンチ中央西側南よりに直交して設定した、幅3.0m、長さ10.0mの東西方向のトレンチである。耕土直下は造成土によって埋め立てられ、旧耕土をわずかに残している。現表土下180cmで厚さ5~10cm淡黄灰色粘性砂質土がみられる。その下層の黄灰色砂質粘土となる。これら淡黄灰色粘性砂質土・黄灰色砂質粘土上面においてはピット等の遺構は検出していない。

3.まとめ

今回の調査は、都市計画道路出合新方線築造に伴って発掘調査を実施した馬掛原遺跡第1次調査地の東側隣接地において、遺跡の広がりを確認する目的で実施した。調査の結果、今回の調査対象地のうち、第1次調査地に隣接する西側の低位の畠地部分においてピット等を検出した。今回の調査における遺構の検出状況については、第1次調査地と同様に遺物包含層は遺存しておらず、後世の削平を大きく受けているものと考えられる。このため検出した遺構については本来の深さを保っていないものが多いものと考えられるが、遺構自体は一定の範囲で残存していることを確認できたものと考えられる。

調査区の東半部は、盛土によって畠地に造成されているが、当初から丘陵の旧地形を改変し可耕地としており、遺構は確認していない。

また、今回の調査区の南側については、平成19年度に実施した試掘調査では遺構を確認していなかったが、今回の調査においてNo.5トレンチで遺構を確認していることから、遺構がさらに南側に広がる可能性が高いものと考えられる。

27. 高津橋岡遺跡 第11次調査

1. はじめに

高津橋岡遺跡は、明石川中流域東岸の段丘上に立地する、旧石器時代～鎌倉時代にかけての集落遺跡である。これまでに10次にわたる発掘調査が実施されており、県道小部明石線の西側において弥生時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物、奈良時代、平安時代、中世の掘立柱建物等が検出されている。

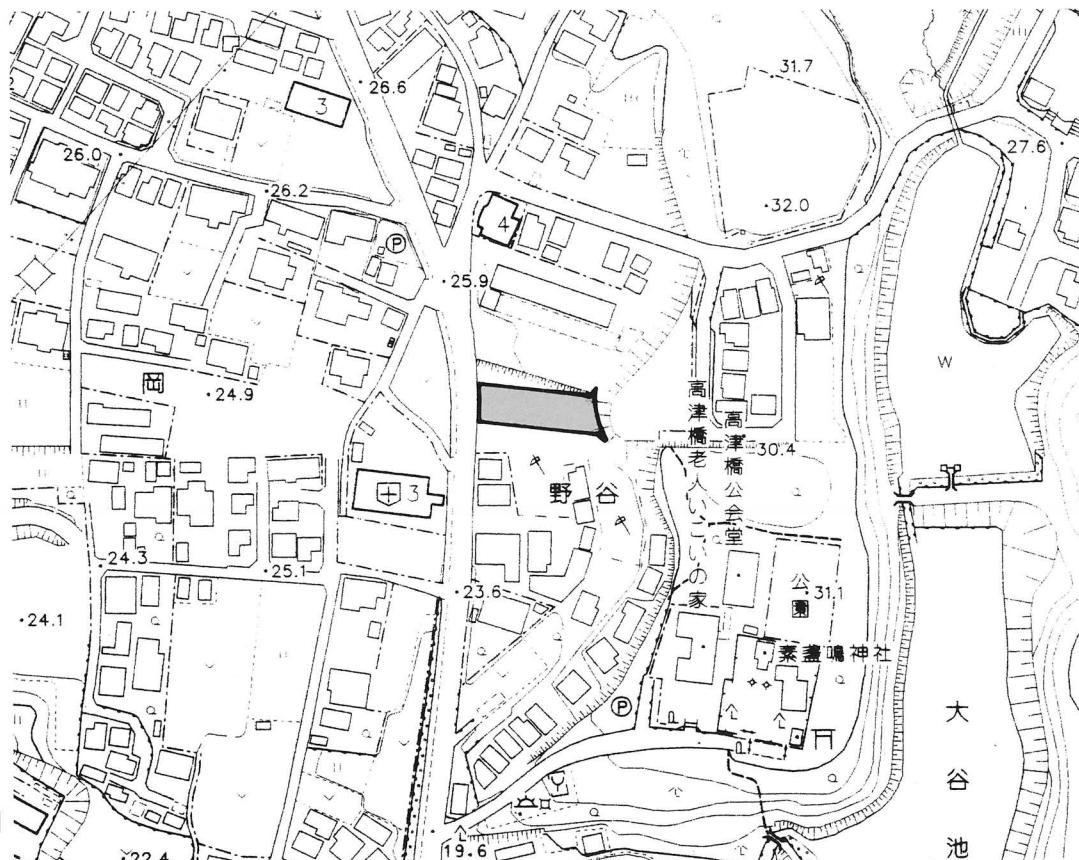


fig.132
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は明石木見線街路築造に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。今回の調査対象地は県道小部明石線の東側に隣接し、東から西へ延びる中位段丘面上に位置する。調査地付近の標高は約25mである。

調査は残土置場を確保するため、2分割して反転調査を実施した。調査地の東半部を1区、西部を2区と呼称し、1区より調査を開始した。

基本層序

上層より、旧耕土下にコンクリート改良土を含む整地層が存在し、その下層に数枚の旧耕土・旧床土が存在する。この下層の黄褐色混礫砂質シルトおよび黄灰色砂質シルト上面で遺構面を検出した。今回の調査地は元来、北東から南西へと下がる緩斜面地であったと考えられるが、調査区の東半の大半と北半は、耕作地の造成に伴う削平の影響を大きく受けており、調査区東半では遺構は確認されず、調査区北半では深度の深い遺構のみが遺存する状況であった。現地表面から遺構面までの深さは25～35cm前後を測る。

調査の結果、調査区の南西部を中心にして竪穴住居4基、掘立柱建物2棟、溝3条、土坑27基、落ち込み2基、ピット多数を検出した。



fig.133 調査区平面図

- SB01** 調査区の中央やや西寄り、南側で検出した。東西幅4.8mを測り、平面形が方形を呈する。主軸方向はN31° Eである。南側はSX01に切られており、全体の規模は不明である。深さは10cm前後である。
北東側の辺の中央部には、長さ2.1m、幅1.5mの範囲で、黄灰色粘質土混じりの灰色砂質シルトが幅50cm、高さ10cmで馬蹄形に廻り、周囲にはわずかに炭化物が広がる。以上の検出状況から竈である可能性が考えられる。また、北西側の辺には幅25cm、深さ5cmの溝が存在し、周壁溝であると考えられる。柱穴等は確認していない。
- SB02** 調査区西半部（2区）で検出した。東西幅5.0mを測り、平面形は方形を呈する。中央主軸はN 9° Eである。北側は削平により消失しており、全体の規模は不明である。床面までの深さは最深部で、30cmを測る。住居掘形内では、幅1.0m前後、検出面からの深さ10cm前後で、東西の両辺側がいわゆる「ベッド状」に一段高くなっている。掘形内で柱穴等は確認していない。掘形内中央部の床面からは浮いた状態で、比較的まとまった量の須恵器片が出土している。
- SB03** 調査区の中央やや西寄り、南側で検出した。西側をSB02、南側がSB01、北側は搅乱により失われており、全体の規模は不明であるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。東側は後世の遺構に切られているが、わずかに遺存している範囲から、主軸方向はN12° Eである。床面までの深さは、10～15cmを測る。柱穴等は確認していない。
- SB04** 東側はSB02に切られており、北側は搅乱により失われているため全体の規模は不明であるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。主軸はN12° Eで、床面までの深さは10cm前後である。
SB01～04は、内部で柱穴等は確認していないものの、掘形の平面形等から竪穴住居と考えられる。

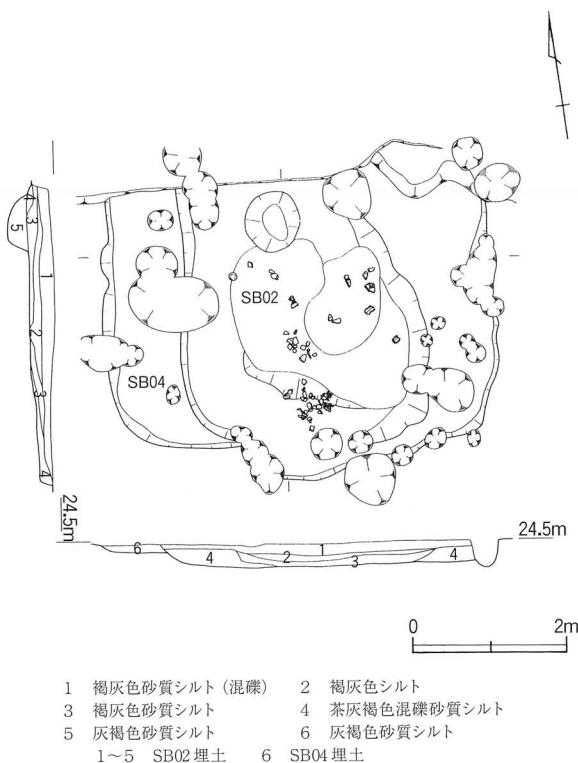


fig.134 SB02・04平・断面図

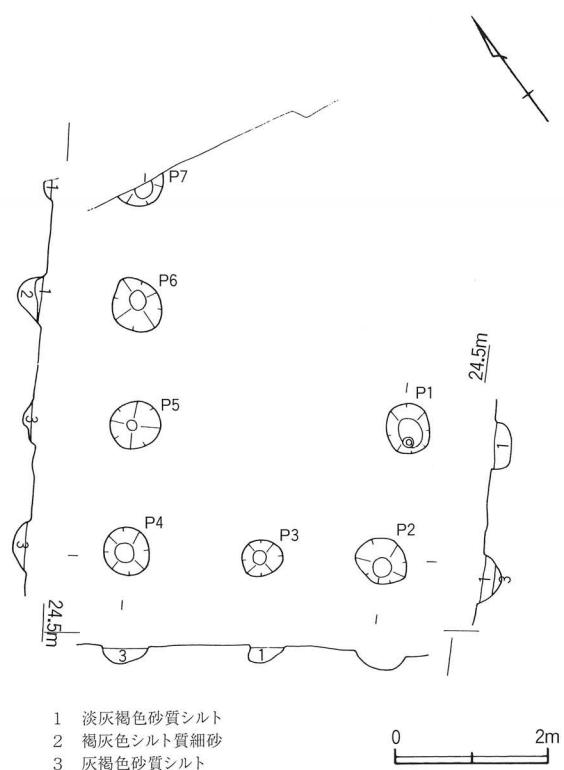


fig.135 SB06平・断面図

SB05 調査区北西部で検出した掘立柱建物である。南北3間分を検出したが、全体の規模は不明である。東側では柱列は続かないため、西側へ続く建物と考えられる。柱間は1.3~1.35mで、主軸方向はN40° Eである。柱穴の直径はP1・P3は35cmを測り、その間に直径30cmを測るP2が並び、南側のP4も直径30cmを測る。深さはP1・P3が10cm前後、P2・P4は5cm前後を測り、深い柱の間に浅い柱穴が存在するが、上面が削平されているため、元来の柱穴の直径、深さについては不明である。

SB06 調査区中央部、やや北側で検出した掘立柱建物である。南北3間分、東西2間分を検出した。東側は搅乱を受けており、北側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。柱間は1.7m前後で、主軸方向はN 9° Eである。柱穴は直径65cm前後と直径50cm前後のものが存在する。深さは、25cm前後と15~20cm前後のものが存在する。SB05と同様に上面が削平されているため、元来の柱穴の直径、深さについては不明である。検出状況からは、底は存在しないものと考えられる。

SD01 調査区のほぼ中央で検出した北西から南東方向の溝である。幅50~75cm前後、深さは北西側で15cm、南東側で20cm前後で、主軸はN40° Wである。古墳時代後期末~飛鳥時代の須恵器壺蓋などが出土している。

SK10 調査区西端部で検出した土坑である。長径1.65m、短径0.95mの楕円形で、南東側を溝に切られている。深さは15cmである。掘形内から、須恵器壺蓋、高壺脚部などが出土した。出土遺物から古墳時代後期（6世紀代）の時期が考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、調査区の南西部で、顕著な遺構・遺物の検出を確認した。各遺構出土遺物の詳細な時期については整理作業の進展を待って検討したいが、現段階では弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代～平安時代の遺構を検出したものと考えられる。

弥生時代

調査区中央付近で検出したSX02から、弥生時代後期頃の遺物が出土している。

古墳時代

調査区西端で検出したSK10から6世紀代の遺物が出土しており、古墳時代後期の遺構と考えられる。

飛鳥時代

竪穴住居は、出土遺物から古墳時代後期～飛鳥時代頃の時期が考えられる。調査地の西側で実施された第1・2・4次調査でも当該期の竪穴住居を確認しており、今回の調査地付近まで集落域が拡がることを確認した。

奈良時代以降

掘立柱建物及び多数のピットからの出土遺物には、奈良時代以降の遺物が含まれており、一部のピットについては竪穴住居埋土の上部から切り込む状況を確認した。現段階では掘立柱建物2棟を確認しているが、この他にも建物が存在する可能性が高い。

当遺跡におけるこれまでの調査では、当調査地の西側に隣接する県道小部明石線の西側において顕著な遺構の分布が確認されていた。県道の東側では、今回の調査地の北側隣接地で実施された第8次調査において、限定された範囲での調査ではあったが、古墳時代と奈良時代の遺構・遺物が確認されており、県道の東側においても遺跡の広がりが予測されていた。今回の調査において、遺構が濃密に分布することを確認したが、今回の調査地の東側は丘陵の高位部となっており、当調査地は丘陵斜面が緩斜面となる傾斜変換点付近に立地し、集落域の東端部付近に位置している可能性がある。今回の調査地において濃密な遺構の分布を確認したことは、当遺跡の全体像を考える上で貴重な成果といえよう。



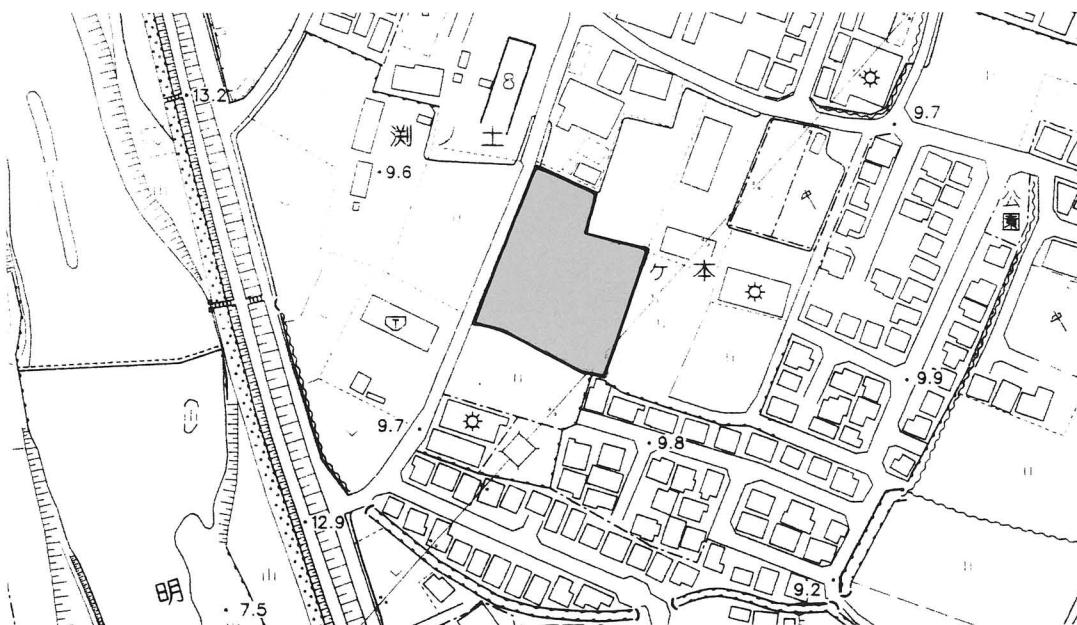
fig.136
調査区西半部
全景

28. 今津遺跡 第22次調査

1. はじめに

今津遺跡は明石川東岸、条里が良好な状態で残される沖積地に立地する遺跡である。これまでに21次にわたる発掘調査が実施されており、これまでの調査では弥生時代前期～後期、古墳時代、平安時代、室町時代等の遺構・遺物が確認されている。

fig.137
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査の結果、遺構面を2面確認した。古墳時代後期と推定される第1遺構面では柱穴、土坑を検出し、弥生時代中期を主体とする第2遺構面では掘立柱建物、柱穴、溝、土坑、流路等を検出した。

基本層序

現耕土の下に数枚の水田土壤（2層として一括）が確認でき、この下位に古墳時代後期までの遺物を含む3a層が存在する。その下面である4a層上面で第1遺構面を検出し、さらにその下層、4b層の上面で第2遺構面を検出したが、4b層下面まで掘り下げた段階で確認した遺構も存在する。

4b層上面の標高は、長さ約34mの北トレンチの東端で8.75m、西端で8.15mを測り、長さ約30mの南トレンチでは東端で8.55m、西端で8.00mを測る。西の明石川方向へ約1.8%で傾斜している。

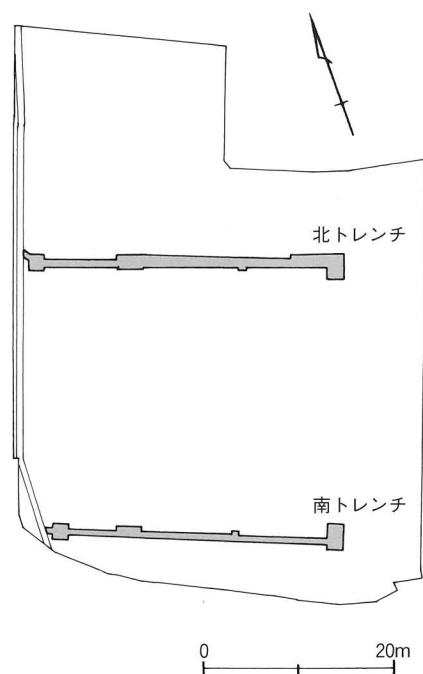


fig.138 調査範囲位置図

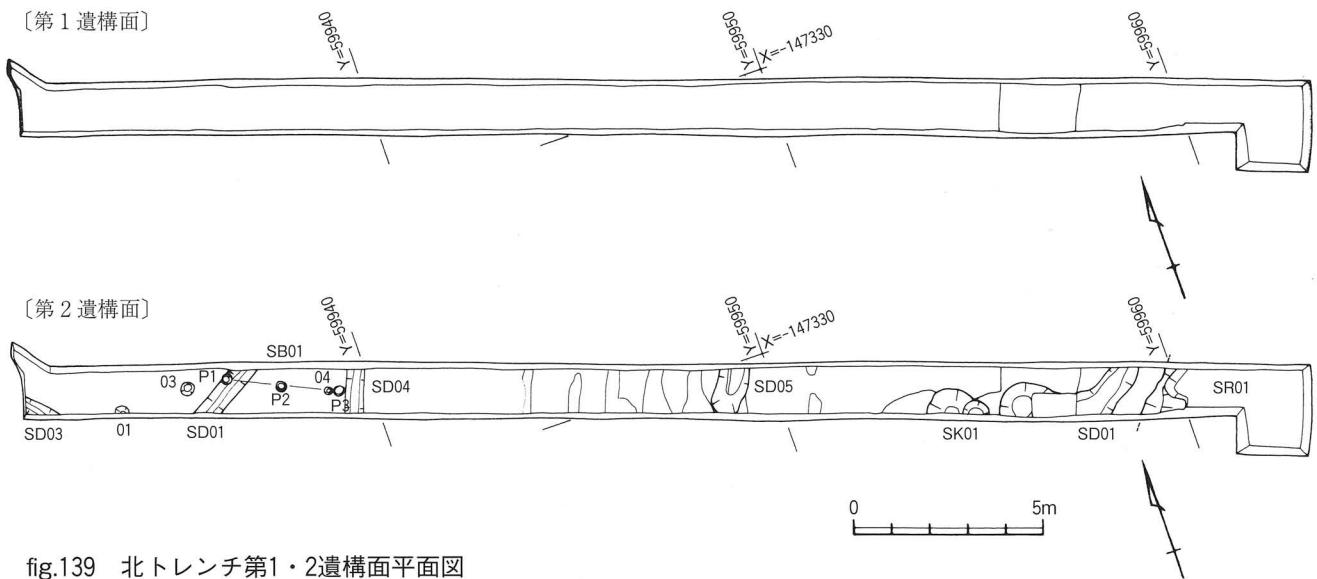


fig.139 北トレンチ第1・2遺構面平面図

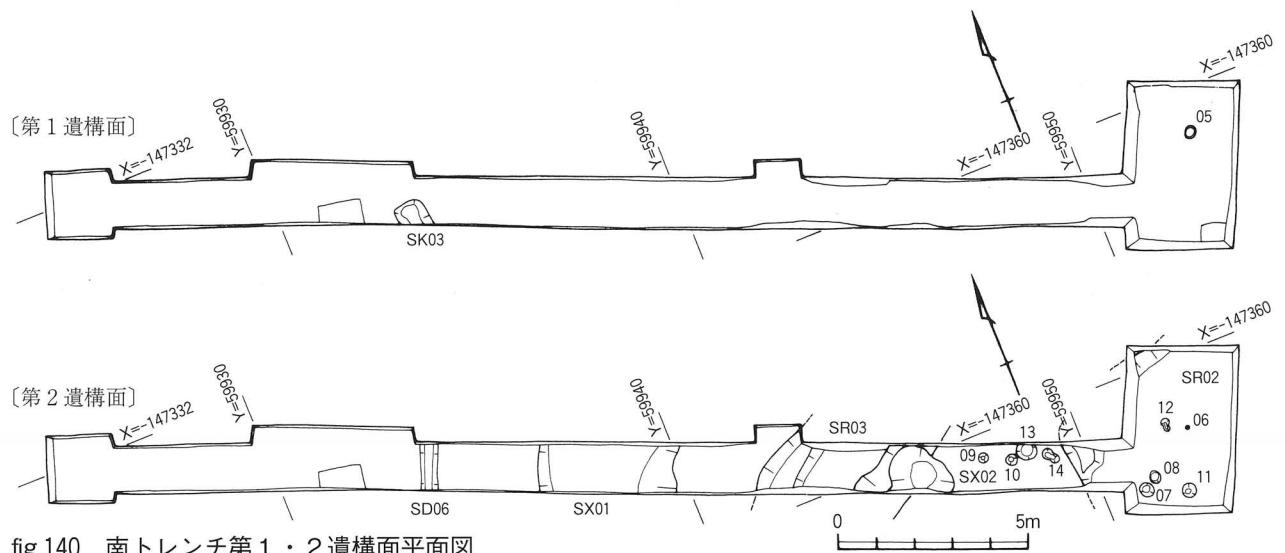


fig.140 南トレンチ第1・2遺構面平面図



fig.141 (左)
北トレンチ
第2遺構面全景

fig.142 (右)
南トレンチ
第2遺構面全景

第1遺構面 近隣で実施された調査においても第1遺構面に相当する層位においては溝や牛の蹄跡等が確認できる程度で、顕著な遺構は確認されていないが、今回の調査でも柱穴1基、土坑1基を確認したに止まる。この遺構面に対応する表土層である6a層から古墳時代後期の遺物が出土している。

第2遺構面 4b層の上・下面で確認した弥生時代の遺構面である。掘立柱建物1棟、柱穴13基、土坑3基、溝6条、広く浅い落ち込み1基、流路などを検出した。

SB01 北トレンチ西部で確認した、掘立柱建物の一部と推定される柱列である。掘形の径25～30cm、深さ約45cmを測る柱穴3基が東西方向に並ぶ。芯々間の距離は1.5mを測る。3基とも柱痕を確認している。径約20cmを測る。

SK01 北トレンチ東部で確認した、径約1.5m、深さ約40cmを測る土坑である。弥生時代中期の完形の甕と壺が各1個体出土した。近接し、あるいは重なる位置に同様の土坑が存在するが、埋土が同質で区別できなかった。

SD04 北トレンチ西部で確認した、幅約50cm、深さ約30cmを測る溝である。弥生時代中期の鉢が出土している。

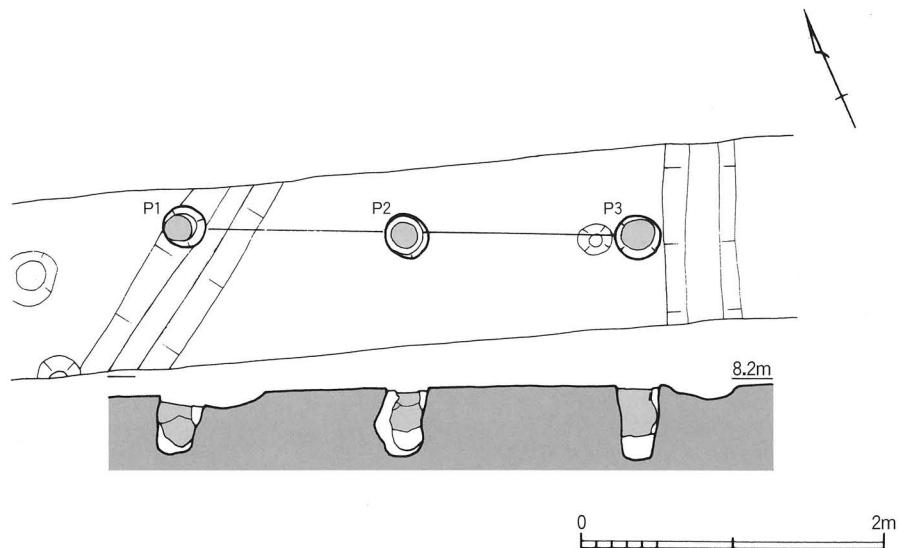


fig.143
SB01
平・断面図

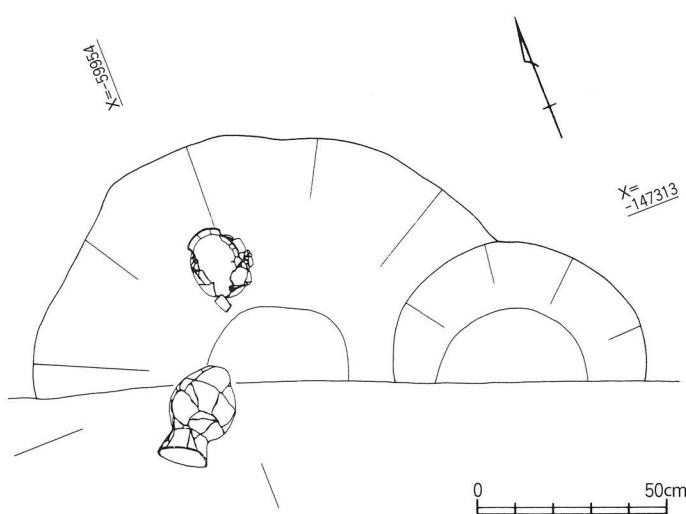


fig.144 SK01遺物出土状況平面図



fig.145 SK01遺物出土状況

SX02 南トレンチ西部で確認した、径約2m、深さ約70cmを測り、平面形が不整形を呈する土坑である。埋土上位からは弥生土器の小片が出土したが、中位以下においては遺物が出土していない。

SR01~03 北トレンチ・南トレンチ東部を北から南に流下する自然流路である。南トレンチではこの流路の埋没後にSP06~08・11・12、SX01等の遺構が掘削あるいは形成されている。

3. まとめ 今回の調査では、弥生時代中期の掘立柱建物等の遺構を確認し、同時期の土坑からは完形に復元できる弥生土器が複数個体出土した。以上の状況から、当調査地も弥生時代における集落域の一部に含まれるものといえよう。

今回の調査においては、南トレンチでは遺構等が北トレンチに比べて少なく、この付近から南側は遺構の希薄な部分に入る可能性も考えられる。一方今回の調査区の西側隣接地で実施した第20次調査ではその南部の調査区においても遺構が比較的多く確認されていることから、南トレンチ以南の地区にも遺構が続く可能性が考えられる。

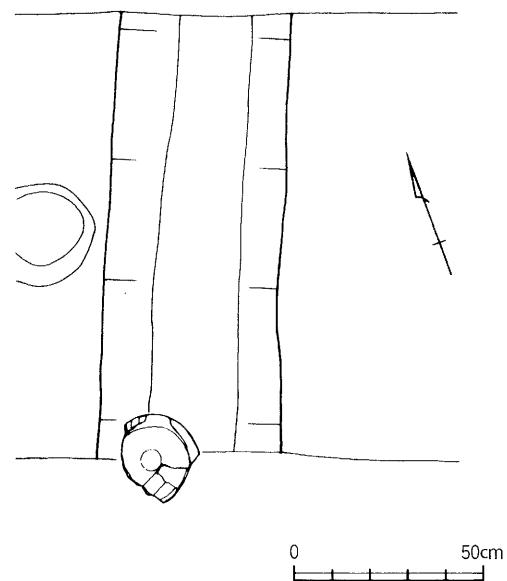


fig.146 SD04遺物出土状況平面図

29. 新方遺跡 第47次調査

1. はじめに

新方遺跡は明石川東岸、条里が良好な状態で残される沖積地に立地する。これまでに46次にわたる発掘調査が行われており、弥生時代前期の木棺墓、同中期の方形周溝墓をはじめとして弥生時代・古墳時代・古代～中世の集落等の存在が確認されている。

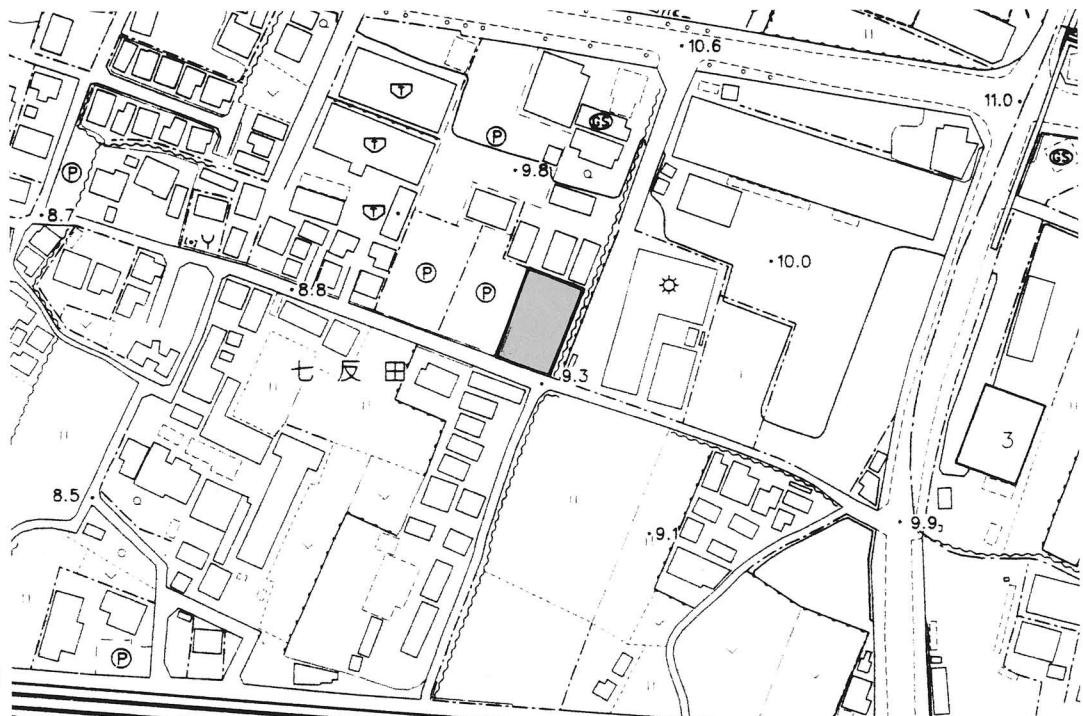


fig.147
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分に発掘調査を実施した。調査の結果、遺構面を6面確認し、弥生時代～中世の遺物・遺構を確認した。

調査対象範囲は2ヶ所に分かれており、北側の調査区を北区、南側の調査区を南区と呼称する。

基本層序

現在の表土層である盛土の下層に旧表土水田耕土、さらに下層に数枚の水田土壤(3a層～5a層)が確認できる。5a層からは中国製白磁等が出土している。6a層が奈良時代を中心とする表土層で、この層の上面で第1遺構面を検出した。洪水砂である6c層に覆われる7a層が飛鳥時代の表土層であり、その下面で第2遺構面(上)を、下面で第2遺構面(下)を検出した。洪水砂7c層に覆われる8a層が古墳時代から飛鳥時代の表土で、その上面で第3遺構面(上)を、下面で第3遺構面(下)を検出した。9a層が弥生時代の表土で、その下面が第4遺構面である。ただし北区は全体が流路で9a層は確認できず8b層の下面が遺構検出面となる。

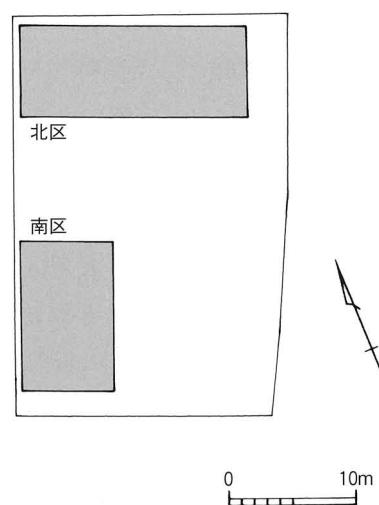


fig.148 調査範囲位置図

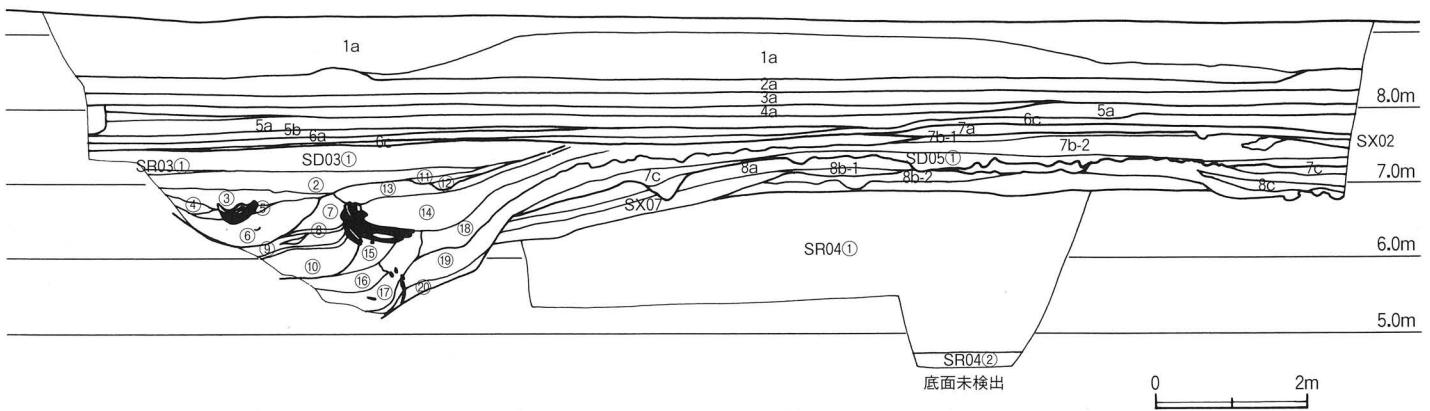


fig.149 北区北壁土層断面図

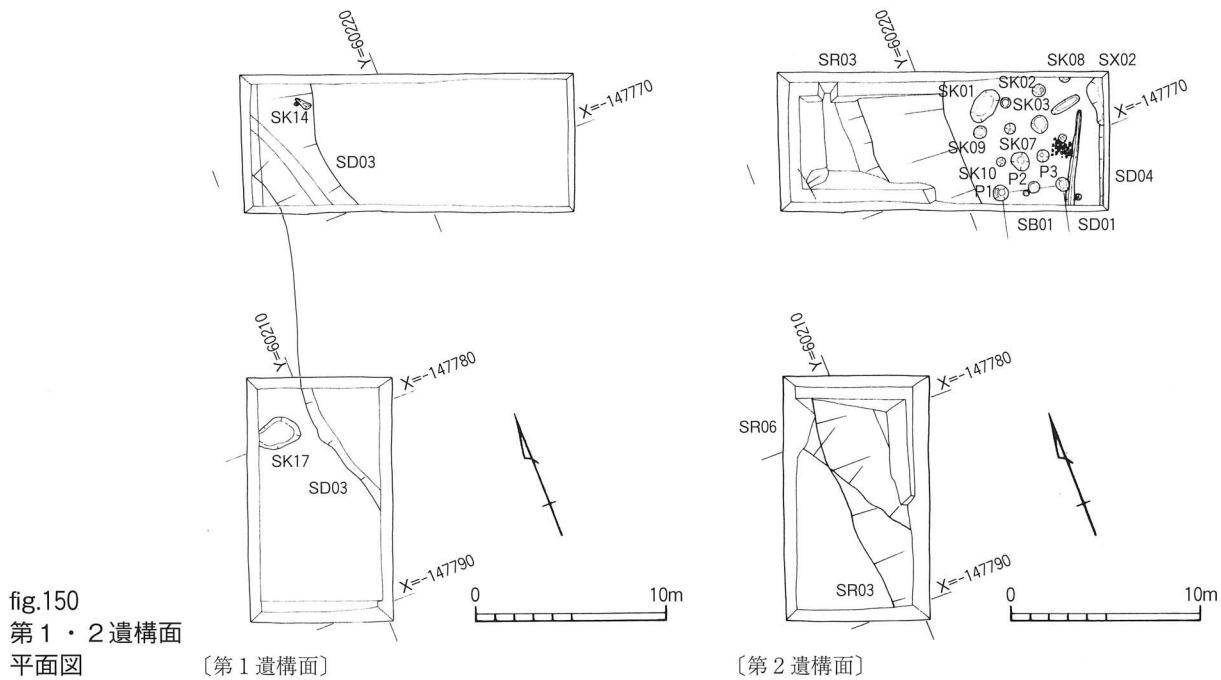


fig.150
第1・2遺構面
平面図

それぞれの標高は、現地表がT.P.9.1m～9.2m、第1遺構面がT.P.7.5m～7.9m、第2遺構面がT.P.7.4m～7.6m、第3遺構面（上）がT.P.7.0m～7.3m、第3遺構面（下）がT.P.6.6m～7.1m、第4遺構面がT.P.6.6m～6.9mを測る。

第1遺構面 奈良時代を中心とする時期の遺構面で、第2遺構面のSR03等にほぼ重なる位置を流れる流路であるSD03と、不整形の深い土坑であるSK17等を検出した。SD03から円面硯片が出土している。

第2遺構面 飛鳥時代を中心とする時期の遺構面である。洪水砂である6c層に覆われるため、北区の西半と南区ではその下面となる7a層上面と下面の2面で遺構を検出した。上面で流路SR03、牛蹄跡、下面で掘立柱建物、土坑、柱穴、溝、流路等を検出した。

SB01 北区の東部に位置する東西2間の掘立柱建物である。南部は調査地外にあたり、北辺のみを検出した。建物の主軸方位はN11°Eを測る。柱穴は径60～80cmを測る、平面形が円形で、深さ50～70cmを測る。中央のP2は柱痕が土層断面で確認でき、そこで見える径は約20cmを測る。柱穴の芯々で東西約3.2mを測り、柱間は1.6m程度を測る。倉庫である可能性が高い。

SK02~10 北区の東部、SB01の北側にある土坑あるいは柱穴群である。径0.5~1.0m程度を測り、平面形が円形を呈する遺構群であるが、建物としてのまとまりは認められない。埠のような性格を有する可能性が考えられる。

SX02 北区の東部に位置する、南北2.6m以上、東西90cm以上を測る、平面形が不整形を呈する土坑である。土師器・須恵器に混じり、土師器手捏ね土器1点が出土している。

SR03 北から南に流下する自然流路あるいは大溝である。北区では東岸を、南区で西岸を確認しており、溝幅は約10mと推定され、深さは約3mを測る。埋没過程の状況から、遺構内の堆積土は新・中・古の大きく3層に分層できる。堆積土の中に立ち木の根が張っている状況も確認している。

新・中段階の堆積土からの出土土器は多くないが、古段階の堆積土、特に下層の暗灰色粘土からは遺存状態の良好な土器が多く出土している。遺構の肩部分では、両岸



fig.151 (上)
北区東半
第2遺構面全景



fig.152 (中左)
北区
SR03全景



fig.153 (中右)
北区SR03東岸
遺物出土状況



fig.154 (下左)
南区SR03
遺物出土状況
fig.155 (下右)
南区
SR06全景



とも据え置かれた状態を保つ遺物が多く出土しており、岸部分に土器を据え置く何らかの行為が行われたものと推測される。レベルを違えてほぼ同じ位置で出土する土器の存在から、供献行為が複数回にわたって行われたことが想定される。遺構の斜面や下位で出土する遺存率の高い遺物はこれらの供献された土器が転落したものと考えられる。このほか、ヘラ状の木製品や杭等が下層粘土から出土し、西岸の土器群の間からは桃の種が数十個単位で、比較的多量に出土している。

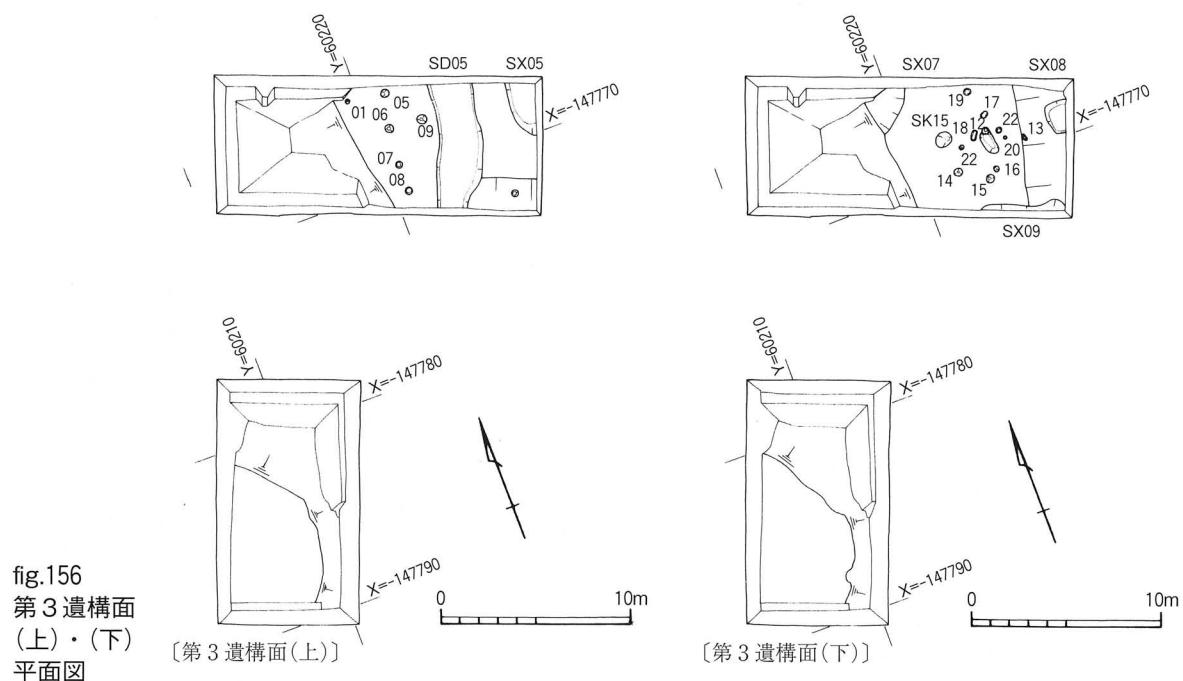
SR06 南区で検出された自然流路あるいは大溝である。SR03と切り合い関係にあり、SR06の方が古い時期のものである。西壁の土層観察からこの溝が浚渫されていることを確認した。浚渫後の最終堆積土の中からやや集中して土器類の出土があったが、全体としての遺物出土量は少ない。浚渫前の堆積土から手捏ね土器が出土している。

第3遺構面 古墳時代～飛鳥時代を中心とする遺構面である。洪水砂7c層に覆われるため、その下面となる8a層上面と下面の2面で遺構を検出した。上面では、溝(SD05)、杭列(SP05～08)、蹄跡等を、下面では柱穴、落ち込み(SX07)等を検出した。南区では8a層と9a層の間層がほとんどないかあるいは9a層が8a層に切られる状態となっており、第3遺構面(下)と第4遺構面を同じ面として検出した。

SD05 北区東半に位置する溝である。幅約2.2m、遺構確認面からの深さ約20cmを測る。埋土はブロック状で人為的に埋められたものと判断される。底面には遺構の周辺、8a層上面と同様、踏み込み状の凹凸が多数見られる。

SP05～08 北区中央付近、わずかに弧を描きながら南北方向に連なる柱穴列である。

SX07 北区中央北寄りに位置する落ち込み遺構である。SR03によって西側が搅乱され、北側は調査区の外に延びる。東西・南北ともに2.4m以上、深さ1m以上を測る。小型丸底壺等の古墳時代前期の土器が出土している。



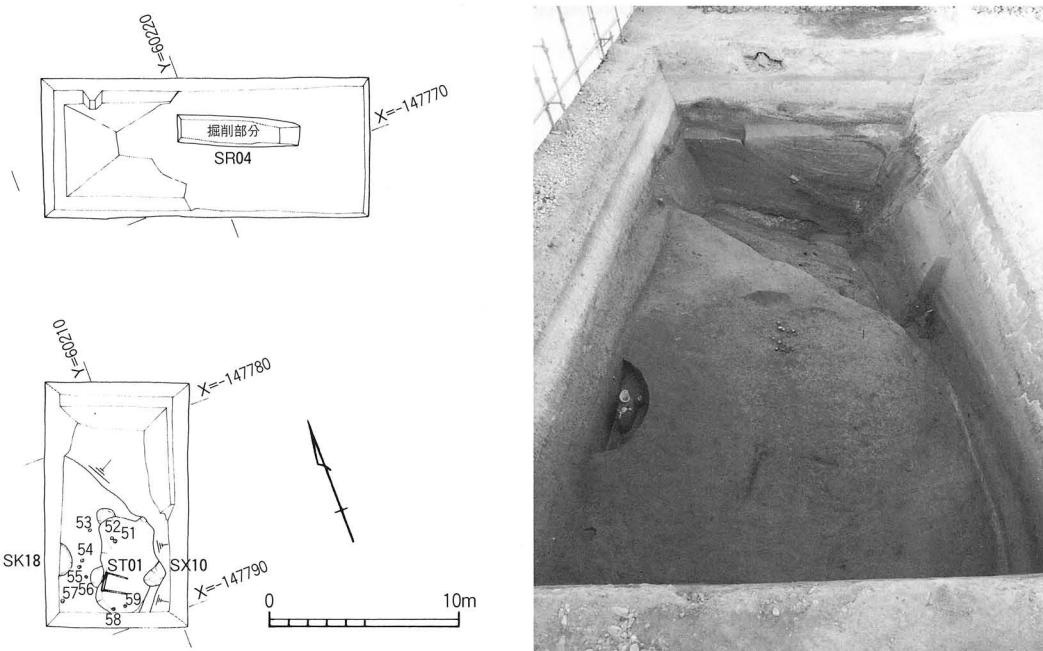


第4遺構面 弥生時代の遺構面である。北区で流路、南区では9a層下面で土坑、木棺墓等を検出した。

SR04 北区は全域が流路SR04の内部にあたっている。南区ではこの流路は確認されず、両区の間にSR04の西岸が存在するものと考えられる。

SK18 南区の南西部に位置するプラン円形の土坑である。調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、平面形が正円に近い形であれば径1.8m程度と推定される。壁はほぼ垂直に立ちあがるもので底面は平坦である。弥生時代中期の遺物が出土している。

ST01 南区の南部で検出した。木質は遺存していないが、板材状のものを方形に組み合わせる遺構で、木棺墓である可能性が考えられる。主軸方向は、N35° Wを指向する。北西の小口板は幅約105cm、幅約10cm、深さ約20cmを測る。側板は幅約10cm、深さ1～2cmを測る。小口板と接する部分から120cm程度のみ側板の痕跡が遺存する。北西小口板の内側に側板の小口面を当てる形状をとる。側板の内法は小口板と接する部分で約80cm、遺存する南東端で約70cmを測る。棺幅は北西が広く、南東が狭い。棺であれば頭位は北西と推定される。



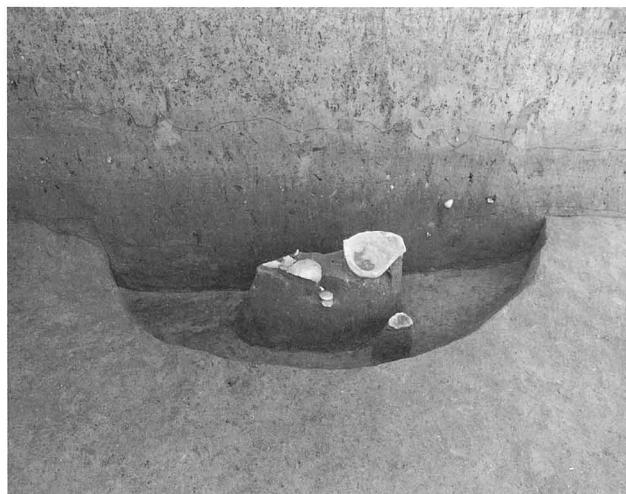


fig.161 SK18遺物出土状況



fig.162 ST01全景

3.まとめ

新方遺跡ではこれまでの調査において円面硯や剣形木製品、斎串、人形が出土しており、当遺跡が律令期の遺跡でもあることは知られていたものの、これまでに確認されていた当該期の遺構は流路程度であり、質・量ともに多く確認されている弥生時代の遺構・遺物に比べやや低調であった。こうした状況のなか、今回当該期の遺構を集中して確認したことは、新方遺跡全体について考える上で重要な意味をもつものといえよう。

今回の調査で確認したSR03とSR06は同じ飛鳥時代の中で切り合い関係にあり、その方向がまったく異なっている。また、SR03は調査地内では南北方向に直線的に伸びるものであるが、第2次調査で確認されている律令期の溝あるいは流路の延長線上には位置していない。西の明石川へ続く溝あるいは流路が複数存在し、クリークとなっている可能性が考えられ、100年程度の時間幅のなかでその移動があったことも確認できたことになる。

SR03からは多量の土器類が出土している。一方SR06は最上層の一部に土器が集中して出土したに止まり、中層～下層からは遺物はほとんど出土していない。

SR03から出土した遺物は両岸に堆積した粘土質の土層中に埋没しており、そこに据え置かれた状態を保つものがみられ、肩部分に置かれたものが下に転げ落ちたと考えられる遺物もある。他に桃の種子も多く出土しているが、桃は古代において僻邪の意味をもつ呪物であることから推察すれば、これらの遺物は水辺の祭祀を行うために据え置かれた可能性が高いと考えられる。

第1遺構面における流路からの円面硯片の出土や、また、既存の周辺地での調査による剣形木製品・斎串・人形の出土からは今回の調査地点付近に文字を用い、律令制的な祭祀活動を行う階層の人々が活動していたことが推測され、当地に古代明石郡の行政単位を束ねる公的な施設、官衙のあった可能性が高いものと考えられる。

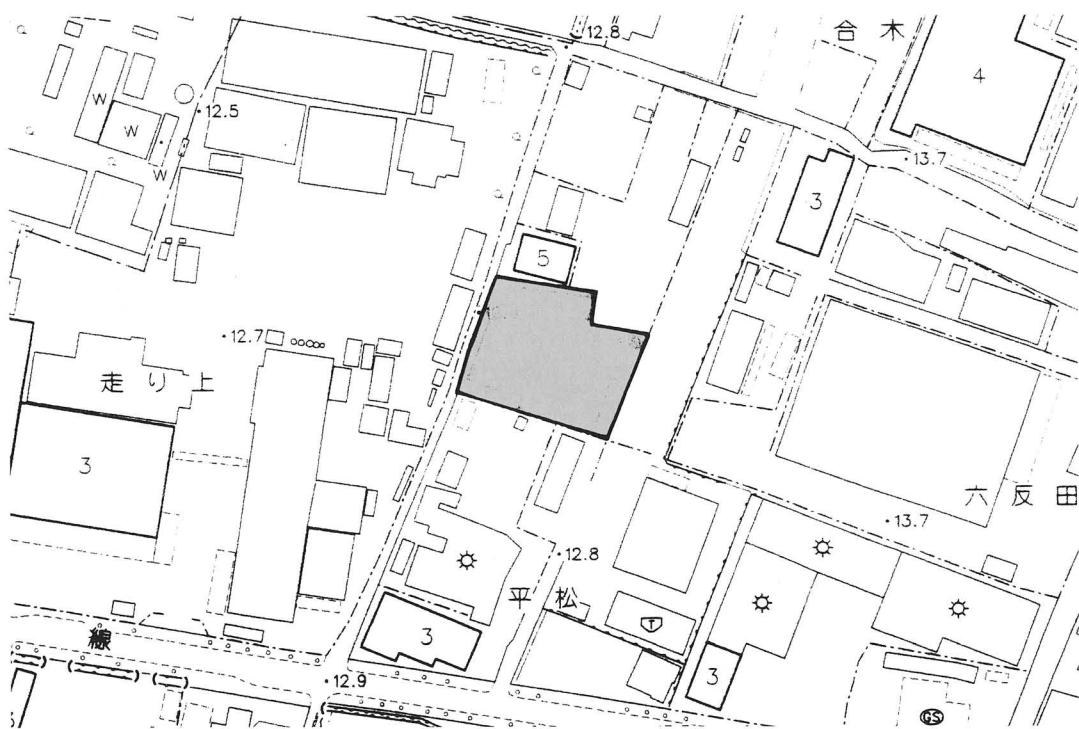
また第1遺構面で検出したSB01は、柱間が狭く、東西2間という構造から、おそらく南北方向も柱間2間となる可能性が考えられ、倉庫である可能性が高い。公的施設の倉庫であれば複数棟が並んで存在する可能性が考えられ、今回の調査区の周辺には、関連する建物等の存在も推定される。今後周辺地域での調査の進展により、構造等を含め、当該時期における遺跡の状況が明らかになるものと考えられる。

30. 新方遺跡 第48次調査

1. はじめに

新方遺跡は、明石川とその支流の伊川が合流する地点の北側に広がる沖積地に立地している、弥生時代～中世に至る複合遺跡である。これまでに50回近い発掘調査が実施されており、縄文時代人的形態をもった埋葬人骨が検出された弥生時代前期の溝状埋葬施設、同・中期の玉造り関連の遺構・遺物など多くの調査成果が蓄積されつつある。

fig.163
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は店舗建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査区は3ヶ所に分かれており、北側より1～3区と呼称する。

なお、今回の調査地の東側隣接地では現在の都市計画道路出合新方線築造に伴って発掘調査が実施されているが、今回の調査区はそのうちの第33次調査区（旧新方遺跡平松地点第3次調査I区）の西側に隣接している。

1区

1区及び2区は、ともに2m四方の小規模の調査区である。

1区では、現地表面下約1.9mで北側に下がる落ち込みを検出した。

落ち込みは、現地表面から2m近く下がった深い位置で検出したが、fig.166上段の調査区壁面断面図に示したように、より上層にあたる土層（fig.166 - 6層あるいは7層以下の土層）についても同様に北側に落ち込む堆積状況が認められるため、本来の落ち込みの肩部は今回の検出面より浅い（高い）位置に存在することが考えられる。

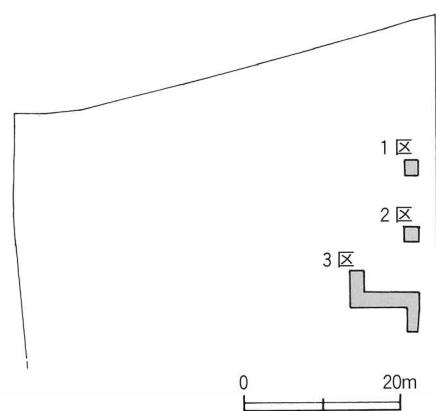
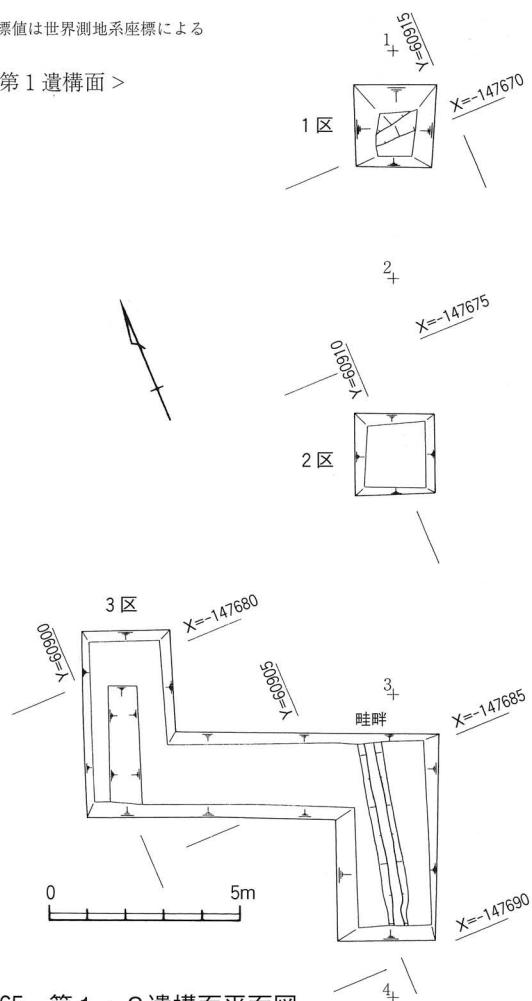


fig.164 調査範囲位置図

※座標値は世界測地系座標による

<第1遺構面>



<第2遺構面>

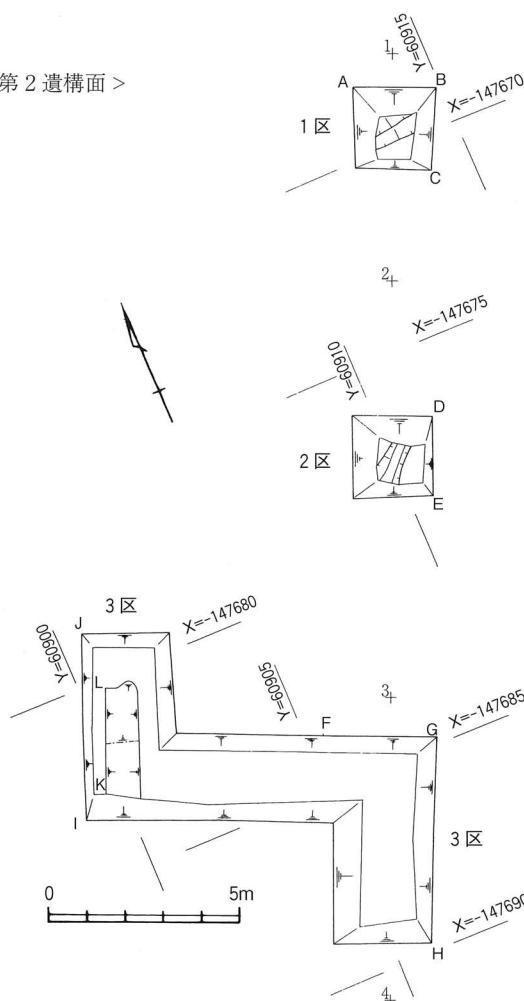
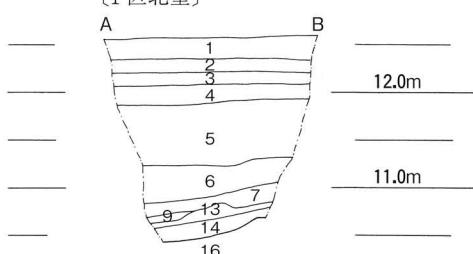
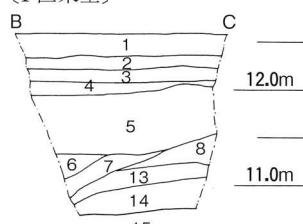


fig.165 第1・2遺構面平面図

[1区北壁]



[1区東壁]



- 1 盛土
- 2 耕土
- 3 淡灰(黄)色粘性砂質土(旧耕土)
- 4 灰黄色粘性砂質土(旧耕土)
- 5 灰色～淡灰色砂礫
- 6 淡灰色極細砂～乳灰色砂礫
- 7 乳褐色砂礫
- 8 淡乳灰色～淡灰色極細砂～粗砂
- 9 褐灰色シルト質極細砂
- 10 淡灰(茶)色極細砂
- 11 (淡)黄褐色～(淡)灰色シルト質極細砂
- 12 淡(青)灰色極細砂質シルト(水田層、第1遺構面)
- 13 暗灰色シルト
- 14 (暗)青灰色シルト
- 15 淡(青)灰色極細砂質シルト
- 16 淡褐色～淡綠褐色砂質シルト(第2遺構面)

[2区東壁]

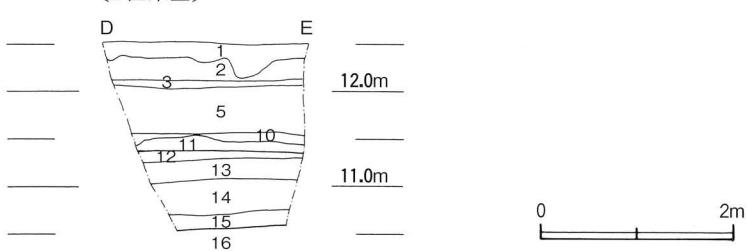
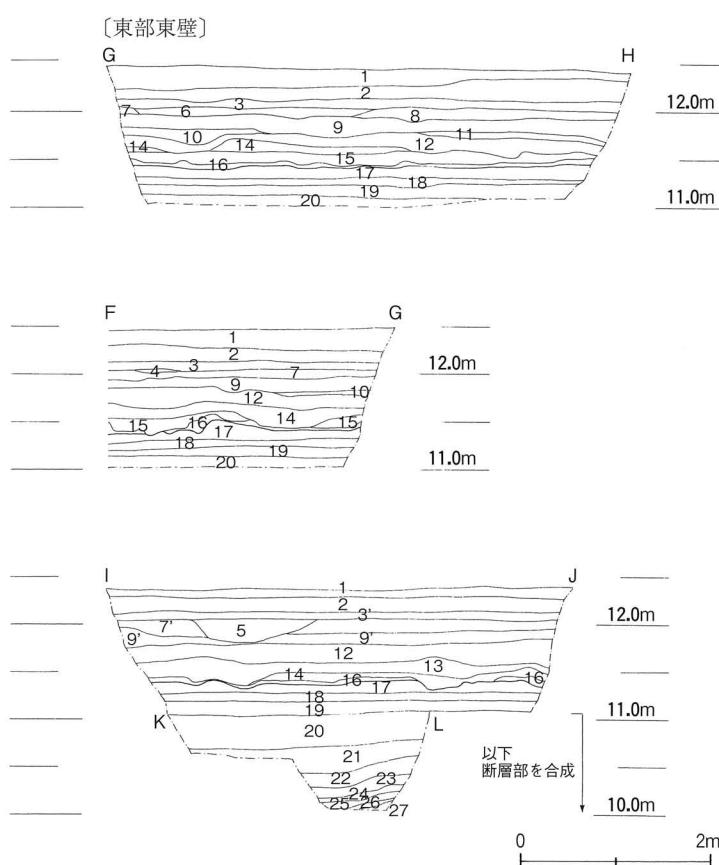


fig.166 1・2区土層断面図



1 盛土 2 耕土 3 灰黄色粘性砂質土 3' 灰黄色礫混じり砂質土 4 灰黄色極細砂
 5 灰色小礫混じり極細砂～シルト質極細砂 6 淡灰(黄)色シルト質極細砂～灰色小礫混じり細砂
 7 淡灰黄色シルト質細砂 7' (淡)灰色シルト質細砂 8 淡灰色～淡褐色極細砂～細砂 9 (淡)灰色シルト
 9' 淡灰色シルト質細砂 10 淡灰(黄)色シルト質極細砂 11 淡灰(黄)色シルト質極細砂～細砂
 12 灰色～淡灰色砂礫 13 淡灰色～淡褐色極細砂～細砂 14 乳褐色砂礫 15 淡灰色～淡茶褐色極細砂
 16 暗黃褐色シルト 17 淡(青)灰色極細砂質シルト(水田面、第1遺構面) 18 暗灰色シルト 19 暗(青)灰色シルト
 20 (淡)緑灰色シルト質細砂 21 淡綠灰色砂質シルト 22 淡青灰色極細砂 23 (淡)青灰色極細砂～細砂
 24 淡褐色シルト 25 淡灰色細砂 26 淡(褐)灰色シルト 27 淡灰色小礫混じり細砂



fig.168 3区水田畦畔全景

fig.167
3区土層断面図

今回の調査地の東側隣接地において実施された第33次調査において、平安時代の河道が確認されている。1区では遺物が出土していないため断定はやや困難なもの、今回検出した落ち込みも同じ平安時代の河道堆積の一部と判断され、後述する3区で検出した平安時代の水田畦畔と同じ遺構面（第1遺構面と呼称）に対応するものと考えられる。

2区

2区では、現地表下約0.9m以下において1区と堆積土層に若干の違いが認められた。洪水による堆積層と考えられる極細砂が厚さ約10cm程度堆積しており、その下層の標高11.4m付近で淡(青)灰色極細砂質シルトの上面を検出した。2区においてはこの層の上面がほぼ水平であるが、後述する3区ではこの層の上面で水田畦畔を検出している。よってこの層の上面が第1遺構面に相当するものと考えられる。

1区ではこの淡(青)灰色極細砂質シルトが存在せず、先述のように河道堆積を確認している。両調査区の土層堆積状況から、河道の肩部は1・2区の間に存在するものと判断される。

なお、1区と同様に現地表下約1.9mまで掘削したところ、溝状の遺構を1条検出した。深さ6～11cmと比較的浅いものである。fig.165に第2遺構面として図示したが、人為的な遺構ではなく、水みちのような性格のものであった可能性が考えられる。

3区

2区でも確認した淡(青)灰色極細砂質シルトの上面において、南北方向に走る水田畦畔を1条検出した。畦畔の現状での高さ10cm程度を測り、遺存状態は良好である。検出した範囲はわずかであるが、畦畔の方向は、第33次調査において検出されている畦畔とほぼ同様と考えられる。検出した畦畔はこの1条のみであったが、水田層自体は3区の全域に広がっている。上層の極細砂は洪水による堆積物と考えられ、他の畦畔は洪水により削平されたものと考えられる。

第33次調査で検出された水田区画は南北に長い区画であり、東西方向の畦畔については元来あまり濃い密度で存在していなかった可能性も考えられる。

淡(青)灰色極細砂質シルトより下層については、西部において断面調査を実施し、標高10.0mまでにおいては極細砂ないし細砂とシルトの互層となっていることを確認した。いずれも河道や洪水によってもたらされた堆積物と考えられ、安定した基盤層になりうる土層は確認していない。

遺物については、淡(青)灰色極細砂質シルトの下層の暗灰色シルト(fig.167-18層)や暗(青)灰色シルトから弥生土器と考えられる土器片が極少量出土したが、第33次調査において検出されているような弥生時代の遺構は今回の調査では確認していない。

3.まとめ

今回の調査は限定された範囲について実施したものであったが、平安時代のものと考えられる水田畦畔1条と河道を確認した。

これらの遺構は、東側隣接地において実施された第33次調査でも確認されており、同調査結果と同様の当該時期の景観が当調査地内においても広がっているものと考えられる。ただし前述のように、いずれの調査区においても弥生時代の遺構は確認していない。今回は限定された範囲について調査を実施したため、調査区周辺における弥生時代の遺構の有無は不明である。

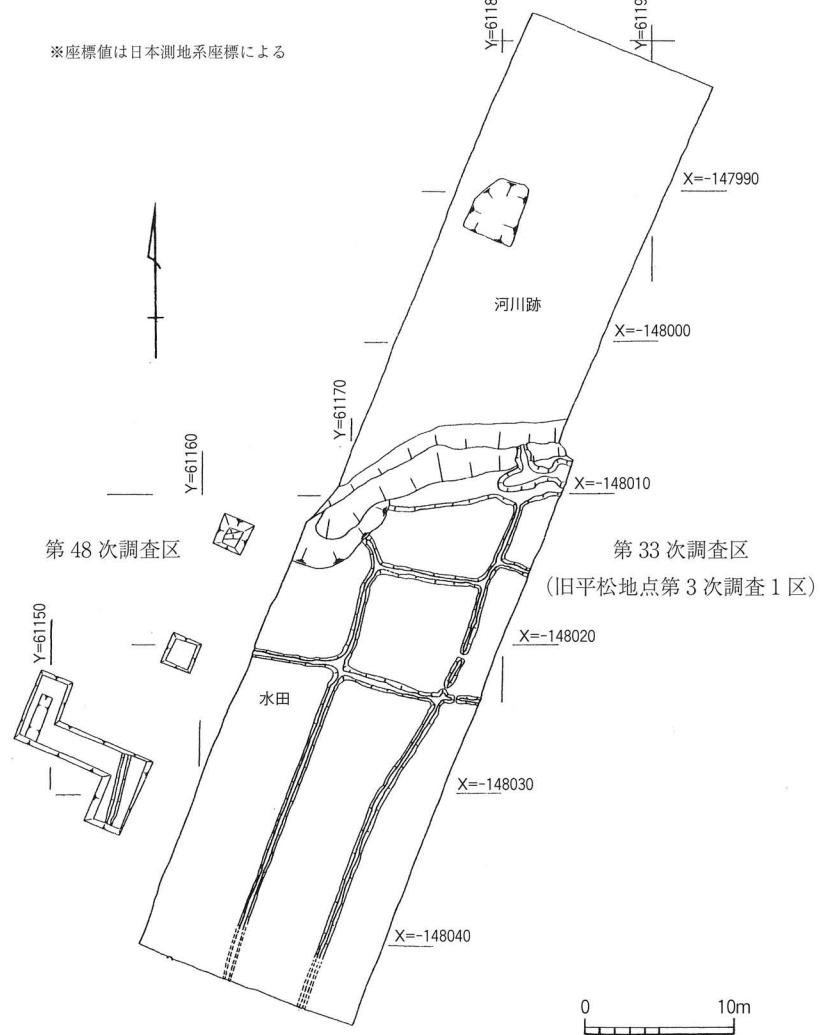


fig.169 第33・48次調査区平面図

31. 上池遺跡 第3次調査

1. はじめに

上池遺跡は、明石川の支流伊川の右岸の自然堤防上に立地する。当遺跡における発掘調査の件数は未だ少なく、遺跡の全容を解明するまでには至っていないが、昭和61年度に実施された第1次調査では、掘立柱建物などの遺構や、土器・瓦などの平安時代の遺物が確認されている。出土遺物の中には円面硯や緑釉陶器、灰釉陶器、軒平瓦等が含まれることから官衙等の性格をもつ可能性も想定されるなど注目されている。

なお、今回の調査については平成22年度に『上池遺跡第3次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

fig.170
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は老人福祉施設建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。なお調査は、残土置場を確保するため、東（1区と呼称）・西（2区と呼称）に2分割し、1区より調査を開始した。

基本層序

上層より、盛土（厚さ70~100cm前後）、旧耕土、淡灰色粘性砂質土（近世以前の耕土）が堆積し、その下層に暗灰色粘性砂質土（平安時代中期～鎌倉時代の遺物包含層）が存在する。この遺物包含層は、調査区北東側にのみ厚さ約25cm程度堆積している。その下層に調査区全域にわたって、奈良時代後期～平安時代前期の遺物包含層である黒灰色粘性砂質土（厚さ10~20cm）が存在する。その下層の暗茶色粘性砂質土上面で遺構の検出に努めたが不分明であり、その下層の暗黄褐色粘性砂質土、褐灰色粘性シルト上面で遺構面を検出した。

掘立柱建物12棟、溝及び河川状遺構29ヶ所、性格不明土坑1ヶ所を検出した。

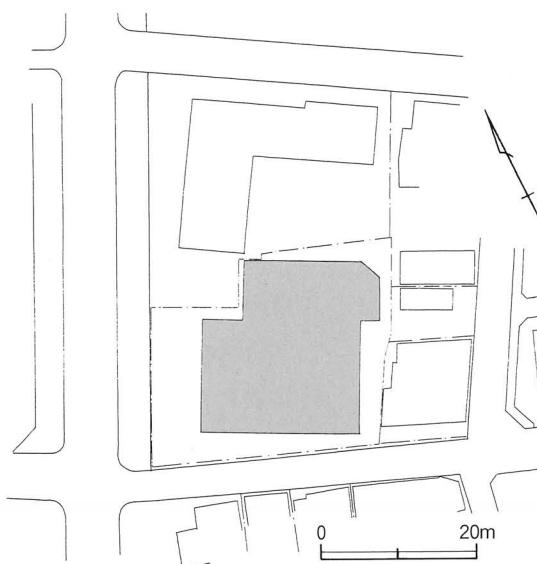


fig.171 調査範囲位置図

- SB01 調査区北西部で検出した、東西4.8m、南北4.2mを測り、 2×2 間と推定される掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $1^{\circ} 30' W$ を指向する。
- SB02 調査区中央部南東寄りで検出した、東西4.2m、南北5.4mを測り、 2×3 間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $1^{\circ} 30' W$ を指向する。
- SB03 調査区北東部で検出した、東西7.2m以上、南北4.2m以上を測り、3間以上×2間以上と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $33^{\circ} 30' W$ を指向する。
- SB04 調査区中央東辺で検出した、東西3.3m以上、南北3.0m以上を測り、2間以上×2間以上と推定される掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $1^{\circ} 30' W$ を指向する。
- SB05 調査区中央部南東寄りで検出した、東西3.1m、南北8.2mを測り、 2×3 間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $8^{\circ} E$ を指向する。
- SB06 調査区中央部南東寄りで検出した、東西3.8m、南北4.8mを測り、 2×3 間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $1^{\circ} 30' W$ を指向する。
- SB07 調査区北東部で検出した、東西6.9m、南北6.0mを測り、 3×3 間以上と推定される総柱の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $28^{\circ} E$ を指向する。
- SB08 調査区北西部で検出した、東西3.3m、南北5.4mを測り、 2×4 間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $28^{\circ} E$ を指向する。
- SB09 調査区北西部で検出した、東西3.3m以上、南北2.3m以上を測り、2間以上×1間以上と推定される掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $2^{\circ} W$ を指向する。
- SB10 調査区北西部で検出した、東西3.6m、南北6.0mを測り、 5×2 間以上と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $30^{\circ} E$ を指向する。
- SB11 調査区南西部で検出した、東西3.6m、南北3.6mを測り、 2×2 間と推定される総柱の掘立柱建物である。
建物の主軸方向は、N $33^{\circ} W$ を指向する。
- SB12 調査区南西部で検出した、東西3.6m、南北3.9mを測り、2間以上×2間以上と推定される掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N $33^{\circ} W$ を指向する。

3. まとめ

今回確認した掘立柱建物については、8世紀半ば～10世紀の時期的な変遷を追うことができ、貴重な成果を得た。



fig.172 調査区平面図

32. 出合遺跡 第44次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域西岸の段丘上から沖積地に立地する、旧石器時代～鎌倉時代にかけての遺跡である。これまでに40次を超える調査が実施されている。

これまでの調査では、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代中期後半の前方後円墳（亀塚古墳）、円墳3基、方墳1基、奈良時代の掘立柱建物群等の検出、古墳時代の韓式系土器の出土が確認されている。近年では第37次調査で11基の円墳が検出されている。

なお今回の調査については集落基盤整備事業に伴って実施した過去の調査成果と合わせて、平成22年度に『出合遺跡第34・35・37・39・40・43・44次埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

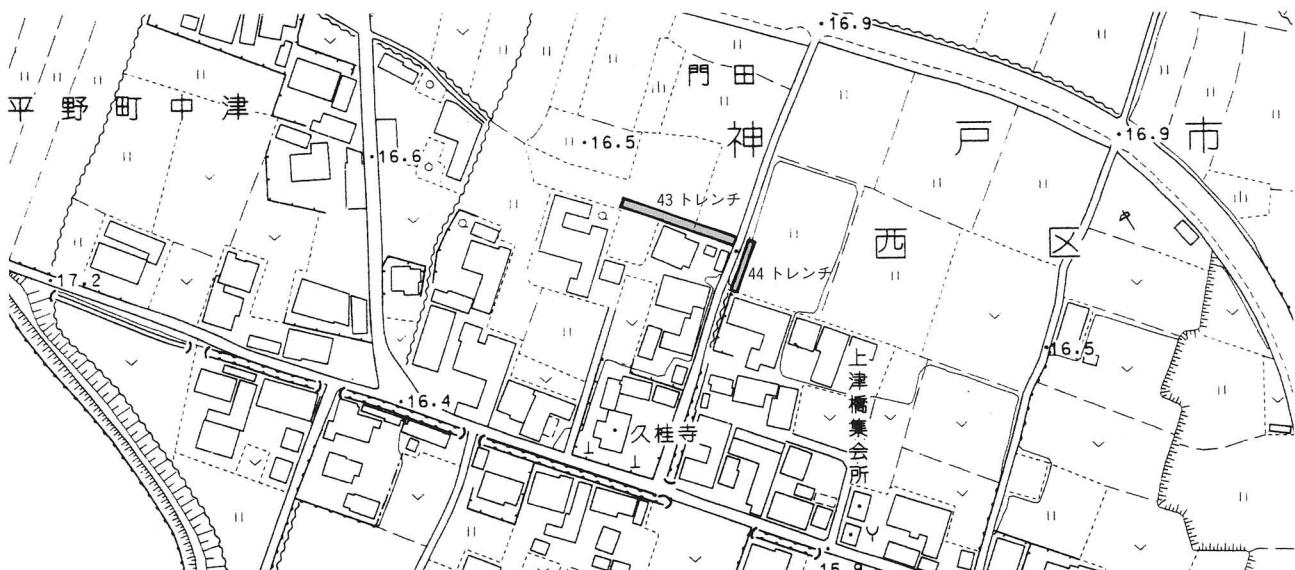


fig.173 調査地位置図 1:2,500

2. 調査概要

今回の調査は、集落基盤整備事業に伴うものである。事前に実施した試掘調査において埋蔵文化財の存在が確認された範囲の中で、工事により影響を受ける部分について、平成17年度より発掘調査を実施している。平成21年度は5年次目にあたる。

今回の調査区は排水路布設部分にあたり、平成20年度に実施した第43次調査区（42トレンチ）の東側に隣接する。調査区名については、第43次調査に引き続いてトレンチ番号を付した。

43トレンチ

基本層序

43トレンチの基本層序は、現耕土下に数枚の旧耕土・旧床土が存在し、その下層の灰褐色シルト質極細砂の上面で第1遺構面を検出した。この灰褐色シルト質極細砂及び暗灰褐色シルト質極細砂には、調査区の西半では、微細な遺物をわずかに含む。近隣の調査成果からは、この下層の灰褐色シルト質極細砂の上面で第2遺構面を検出している。現地表面から第1遺構面までの深さは調査区東端～中央部で55cm前後、西端50cmで、同じく第2遺構面までは調査区東半1m、中央部で95cm、西端では75cm前後で、西から東へと緩やかに下がる地形である。

第1遺構面　掘立柱建物1棟、溝3条、土坑8基、ピット2基を検出した。

SB01　　調査区西半東側で、掘立柱建物の一部と考えられる柱列を検出した。柱穴は、東西3間分（4基）を検出した。柱間は1.35～1.4mを測る。主軸方向は、N57°Wを指向する。

柱穴は東西方向のみの検出であるため、全体の規模は不明である。しかし北側では柱穴を検出していないことから、東・南方向に展開する建物である可能性が考えられる。微細な土器器片が出土している。中世の遺構であると考えられる。

SD01　　幅40～45cm前後、深さ15cm前後を測る溝である。遺物は出土していない。

SD02　　幅65cm前後、深さ65cm前後を測る溝である。南半はSK04、SP05によって切られている。弥生土器と考えられる微細な破片が出土した。

SD03　　調査区西端で検出した。幅40～50cm、深さ25cm前後を測る溝である。布留式併行期と考えられる土師器甕、高壇等が出土している。

SK01　　調査区東端で検出した、長辺1.1m、短辺0.73mを測る平面形が長方形を呈する土坑で、深さ40cmを測る。中世の土師器、須恵器が出土している。

SK02　　調査区東半西端で検出した、直径0.75m前後、深さ26cmを測り、平面形が円形を呈する土坑である。中世の土師器、須恵器が出土している。

SK03　　SK02の西側で検出した、直径0.88m前後、深さ35cmを測り、平面形が円形を呈する土坑である。上面から17～28cmの埋土中に炭と考えられる、黒灰色シルトが薄く面状に堆積している。中世の土師器、須恵器が出土している。

SK04　　長辺1.65m、短辺が東側0.9m、西側1.0mを測り、平面形が瓢形を呈する土坑である。検出状況から1つの土坑としたが、2基が切り合っている可能性も考えられる。微細な土師器片が出土している。

SK05　　調査区の西半で検出した東西幅1.35m、南北幅0.6m以上、深さ40cmを測る土坑である。南半は調査区外へ延びるため全体の規模・形状は不明である。掘形は2段掘りで、20cm前後でテラス状になり、そこより内側

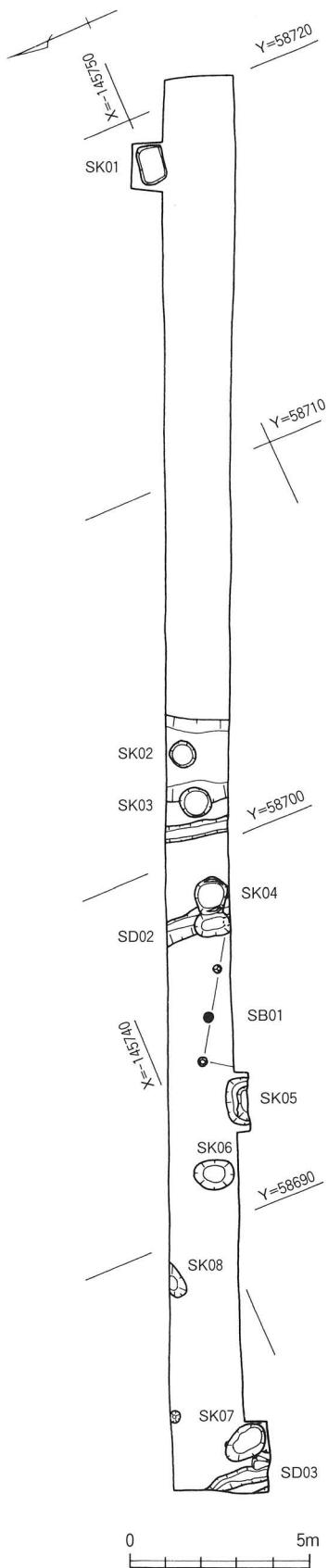


fig.174
43トレンチ平面図

- には拳大の石が充填されていた。土坑の落ち際には拳大の石が据えられた様な状況を検出した。石と石の間から、中世の土師器、瓦等が出土している。
- SK06 SK05の西側で検出した長径1.15m、短径0.85m、深さ26cmの土坑で、中世の土師器鍋等が出土している。
- SK07 調査区西端で検出した長径1.3m、短径0.9m、深さ28cmの土坑である。古墳時代初頭～前期頃の土師器が出土している。
- SK08 調査区西部で検出した東西0.75m以上、南北0.5m以上を測る土坑である。北側は調査区外へと続くため全体の規模は不明である。深さは20cmを測る。
- 第2遺構面 遺物の出土状況、断割調査の結果から、調査区西半のみ全面調査を実施したが、遺構は検出していない。
- 小結 今回の調査では、調査区の西半分で、顕著な遺構・遺物の検出を確認した。
第43次調査(42トレンチ)では、弥生時代後期の竪穴住居や、遺物が多量に出土した溝等が確認され、現在の上津橋集落の立地する微高地が北側へ拡がる点が指摘されているが、今回の調査では、東へ向かうに従い、遺構・遺物は希薄になる。第1遺構面基盤層からの遺物の出土が、調査区西半に限られ、断割による下層の状況が、東側では細砂を含むことから、調査地は西側に位置する微高地から、明石川の旧流路、もしくは氾濫原の低地へと下って行く立地状況にあるものと考えられる。



fig.175 43トレンチ全景



fig.176 SD03・SK07遺物出土状況



fig.177 SK04土層断面



fig.178 SK05礫検出状況

44トレンチ

基本層序

44トレンチの基本層序は、現耕土・床土の下層に、淡乳灰色極細砂（近代耕土）、灰褐色極細砂（近世耕土）、暗灰褐色シルト質極細砂（中世耕土）が堆積している。さらに下層には乳褐色、灰白色を基調とするシルトやシルト質極細砂が堆積しており、いずれも軟弱な地盤を形成している。

検出遺構

調査区西壁際に近世耕土面から切り込む落ち込みがあり、陶磁器、瓦片が多数出土した。里道の側溝や水溜め状のものが重複する箇所と考えられる。水溜め状の部分は底部に凸凹があり、径10cm以下の杭が不規則に穿たれている。また調査区の東壁際は深さ20~30cmで浅く落ち込む。中央の高まりが畦畔で、東側に水田が広がるものと考えられる。落ち込みからの出土遺物はいずれも近世のものである。

中世耕土面とその下面、及び現表土下約80cmの灰茶色極細砂上面で土壤化した状況を確認したため、各層面で遺構検出を行ったが、遺構は確認していない。

小結

今回の調査区では、近世の落ち込み以外に明確な遺構は検出していない。里道に沿うために早くから搅乱を受けたことによるものと考えられる。

中世の旧耕土からは当該期の須恵器、土師器片が出土し、その他に古墳時代後期に属する壊身片等が比較的多く混入する状況を確認した。今回の調査区内では明確な遺構は検出していないが、周辺に当該時期の遺構が存在する可能性を示唆するものである。

現集落域が微高地上に形成されており、この部分に遺構が存在する可能性が高いものと想像される。

3. まとめ

今回の調査では43トレンチにおいて中世の掘立柱建物等の遺構を検出した。遺構は調査区の西半部分に集中し、東半部では土坑を1基検出したに止まる。

43トレンチの東側隣接地に位置する44トレンチの調査では、顕著な遺構は確認されず、近世の落ち込みを検出したに止まった。

また、平成20年度に実施した第43次調査では、今回の調査地の西側隣接地に位置する42トレンチの主に東半部分で堅穴住居等の遺構が確認されている。

以上の調査成果を考え合わせると、集落域のひとつのまとまりが、42トレンチ東半から43トレンチ西半にかけての地区に展開し、43トレンチ東半以東の地区においては遺構の密度が粗くなり、集落域から離れていく様子を窺い知ることができる。

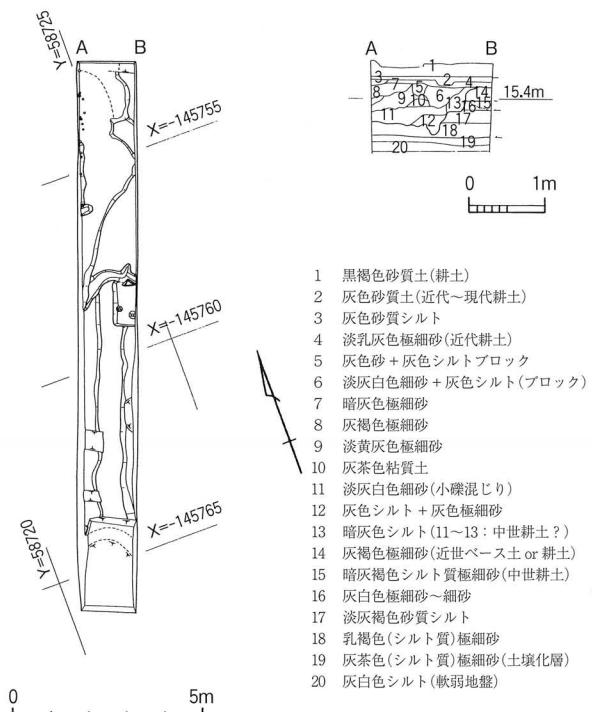


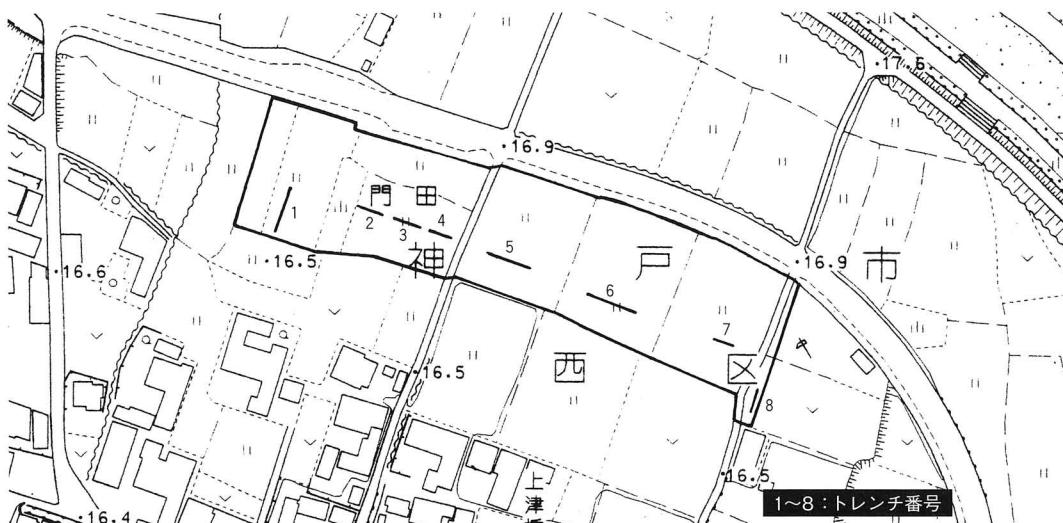
fig.179
44トレンチ平面図・北壁土層断面図

33. 出合遺跡 試掘調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域の右岸に位置する旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である。昭和52年度に第1次調査を開始し、平成21年度までに44次調査まで実施されている。平成15年度から始まった集落基盤整備事業に伴う試掘調査及び発掘調査により、弥生時代、古墳時代、中世の遺構、遺物が確認され、遺跡の広がりが認識されてきている。

平野町中津字門田地区は、明石川中流域の右岸の氾濫原に位置する地域であるが、南西側の地域は沖積地にあたる。今回の試掘調査は、宅地開発により造成される地域内にトレーニングを8ヶ所設定して、遺構の時期と遺構面の面数を詳細に精査するため実施した。



2. 調査の概要

今回の試掘調査は、街路予定部分の側に並行に幅1.2～1.5mの試掘トレーニングを設定して実施した。西側から第1トレーニングとし、順に設定し東端で第8トレーニングとなる。

基本層序

現耕土(1a層)の下層に3～4枚程度の水田耕土(2a～5a層：旧耕土)が確認できる。その下層である6a層からは須恵器、土師器が出土し、その下面が第1遺構面となる。この面では古墳時代～中世の溝、土坑、柱穴、牛の蹄跡等を確認した。第4トレーニングより東ではこの下層にぶい赤褐色を呈する7a層が堆積している。この土層は弥生時代中期の遺物を包含し、その下面で土坑・流路等を検出した。さらに下層の7c層は1m近く堆積する洪水砂で、その下層が8a層である。第8トレーニングでは弥生土器が出土している。第5トレーニングにおいてもこれに対応する土層が確認されているが、こちらは土壤化の進んだ泥層であり、別の層になるか、低湿地部分になる可能性が考えられる。第4トレーニングでは8a層の下洪水砂を挟んで土壤化した9a層が存在し、少量の弥生土器を含む。

第1トレーニング 長さ15m、幅1.5mの南北方向のトレーニングである。旧耕土の直下で第1遺構面を確認した。溝、土坑、柱穴等の遺構を多く検出した。出土遺物から、古墳時代を中心とする遺構と考えられる。このトレーニングでは、遺構の密度が高いため下層確認は実施していない。

第2トレーニング 長さ10.3m、幅1.5mの東西方向のトレーニングである。旧耕土の直下で第1遺構面を確認した。条里制を引き継ぐ現状の耕地区画に合致する方向の鋤溝や溝を多数検出し、他に古墳時代の土坑、柱穴等も検出している。遺構の密度が高いため下層確認は実施していない。

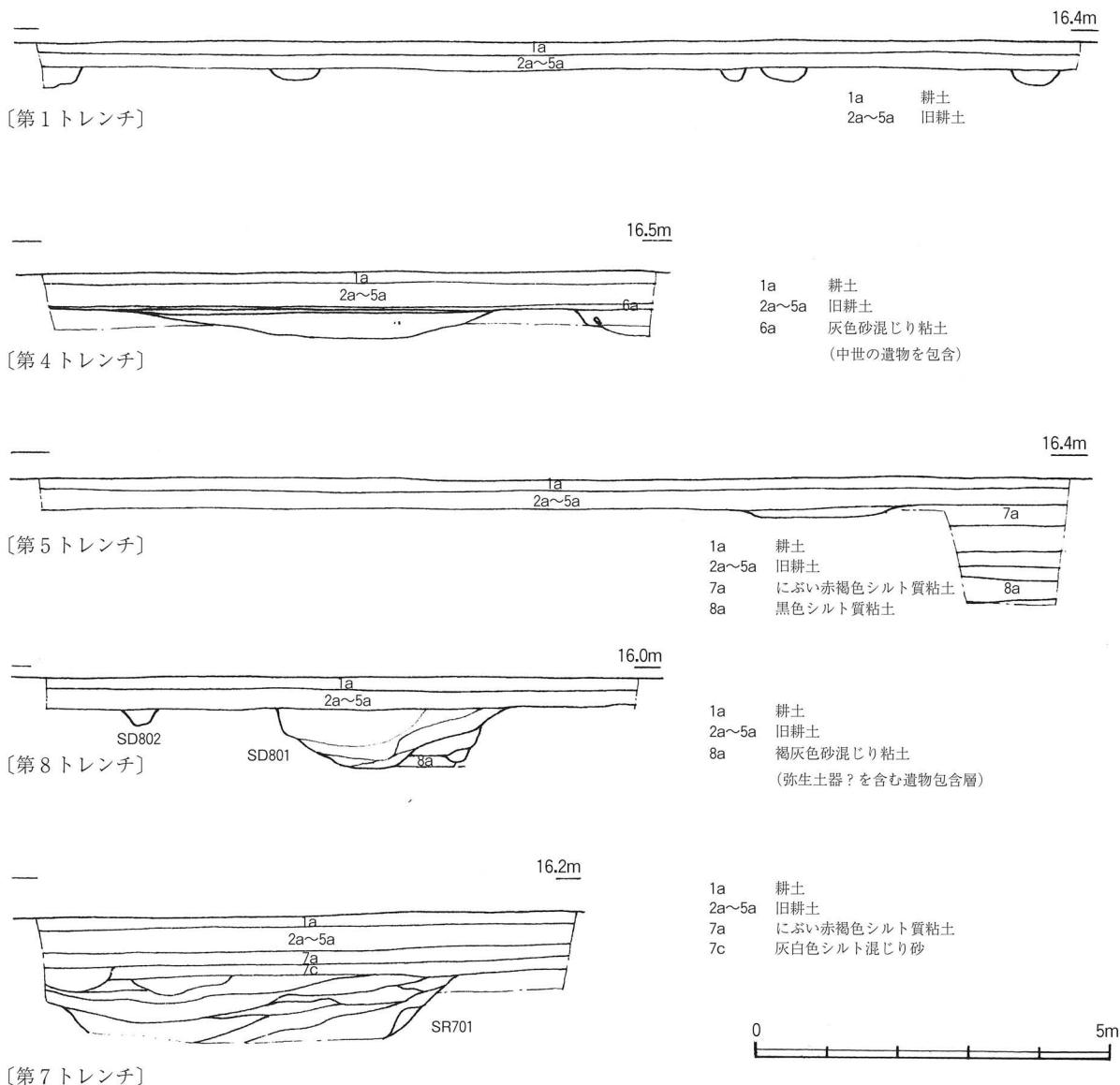


fig.181 調査区土層断面図

第3 レンチ 長さ8.7m、幅1.5mの東西方向のレンチである。旧耕土の直下で第1 遺構面を確認した。

溝、土坑、柱穴等を検出した。第1 遺構面の検出に止め、遺構掘削は行っていない。

第4 レンチ 長さ8.6m、幅1.3mの東西方向のレンチである。旧耕土の直下で第1 遺構面を検出した。

溝、土坑を検出した。溝からの出土遺物は弥生時代後期のものが多いが、少量の中世の土器が含まれる。混入なのか中世の遺構なのか現状では判断できない。東端部で下層の掘り下げを行い、土壤化した淡褐灰色砂質粘土(8a層)と弥生土器を包含する極暗灰色シルト質粘土(9a層)を確認した。

第5 レンチ 長さ15m、幅1.2mの東西方向のレンチである。旧耕土下の古墳時代後期の遺物包含層(6a層)上面で第1 遺構面を確認した。土坑、溝、ピットを検出している。

レンチ西端で検出した円形の土坑は出土遺物がなく、時期は不明である。レンチ東端で検出した南北方向の溝は条里制を引き継ぐ現状の耕地区画に合致する方向で、中世頃の須恵器、土師器が出土している。

トレンチ東端の下層確認のため掘り下げを行ったが、遺物包含層下で洪水砂が堆積し、土壤化した暗褐灰色砂混じりシルト（8a層）が堆積している。しかしこの層では遺物の出土は確認できなかった。

第6 トレンチ 長さ16m、幅1.2mの東西方向のトレンチである。旧耕土の直下で第1遺構面を検出した。そして、耕土下約70cmで河道の上面となる。河道上層の灰色シルトからは飛鳥時代の完形の須恵器が出土している。河道検出面から60cm下の灰白茶色砂から古墳時代～飛鳥時代の遺物が出土している。最下層の黒灰色シルトには遺物が含まれていない。なお、下層では長さ50cmの木杭を倒立した状態で検出した。

第7 トレンチ 長さ6m、幅1.2mの東西方向のトレンチである。旧耕土の直下で第1遺構面を確認した。遺構面の基盤層には、古墳時代～飛鳥時代の須恵器・土師器が含まれている（第2遺構面包含層）。さらに下層では東西方向の河道を検出し、若干の土師器が出土した。土層断面を観察すると、方向が異なる河道が切り合っている可能性も考えられる。

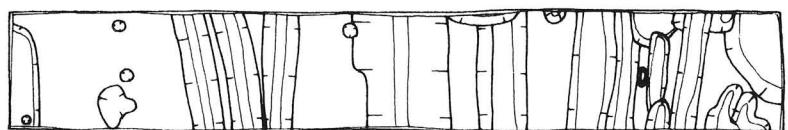
第8 トレンチ 長さ8.8m、幅1.2mの東西方向のトレンチである。旧耕土の直下で第1遺構面を確認した。条里制を引き継ぐ現状の耕地区画に合致する方向に流れる溝2条を検出した。規模の大きい溝からは土師器・須恵器が出土している。

このトレンチは下層の掘り下げを実施していないが、大溝の掘削面で下層の状況を確認している。大溝の底付近で下層の褐灰色砂混じり粘土（8a層）が確認でき、この層を一部掘削したところ、弥生土器が出土した。この土層が第3遺構面に対応する表土層になるものと考えられる。

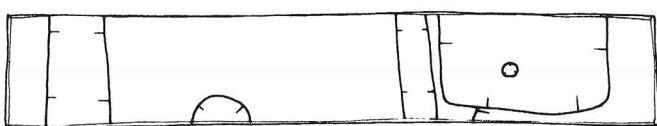
3. まとめ

今回の試掘調査では、街路予定部分に近接した位置においてトレンチ調査を実施し、東西方向の約170mの範囲についての試掘データを得た。旧耕土（2a～5a層）の下層の第1遺構面では、古墳時代～中世の遺構・遺物を確認した。西側に位置するトレンチでは検出した遺構の密度が高く下層の確認ができていないが、第4トレンチより東側では、一部のトレンチにおいて古墳時代～飛鳥時代の遺物包含層であるにぶい赤褐色シルト質粘土（7a層）、洪水砂を挟んで褐灰色砂混じりシルト（8a層）、さらに下層には弥生土器を含む極暗灰色シルト質粘土（9a層）の堆積を確認した。ただし、下層から遺物は出土しているものの、遺構は確認できていない。

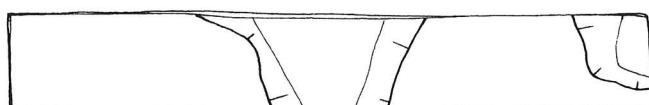
今回の調査範囲内では明石川の氾濫原の存在も想定されたが、調査範囲全域にわたって安定した面が広がることを確認した。ただし洪水による堆積も確認できることから、過去には幾度かの川の氾濫の影響を受けており、その都度居住域を移動していったものと考えられる。



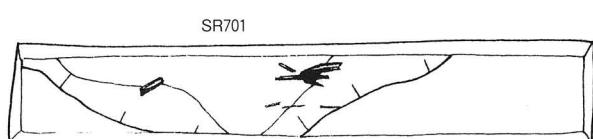
〔第2トレンチ〕



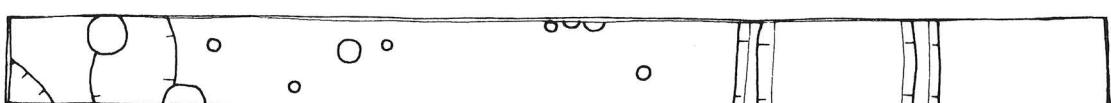
〔第3トレンチ〕



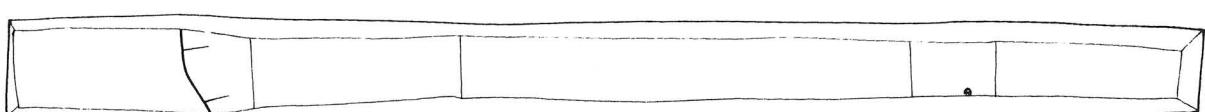
〔第4トレンチ〕



〔第7トレンチ〕



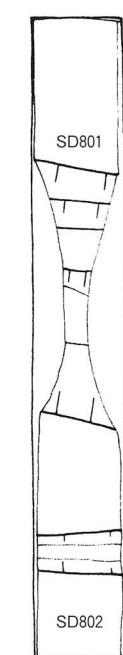
〔第5トレンチ〕



〔第6トレンチ〕



〔第1トレンチ〕



〔第8トレンチ〕



0 5m

fig.182 調査区平面図

III. 平成21年度の保存科学調査・作業の概要

平成21年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

古墳主体部の保存 平成17年度～18年度にかけて発掘調査が行われた、北区道場町塩田所在の塩田北山東古墳は、4世紀代に築かれた前方後円墳である。主体部は割竹形木棺を埋置する粘土槨が4基存在し、第1主体部の三角縁仏獸鏡をはじめ、各主体部からは装飾品や鉄製武器・鉄製工具などが出土している。なお古墳そのものは現地調査後の造成工事によって失われることが決定していたため、第1主体部の主要部分について切り取りを行った。

硬質発泡ウレタンフォームで梱包された主体部は開梱後、ガラス玉等微細遺物の検出や赤色顔料の調査といった、室内での詳細調査については平成19年度中に終えており（詳細は2008『塩田北山東古墳発掘調査報告書』所収）、平成21年度は遺構そのものについて、保管・展示に耐え得るための保存科学的処置を施すこととなった。

切り取った遺構土壤はおよそ長さ4.0m×幅1.0m×厚さ0.5mを測る。その他に、梱包に用いた木材と発泡ウレタンフォームを含めると、総重量は約2.7tに達していた。この状態では展示等の運搬には過重であり、乾燥によって土壤の崩壊につながる。そのため表面数cmを残して、可能な限り裏側の土壤を除去した。棺内には棺材が残存していたが、同時に保存処置を施すことは困難な点が多いため、まずは棺材を取り上げて別工程で作業することとした。棺材取り上げ後、遺構表面が露出した状態のものを再度梱包し、クレーンを用いて天地を反転、開梱後、裏側土壤の掘削を行った。その際、粘土床に遺物が含まれている可能性を考慮して、24ブロックに区分けし慎重に掘削を進めた。結果、部位によって異なるが、土壤の厚さを3～5cm程度まで減量した。また、掘削中および掘削後およそ2週



fig.183 開梱直後



fig.184 反転作業

間は、エタノールを散布し続けた。これは、後に施す土壤強化剤（シリカ系合成樹脂、商品名：OM-25）の含浸を促進させるために、土壤中の水分をエタノールに置換するためである。土壤強化剤は洗滌瓶を用いて約14kgを散布含浸した。硬化を確認した後、パテタイプのエポキシ系合成樹脂（商品名：コニシKモルタル）で厚さ約1cmの裏打ちを施した。その上に液状のエポキシ系合成樹脂（商品名：アラルダイトAER2400+ハードナーHY837）とガラスクロスを交互に3層塗り込め、さらに裏打ちを強化した。裏打ちが完了すると、キャスター付の木製支持台を取り付け、再度ウレタンフォームで梱包し、正位に反転させた。その後、梱包を全て解いた時に、計測した重量は927kgであった。遺構表面の状態は、裏面の掘削作業時に生じたクラックに沿ってOMが結晶している状況が確認され、これを清掃した上で表からもOM-25を約2kg散布し、基本的な保存科学的処置を終えた。

また、遺構を周囲環境から保護するため、鉄製アングルに樹脂製パネルをはめ込んだ保管ケースに収納した。上面は透明アクリルパネルでカバーし、展示を可能としつつ、保管環境のコントロール効果も得ている。

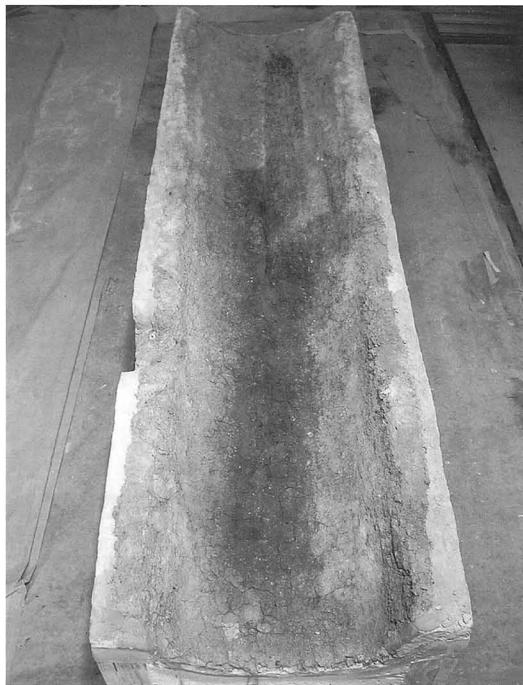


fig.185 保存処理完了後



fig.186 保管ケース収納

土層転写 旧神戸外国人 居留地遺跡

埋蔵文化財調査において、遺跡土壤の堆積状況を観察することは重要な調査である。これを記録する手法としては通常、実測図や写真撮影などの記録保存法を採るが、土層そのものを持ち帰る土層転写法も行っている。

平成21年度の旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査では、主にアメリカに日本茶を輸出したヘリヤ商会が明治期に開設した茶再製場と、これにともなう茶再製炉と推定される遺構を検出している。また同志社大学理工学部の増田富士雄教授による現地調査と粒度分析等によって、建物基礎の下に、地震に起因する津波の堆積層が存在することが判明した。さらに、津波堆積層より下の砂礫層より出土したヤナギ属の木片について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、16世紀前半～17世紀前半とのデータが得られた。

この結果から、津波の原因となった地震は、宝永地震（1707年）もしくは安政南海地震（1854年）と推定されることが、現地調査終了1年後に明らかとなった。

粒度分析等のサンプリングを行った調査区西壁で、基本土層を保存する方法として土層転写を行うこととなった。転写の対象となった堆積層は粗い砂を中心である。転写樹脂には、このような砂礫に適した変性ポリウレタン系合成樹脂（商品名：トマックNS-10）を採用した。調査区の壁面をならした上で樹脂を刷毛で塗布し、バックアップのためにガーゼを貼り込む工程を2度繰り返し、硬化後、剥がし取った。転写土層は余分に付着した土壤を水洗し、埋蔵文化財センターに保管している。



fig.187 調査地

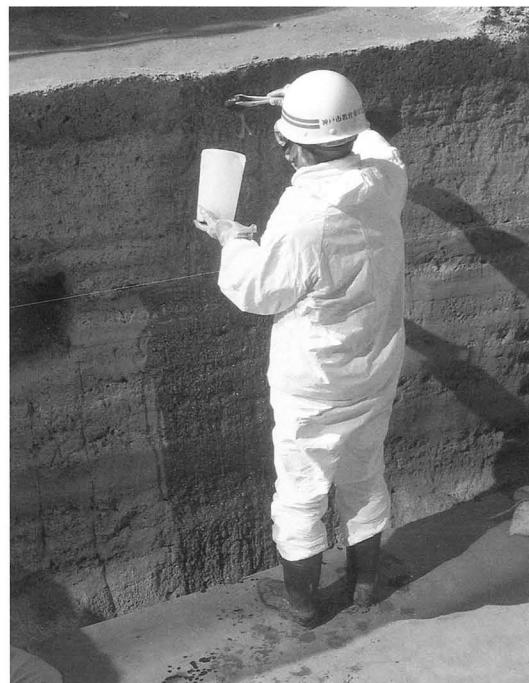


fig.188 合成樹脂塗布

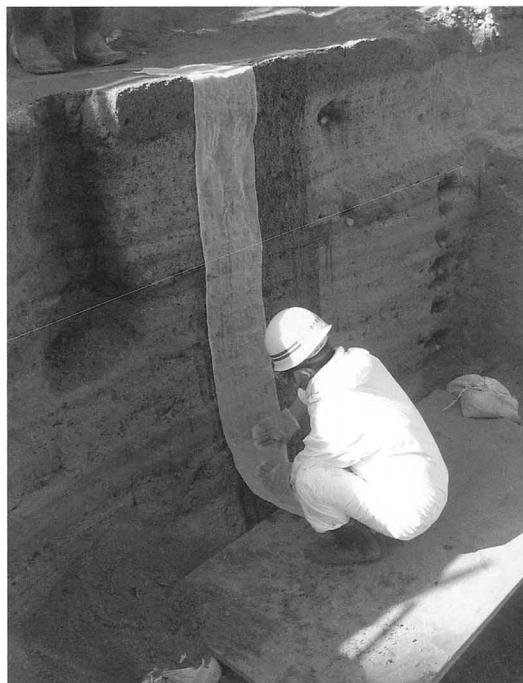


fig.189 ガーゼ貼り込み



fig.190 土層転写完了

遺物の保存科学

木製品の保存

塩田北山東古墳

遺跡より出土する木材は、土中に埋蔵されている間に生物的・化学的な腐食作用によつて劣化していることがほとんどである。遺構切り取りで紹介した塩田北山東古墳第1主体部の木棺材も、劣化しながらも残存していた。残っていたのは東西を中軸線とした割竹形木棺の身（残存長2.5m×幅38cm×厚さ2.5cm）と、蓋（残存長1.3m×幅4cm）の一部である。これらは棺内に微細な遺物が残されていたこと、赤色顔料の調査も終わっていなかったことなどから、現地での取り上げを行なわず、棺床粘土ごと切り取って持ち帰っていた。棺身は中軸線から南半分のみが残存している。また青銅鏡が副葬されていた部位については、銅の殺菌作用による可能性もあるが^(注)、他の部位に比べると材の残りが良好であった。また、事前調査として樹種の同定を行なった。遺物から切片を採取し、薄片を透過光



fig.191 (左)
クリーニング



fig.192 (右)
型枠作製

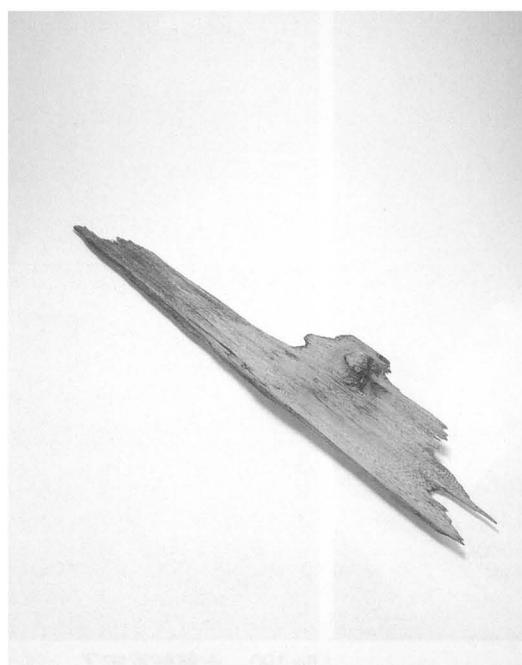


fig.193 (左)
保存処理後

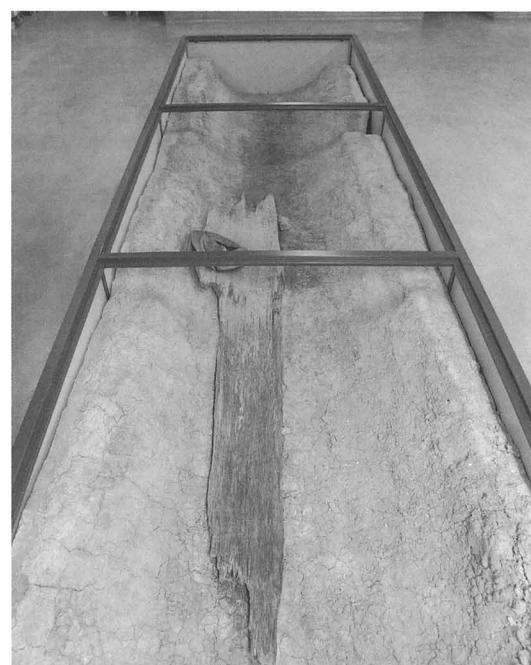


fig.194 (右)
ケース収納

で検鏡した結果、身・蓋材ともにコウヤマキであることがわかっている。

棺材の保存処置は先述のとおり棺床土壌とは分離して行なった。保存処置の方法は合成樹脂（商品名：PEG4000S）を樹脂の水溶液中で含浸して硬化させ、形状を保持するのであるが、樹種によっては樹脂含浸の途中でも変形を生じやすい。コウヤマキは比較的寸法安定性の良い材ではあるが、変形を防止するために型枠を作製し、これにはめ込んで含浸槽に浸漬した。型枠はステンレス管をエポキシ系合成樹脂で固定したもので、材の表面を不織布とポリエチレンシートで養生し、型取りをして成形した。含浸液は最初20%で開始し、約4ヶ月間で95%まで上昇させた。含浸終了後、表面に付着した余分な含浸液を水洗した。大気中で乾燥、硬化させた後、すでに保存処置が完了していた粘土棺床に設置したところ、年輪に対して接線方向に若干の収縮が生じていたが、これは含浸液の濃度上昇のスピードが速すぎたこと、また最終的に液温を55℃まで上げたことなどが遺物にとってストレス要因となった可能性がある。現在、主体部と組み合わせて、随時展示等に活用している。

(注) 2010酒井ほか「桜井茶臼山古墳の木棺の劣化状態」『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集』
日本文化財科学会編を参考にした。

水損史料の保存

平成21年8月に発生した台風9号は、全国で26名、中でも兵庫県佐用郡佐用町では18名の犠牲者を出す甚大な被害をもたらした。一方、文化財への損害も大きく、その中には洪水によって水損した古文書類も含まれており、佐用町教育委員会を中心として組織的なレスキューが行なわれた。

救出された史料の総点数は約7,500冊であり、その内22冊が同年8月21日（第1便：総重量35.9kg）に、またビニール袋45袋分が平成22年1月14日（第2便：総重量39.2kg、一袋に数冊入りで凍結保管されていたため、総冊数は未詳）に当市埋蔵文化財センターに搬入された。史料はカビ・腐朽対策としてエタノールを噴霧し、ビニール袋に封入、凍結された状態であった。佐用町教育委員会から依頼された作業は、真空凍結乾燥法による乾燥作業であり、後のクリーニング等については別途行われることであった。内容は第1便が近世・近代の土地台帳類で和紙に墨書きされた和綴じのもの、第2便は洋綴じされた書物を主体とし、和紙和綴じの文書類があった。

まず、現状の記録として写真撮影と、処理前後の変化の記録を目的とした重量計測を行った。その後、各点についてレーヨン紙で梱包し、真空凍結乾燥機にかけた。史料の重量は、軽いものでは1枚物の団面が200g程度、重いものでは4.7kgを測る分厚い帳簿がある。



fig.195 (左)
レーヨン紙養生



fig.196 (右)
真空凍結乾燥

乾燥中の状態把握として重量をモニタリングできるよう、史料を上皿自動秤（秤量：2 kg）に載せ、資料庫扉の窓から読み取れる位置に設置した。重量モニタリングの状況はfig.199・fig.200に示したとおりである。1便、2便ともに秤の秤量限界を超えるものが多数あったため、モニタリング史料の重量が一定した後、一旦装置を停止し、史料の状態を確認するとともに乾燥完了の史料を秤に乗せ換えて乾燥作業を続行した。結果、乾燥作業には第1便に61日間、第2便は54日間を要した。乾燥後写真撮影と重量計測を行なった。搬入時の含水率（乾燥後重量に対する昇華した水分量）を算出したところ、最小値が19.4%（写真アルバム：洋紙洋綴じ、昭和時代）、最大値が378.3%（帳簿：和紙和綴じ、大正時代）であり、その他の和紙和綴じ文書類も軒並み200%以上を計測した。これを和紙の構造的劣化の進行と捉えるか否かであるが、乾燥後の状態観察では十分に柔軟性を保っており、劣化の度合いは低いと考えられた。これを踏まえると、和紙の含水率の高さは保水能力の高さを表しているとも取れる。ただし今回は一定条件下でのデータとは言えず、あくまでも予測的なものとして捉える必要があろう。

作業完了後、調湿剤（商品名：アートソープ、60%調湿）を封入したガスバリアフィルム製ガゼット（商品名：エスカル）に梱包し、佐用町に返却した。



fig.197 完了後検品



fig.198 梱包

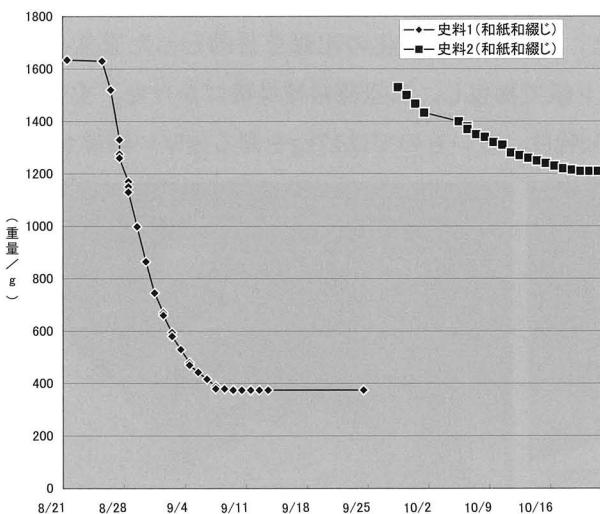


fig.199 重量変化 (H21/8/21搬入分)

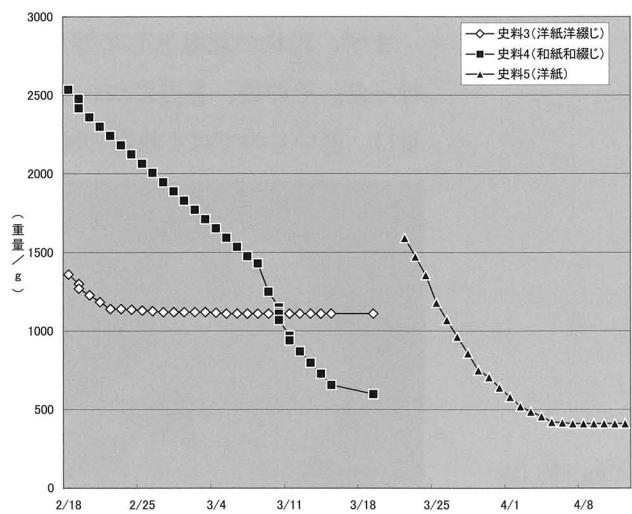


fig.200 重量変化 (H22/1/14搬入分)

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
郡家	84	銅錢	1
高津橋岡	11	刀子、鉄釘	3
篠原	28	鉄釘	1
篠原	29	鉄鏃、鉄釘	3
出合	44	煙管雁首	1
中	-	鉄釘	2
大橋町東	2	鉄鏃、鉄釘、轆羽口	3
雲井	32	鉄鏃、鉄釘、鉱滓	16
新方	47	鉱滓、炉壁	2
楠・荒田町	45	鉱滓	1
旧神戸外国人居留地	1	鉄製部品、銅製横櫛	21
西岡本	8	鉄釘	4
上池	3	鉄釘	2
兵庫津	52	銅錢、簪、鉄錢、火打金	149
兵庫津	51	銅錢、釣針、刀子、包丁	647
計856点			

表11 平成21年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
本山	37	不明木製品	1
雲井	32	木製品	3
兵庫津	52	板材、杭	3
二葉町	22	曲物、柱材、杭	9
大田町	16	桶箍(タガ)、加工材	7
上池	3	柱材	3
新方	47	杭、付け木、松明	44
新方	48	加工材	2
計72点			

表12 平成21年度出土木製品

遺跡名	次数	分析項目	資料数
住吉宮町	46	花粉分析	2ブロック
		プラントオパール分析	2ブロック
雲井	28	石器等(石材)	84点
		石製品(蛍光X線)	1点
		C14年代測定	3点(種実)
		花粉分析	25ブロック
		テフラ分析	2ブロック
		大型植物遺体	14ブロック
兵庫津	14	金属器(蛍光X線)	17点
松野	42-2	花粉分析	6ブロック
		プラントオパール分析	6ブロック

表13 平成21年度自然科学分析

平成21年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成24年3月 印刷

平成24年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 デジタルグラフィック株式会社

神戸市中央区弁天町1-1

TEL 078(371)7000

神戸市広報印刷物登録 平成23年度 第404号 (広報印刷物規格 A-6類)

